

角田

——新潟県柏崎市・角田遺跡発掘調査報告書——

1999

柏崎市教育委員会

角田

——新潟県柏崎市・角田遺跡発掘調査報告書——

1999

柏崎市教育委員会

序

遺跡を発掘すると、その都度新たな発見に出会います。この発見は歴史の空白を埋めています。しかし、それは新たな謎を呼ぶことにもなりますが、遺跡はその謎解きの期待に、再び答えてくれることでしょう。

このたび、さまざまな人の手助けの下、角田遺跡の発掘調査を行いました。当地は、今でこそ住宅地で埋め尽くされていますが、少し前までは田圃が広がっていました。この地が立派な水田となったのは、藤井堰東江が竣工し、用水の確保が果された江戸時代以降のことと、これまで考えられていました。それ以前の姿と言えば、アシが一面に生い茂る川原や湿地がイメージされていたのではないでしょうか。それもそのはずで、遺跡地が現在の劔集落から少し離れたところに位置し、すぐそばを鮒石川・別山川が流れ、周囲には旧河道の痕跡が幾筋も残されているなど、氾濫や洪水の被害を思い起こさずにはいられないからです。

ところが、角田の地は、古墳時代の始まりからすでに人との関わりを持ち、奈良時代や平安時代にはムラも作られていました。そして、鎌倉時代になると、大きな建物が幾度となく建て替えられ、有力者が住む屋敷となっていたことも確かめられたのです。また、藤井堰東江と関わりを持つ時期の遺構・遺物も発見されました。各時代の様子など分からぬことがあります。しかし、角田の地に刻まれていた歴史的事実は、幾度とない災害を乗り越え、力強く生きた人々がいたことを証明してくれました。

これまでの認識を変える角田遺跡の調査成果は、劔地区だけではなく、西中通や柏崎市における歴史の空白を埋める発見であったと言えるでしょう。この成果を報告する本書そのものはささやかではあります。しかし、地域の歴史を理解する一助となり、遺跡保護のため活用されるとすれば、この上なく幸いに思うところであります。

調査中は梅雨の豪雨に見舞われ、あるいは真夏日が続く中、予想外に多い遺構との悪戦苦闘となりました。しかし、調査を無事終え、この成果が報告できましたことは、事業主体であります㈲伊原建築設計事務所のご理解とご協力の賜物であり、心から感謝申し上げたいと思います。最後になりましたが、幾日も続く真夏日の中、最後まで調査に参加されました柏崎市シルバー人材センターの会員の皆様および調査員各位に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第であります。

平成11年3月

柏崎市教育委員会

教育長 相澤陽一

例　　言

- 本報告書は、新潟県柏崎市大字劍字角田165-5番地に所在する角田遺跡発掘調査の記録である。
- 本事業は、宅地造成事業と市道拡幅工事に伴う事前調査として実施した。宅地造成用地部分については、有限会社伊原建築設計事務所から柏崎市が委託を受け、柏崎市教育委員会が事業主体となって発掘調査を実施したものである。
- 発掘調査は、平成10年6月9日から同年8月12日まで現場作業を実施し、その後平成11年3月31日まで整理作業及び報告書作成作業を行った。現場作業は、社団法人柏崎市シルバー人材センターから会員の派遣を受けて実施し、整理・報告書作成作業は、柏崎市西本町3丁目喬柏園内文化振興課遺跡調査室において行った。また現場作業は、文化振興課職員及び遺跡調査室のスタッフを調査員とし、整理・報告書作成作業は、職員（学芸員）を中心に、遺跡調査室のスタッフで行った。
- 発掘調査によって出土した遺物は、注記に際し遺跡名を「角田」とし、グリッド名や遺構名および層序等を併記した。
- 本事業で出土した遺物並びに調査や整理作業の過程で作成した図面・記録類は、すべて一括して柏崎市教育委員会（文化振興課遺跡調査室）が保管・管理している。
- 本報告書の執筆は、下記のとおりの分担執筆とし、調査担当の品田が編集もあわせて行った。

第Ⅰ章・第Ⅳ章・第Ⅴ章第2節第2項・第VI章第2節・第3節

第Ⅶ章・写真図版 品田高志

第II章・第III章・第V章第1節・第2節第1項・第3項～第5項

第3節～第5節・第VI章第1節・（遺構一覧表） 伊藤啓雄

7. 本書掲載の図面類の方位は、すべて真北である。磁北は真北から西偏約7度である。

8. 発掘調査から本書作成まで、事業主体である㈲伊原建築設計事務所（伊原武代表取締役）からさまざまご協力とご理解を賜った。またこのほかの方々から、多大なご助力とご協力並びにご教示等を賜った。記して厚く御礼を申し上げる次第である。

猪爪一郎・大橋勇・大橋康二・川又昌延・庄田知充・滝川重徳・鶴巻康志・中野純・平吹靖
藤田邦雄・堀幸子・水沢幸一・南洋一郎・宮田進一

柏崎市建設部道路河川課・柏崎市立図書館・柏崎市立博物館・新潟県教育庁文化行政課・北陸近世
遺跡研究会・北陸中世考古学研究会
(五十音順・敬称略)

調査体制

調査主体 柏崎市教育委員会 教育長 相澤陽一

總括 小林清輔（文化振興課長）

管理・庶務 飯塚純一（文化振興課副参事兼埋蔵文化財係長）

調査担当 品田高志（文化振興課副参事兼埋蔵文化財係主査・学芸員）

調査員 伊藤啓雄（文化振興課埋蔵文化財係学芸員）

横田忠義（文化振興課埋蔵文化財係工務員）

帆刈敏子（文化振興課埋蔵文化財係嘱託）

黒崎和子（文化振興課埋蔵文化財係遺跡調査室）

大野博子（文化振興課埋蔵文化財係遺跡調査室）

渡辺富夫（文化振興課埋蔵文化財係嘱託）

徳間香代子（文化振興課埋蔵文化財係嘱託）

村山幸子（文化振興課埋蔵文化財係嘱託）

片山和子（文化振興課埋蔵文化財係遺跡調査室）

現場事務員 竹井一（文化振興課埋蔵文化財係遺跡調査室）

現場作業スタッフ 中沢時春・駒形武雄・野村直・吉田義雄・木間正敏・牧良雄・今井和幸
(柏崎市シルバー人材センター会員)

整理作業スタッフ 竹井一・黒崎和子・萩野しげ子・吉浦啓子・片山和子・大野博子
(文化振興課埋蔵文化財係遺跡調査室)

目 次

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	3
1 遺跡の位置と地理的環境	3
2 角田遺跡をめぐる歴史的環境	7
III 調 査	11
1 調査の方法と調査区（グリッドの設定）	11
2 発掘調査の経過	11
IV 遺 跡 と 遺 構	13
1 角田遺跡概観	13
2 遺構各説	17
遺構観察表	26
V 出 土 遺 物	39
1 遺物概観	39
2 土器・陶磁器類	39
3 木製品類	54
4 石製品類	56
5 金属製品類	56
III 総 括	57
1 角田遺跡と開発	57
2 角田遺跡における集落構成と遺構群	62
3 角田遺跡出土中世土師器の時期と変遷	69
VII 調査のまとめ	79
<引用参考文献>	80
抄 錄	卷末

図版目次

図面図版

- 図版1 角田遺跡の位置と周辺の地形（1：6,000）
図版2 角田遺跡の調査区とグリッドの配置図（1：500）
図版3 角田遺跡遺構確認全体図（1：200）
図版4 角田遺跡遺構全体図（1：200）
図版5 角田遺跡遺構図割付図（1：300）
図版6 角田遺跡遺構見取図1（1：100）
図版7 角田遺跡遺構図1（1：100）
図版8 角田遺跡遺構見取図2（1：100）
図版9 角田遺跡遺構図2（1：100）
図版10 角田遺跡遺構見取図3・4（1：100）
図版11 角田遺跡遺構図3・4（1：100）
図版12 角田遺跡遺構配置図（1：300）
図版13 角田遺跡建物配置図1（1：100）
図版14 角田遺跡建物配置図2・3（1：100）
図版15 角田遺跡遺構個別図1（1：60）
図版16 角田遺跡遺構個別図2（1：60）
図版17 角田遺跡遺構個別図3（1：60）
図版18 角田遺跡遺構個別図4（1：60）
図版19 角田遺跡出土遺物1 須恵器（1：3）
図版20 角田遺跡出土遺物2
　　須恵器・土師器・製塩土器（1：3）
図版21 角田遺跡出土遺物3 中世土師器（1：3）
図版22 角田遺跡出土遺物4
　　中世土師器・貿易陶磁器・漆器・鉄製品（1：3）
図版23 角田遺跡出土遺物5 珠洲（1：3）
図版24 角田遺跡出土遺物6 珠洲（1：3）
図版25 角田遺跡出土遺物7 珠洲（1：3）
図版26 角田遺跡出土遺物8 珠洲・近世陶磁器（1：3）
図版27 角田遺跡出土遺物9 石製品（1：2, 1：3）
図版28 角田遺跡出土遺物10 木製品（1：3）
図版29 角田遺跡出土遺物11 木製品（1：3）
図版30 角田遺跡出土遺物12 木製品（1：3）
図版31 角田遺跡出土遺物13 木製品（1：3）
図版32 角田遺跡出土遺物14 木製品（1：3）

写真図版

- 図版33 角田遺跡1 a・b 調査区全景（カラー）
図版34 角田遺跡2 a・b 調査区近景（カラー）
図版35 発掘調査1 a～h 調査状況
図版36 発掘調査2 a 調査状況 b 調査スタッフ
図版37 発掘調査3 a 遺構検出状況
　　(B・C-3グリッド)
　　b S E-111戸井戸周辺遺構検出状況
図版38 層序 a・b B-7～8グリッド
　　北壁土層断面
図版39 遺構1 a 調査区全景
　　b 調査区全景空中写真
図版40 遺構2 a 調査区全景
　　b A区全景
　　(D・E-2～4グリッド)
図版41 遺構3 a・b B-D-2～4
　　グリッド遺構群
図版42 遺構4 a S B-1201建物跡
　　b B・C-2～4グリッド遺構群
図版43 遺構5 a B・C-2～8
　　グリッド遺構群
　　b B・C-3・4グリッド遺構群
図版44 遺構6 a B・C-2～8グリッド全景
　　b B・C-7・8グリッド大溝群
図版45 遺構7 a SD-1018a・1038大溝
　　b SD-1018a 大溝北壁土層断面
図版46 遺構8 a SD-1040・1050大溝全景
　　b SD-1050大溝
図版47 遺構9 a SD-1050大溝
　　b SD-1018a 大溝
　　c SD-1040大溝
　　d SD-1038大溝
　　e～h SK-460
図版48 遺構10 a SE-1戸井戸
　　b・c SK-40土坑

	d • e	S E-33井戸	e	S Kp-135a柱穴
	f	S Kp-39柱穴	f	S Kp-343柱穴
	g • h	S K-40土坑	g • h	S Kp-403柱穴
		• S Kp-39柱穴		
図版49 遺構11	a • b	S K-70土坑		
	c • d	S E-111井戸		
	e • f	S K-129土坑		
	g • h	S K-225a土坑		
図版50 遺構12	a	S E-24井戸		
	b	S E-456井戸		
	c • d	S E-457井戸		
	e • f	S E-563井戸		
	g	S E-572井戸		
	h	S E-524井戸		
図版51 遺構13	a	S E-661井戸	図版56 遺物1	a 須恵器1(無台杯)
	b	S E-571井戸		b 須恵器2(有台杯・杯蓋)
	c	S E-622井戸	図版57 遺物2	a • b 須恵器3(杯蓋・斐頬)
	d	S E-682井戸	図版58 遺物3	a • b 須恵器4(斐頬)・土師器 (杯・斐頬)・製塙土器
	e • f	S E-682井戸	図版59 遺物4	a • b 中世土師器1(皿頬)
	g • h	S E-770井戸	図版60 遺物5	a • b 中世土師器2(皿頬)
図版52 遺構14	a ~ d	S E-739井戸	図版61 遺物6	a • b 中世土師器3(小皿頬)
	e	S K-736	図版62 遺物7	a 珠洲1(壹・斐頬) b 珠洲2(壹・斐頬)
	f	S E-778a井戸	図版63 遺物8	a 珠洲3(壹・斐頬) b 珠洲4(壹・斐頬)
		• S E-778b井戸	図版64 遺物9	a • b 珠洲5(壹・斐頬・鉢頬)
	g	S E-922井戸	図版65 遺物10	a • b 貿易陶磁器・近世陶磁器1
		• S Kp-924柱穴	図版66 遺物11	a • b 近世陶磁器2
	h	S E-926井戸	図版67 遺物12	a • b 石製品1(磁石)・ 漆器・鉄製品
図版53 遺構15	a	S E-932井戸	図版68 遺物13	a 木製品1(ハシ類ほか) b 木製品2(ハシ類ほか)
	b	S E-909a井戸	図版69 遺物14	a 木製品3(ハシ類ほか) b 木製品4(曲物底板・鍔)
	c • d	S E-907井戸	図版70 遺物15	木製品5(板材ほか)・石製品2 (石臼)
	e	S E-907井戸	図版71 遺物16	木製品6(礎板)・鍔
		• S E-909a井戸	図版72 遺物17	木製品7(柱根)
図版54 遺構16	a	S Kp-257柱穴		
	b	S Kp-326柱穴		
	c	S Kp-241柱穴		
	d	S Kp-253柱穴		

挿図目次

- | | |
|-------------------------|-----------------------------|
| 第1図 柏崎平野の地形分類と角田遺跡の位置／4 | 第13図 角田遺跡タタキ目・当て具痕分類図／41 |
| 第2図 角田遺跡周辺の旧河道推定図／5 | 第14図 角田遺跡出土須恵器の摩滅状態／42 |
| 第3図 角田遺跡周辺の旧土地更正図／5 | 第15図 西中通地区の旧土地更正図／58 |
| 第4図 角田遺跡と周辺の遺跡分布図／8 | 第16図 角田遺跡古代土器遺構別分類図／59 |
| 第5図 柏崎平野における莊園・公領分布図／9 | 第17図 角田遺跡建物跡主軸方位図／63 |
| 第6図 角田遺跡基本層序模式図／14 | 第18図 角田遺跡の遺構群と周辺の地形／67 |
| 第7図 角田遺跡遺構配置概念図／16 | 第19図 角田遺跡中世土師器形態分類図／71 |
| 第8図 角田遺跡建物跡模式図／19 | 第20図 角田遺跡中世土師器変遷試案／72～73 |
| 第9図 角田遺跡柱穴法量分布図／21 | 第21図 角田遺跡遺構出土土器・陶磁器集成(1)／76 |
| 第10図 角田遺跡井戸・土坑法量等分布図／23 | 第22図 角田遺跡遺構出土土器・陶磁器集成(2)／77 |
| 第11図 角田遺跡古代土器器種分類図／41 | 第23図 角田遺跡中世土師器法量分布図／77 |
| 第12図 角田遺跡古代土器法量分布図／41 | |

表目次

- | | |
|---------------------|--------------------------------------|
| 第1表 角田遺跡建物跡一覧表／18 | 第5表 角田遺跡珠洲焼観察表／52 |
| 第2表 角田遺跡井戸・土坑一覧表／22 | 第6表 角田遺跡出土建築用部材／55 |
| 第3表 角田遺跡遺構一覧表／26～38 | 第7表 角田遺跡における中世土器・陶磁器
塗器の破片数集計表／60 |
| 第4表 角田遺跡中世土師器観察表／49 | |

挿写真目次

- 写真1 確認調査スナップ／2

I 調査に至る経緯

角田遺跡は、新潟県柏崎市大字劍字角田地内に所在する遺跡である。付近一帯は、鰐石川と別山川の合流点となる沖積低地であり、旧河道や自然堤防などの痕跡を観察することができる。当該地における遺跡の北側には、北東から南西へ流れる別山川がある。その右岸域と荒浜砂丘列の間は、国道8号線とJR越後線が並行して通る交通の動脈となっており、また遺跡の東側には北流する鰐石川の右岸に沿って県道が走る。旧来からの剣集落城とは、この県道が通る鰐石川右岸の自然堤防上に展開していたものである。しかし、近年は、交通の至便性もあって、従来の集落城北側の沖積低地まで宅地化が顕著となっていた。

角田遺跡の発見は、昭和58年に実施された新潟県教育委員会（以下「県教委」と略記）主催の詳細分布調査においてであった。しかし、当初把握されていた遺跡の推定範囲は、現在の鰐石川と別山川が銳角に合流した三角状の畠地（自然堤防）とその周囲であり、これらの東側に広がる水田地帯（沖積地）までの広がりは把握されていなかったのである。

ところで、柏崎市開発行為指導要項は、快適な住みよいまちづくりと秩序ある都市形成の推進に寄与することを目的として、平成5年に告示された。そして、市域における開発行為のうち新潟県が対象とする大規模開発等を除く面積3,000m²以上の開発行為に対し、都市計画法に定められた諸手続き以前に、柏崎市長との事前協議を行うことを求めている。角田遺跡の発掘調査に至る直接的契機となった開発行為は、平成9年8月14日付けで提出された開発行為事前協議書において初めて明らかにされたもので、柏崎市大字劍字角田165-5番地における開発面積3,638.16m²の建売分譲住宅地造成事業であった。平成9年8月25日付けで建築住宅課から所管事項について意見聴取を受けた柏崎市教育委員会（以下「市教委」と略記）文化振興課では、事業予定地が角田遺跡に隣接していたことから、稲刈り前の8月27日に現地確認及び踏査を実施した。その結果、事業予定区域西端となる水路沿いにおいて、古代から中世に至る土器類を採集するおよんだ。このため、9月1日付けで提出した意見書には、遺物の散布が確認された事実と文化財保護法上の手続き、そして確認調査実施の必要性が記されたのである。

角田遺跡に係る取り扱い等に関する事業者との協議は、平成9年9月3日に第1回目が開かれ、文化財保護法（以下「法」と略記）上の手続き等の打合せのほか、確認調査の早期実施が要望された。法の手続きとしては、9月4日付けで法第57条の2第1項の規定に基づく土木工事等の届出が市教委へなされ、確認調査が必要という意見を付して9月8日付けで県教委宛に進達した。確認調査の実施については、事業者の要望にできる限り添うこととして、法57条の2の届出書の進達と同日付けで確認調査実施の事務連絡を県教委宛に行って直ちに準備に入り、翌9月9日に確認調査を実施することとした。

確認調査の期間は、急きょ実施せざるを得なかつたこと、他事業との兼ね合いなど諸般の事情もあり、1日限りを予定として終了を目指した。そのため、調査の方法は、重機（バックホウ）を使用して任意のトレンチを順次発掘して行き、掘削土中における遺物の有無、遺構認面における遺構の確認、そしてトレンチ断面における遺物包含層の確認などを主な視点として実施し、発掘したトレンチ及び遺構については写真と平板測量による配置や分布図を作成することとした。

午前中は、主にトレンチの掘削と遺物や遺物包含層そして遺構の確認作業を行い、午後から人員を増やして測量を行った。調査の結果としては、開発区域のうち、県道側となる東辺部を除くおよそ2,700m²の

範囲に遺構が確認されることが判明し、意外と密度が濃いことも確認された。また、遺跡の時期的についても、表掲されていた遺物とはほぼ整合し、古代から中世前期を中心としていることが明らかとなった。

確認調査の結果については「概要報告書」としてまとめ〔柏崎市教委1997〕、平成9年9月18日付で県教委へ報告した。そして平成9年9月26日付け、教文第655号により工事着手前に発掘調査を実施することが事業者宛に通知されたのである。しかし、平成9年度における本発掘調査の実施については、市教委側の事業計画が、すでに年末までの調査日程が決まっていたことから、すぐに対応することができない状況にあった。また、平成10年度における本発掘調査の実施についても、先行事業との兼ね合いがあり、更に年末まで予定されている試掘・確認調査結果を見ない限りは判断できない状況にあった。このため、本発掘調査の実施主体を含め検討を進めたが、平成9年11月21日において、市教委直営方式により平成10年6月中旬から9月末頃に本調査を予定することに決定し、平成10年度当初予算の計上に向けた具体的協議が行われたのである。なお、当該宅地造成事業用地に接する市道において、事業の実施時期は未定であるが、拡幅することが計画されていた。この部分の取扱いについては、これまでの協議でも検討されてきたことであるが、両事業を別個に実施するのでは費用や時間のロスが大きいことから、合わせて調査できるよう調整することとなった。

平成10年5月12日において、市道拡幅分を合わせて本発掘調査を実施することとして、本発掘調査の実施に向けた具体的な協議がもたらされた。この日の協議では、発掘調査対象区域を市道などの道路部分に限定し、盛土工法による宅地部分については地下に与える影響がほとんどないことから、そのまま盛土下に保存することとした。このため、発掘調査の対象とした面積は、市道部分を含め613.57m²となった。それぞれの発掘調査費用負担については、調査面積の比率で算定することで協議が整った。

これらの経緯のあと、現場事務所の設定など具体的な調査準備に入り、平成10年5月15日、発掘調査委託契約を締結し、同年6月9日付け、教文第24号により、法第98条の2第1項の規定による文化庁長官宛の埋蔵文化財発掘調査の報告を県教委へ通知するとともに、平成10年6月9日から本発掘調査に着手するに至った。



写真1 確認調査スナップ

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と地理的環境

今回の発掘調査で対象となった角田遺跡は、柏崎平野の中央部に近い劍地区に位置し、市の中心部からは北東へ約4～5kmほど離れた地域である。ここではまず柏崎平野について概観し、遺跡の位置とその周辺地形についてまとめてみたい。

柏崎平野概観 柏崎平野は、新潟県の日本海沿岸部のほぼ中央部に位置した、臨海沖積平野である。行政的には中越地方として区分されているが、柏崎平野は中越地方でも北西部といえる。中越地方は、地形的には大きく南部と北部とに分けられる。南部は、魚沼地方を中心とした山間部で、群馬・長野両県と接し、豪雪地帯として知られている。北部は、おもに東半部が新潟平野の一部で、柏崎平野は西半部にあたる。新潟県には、信濃川・阿賀野川という全国でも有数の大河によって形成された広大な新潟平野や、関川による高田平野など、比較的大規模な平野がみられる。柏崎平野はこの二大平野に間に挟まれ、山塊や丘陵等の分水嶺に囲まれた小規模な独立平野である。

柏崎平野は、鶴川・鰐石川およびその支流である別山川を主要河川として形成されている。平野は、河川流路によって南へあるいは北東へ広がり、流路に沿った自然堤防の発達が顕著である。また平野を囲む山塊・丘陵は、西側から派生する東頸城丘陵の一部をなし、刈羽三山と総称される米山・黒姫山・八石山が連なっている。北流する鶴川・鰐石川はそれぞれ独立した水系を有しているため、河川によって平野を取り巻く丘陵は地形的に西部・中央部・東部に3分できるが、刈羽三山は各部の頂点にある。西部は、米山を頂点とした険しい山塊によって高田平野とを隔絶させるが、その山塊は米山海岸にまで達し、低位・中位・高位段丘の形成が著しく、断崖が多い。また西部には、中央部・東部とは異なって沖積地は少なく、砂浜もほとんどない。鶴川と鰐石川に挟まれた中央部は、黒姫山を頂点とした丘陵がなだらかに裾野を北側へと伸ばしている。沖積地に近い丘陵の北辺部では、広い中位段丘がみられるが、鶴川水系あるいは鰐石川水系による浸食が著しく、島状を呈する独立丘もある。東部は、南西→北東方向へ伸びた八石山丘陵・曾地丘陵・西山丘陵が規則的に並び、向斜軸によって長鳥川・別山川といった鰐石川の支流が南西へ流れている。また中央部→東部にみられる沖積地の北西辺は、日本海によって洗われているが、海岸線に沿って柏崎砂丘・荒浜砂丘が横たわり、南西では米山山系の丘陵に、北東では西山丘陵に接している。平野部における大部分の沖積地は、現在では水田化されているものの、本来はこの砂丘の後背地として湿地性が強い低地である。

角田遺跡と周辺の旧地形 鰐石川は、中流域になると蛇行をしながらおおむね北へ流れていく。南条付近で長鳥川を合流させた後は、黒姫山に連なる段丘と曾地丘陵との間を抜け、流路もやや西へ傾くようになる。下流域では、劍・上原付近で流路を真西にとると、まもなく南西に流れる別山川を合流させる。その後も荒浜・柏崎砂丘を回避しながら、やがて日本海へ注がれる。鰐石川は河川改修によって蛇行部分がショートカットされた部分が多いが、旧河道を追えば、蛇行していた流路に沿うようにして各所に幾筋もの自然堤防を形成させていることがわかる。角田遺跡の位置する別山川との合流点付近を中心とする一帯は、柏崎平野でも自然堤防の発達が顕著な場所である。沖積地の遺跡は、自然堤防のような微高地で見つ



沖積地

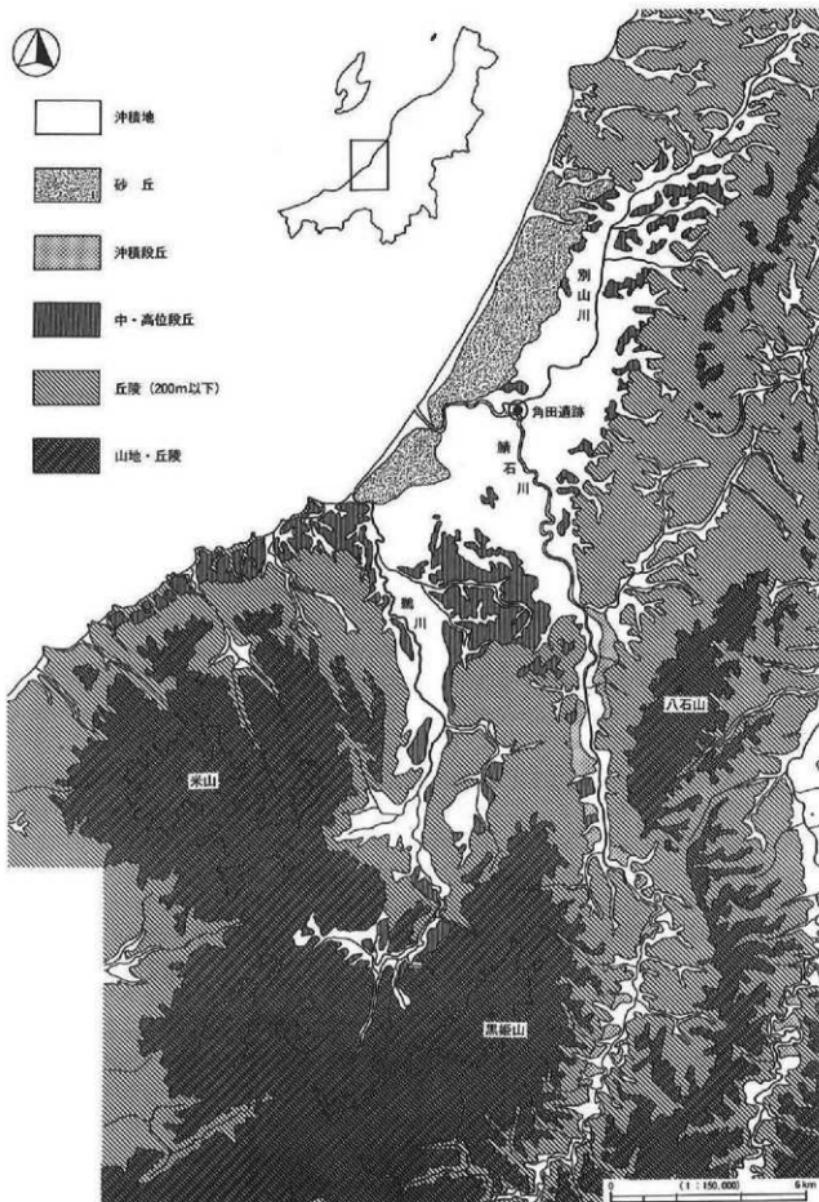
砂丘

沖積段丘

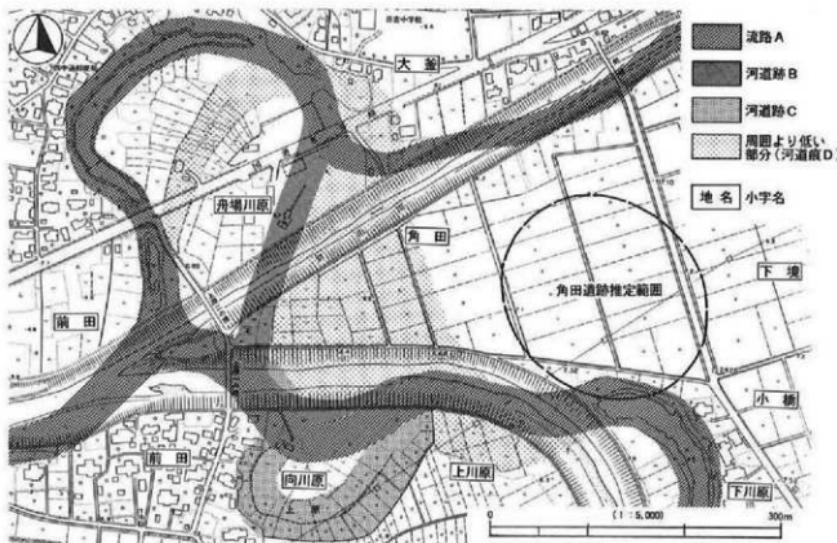
中・高位段丘

丘陵(200m以下)

山地・丘陵

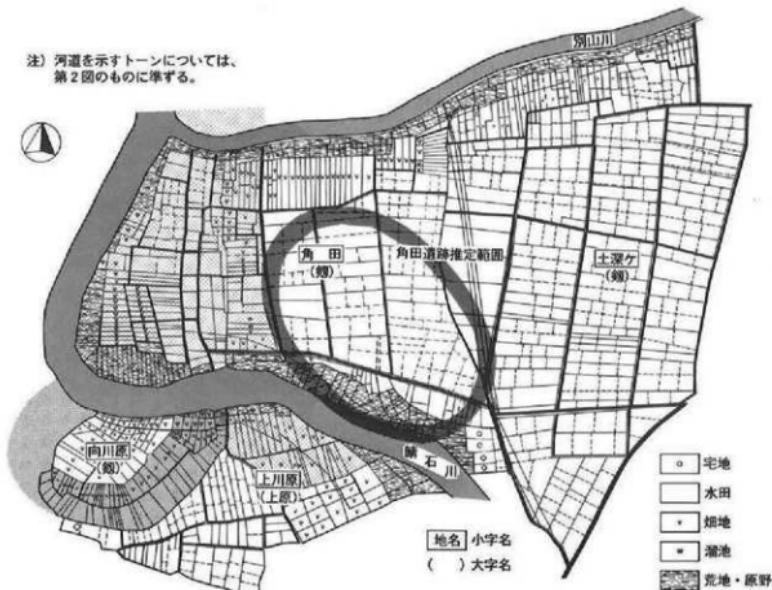


第1図 柏崎平野の地形分類と角田遺跡の位置



第2図 角田遺跡周辺の旧河道推定図

注) 河道を示すトーンについては、
第2図のものに準ずる。



第3図 角田遺跡周辺の旧土地更正図 (約 1 : 5,000)

けることが可能で、角田遺跡もそのひとつといえる。

角田遺跡が立地するのは、鮭石川・別山川合流点の内側にあたり、小字では角田とされる地点に該当する。近年では宅地化が著しいものの、1970年代頃には一面が水田となっていた。今回の調査区は、角田地内の南西隅に位置し、水田の標高は6.6~6.7mを計る。調査区の北側や西側および東隣の小字下境地内の水田は6.2~6.3mであるから、約40cmの標高差が認められる。また、合流点も含めた鮭石川・別山川の流路については後に述べることとするが、遺跡と推定される範囲内では河道痕は確認されていない。さらに、遺跡のすぐ南側においては、鮭石川の流路がほぼ直角に曲がっていることなどを考えれば、遺跡は周辺よりもやや隆起した微高地に立地していることがわかり、地形的に安定した地点であったことがうかがえる。

河川流路の変遷試論 最後に、河川流路の変遷について考察し、旧地形の復元の一助としたい〔柏崎市教委1998〕。第2図は、1972年調整の地図を下地として作成したものである。当該地が土地改良事業等によって現在のような水田区画を呈するようになったのは1960年代以降のことである〔西中通のあゆみ編さん委員会1995〕。また、現在の流路は戦後の河川改修によるものであるが、随所にみうけられる河道痕によって、過去においてはかなり小刻みに蛇行した流路であることを知ることができる。ただし、複数の河道痕には切合関係があり、すべてが同時期に河道として機能していたわけではなく、流路にも変遷があったことがわかる。1947年の航空写真〔柏崎市教委1998図版4〕によれば、当時の流路はAであったことがわかる。またこの航空写真からは、流路以外にも河道痕を観察することができる。それらを同図に重ね合わせ、やや推測を加えたところ、B~Dのようになった。

河道痕B~Dについて、旧土地更正図（第3図）を参照すると、明治23・24（1890・91）年の流路は、河道痕Bに合致する。また角田が含まれている日吉村大字領は、鮭石川右岸にある地区であるが、例外的に向川原は、鮭石川左岸にある。向河原・上川原間に朝と上原の大字界のみならず、日吉村と樺原村との境界にもあたる。このような大字・村界のあり方は不自然であり、向川原の田畠の区画から推測されるように、境界部分に旧河道を想定したい。するとこの河道は第3図の河道痕Cに合致することがわかる。Cは明治期の大字・村界をなしているが、明治期の大字・村が近世の村をもとに編成されたとすれば、Cは近世から機能していたと考えられる。しかしBよりも古いことがわかるのみで、これ以上は年代を明確にする資料はない。さらに角田の部分をみると、河道沿部が原野・荒地であるのを除けば、土地の地目・区画は大きく南北に長いブロック状になされていることが観取できる。その中には、溜池があり、周囲が水田であるにも関わらず畑地の多いブロックがある。また西側からの道路がここで途切れたり、このブロック内の道路があるなど、様相の差異がわずかに認められる。おそらくこのブロックは周囲よりも低い土地なのであり、旧河道の想定が可能と思われる。この想定が妥当とすれば、おそらくこの河道は上川原・角田地内を通過するもので、河道痕Dに相当する。Dの年代については明確にできないが、上川原にみられる河道痕がCによって切られているので、Cよりは古い時期に機能していたと考えられる。

このように考えれば、鮭石川・別山川の流路はD→C→B→Aと変遷したと考えられ、Cはおそらく近世に機能していたと思われる。ただし、これらの推論はやや短絡的に進められている部分があることを否むことはできない。また、流路そのものについても、組合せによってさらに多くのパターンが想定できると思われる。しかし、いずれのパターンにしても鮭石川・別山川が角田遺跡に与えた影響は大きかったことが考えられる。

2 角田遺跡をめぐる歴史的環境

今回実施した角田遺跡の発掘調査では、中世前期を中心とした遺物が検出されているが、ほかにも古墳・古代・近世といった各時期の遺物も出土している。これらは、断続的ではあるものの、各時代における人々の痕跡である。また、周辺の台地上には縄文・弥生時代の集落跡も発見されている。

近年の遺跡発掘調査では、柏崎平野南部あるいは東部において著しい成果があげられているが、角田遺跡周辺はこれらの遺跡群とは低湿地によって隔離されている。第4図は、角田遺跡をも含めた、鰐石川・別山川の合流点付近に集中する遺跡および荒浜砂丘南端部に散見する各遺跡の分布を示している。本節では、これらの遺跡や諸資料から、各時代を概観することとしたい。

縄文時代 荒浜砂丘上には数件の縄文遺跡の存在が知られているが、ここで対象とした南端部では、荒浜庚申塚遺跡（3）があり、前期後半の土器片が採集されている〔岡本1979〕。集落が確認されたのは、砂丘内陸側最南端の東側に舌状に張り出した台地上に営まれた岩野遺跡（9）である。発掘調査によって、橢円形状の堅穴住居が4棟検出され、出土土器から中期中葉～後葉に比定されている〔柏崎市教委1980〕。さらに、すぐ西側の西岩野遺跡（8）からは、後期初頭の三十稻場式土器が出土している〔柏崎市教委1987〕。周辺の遺跡分布状況から、岩野遺跡・西岩野遺跡が中～後期の中核的な集落であったと考えられる。このほか、開運橋遺跡（7）から晩期と目される浅鉢形土器が出土しているが〔柏崎市史編さん委1987a〕、この頃になると、遺跡の立地は台地上から神積地へと変化していったと想定される。

弥生～古墳時代 柏崎における弥生～古墳時代の遺跡としては、当該地とは東側の低湿地で隔離された吉井遺跡群にて顕著であるが、当該地における分布はやや稀薄である。

弥生時代では、西岩野遺跡（8）・開運橋遺跡（7）で後期の資料が得られるのみである。岩野遺跡と同じ台地上に位置する西岩野遺跡は、発掘調査によって後期後半に営まれた集落であったことがわかった。土坑やピットのほか、住居跡と思われる遺構も検出されている〔柏崎市教委1987〕。開運橋遺跡では、壺形土器・蓋形土器が出土しているが、詳細は不明である〔柏崎市史編さん委1987a〕。

角田遺跡からは古墳前期に属する古式土師器が出土している。周辺では、劍下川原遺跡（16）で古式土師器が出土したとされるのみで、詳細な時期も不明である。しかし、鰐石川の自然堤防上に立地するという点では共通するといえよう。

古代 7世紀の畿内政権によって、当該地にも律令に基づく制度が導入されたと考えられる。7世紀末までは北陸道にあたる越国が3分割され、阿賀野川以南の新潟県域は越中国に属した。その後、8世紀初頭に越中国4郡割譲や出羽郡建郡・出羽国建置を経て、明治に至る越後国が確定したと考えられている。なお柏崎地方は、割譲された4郡中の古志郡に属していたが、9世紀初頭に三島郡として分置独立したと推定される〔米沢1980〕。さらに、承平年間（931～937）に成立した『和名類聚抄』には、三島（島）郡内の郷として三島（島）・高家・多岐の3郷が記載されている〔柏崎市史編さん委1987b所収4・5〕。この3郷の範囲については、推測の域を出ることができない。しかし、おおよその範囲でとらえるとすれば、鰐石川下流域・別山川流域は多岐郷域の比定地とすることができます。

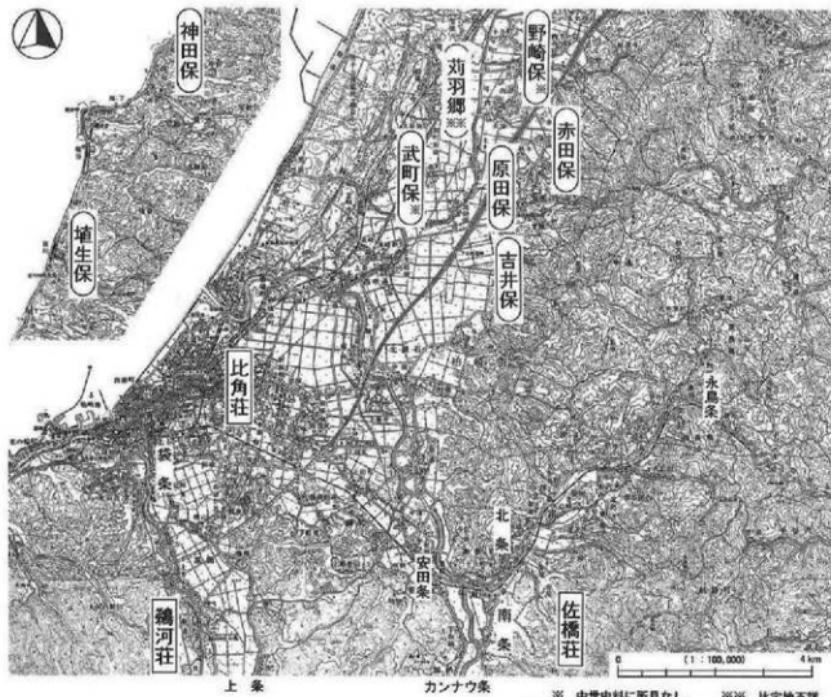
集落は、角田遺跡のように自然堤防上に立地すると考えられる。また、遺跡の実態は明かではないが、砂丘上からも点的に遺物が出土しており、今後の資料の増加が期待される。なお、荒浜沖海底（1）からは、須恵器の横瓶が揚げられたことにも注目されよう〔柏崎市史編さん委1987a〕。



国土地理院「柏崎」1:25,000 1998年をもとに作成

No.	名 称	時 期	立 地	9 岩野遺跡	縄文中期中葉～後葉	台 地
1	(荒浜沖海底)	古 代	海 底	10 土合殿屋敷遺跡	中 世	冲 案 地
2	旧荒浜小学校裏遺跡	古 代	砂 丘	11 岩野遺跡	中 世	台 地
3	荒浜庚申塚道路	縄文前期後半	砂 丘	12 宮ノ前遺跡	古代・中世	冲 案 地
4	荒浜小学校裏B遺跡	古 代	砂 丘	13 下才見遺跡	中 世	自然堤防
5	荒浜小学校裏A遺跡	古 代	砂 丘	14 角田遺跡	古墳前期・古代前期・中世 前期・近世前期	自然堤防
6	沙鉢山遺跡	古 代	砂 丘	15 上原遺跡	中世前期	自然堤防
7	間連橋遺跡	縄文晚期・弥生後期・古代	冲 案 地	16 錦下川原遺跡	古墳・古代	自然堤防
8	石岩野遺跡	縄文後期初頭・弥生後期後 半・中世・近世	台 地	17 境川原遺跡	中 世	自然堤防

第4図 角田遺跡と周辺の遺跡分布図



第5図 柏崎平野における荘園・公領分布図

中世 11世紀後半～12世紀になると、越後国にも多くの荘園・公領が成立するようになる。刈羽郡と称された柏崎平野の場合、荘園の分布する平野中～南部と、公領の分布する平野北部に分類される（第5図）。中～南部は、鶴川流域・鰐石川（中）流域に該当するが、鶴河・佐橋・比角の3荘の荘域を比定することができる。立荘はやはり11世紀後半～12世紀前半と考えられる〔荻野1986〕。これに対し、別山川流域を中心とする現刈羽村までも含めた平野北部や砂丘上では、公領の単位である保が散在している¹⁾。中世史料からは、神田・埴生・赤田・原田・吉井の5保の存在が確認され、12世紀後半以降に成立したと考えられている〔荻野1986〕。この他にも、野崎保・武町保があり、17世紀後半の「天和検地帳」では、角田遺跡の位置する鶴村が土合村などとともに武町保に分類されている。ただし、この2保についての中世に遡る史料はないため、角田遺跡が中世の保に属していたとするには資料の根拠に乏しい。角田遺跡の所在する西中通地区は、いずれかの荘園内に含まれた可能性は低く、公領も確認されていない。また、当該地が鰐石川と別山川の合流点に近いことからも、荘園と公領の分布域の間に位置していることにもなるので、中世における土地制度上の帰属はあまり判然としない。

中世の遺物が出土する遺跡は、岩野台地や鰐石川・別山川の自然堤防上で見つけることができる。岩野

台地には西岩野遺跡（8）が所在するが、発掘調査では溝・柵跡・土墳が検出されている。このうち1基の土墳からは、北宋銭6枚が出土し、これを六道錢とする墓墳が想定された〔柏崎市教委1987〕。また、同台地の南東方向へ舌状に張り出した部分には、岩野城跡（11）が周知されている。直下の水田面との比高差は10~20mで、全体的には小規模であるものの、尾根筋に直交する空堀・土塁等がみうけられる〔柏崎市史編さん委1987b〕。台地東端の麓には土合殿屋敷遺跡（10）、岩野城跡の南麓には、宮ノ浦遺跡（12）がある。宮ノ浦遺跡からは、古代土器のほかに青磁片が採集され、14世紀と目されている〔柏崎市史編さん委1987a〕。これら2遺跡は、岩野城跡との関係もしくは別山川とは対岸になる角田遺跡との関係など、今後注目される遺跡である。また、この他に別山川左岸の下才見遺跡（13）、鯖石川左岸の上原遺跡（15）・境川原遺跡（17）がある。特に上原遺跡は、角田遺跡とは位置的にも近接し、同様に中世前期の珠洲焼片も採集されている。このほか、岩野遺跡で検出された中世以降の所産とされる地下式墳や境川原遺跡付近に立つ五輪塔・宝鏡印塔などは、当時の非日常的な様相を示す資料であろう。

近世 中世末までの柏崎平野は上杉氏による支配がなされるが、その会津移封後は、堀氏による支配となり、幕藩体制下では春日山藩領となる。その後、西中通地区は分割して統治された時期も続いたが、角田遺跡の属する近世の朝村は、土合・土合新田・下大神田という別山川を挟む村々と一貫して同じ領主による支配を受けている。その変遷を概観すると、1681~1701年の天領時代を除けば、18世紀前半までは高田地方の藩主（堀氏→松平氏→酒井氏→松平氏→天領→福葉氏→戸田氏→松平氏）¹⁾による統治だったといえる。1741年に高田藩主松平氏は白河藩へ移封されたが、当該地の支配はそのまま継続されたので、この松平氏の支配は幕末までに至る。

近世の朝村はどのような状況であったのかについては、19世紀初頭に藩主松平定信の命によって編纂された『白川風土記』〔柏崎市立図書館1977〕などによってある程度把握することができる。村で使用する用水は、「堰六カ所（中略）水モトハ藤井大堰ノ東江筋ノ分流ヲ引」とある。この藤井大堰とは南西の藤井村にある井堰のことであり、付近一帯の村はこの堰より用水を得ていた。藤井堰は、1595年に上杉家の直江兼続による「藤井堰」〔柏崎市史編さん委1987b所収600〕で築造を命じられた堰である。1598年の会津移封直後、豊臣秀吉は石田三成を派遣して国改めをしているが、藤井堰については同年4月に「藤井堰」を追認する旨の文書（『柏崎市史』中巻2頁所収）を発している。また、上杉氏に替わって入部した堀氏もやはり同年5月に同文の文書〔柏崎市史編さん委1984所収1~2~3〕を発している。16世紀末は、当該地における支配者の変遷があった時期であるが、藤井堰の築造はいずれの支配者においても関心事であったようである〔新沢1990〕。それは藤井堰の築造によって、周辺の開発を大きく前進させることを意図していたものと考えられる。

また『白川風土記』によれば、鯖石川には「渡舟一艘アリ隣村ヘノ通路ナリ」とある。鯖石川は村々間の主要な交通路であった。第2図に示したように朝村角田の西側には鯖石川が大きく蛇行した流路があり、その内側は「舟場川原」と称されている。鯖石川の河川交通については、さらに下流の北国街道における「悪田渡守」が知られているが、『白川風土記』のわずかな記載や地名から考えれば、角田遺跡に位置的に近い「舟場川原」にも何らかの役割があったと思われる。

註 1) 保と同じく公領の単位である郷についても、羽羽郷が知られている。しかし、比定地が中蒲原郡村松町にもあることや、越後の場合、莊園内の単位である郷との判別が容易でないことから、現在のところ詳細は不明とせざるを得ない〔荻野1986〕。

2) 堀氏は春日山城から福島城へ移築、次の松平氏は福島城から高田城へ移築といった変遷がある。

III 調査

1 調査の方法と調査区（グリッドの設定）

当該事業用地は、西辺約30m、東辺約70m、北辺約80m、南辺約90mを計る台形を呈する範囲で、面積は約3,600m²である。平成9年にこの全範囲を対象とした確認調査を実施した結果、用地東部を除いた約2,700m²が遺跡の範囲内であると考えられた〔柏崎市教委1998〕。しかし、その後の諸協議により、本発掘調査の対象が道路部分のみとなったので、市道拡幅部分となる延長約50m、幅約3m（A地区）および宅地内道路部分となる総延長約75m、幅約6m（B地区）の範囲が調査区として設定された。

調査用グリッドは、事業においてB地区に打たれたセンター軸となる20m毎の指標（№1～3）をもとに設定した（図版2）。まず、№1～3の指標を基準として東西方向へ10m毎に分割し、その呼称には西から1・2・3…の算用数字を用いる。次に、センター軸に直交するラインを東西方向に10m毎に分割し、その名称には北からA・B・C…のアルファベット大文字を用いる。これによって10m四方の大グリッドが設定できる。大グリッドの名称は、組合せによって「A-1グリッド」などとすると、本調査区はB～C-2～9・D-1～3・E-3～4・F-5～6の各グリッドに跨がっていることになる。さらに、この大グリッドを2m四方の小グリッドにより25分割した。小グリッドの名称は、北西隅を①、北東隅を⑤、南西隅を⑨、南東隅を⑩となるよう順に配置し、大グリッドと組合せて「A-1①グリッド」などと表記し、遺構外から検出された遺物の出土地点などを表すことにする。

調査は、まず重機による表土剥ぎから始める。調査区の形態が単調ではないため、A地区西端より開始し、次にB地区へ移行した。遺物包含層に含まれる遺物は概して少なかったため、表土剥ぎ段階で遺物の検出に努め、遺構確認面まで掘り下すこととした。全体的には南西から北東へと進めていったが、表土剥ぎを追いかけるようにジョレンがけと調査区壁の整形、さらに遺構確認を実施した。遺構確認が終了すると、すぐに遺構の発掘を開始した。発掘は、B～C-8～9グリッドで重複している溝群から始め、その間に遺構見取図を作成した。溝群の完掘後に、1,200基以上もの柱穴・井戸を中心とした遺構の発掘に着手した。遺構数が膨大な上に重複も多く、時間的な制約もあったことから、発掘にあたっては効率化を図った。すなわち、遺構覆土および柱痕は確認面から観察して遺構台帳に記載し、半截段階では重複した遺構の新旧関係の把握に重点をおいたのである。井戸のほか、性格不明の大型土坑については、柱穴の後に着手することとした。おおかたの遺構が完掘すると全体清掃と空中撮影を行った。最後に測量作業を実施して現場作業は終了である。

2 発掘調査の経過

現場作業は平成10年6月9日から8月12日の調査終了まで、延47.5日間にわたって実施した。調査面積は約530m²で、調査員・調査補助員延266人、作業員延275人を要した。調査期間の前半には梅雨に悩まされたが、雨天でも決行したので、作業を中止としたのは全体でわずか4日間のみであった。

発掘の準備と遺構確認 6月になってから、実際に現場での準備に取り掛かり、小屋の設置や機材の搬

入、および表土剥ぎの打合せや調査区の確定をした。

9日、初日であるため関係者の挨拶・諸注意の後、早速表土剥ぎから着手した。また平行して事業用地外周に安全柵を設けていった。表土剥ぎは1日でA地区を終了できたが、E～F-5グリッドで用水路と調査区間に亀裂が生じ、危険になったので、この部分のみは埋め戻すこととした。しかし、表土剥ぎはおむね順調に進めることができ、12日までに終了した。表土剥ぎの終わった部分より、順次ジョレン掛け・調査区壁整形を行っていったので、17日までにすべての遺構を確認することができた。

遺構確認の結果、1,200基以上もの遺構が検出され、見取図の作成に入った。確認調査段階では、1m²あたり1基、つまり全体では500～600基と算定していたが、およそ2倍の結果となった。特にB～C-3～4グリッドは遺構の密集区域であり、10基以上の遺構が重複している部分もあった。また、全体的にみると、覆土の色調には差異が観察され、おもに黒色系の遺構は中世、灰色系は古代もしくは近世の所産であると目された。

遺構の発掘 17日、見取図作成中ではあるが、B～C-8～9グリッドで検出された溝群から、遺構発掘に着手することとした。溝群の発掘は23日で終了したが、その間に柱穴群の発掘準備として遺構台帳を作成していった。遺構台帳は、調査の効率化を図った内容のものである。18日からは、台帳に記録された遺構より柱穴の半截作業にも着手していく。24日は見取図が完成し、調査区全体の遺構分布を把握できるようになった。全体的に分布密度は高いが、特にB～C-3～4グリッドが密集区域で、重複も多い。遺構発掘はこれより8月初旬まで続くが、この区域の進捗状況が全体の工程に影響すると予想された。

調査区付近は、かつて葦や芦が生茂っていたと思われ、遺構確認面にはその根の底についた黒色土が無数にみられた。そのため、地山土と柱穴の根固部との識別には誤認が生じ、悩まされることが多かった。また、6月は2日間以上晴天であったことは稀で、午前中は降雨と浸水に対する排水作業に費やされる毎日であった。そこで、浸水が激しいと予想される日には早朝6時より水中ポンプ2台を稼動し、効率化を図ることとした。

しかし、梅雨が明けて7月に入ると降雨も少なくなり、調査区内の水位も低下したためか湧水や浸水は減少したので、排水作業の時間は大幅に削減することができた。また14日頃からは、井戸跡をはじめとする比較的大型の遺構に着手できた。さらに、翌15日には、遺構台帳がすべて完了したほか、遺構密集区域であるB～C-3～4グリッドの発掘がほぼ終了した。これによって、作業ベースを早めることができ、30日には、B地区から未着手であったA地区に作業の中心を移すことができた。A地区についても8月6日には発掘を終了することができた。また、7月28～31日には、勤労体験学習として市立南中学校の生徒13人の参加があった。

発掘の仕上げ おおかたの遺構を完掘すると、空中撮影のための準備として、排水や清掃に取り掛かった。また、A地区より平面図を作成していくといった測量作業も同時に進めていった。遺構の数が多いため、この2つの作業はどちらも難航した。11日午前になんとか全体清掃を終了させたので、昼に空中撮影を実施することができた。午後には木柱根をすべて採集し、器材等の撤収作業を始めた。翌12日には、残りの測量作業がすべて終了したので、現場作業を完了とした。

なお、今回の調査では時間的な余裕がなかったため、現地説明会等を開催することができなかつた。しかし、時折訪れる地元の人々や小学生に本遺跡の解説をしたり、雨天時には調査参加者に出土遺物の説明会を催すなど、できる限りの普及活動に努めることができた。

IV 遺跡と遺構

1 角田遺跡概観

1) 立地と現状

遺跡範囲と現状 角田遺跡は、柏崎市大字劍字角田地内に所在する。出土遺物から判断された時代は、古墳時代を含む古代から中世・近世までにおよび、断続的に集落が営まれていたことが明らかにされた。角田地籍とされる範囲は、別山川と鰐石川との合流点へ突き出た鋭角的な一角に相当するが、現在の別山川は、角田の北東隅部分を河川改修にともなって開削されたものである。角田地籍の西端から西方では鰐石川の蛇行が著しく、合流点もその時々によって位置を変えているが、河道の痕跡は田畠の区画などに記録されている。しかし、その東側となる角田地籍の主体部は、旧河道等による蛇行痕ではなく、旧更正図に示された水田の区画も整然として広いなど、比較的平坦で安定していたことがうかがわれる。それは、昭和53年の6・26水害の際に冠水しなかったという実績が物語っているとおりである。

遺跡の範囲については、今のところ具体的に示されるほど、周辺での調査が進んでいない。ただし、東の境については当初の推定範囲より拡大し、県道付近まで至ることが判明している。南側については、鰐石川の現河道が境界であるが、蛇行が著しいとおり浸食によって一部が流出した可能性は高い。北側についても判然としないが、別山川の河道付近が境と考えられる。これらの想定からすれば、一辺およそ250mほどの範囲となるが、今後はこれらの再確認が必要であろう。

当該地一帯の地域的な特徴としては、河川の合流点という属性がまず挙げられる。また、遺跡の北側では、別山川の右岸に国道8号線やJR越後線が東西に走り、鰐石川右岸沿いには県道が南北の方位でこれらと交差していることなど、交通の動脈が通っているという点である。これらの状況は、古代や中世における河川交通の可能性を考え合わせれば、交通の要衝としての歴史的な経緯を想定することができそうである。現角田地内も、このような交通の至便性もあって、小規模な埋立て造成が繰り返され宅地化が顕著となっており、現況を水田とした角田165-5番地の調査区域も、宅地造成が本発掘調査の原因であった。

立地と微地形 調査区内における遺構確認面の色調は、東側の県道沿いや南東隅部付近が還元化されたままの青灰色粘土層であり、わずかながら観察された遺構確認面の傾斜でも低くなるという結果が得られている。このため、今回の調査区は、遺跡範囲でも東端部にあって南端に近いこととなり、南東隅部分の一角に相当することになりそうである。当該地は、前述のごとく鰐石川と別山川との合流点に所在するが、位置からすれば鰐石川右岸に形成された自然堤防が主な立地基盤であったと考えられる。現在の用水路は、鰐石川沿いの南辺に水路を通り、北側の別山川に向かって用水を落としているが、基本的にはこれが地形の特性を示している。つまり、鰐石川が形成した自然堤防の頂部が稜線をなし、北側と西側へ緩く傾斜しているのである。このような現況からすれば、今回の調査区域も自然堤防の頂部に近い位置を占めていたことになる。ただし、鰐石川は、調査区の南側で流路を北から西へ転回させているとおり、自然堤防の稜線も変化しており、この点は調査区における傾斜と整合することになる。したがって、遺跡の東側に相当する県道以東は自然堤防の本体から外れており、集落跡の居住区域がそれ以上拡大する可能性はなく、還元状態の遺構確認面が続くとすれば、湿地状況に近い環境が想定できる。

しかし、湿地的な環境に近いとしても、現在の鯖石川の通常水位から3mの高低差があることから、常に湛水する環境ではない。また角田地区の現況は、最近まで一面の水田であったが、用水を河川奔流から取水することは難しい。現水利は、文禄年中以降に開削された藤井大堰東江が利用されており、角田地内が美田に開発されたのは、東江が完工したとされる承応3年（1654）前後となる近世初期以降のことであった。したがって、それ以前の開発状況や土地利用を推察すれば、自然堤防の頂部を中心とした高地上では居住空間に活用されても、県道以東においてはやや湿地的状況を呈していることから、一部が水田に開発されることはあるものの、大半は芦原などが広がっていた可能性が考えられるであろう。

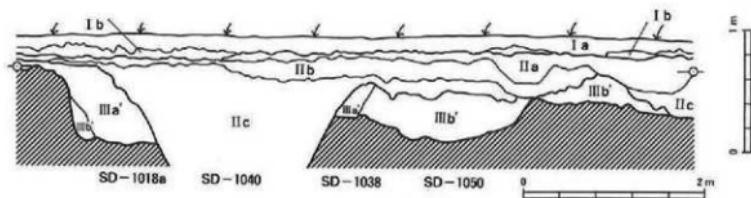
2) 層序

角田遺跡の基本層序は、大きく4層に大別される。第I層は現在まで耕作されていた水田耕土関係の土層である。第II層は、第I層以前の旧耕作土と、水路や大溝内に堆積していた灰色系粘土層である。大半は調査区の東側において検出されるもので、おおむね7ライン以東に分布する。第III層が遺物包含層であり、古代から中世前期を主体とするが、近世初期までを含むか否かは明確でない。第IV層が遺構確認面とした黄褐色もしくは青灰色粘土層となる。

第I層は、上下二枚に細分され、上位のa層が暗褐色粘質土の耕作土層、下位のb層が水田の床土とされる明灰色もしくは白灰色を呈した粘土層であり、ほぼ調査区全面に広がり、第I a層直下に安定して存在する。調査区全てが水田であるため、ほぼ水平に全面堆積している。

第II層は、大きく3区分することができ、第I層と同じく水田耕作土あるいはそれらと関わる層序である。a層は、大溝等の覆土上層位を水平に覆う灰褐色粘土層である。暗褐色を呈するb層は、現耕作土の下位にあってSD-1040溝の上位を覆い、ほぼ水平に堆積していることから、水田耕作土層の可能性が高い。ただし、時期的には新しく、圃場整備以前の水田と水路等に伴う可能性が高く、同一層位に溝の断面などが確認されている。c層は、SD-1050溝覆土の上面を覆う灰褐色系の粘土層で、調査区東端付近から以東では厚く堆積するようになる。SD-1040大溝の覆土は、本層が主体である。第II層は、全体的に酸化と暗色化が乏しいこと、また標高が低い東側を主体に堆積していることから、湿地状の環境化において比較的短期間で堆積した可能性も考慮しておきたい。

遺物包含層とした第III層も、大きく3区分で理解したい。a層は黒色粘土層で調査区全体に安定して存在する。数多く検出された柱穴などの遺構は、ほとんどが黒色粘土系の覆土であり、第III a層を表土とした時期の所産と考えられる。したがって、本遺跡の主体的な時期である中世前期に対比できる。黒色は、人為的な生活廃棄物による有機物によって汚染された結果とすることができるかも知れない。b層は褐色～暗茶褐色、c層は茶褐色を呈する粘土層である。遺物の出土は多くなく、時期を特定することはでき



第6図 角田遺跡基本層序模式図

ないが、b層はa層の色調ともかなり相違することから古代に相当し、c層は第IV層との漸移層として理解したい。

第IV層は、その上面を遺構確認面とした。酸化して黄褐色を呈する区域では遺構が密集し、大溝群以東では還元化したままの青灰色粘土層となる。なお、今回は本層を遺構確認面として調査を実施し、時期的には古代以降の遺構が検出されたもので、基本的には無遺物層となる。しかし、出土遺物には、古墳時代のものが確認されているが、その包含層は第IV層中にある。しかし、色調等に変化などは見られず、層位を特定できなかった。当該地が自然堤防でもあり、形成過程の一時期に包含された可能性があるが、これらの確認等は今後の課題としておきたい。

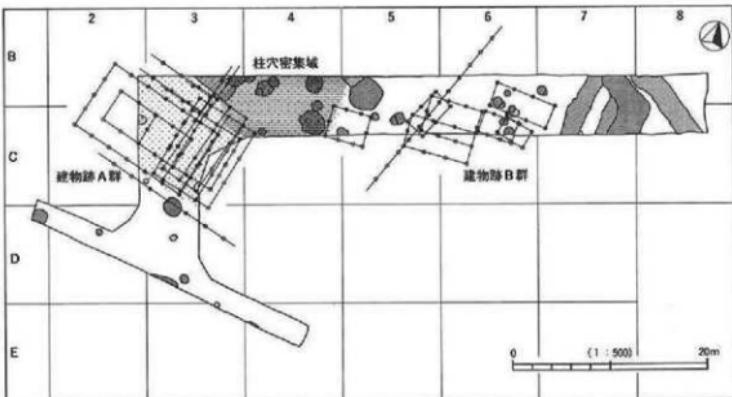
3) 遺構の分布と配置

角田遺跡で検出された遺構は、発掘調査面積530m²に対し、遺構数は延べ1,200個である。それぞれの規模にはかなりの格差もあるが、1m²あたり2個程度が検出された計算となる。このように、本遺跡は遺構の分布密度がかなり高いことがかがわれるが、調査区全体では密集度に粗密があり、最も遺構密度が高いのはB-C-3~4グリッド一帯であった。確認された遺構は、大きく溝と穴に大別される。穴には、土坑と井戸そして柱穴があり、遺構群の大半を柱穴が占め、柱穴の配列により建物跡等が復元される。溝には水路と考えられる大きなものから、性格が不明ながら数条が並列する細長い溝群などがある。

柱穴群 検出総数は、およそ1,100個におよぶ。調査区域の全面に分布するが、B-C-4グリッドでの密度が極めて高く、調査区内での移動もままならないほどであった。次いで密度の高いB-C-3グリッドでは、分布状況に筋状の流れが看取れ、そのまま建物の梁間や桁行となる。同様な傾向は、密度が濃くなりやや煩雑ではあるが、B-C-4グリッドでもうかがわれる。また、B-C-5グリッドにおいてやや密度を落としつつも、その東側からB-C-7グリッドにかけては、ややまとまった柱穴群が分布する。これらに対し、大型の溝群が多く検出された7グリッドライン以東と、A地区とした市道側などDグリッドライン以南では柱穴の分布が少なくなっている。後者の内、A地区となるD-2グリッド東側は、重機による表土剥ぎが深く入り過ぎてしまい、このため浅い柱穴は検出できなかった可能性がある。しかし、南15m程で筋石川本流となることから、全体的にはそのまま密度が薄くなる傾向にあるものと判断できる。また、調査区東端は、遺構確認面の標高も少しづつ低くなり、確認面の還元色が強まることなどから、湿地状の環境へ移行することがうかがわれ、集落の居住可能区域からは遠ざかるものである。

建物跡 前述の柱穴群は、基本的にはすべて建物跡や棚跡の柱穴であり、建物跡は柱穴の分布密度と正比例して配置することは間違いがない。しかし、調査区の幅が狭く、発掘面積も小さかったこと、および柱穴が高密度に分布することなどにより、柱穴の配列を充分に把握し切れなかった。このような事情により、把握できた建物跡は合計13棟となった。しかし、建物跡や棚跡と認識して活用された柱穴の数は、合計で116個であり、柱穴総数の1割程度に過ぎない。この事実は、相当数の建物があったことを物語るが、当該調査区内に関わる建物跡総数を単純に算定すれば、13棟のおよそ10倍程度、少なくとも100棟以上の建物跡の存在を想定可能とするのである。把握された建物跡13棟の配置は、第7図および図版12に示したように、4グリッドラインを境に大きく2群に大別することが可能である。ここでは、C-3グリッド周辺の建物群をA群とし、5~6グリッドラインに分布する一群をB群と便宜的に呼称したい。

建物跡A群の分布域であるC-3グリッド一帯は、遺構確認面の標高が相対的に高い地点である。A群は、指向する方位がN-15~18°-Wでおおむね共通する建物跡6棟と棚跡1列で構成されている。建物



第7図 角田遺跡遺構配置概念図 (1:500)

跡個々の全体像は、すべて把握し切れてはいないが、概して規模が大きい。さらに、SB-1201は四面廊、またSB-1204は東西両廊の可能性があることなどからすれば、主屋もしくは中枢施設となるべき性格の建物跡の存在が想定できる。また、A群は重複の度合いが高く、比較的規模の大きな建物だけでも4棟の重複を確認できるが、活用されていない柱穴の数を考えると、倍近い重複あるいは建て替えを想定せざるを得ない。本群と柱穴群が少なくなる南側の境界には、建物跡とほぼ平行する柵跡が設定されている。これら遺構群のはほとんどは第Ⅲ期（中世前期）の所産と考えられる。もう一つの建物跡群としたB群は、5～6グリッドラインを中心に分布し、小規模な建物跡7棟のほか柵跡1列で構成されている。それぞれの建物跡が指向する方位は、おおむね真北を指向する一群と、A群に近い方位を指向するものが含まれる。両者はそれぞれ時期差と考えられ、前者は第Ⅱ期（古代）、後者は第Ⅲ期となる可能性が高い。

なお、第7図および図版12に示した建物配置からすれば、建物跡A群とB群は、離れて存在するかのように見える。しかし、その空白域となるB・C-4グリッドは、柱穴群が最も密度濃く検出されている箇所であり、建物跡の復元ができるなかっただけであるため注意を要する。また、柱穴の分布状況に、C-3グリッドのような規則性が見出しづらいのは、方位の異なる建物群多数の重複による結果と考えられる。

井戸・土坑群 合計38基を抽出したが、種別としては井戸29基、土坑7基、溝状土坑2基（X類）である。井戸の群としてのまとめりは、D-2・3グリッド（A群）、B・C-4・5グリッド（B群）、B・C-6グリッド（C群）など3カ所ほどとなる。A・B群は建物跡A群の周辺に配置されていた観があり、概して大型の井戸が含まれる。土坑は、調査区の東側と西側の両端に分かれて分布する。X類とした溝状土坑は、東側端部を検出しただけで遺構全体を検出してないため実態を図りかねる。遺跡内の区画などの可能性があるが、溝的な性格が強い可能性もありにわかに決しがたい。

溝跡群 溝は大きく分けて2種がある。まず大型の溝は、調査区東端のやや低くなる7・8グリッドラインに集中する。機能としては、水路や道路の側溝などが考えられ、遺跡全体を規制するものと言える。最後は、浅くて細長い溝跡で、覆土が暗灰色など明色で痕跡的に検出されたものである。調査区のはば全体に分布し、数条が方向をそろえて併走する。建物跡などに沿うものもあるが、性格等は不明である。

2 遺構各説

1) 建物跡

わずか530m²の調査面積の中から、膨大な数の柱穴が検出されたことは、相当数の建物跡（記号：S B）の存在を物語る。その想定数は100棟を下らないと思われ、事実建物跡候補は数多くあった。しかし、1棟あたりの柱穴の大半を調査区外に想定せざるを得ず、確証が得られないなどの事由から、最終的に復元できた建物跡は13棟という結果となった。以下、これらについて個別に概略を述べたい。

なお、各建物跡の位置や規模等については、第1表にまとめたので参照されたい。

S B-1201建物跡 建物跡A群では中心的な建物跡となる。西側が調査区外に出るため、全体構造や規模の確認はできない。東西対称構造として復元すると、桁行4間×梁間2間の母屋を1間幅の廊が四面に巡らされるものとなり、全体としては6間×4間の建物となる。母屋での柱根の残りは意外に良く、SK p-212・223a・241a・250・253・257・326・333の7個で検出された。柱は大きい材木を8分割程度に縦割り、断面を長方形状に仕上げたものが使用されている。柱材の樹種については分析していないため不明である。これら柱の下部には、軟弱な地盤での沈下を防ぐため礎板が配されていたが、母屋ではSK p-253a・257・326の3個から、また廊ではSK p-135・417・351の3個から検出されている。後者の廊で礎板が検出された柱穴の配置は、四隅部分の2カ所と、中央部間仕切りの延長にあたる。

本建物跡と重複せずに同一方位を指向する建物跡としては、S B-1202・1203の2棟がある。両棟は前後しつS B-1201に伴った可能性を考慮しておきたい。

S B-1201建物跡の重複関係については、S B-1205とS B-1204建物跡の2棟が関係する。前者では、SK p-388がSK p-390を切り、本建物跡に付随すると考えられるS B-1202もSK p-406がSK p-500を切っており、S B-1205より新しいと判断したい。また、S B-1204との関係については、SK p-159とSK p-155の関係は確認されておらず、SK p-135とSK p-139は前者が古く、SK p-198とSK p-199bでは前者が新しいものとされ、両者の新旧が逆転しているため判断できない。

時期については、遺物がわずかであり、混入の可能性を伴うなど確実な時期判定には難があるが、SK p-159から中世土師器小皿A II b-1類(47)とSK p-388から中世土師器皿A V b類(32)が出土しており、第III期(中世前期)の所産としたい。

S B-1202建物跡 S B-1201と同じ方位を指向し、柱の位置も対応させるなど一体化が強くうかがわれる建物跡である。この状況からすれば、S B-1201建設に際し、あわせて併設された可能性が想定される。柱穴は、7個が把握できたが、それ以外はすべて調査区外にあるため、全体の規模や構造は不明であるが、S B-1201側となる南側に廊を持つ構造もしくは竪柱形式となる可能性がある。遺物としては、SK p-342・349bから中世土師器が出土していること、およびS B-1201との関連から所属の時期については、第III期(中世前期)と考えたい。

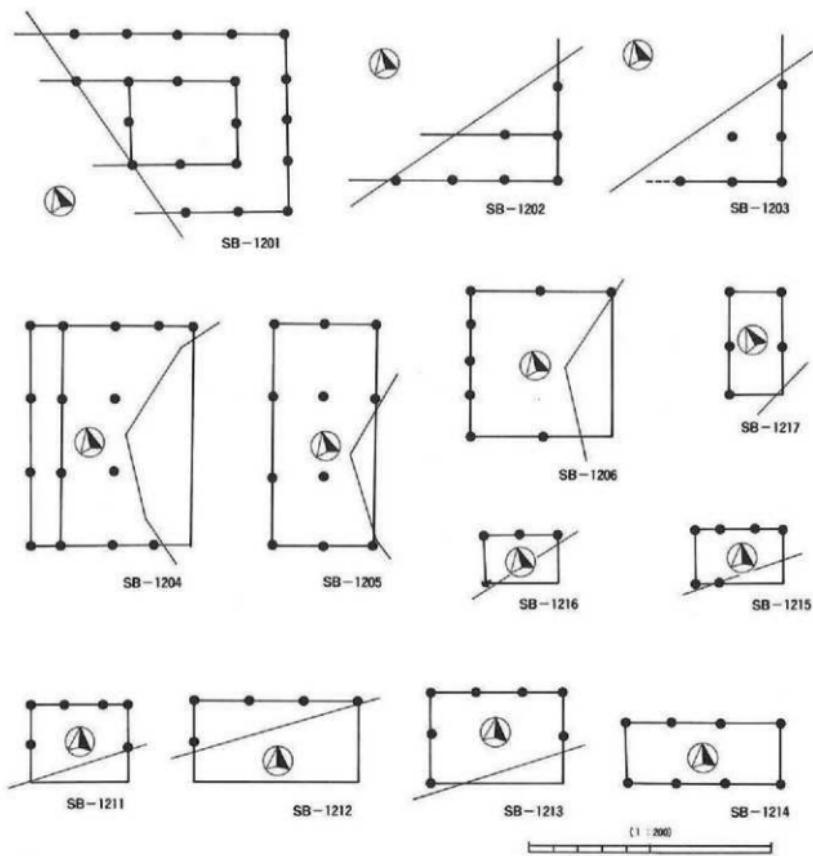
S B-1203建物跡 ほぼ全面に重複するS B-1202の柱穴とは、おおむね60cm(2尺)ほど西へ移動させた位置に柱穴が設定されている。このことから、S B-1202の建て替えに際し、柱の位置を意図的に違えたことが指摘できる。このことが正しいとすれば、S B-1201に伴った可能性が高いことになる。確認された柱穴は6個に過ぎず、全体の様子は不明である。ただし、S B-1202の建て替えとすれば、基本構造はそれに習うものと見られる。時期については、各柱穴から出土遺物が得られなかつたため特定でき

遺構	位置	規模	横方向	主軸	桁行m	梁間m	柱穴番号	時期	備考
S B-1201	B~C -2~3	-×4	EW	N-17.5°-W	7.3	-	135-159-173a-190-196-212 223a-241a-250-253a-257-285 308a-325-333-336-351-356 388-417*	Ⅲ期	四面廟?
S B-1202	B~C-3	-×-	EW	N-17.5°-W	-	-	342-349-371-379-406-899b 1065	Ⅲ期	南廟? 總柱?
S B-1203	B~C-3	-×-	-	N-18°-W	-	-	346-361-370-395-405-1066		總柱?
S B-1204	B~C -3~	3×2	NS	N-15°-W	9.0	6.7	139-141-155-168-199b-220a 299-303a-220a-273-313a-377b 396-440a-489a-521a		東西兩廟?
S B-1205	B~C-3	3×2	NS	N-18°-W	9.1	4.2	146-179-183-209-280-390-415 421-436-487a-500	(Ⅲ期)	
S B-1206	C-3	4×2	NS	N-14.5°-W	5.9	5.8	189b-230-274-314-321a-373 413-478		
S B-1211	C-4~5	3×2	EW	N-0°	4.0	3.15	694-714-742-752-759-769	Ⅱ期	
S B-1212	C-5~6	3×-	EW	N-0°	6.7	-	794-798b-832-866-887	(Ⅱ期)	
S B-1213	B~C -5~6	3×2	EW	N-0°	5.45	3.7	802-819-826-862-871-884-893	Ⅱ期	
S B-1214	B~C -6~7	3×1	EW	N-4.5°-W	6.3	2.5	898-904-928-942-955-972 995-1000		
S B-1215	C-6	3×1	EW	N-3°-W	3.6	2.2	886-888-894-913-930-957		
S B-1216	C-6	2×1	EW	N-16°-W	3.0	2.0	920-929-958-967		
S B-1217	B~C -5~6	2×1	NS	N-27.5°-W	4.2	2.2	727-796-830-841-850		

第1表 角田遺跡建物跡一覧表

ないが、S B-1202に後続しつつ、S B-1201と併存するとすれば、第Ⅲ期（中世前期）の所産とすることができる。

S B-1204建物跡 桁行3間×梁間2間の母屋に東西両側に1間の廊が付く3間×4間の建物として復元した。ただし、全プランのうち東側が調査区外となるため、全体の規模や構造は確定できない。ただ当該想定通りとすれば床面積は述べ60.3m²（36.5畳程度）となる。柱穴の配置は総柱形式となり、概して堅固である。重複は、S B-1201とS B-1206の2棟と関係する。しかし、前者は前述のごとく、重複が逆転した事例が2カ所あり、前後の判断ができない。また、後者も同様であり、S B-1206との関係も明らかにできなかった。時期については、S Kp-220a・273から遺物が得られているが、古式土師器と古代の土師器であり、混入の疑いが捨て切れない。取り敢えず、第Ⅲ期の範囲で考えたいが、場合によっては相



第8図 角田遺跡建物跡模式図

対的に古いのかも知れない。

S B - 1205建物跡 東側が調査区外となるため確定できないが、桁行3間×梁間2間の建物跡として復元した。柱穴は、11個を確認したが、S B - 1204と同様に総柱形式となる。建物の規模が復元通りと仮定すれば、床の延べ面積は 38.22m^2 （約23畳）となる。重複関係は、S B - 1201およびS B - 1202の両者に切られていることにより、前後関係が明かである。遺物は、S Kp - 390・487 aから古代の土器が出土したほか、S Kp - 183から中世土器皿A II a類の小片が出土している。これらのことから、所属時期については、第Ⅲ期（中世前期）の所産と考えたい。

S B - 1206建物跡 桁行3間×梁間2間のはば正方形となる建物跡である。ただし、プランの東側が調査区外にかかるため、全体の状況は確定的ではない。柱穴は、合計8個となり、状況的に扇はない可能性

が高い。床の延べ面積はおおむね34.22m²（約21畳）を想定できる。遺物は少なく、しかもSKp-373から古代土師器が出土したのみである。このため時期は特定できないが、主軸の方位などからおおむね第Ⅲ期に属すると考えられ、SB-1204と同様に相対的に古くなる可能性を考慮しておきたい。

なお、重複関係については、前述したようにSB-1204との関わりがあるが、逆転した事例2カ所により断定が不能である。

SB-1211建物跡 桁行3間×梁間2間の一般的規模となるが、南側が調査区外に出ており、規模そのものは確定できない。面積は、想定通りと仮定すれば、12.6m²となる。方位の指向が真北にある。遺物は、SKp-759から土師器が出土しており、第Ⅱ期（古代）の所産である可能性が高い。

SB-1212建物跡 南側の過半が調査区外にあり、規模等は不明とせざるを得ないが、おおむね3間×2間程度の規模を想定しておきたい。出土遺物はなく時期等も不明であるが、SB-1211と重複せずに主軸の方位が同じ真北を指向することから、取り敢えず第Ⅱ期（古代）としておきたい。なお、SB-1215より新しいが、SB-1213との前後関係は不明である。

SB-1213建物跡 桁行3間×梁間2間と考えられる建物跡であるが、南側が調査区外にはみだし、正確なところは不明とせざるを得ない。規模が想定通りとすれば、面積は20.17m²となる。主軸方位は、真北を指向し、前述したSB-1211・1212と同じである。出土遺物は、SKp-871から土師器が出土しており、第Ⅱ期（古代）の所産と考えられる。本建物跡も、SB-1215より新しいが、SB-1212との前後関係は不明である。

SB-1214建物跡 ブランの全てが調査区内に位置する唯一の建物跡である。規模は、桁行3間×梁間1間と細長い。面積は、15.75m²である。方位は、真北から若干西へ偏る程度であり、真北に方位をとるSB-1211・1212・1213と近い関係にあるものと見られる。遺物は、SKp-942・1000から古代の土師器が出土しており、所属時期も第Ⅱ期（古代）と考えられる。

SB-1215建物跡 桁行3間はほぼ間違いないと考えられるが、梁間についてはSKp-888の存在から1間と推定した。面積は、7.92m²と小さい。遺物の出土はなく、時期の特定はできないが、指向する方位が真北に近い角度であることから、古代である可能性が高い。なお、重複関係では、SB-1212・1213の両者より古いという結果になっている。

SB-1216建物跡 確認された柱穴は4個だけであり、南側の大半が調査区外へ延びている。このため、規模についても取り敢えず2間1間と推定したが、確認等は何もない。出土遺物はなく、所属時期の特定は困難である。方位は真北より16度西へ偏っており、古代とした一連の建物とは異なり、むしろA群とした中世建物群が指向する方位に近い。ただし、重複関係を見るとSB-1214より新しく、SB-1215より古いことから、古代の所産とすることが妥当かも知れない。

SB-1217建物跡 桁行2間×梁間1間の小規模な建物跡である。南端隅の柱穴1個が調査区外にある。面積は、9.24m²となる。出土遺物はなく、時期を特定できないがSB-1212より新しく、指向する方位がA群の建物跡に近いことから、中世の所産となる可能性が高い。

2) 棚跡

棚跡（記号：SA）については、柱穴の配列によりその可能性の高い事例は幾つか存在するが、建物跡の可能性があるなど、断定には至らなかったことから、今回は2件のみとした。

SA-1221棚跡 本棚列に伴う柱穴は3個だけであるが、SB-1201などA群の建物跡と方位がほぼ平

行関係にあること、建物とともに関連する柱穴を特定できなかったことにより柵列と判断した。柱穴の遺構番号は、S Kp-83・109・117であり、109は S E -111 より新しいものであった。

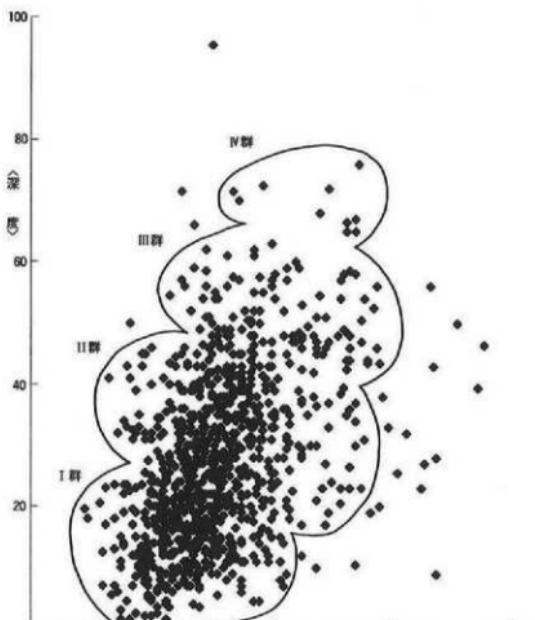
S A -1222 柵跡 5 個の柱穴が直列に配置していたこと、土坑状の溝跡と考えられる S D -460・736とはおおむね直交する方位に設定されていることから、柵跡と想定した。柱穴の遺構番号は、S Kp-803・828・847・859・855の5 個である。遺物は、S Kp-803・828から古代の土師器が出土している。時期については、他の遺構との関係から中世の所産としておきたい。

3) 柱穴とピット

柱穴は、検出された遺構の大半を占め、1,100 個に近い膨大な数に上った。法量分布の状況からすれば、それぞれ漸移的ながらおおむね 4 区分に大別できそうである。第 I 群は、直径 10~45cm、深度 0~25cm 程度であり、主体は 15~35cm に集中する。第 II 群は、直径 15~60cm 程、深度 20~45cm で、直径 20~40cm、深度 20~40cm 程に集中する。第 III 群は、直径 25~60cm、深度 40~60cm で、直径 30~40cm、深度 40~50cm に集中する傾向をうかがうことができる。第 IV 群は直径 25~55cm、深度 60~75cm となるが、個数は極めて少ない。第 III 群の数も概して減少しており、全体的な傾向としては、第 I・II 群が主体的であるとすることができる。なお、深度については、表土除去段階でかなり深く掘っているため、全体に 20cm 程は深くなる。このため、一般的な柱穴の深度は、40~60cm 程となる。

底面の形態については、柱が建っていた部分が沈下により深くなることにより、当初段階より変形することは当然予想できる。このため、一部の柱穴では柱の下に礎板を配置していた。礎板の有無については、実物の出土がなくても、底面の最深部が細長くなっている場合は、その可能性が高い。

柱穴内から出土する遺物の出土率については、遺構観察表でも明らかなように極めて小さく、たとえわずかな破片が採取されても、細片のため時期判定が困難であった。また本遺跡は、古墳時代前期・奈良後期～平安前期・中世前期・近世初期など、大きく 4 時代にわたり断続的に営まれた複合遺跡である。このため、遺物の出土においても、下層部の遺物が掘り返され、新しい時期の遺構内へと混入する場合が多い。このため、本章末の一覧表に示した時期も、出土遺物の時期を示してはいても、遺構の所属時期を示したものとは限らないことになる。この点は注意を要する。



第 9 図 角田遺跡柱穴法量分布図

遺構	位置	種別/分類	規模/長軸: 短軸	平均径/深度cm	底面標高m	覆土色調	時期	備考
SE-1	D-1	井戸 D	160	160	160	88	5.245	黒褐色 (III期)
SE-24	D-2	井戸 C	74	59	66.5	74.5	5.330	黒褐色 III期
SE-30	D-2	井戸(E)						黒灰色 (III期)
SE-33	D-2	井戸 C	100	86	93	90	5.310	黒褐色 (III期)
SK-40	E-3	土坑 B	60	54	57	52.5	5.740	灰色 (IV期)
SE-46	E-4	井戸(D)	117					黒灰色 (III期)
SK-49	E-4	土坑 A	64	44	54	10.5	6.135	明黒灰色 IV期
SK-70	D-2	土坑 B	67	63	65	56.5	5.635	黒褐色 (III期)
SE-111	D~C-3	井戸 D	201	191	196	95.5	5.220	黒褐色 III期
SK-129	C-2~3	土坑 B	50	50	50	54	5.650	黒褐色 (III期)
SE-147	C-3	井戸 C	112		71	5.430		黒灰色 (III期)
SK-255a	C-2	土坑 A		100		20	6.060	黑色 (III期)
SE-456	B-3	井戸(D)						黒褐色 III期
SE-457	B-4	井戸(C)						黒褐色 III期
SE-524	C-4	井戸 C	82	69	75.5	117	5.070	黑色 III期
SE-563	B-4	井戸 C	77		99	5.270		黒褐色 III期
SE-571	B-4	井戸(C)						黒褐色 III期
SE-572	B-4	井戸 D	152		126	4.970		黄褐色 III期
SE-661	B-4	井戸 D	190	150	170	93.5	5.230	黒褐色 (III期)
SE-662	B~C-4	井戸 C	110	107	108.5	82	5.350	暗灰色 III期
SE-682	C-4	井戸 E	277	228	252.5	123	5.000	黒褐色 III期
SE-701	C-4~5	井戸 C	120	88	101.5	88	5.210	黑色 III期
SE-739	B-5	井戸 E	344	330	337	181	4.920	黒褐色 III期
SE-770	C-5	井戸 C	74	71	72.5	74	5.470	黑色 (III期)
SE-778a	C-5	井戸 C	115	112	113.5	111	5.130	黒灰色 (III期)
SE-778b	C-5	井戸 C	110	92	101	70.5	5.535	黒灰色 (III期)
SE-907	B~C-6	井戸 C	74	70	72	73	5.580	暗灰色 IV期
SE-909a	B~C-6	井戸 C	102	87	94.5	103	5.270	暗灰色 IV期
SE-923	C-6	井戸 C	110	104	107	67	5.580	暗灰褐色 (IV期)
SE-926	C-6	井戸 C	87	68	77.5	115.5	5.100	暗灰褐色 (IV期)
SE-933	C-6	井戸 C	72	70	71	80	5.470	明灰褐色 (IV期)
SK-933a	C-6	土坑 A	96	79	87.5	15	6.100	暗灰色 II期
SE-936a	B-6	井戸 C	68	65	66.5	97	5.310	暗灰色 (IV期)
SE-983	B-7	井戸 C	100	90	95	90	5.380	黑色 (III期)
SK-986	B-7	土坑 A	58			20	6.070	灰褐色 II期
SK-1028	C-7	土坑(A)				20	6.140	暗灰褐色 (II期)

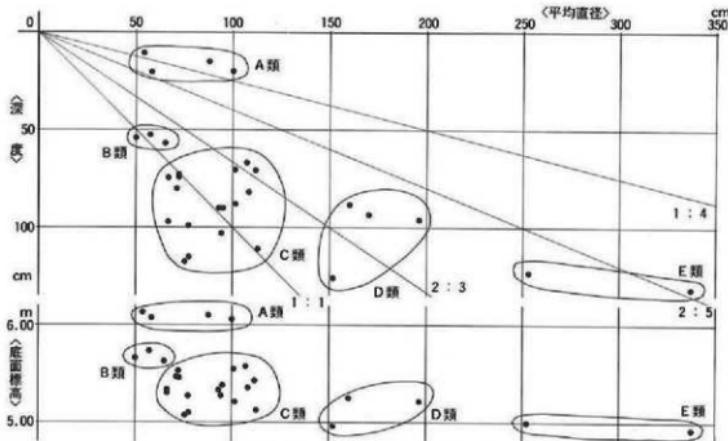
※時期は遺構所屬時期 () 内は推定

第2表 角田遺跡井戸・土坑一覧表

4) 井戸・土坑

穴関係の遺構のうち、柱痕が検出されるなど柱穴と認定できるものや、不整形で遺構として捉えにくいものなどを除いたものを、原則として土坑とした。今回、この原則にしたがって抽出できた土坑数は、あわせて36基となった。これら土坑の基本的な属性である規模や時期などについては、章末の一覧表のはか、第3表にまとめて提示した。

これら土坑類は、規模や断面の形態などによって区分することが可能なため、まず客観的な区分の視点として、直径 [平均径 = (長径 + 短径) ÷ 2] と深度の相関関係から A ~ Eまでの5類に分類したい。その結果は、第2表と第10図に示したとおりである。各分類別の機能や用途については、にわかに判断でき



第10図 角田遺跡井戸・土坑法量等分布図

ない部分もあるが、深度が概して深いC～E類を井戸（記号：S E）とし、特定が難しいA・B類については、そのまま土坑（記号：S K）として記述したい。

A 類（SK-49・255a・933a・986・1028） 直径に比し深度が浅い土坑であり、深度と直径の平均的比率は1:4程度となる。法量的には2細別が可能であるが、事例が少なく、所属時期も古代・中世・近世のそれぞれにまたがっていることから、今回は一括しておきたい。また、用途や目的も一律ではないと考えられ、それらの特定も難しい。ただし、本類の特徴とは深度が浅いことにあり、用途や目的も湧水等の影響が受けにくい深度でなければならないなどの意味があったものと推量される。

SK-49は近世陶磁器が上層位から出土した浅い土坑である。SK-255aは、出土遺物がなく時期を特定できない。しかし、覆土が、中世の遺物包含層とほぼ近似する黒灰色粘土が充満していることから、第III期（中世前期）に比定したものである。なお、覆土とした黒灰色粘土は均質で若干の木炭粒以外、混入物をほとんど含んでおらず、他の土坑覆土等とは異質であった。SK-933a・986はともに土師器などが出土しており古代の所産である。特にSK-933aでは破片ながらやや多く出土した。ただし、両者の性格等は不明とせざるを得ない。SK-1028については、遺物もなく時期を特定できない。

B 類（SK-40・70・129） 深度と直径の平均的な比率がおむね1:1となる土坑である。3基ともに遺物の出土がなく時期を特定できないが、SK-40の覆土が灰色粘土とSK-49に類似することから近世の所産とし、他の2基については黒褐色であるため中世の可能性が高いものと判断した。形態的には、井戸としたC類と比率がほぼ同じとなるが、井戸とするには深度が浅く、C類の深度分布とも一線を隔すことから別分類とした。このような土坑は、柏崎市馬場・天神腰遺跡など同時期の遺跡でも検出されているが、今のところ性格等は特定できていない。3基の分布は、調査区西端に近い3グリッドラインに集中する傾向が看取されるが、その意味も判然としない。

SK-40からは、板材の断片が比較的多く出土している。SK-70は中位から下位にかけてオーバーハングした断面形態の土坑である。開口したままの使用中において、壁面が剥離した結果と推量される。下

層とした第3層には腐植物を多く含む埋土的な土砂が堆積していた。S K-129は、断面がバケツ形をした単調な形態を呈する。覆土は、かなり柔らかな粘土が中位以下に充満していた。

C 類 (S E-24・33・147・524・563・662・701・770・778 a・778 b・798 a・907・909 a・923・926・932・936 a・983) 抽出された土坑36基のうち19基、およそ53%の過半数を占める一群である。深度と直径の平均的な比率は、B類と同じ1:1であるが、深度は70cm前後から120cm程度まで、また直径でも65cm程から110cm前後までと、基數が多いこともあるがかなりばらつきが認められる。遺構の所属時期としては、中世と近世の両者があり、両時代において大きく変化しない一般的な井戸の形態であったとすることができる。

底面等断面の形態を見ると、a類：平底を呈するもの (S E-33・662・770・909 a・923・936など)、b類：丸みを持つもの (S E-24・563・907・932など)、c類：中央が深くなるもの (S E-926) とに細分できる。これら底面形態の差異については、深度などの相関関係が認められないことから、使用頻度や機能していた期間などと関連する可能性が高い。具体的な証拠はないが、使用頻度の高いものは底面の平坦面が損なわれた可能性が考えられる。覆土の特徴としては、生活面下の土砂（黄褐色～青灰色粘土）がブロック状に混入しているものが多く、廃棄にあたって埋め戻されたものと判断できる。

D 類 (S E-1・46・111・456・572・661) 深度と直径の比率がおおむね2:3の割合となる一群である。比率的にはC類の一部と重なるが、直径が150～200cmとかなり大型になる。深度は、C類でも深い一群と大差なく、90～130cmの範囲に納まっている。直径の大型化については、使用中における壁の崩落により、徐々に口径を広げたもので、当初はC類並の規模であった可能性が考えられる。

S E-1・46・456については、大半が調査区外にあったり、壁の崩落により調査を断念するなどにより、詳細な記録を残せなかつた。S E-111は、これを切り込む柱穴の数が多く、調査が難航した遺構の一つである。遺構確認段階、中央部を覆う第1層は黒褐色土であったが、それを遺構確認面よりや暗色を呈する第12層の淡黄灰色粘土がめぐる形で検出された。当初は井戸枠の存在等も考慮したが、結局検出されなかつた。覆土の堆積状況を見ると、壁面の崩落過程で堆積した土砂が確認されることから、壁上部が土圧等により遺構内へ落ち込んだものと判断した。遺物は、中層位下部の第7層上位において疊と13世紀後半代とされる中世土器皿が出土した。S E-572は、2基の井戸に切られて検出されたものである。完掘後、湧水や豪雨による湛水などにより壁のほとんどが崩落した。断面の形態を見ると、底面は概して平坦であるが、壁部分の凹凸が著しい。最終的にはこれらのすべてが崩落したものであることを考慮すれば、これら凹凸は、崩落過程の壁であった可能性が高い。S E-661は、調査区壁に接していたことから、半蔵までしか発掘できなかつた。本井戸も底面と壁面の凹凸が著しいことから、崩落した土砂が残されたままである可能性が高い。覆土は、最下層である第6層が柔らかな黒色粘土であることから、使用中における堆積物であり、第1～5層については青灰色粘土等のブロックが多く含まれており、埋土と判断できる。

E 類 (S E-682・739) 深度と直径の比率が1:2～2:5となる一群をまとめた。比率的には、D類の深度が1m超えないものと大差ないが、直径は250cmを超え、最大337cmを計る超特大の井戸となる。深度は、120～130cmであり、C・D類の深い一群とはほぼ同じである。

本類に含めた2基は、断面形態が互いに類似し、底面が丸みを帯びている。また、覆土を見ると遺構確認面の所謂地山土的な土砂が交互に堆積する部分があるなどでも近似する。これらは、壁の崩落などによる堆積物がかなり入っていることを示している。S E-739では、第3層や第4層がその下位の層位を切っているように見受けられることから、改修等がなされた可能性をも示唆している。したがって、直径の大

型化には、軟弱な地盤による壁の崩落が大きく関係している可能性が高く、その意味ではD類もE類も大差ないことになる。

なお、S E -739の中層位をなす第3a層上位から漆器碗が1点出土した。

X類(S K -460・736) プランの全体が確認されなかったことから、長軸の延長が不明であり方形土坑の可能性が強いものと判断した。2基が検出されているが、遺物等はほとんど出土せず、機能や用途あるいは目的は明らかにし得なかった。SK-460は、覆土を切り込む柱穴が確認されなかったが、底面から数多く発見されており、概して新しい遺構と判断される。SK-736はS E -739に切られ、覆土内にはSKp-735が掘り込まれていた。深度は、72cmと深く、39cmしかないSK-460と同一とするには差異が大きい。両溝の指向する長軸方位は、SK-460がN-68°-W、SK-736はN-63°-Wであった。当該溝と平行する建物跡の復元を試みたが結局見極めができなかった。唯一近い方位をとる遺構は、SA-1222とした標列だけであった。

小結 以上、井戸・土坑類について概要を述べた。井戸類では、D・E類は互いに近似した性格があることから、大きくC類とD・E類に二大別することが妥当と考えられる。C類には、近世初期のものが含まれていることからすれば、相対的な変遷を示すとすればE類(→)D類→C類となる可能性が高いのではないだろうか。今後の課題としておきたい。

5) 溝跡

溝類(記号: SD)については、すでに述べたように大きく三大別が可能である。本項では、それぞれをA・B・Cの3類にまとめて概要を述べたい。

A類(S D-1018a・1038・1040・1050) 本類は、調査区東側で検出された4条の大溝が該当する。これらは、互いに指向する方位に共通性が認められることから、目的や機能あるいは強い土地区画的な規制等といった制約を受けていたことが明かである。溝A群における新旧関係については、SD-1050→SD-1018a・1038→SD-1040となる。

SD-1050は、幅2.2m、深度28cmの浅くて幅広の溝である。覆土の主体は、黒褐色粘質土(第3層)であり、その上位を覆う暗青灰色砂(第2層)は時期の新しい別溝の覆土である。指向する方位は、N-52°-Wである。時期としては、古代の遺物も出土しているが、中世の遺物も少なくないことから、第Ⅲ期(中世前期)の所産と判断できる。SD-1018aと1038は、指向する方位がN-9°-Eと同じであり、図版17のA・G断面のごとく新旧の見極めができないことからも、同時併存となる可能性が高い。その場合、道路側溝などの可能性が生じるが、両溝に挟まれた凸部からはその確認は得られなかった。時期は、SD-1050より新しいが、同じ中世前期の所産と考えられる。SD-1040はかなり大きな溝跡であり、幅は確認面上の最大幅で2.9m、深度もかなり深く94cmを計る。調査区内にて屈曲し、N-9°-EからN-55°-Wへと方向を変えている。壁の掘り込みは、土層断面に斜位に切り込むように観察できる。近世の可能性があるが特定できない。

B類 本類は、調査区内の全域に分布する細長く浅い溝群を一括した。これらの覆土は、大半が暗青灰色粘土であり、時期的には新しい可能性を持つものであった。このため、すべてを発掘していない。指向する方位は個々によって前後するが、比較的平坦な調査区西部ではおおむね東西方位を指向し、若干の傾斜を持つ東端部では南へややゆがむことが看取できる。方向的には、現市道があるA地区と平行するなど、土地区画等との関連が指摘できそうである。

第3表 魚田遺跡遺構一覽表

通 路 種 類	グリッド	平野部	高 度 (m)	標 高 (cm)		面 積 (m ² /km)	斜 面 (m)	面 積 (m ²)	土 被 り 物		斜面 率	面 積 (m ²)	
				北 高 度 (m)	南 高 度 (m)				北 高 度 (m)	南 高 度 (m)			
2006 植生 C-3 沿門部	30	24	22.0	26.5	1.92	—	—	—	—	—	—	—	
2006 植生 C-3 沿門部	30	34	22.0	33.0	6.190	5.540	—	—	—	—	—	○	
2006 植生 C-3 沿門部	29	36	19.0	31.0	1.910	5.980	—	—	—	—	—	—	
400 植生 C-3 円形	23	23	22.5	4.0	6.210	6.170	円門部	11	9	暗褐色	褐色	△	
301 植生 B-3 円形	25	13	19.0	13.0	6.260	6.130	円門部	8	6	暗褐色	褐色	●	
400 植生 C-3 沿門部	28	28	22.0	22.0	5.195	6.020	沿門部	10	10	暗褐色	褐色	△	
202 植生 B-3 円形	44	41	22.5	21.0	5.195	5.420	円門部	11	7	暗褐色	褐色	●	
203 植生 B-3 円形	38	36	27.0	39.0	6.190	5.860	円門部	11	8	暗褐色	褐色	×	
203 植生 B-3 円形	38	36	22.0	22.0	6.200	5.980	円門部	9	9	暗褐色	褐色	—	
206 植生 B-3 沿門部	41	39	6.0	47.0	6.220	5.720	円門部	11	10	暗褐色	褐色	—	
206 植生 B-3 沿門部	39	37	22.0	19.0	6.190	5.860	沿門部	11	7	暗褐色	褐色	—	
206 植生 C-3 沿門部	39	37	20.0	6.0	6.240	5.590	沿門部	—	—	暗褐色	褐色	—	
206 植生 C-3 沿門部	19	19	25.5	25.5	6.213	5.980	沿門部	—	—	暗褐色	褐色	—	
208 植生 C-3 沿門部	36	36	22.0	6.230	6.000	—	—	—	—	—	—	●	
410 植生 C-3 沿門部	40	30	15.0	4.0	6.210	6.070	6.065	—	—	暗褐色	褐色	—	
411 植生 C-3 沿門部	41	33	28.5	6.230	5.020	5.860	沿門部	—	—	暗褐色	褐色	△	
412 植生 C-3 沿門部	29	29	22.0	22.0	6.200	5.860	沿門部	11	7	暗褐色	褐色	—	
412 植生 C-3 円形	26	25	26.0	40.0	6.200	5.980	円門部	11	7	暗褐色	褐色	—	
414 植生 C-3 沿門部	45	34	25.5	27.0	6.230	5.860	沿門部	11	8	暗褐色	褐色	—	
415 植生 C-3 沿門部	36	35	42.0	42.0	6.180	5.760	沿門部	11	7	暗褐色	褐色	—	
416 植生 C-3 円形	31	29	22.0	14.0	6.190	6.050	円門部	9	3	暗褐色	褐色	—	
417 植生 C-3 沿門部	37	36	47.0	45.0	6.220	5.740	沿門部	—	—	暗褐色	褐色	—	
418 植生 C-3 円形	41	41	41.0	41.0	6.180	5.870	円門部	12	12	暗褐色	褐色	—	
419 植生 C-3 沿門部	30	24	20.0	6.0	6.240	5.590	沿門部	—	—	暗褐色	褐色	—	
419 植生 C-3 沿門部	25	19	25.5	25.5	6.213	5.980	沿門部	—	—	暗褐色	褐色	—	
420 植生 C-3 沿門部	25	21	32.0	6.210	5.980	—	—	—	—	—	—	○	
421 植生 C-3 沿門部	25	21	32.0	6.210	5.980	—	—	—	—	—	—	●	
422 植生 C-3 円形	29	21	31.5	33.0	6.190	5.980	円門部	14	11	暗褐色	褐色	△	
423 植生 C-3 沿門部	41	35	30.0	31.0	6.230	5.860	沿門部	12	12	暗褐色	褐色	—	
424 植生 C-3 沿門部	62	60	20.0	20.5	6.195	6.010	沿門部	17	17	暗褐色	褐色	○	
425 植生 C-3 円形	20	19	29.0	26.0	6.200	5.980	円門部	3	7	暗褐色	褐色	—	
426 植生 C-3 沿門部	32	30	22.0	24.0	6.230	5.980	沿門部	3	7	暗褐色	褐色	—	
427 植生 C-3 沿門部	33	45	49.0	54.0	6.220	5.950	沿門部	13	10	暗褐色	褐色	—	
428 植生 C-3 円形	25	24	30.0	30.0	6.230	5.840	円門部	10	8	暗褐色	褐色	—	
429 植生 C-3 沿門部	44	40	45.0	41.0	6.230	5.980	沿門部	2	6	暗褐色	褐色	—	
430 植生 C-3 円形	45	40	45.0	53.0	6.230	5.980	円門部	11	11	暗褐色	褐色	—	
431 植生 C-3 沿門部	35	35	35.0	35.0	6.230	5.980	沿門部	11	11	暗褐色	褐色	—	
432 植生 C-3 沿門部	35	35	35.0	35.0	6.230	5.980	沿門部	11	11	暗褐色	褐色	—	
433 植生 C-3 沿門部	25	25	35.0	17.0	6.210	6.070	円門部	10	10	暗褐色	褐色	—	
434 植生 C-3 沿門部	30	30	35.0	14.5	6.240	6.050	沿門部	—	—	暗褐色	褐色	—	
435 植生 C-3 沿門部	35	35	44.0	6.0	6.260	5.980	沿門部	—	—	暗褐色	褐色	—	
436 植生 C-3 沿門部	50	54	42.0	49.0	6.250	5.770	円門部	12	12	暗褐色	褐色	—	
437 植生 C-3 沿門部	45	40	43.0	5.5	6.210	5.980	沿門部	—	—	暗褐色	褐色	—	
438 植生 C-3-3 沿門部	46	36	38.0	37.5	6.230	5.980	沿門部	10	8	暗褐色	褐色	—	
439 植生 C-3-3 沿門部	47	37	35.5	35.5	6.230	5.980	沿門部	11	8	暗褐色	褐色	—	
440 植生 C-3-3 沿門部	77	74	34.5	34.5	6.230	5.980	沿門部	10	10	暗褐色	褐色	—	
441 植生 C-3 沿門部	21	21	26.0	6.230	6.040	—	—	—	—	—	—	—	
441 植生 C-3 沿門部	56	48	53.0	48.0	6.230	5.980	沿門部	—	—	暗褐色	褐色	—	
442 植生 B-3 门部	33	23	21.0	9.0	6.200	6.170	円門部	10	5	暗褐色	褐色	—	
443 植生 C-3 沿門部	28	28	31.5	31.5	6.230	5.980	沿門部	12	12	暗褐色	褐色	—	
444 植生 C-3 沿門部	40	40	21.0	21.0	6.230	5.980	沿門部	12	12	暗褐色	褐色	—	
445 植生 C-3 沿門部	33	30	33.0	6.0	6.230	5.980	沿門部	12	12	暗褐色	褐色	—	
446 植生 C-3 门部	99	77	29.0	89.0	6.230	5.760	—	—	—	—	—	—	
446 植生 C-3 门部	46	46	36.0	36.0	6.230	6.040	—	—	—	—	—	—	
447 植生 C-3 沿門部	92	81	27.0	55.0	6.230	5.760	—	—	—	—	—	—	
447 植生 C-3-4 沿門部	96	80	45.0	42.0	6.240	6.130	—	—	—	—	—	—	
448 植生 C-3 沿門部	32	39	31.0	22.0	6.230	6.130	6.030	円門部	12	9	暗褐色	褐色	—
450 植生 C-3 沿門部	47	37	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
451 植生 B-3 沿門部	30	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
452 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
453 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
454 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
455 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
456 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
457 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
458 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
459 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
460 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
461 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
462 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
463 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
464 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
465 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
466 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
467 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
468 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
469 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
470 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
471 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
472 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
473 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
474 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
475 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
476 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
477 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
478 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
479 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
480 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
481 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
482 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
483 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
484 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
485 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
486 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
487 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
488 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
489 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
490 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
491 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030	円門部	8	2	暗褐色	褐色	—	
492 植生 C-3 沿門部	27	27	43.5	22.5	6.230	6.030</td							

種類	種別	リットル容積	高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g/cm ³)	材質	表面	土		日付	場所	備考
									横	縦			
485	柱穴	C-1	27	27	27.0	1.25	1.25	0.850	円形	10	9 黒褐色 黒褐色	*	
486	柱穴	C-1 ~ 4	77	27	27.0	0.9	0.9	0.850	円形	—	—	*	
487	柱穴	C-1	47	27	27.0	0.85	0.85	0.850	円形	—	—	*	△ 壁面
487	柱穴	C-2	37	27	30.0	0.85	0.85	0.790	円形	—	—	*	
488	柱穴	C-4	21	16	18.5	0.85	0.85	0.850	円形	—	—	*	
489	柱穴	C-1	45	25	21.2	0.85	0.85	0.850	円形	—	—	*	
490	柱穴	C-2 ~ 4	27	27	27.0	0.85	0.85	0.850	円形	10	10 黒褐色 黒褐色	*	
491	柱穴	C-3 ~ 4	27	27	27.0	0.85	0.85	0.850	円形	—	—	*	
492	柱穴	C-4	27	27	27.0	0.85	0.85	0.850	円形	—	—	*	
493	柱穴	C-4	35	35	35.0	0.85	0.85	0.900	円形	—	—	*	
494	柱穴	B-3	27	26	26.0	0.85	0.85	0.900	円形	13	4 黒褐色 黒褐色	*	
495	柱穴	B-4	27	27	27.0	0.85	0.85	0.900	円形	—	—	*	
496	柱穴	C-4	45	35	45.5	0.85	0.85	0.940	円形	14	9 黑褐色 黒褐色	*	
497	柱穴	B-C-1	30	35	38.0	0.75	0.85	0.880	円形	9	9 黑褐色 黒褐色	*	田 中
498	柱穴	B-C-2	25	35	25.0	0.75	0.85	0.640	円形	10	8 黑褐色 黒褐色	*	
499	柱穴	B-4	39	39	37.0	0.65	0.85	0.800	円形	24	22 黑褐色 黒褐色	*	
500	柱穴	B-4	25	33	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
501	柱穴	B-4	35	35	35.0	0.85	0.85	0.800	円形	17	14 黑褐色 黒褐色	*	
502	柱穴	B-4	61	55	56.0	0.85	0.85	0.880	円形	—	—	*	
503	柱穴	B-4	27	33	26.0	0.85	0.85	0.820	円形	—	—	*	
504	柱穴	B-4	30	37	18.5	0.85	0.85	0.800	円形	—	—	*	
505	柱穴	B-4	33	38	30.5	0.85	0.85	0.850	円形	11	8 黑褐色 黒褐色	*	
506	柱穴	B-4	24	35	32.0	0.85	0.85	0.750	円形	13	15 黑褐色 黒褐色	*	
507	柱穴	B-2	35	35	35.0	0.85	0.85	0.850	円形	—	—	*	
508	柱穴	B-4	27	37	37.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
509	柱穴	B-4	25	38	27.0	0.85	0.85	0.600	円形	—	—	*	
510	柱穴	B-4	35	31	38.0	0.85	0.85	0.750	円形	—	—	*	
511	柱穴	B-4	17	17	17.0	0.85	0.85	0.600	円形	—	—	*	
512	柱穴	B-4	26	33	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
513	柱穴	B-4	30	30	30.0	0.85	0.85	0.850	円形	14	10 黑褐色 黒褐色	*	
514	柱穴	B-4	30	30	30.0	0.85	0.85	0.850	円形	15	11 黑褐色 黒褐色	*	
515	柱穴	B-4	30	30	30.0	0.85	0.85	0.850	円形	10	— 黒褐色 黒褐色	*	
516	柱穴	B-4	30	30	30.0	0.85	0.85	0.850	円形	—	—	*	
517	柱穴	C-4	43	22	42.5	0.85	0.85	0.940	円形	14	10 黑褐色 黒褐色	*	
518	柱穴	C-4	33	31	30.0	0.85	0.85	0.900	円形	11	7 黑褐色 黒褐色	*	
519	柱穴	C-4	12	12	12.0	0.85	0.85	0.670	円形	—	—	*	
520	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	10	9 黑褐色 黒褐色	*	
521	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	12	12 黑褐色 黒褐色	*	
522	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	13	14 黑褐色 黒褐色	*	
523	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
524	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
525	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
526	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
527	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
528	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
529	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
530	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
531	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
532	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
533	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
534	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
535	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
536	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
537	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
538	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
539	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
540	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
541	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
542	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
543	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
544	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
545	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
546	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
547	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
548	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
549	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
550	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
551	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
552	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
553	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
554	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
555	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
556	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
557	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
558	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
559	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
560	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
561	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
562	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
563	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
564	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
565	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
566	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
567	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
568	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
569	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
570	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
571	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
572	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
573	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
574	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
575	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
576	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
577	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
578	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
579	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
580	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
581	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
582	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
583	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
584	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
585	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
586	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
587	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
588	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
589	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
590	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
591	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
592	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
593	柱穴	C-4	20	20	22.0	0.85	0.85	0.700	円形	—	—	*	
59													

註1) テラス標の()内数値は中堤の標高値を表す。

註2) 遺物欄において、古は吉式土器類、頸は須恵器、土は土器類、質は貿易陶磁器、珠は珠洲焼、近は近世陶磁器、木は木製品、石は石製品、金は金属製品を示す。

V 出土遺物

1 遺物概観

今回の発掘調査で得られた遺物は、土器・陶磁器類を主体として、石製品・木製品・金属製品に及ぶというバラエティーに富んでいる。土器・陶磁器類は、中世を中心としながらも、古墳時代から近世に至る、断続的にではあるが、かなりの時代幅を有している内容である。ほかの石製品・木製品・金属製品については、詳細な時期を断じることは難しいが、大半はやはり中世に属すのではないかと考えられる。また、遺物の出土範囲は、調査区全体にわたっているが、遺構の集中するB～C～3～5グリッドにおける遺構・遺物包含層からの出土量ががやや卓越するようである。次節からは、製品ごとに遺物の概略を述べていくこととしたい。

2 土器・陶磁器類

出土した土器および陶磁器は、整理箱で約10箱ほどの出土量である。本節では土器・陶磁器類を種別毎に説明するが、時期別に分類すると、第I～IV期の4時期に分類することができるので、まず時期別の概要を簡単に述べておくこととする。第II～IV期の年代的な問題については、次章にて考察したい。

第I期 古式土師器が属する。土器・陶磁器類全体の2～3割にあたるが、今回は時間等の制約から古式土師器について図化・言及することはできなかった。そのため、ここでは古式土師器を総括的に述べるにとどめ、別の機会に詳細を検討することとしたい。

器種としては、壺形土器・壺形土器・高环形土器が認められる。ただし、すべて破片資料であり、完形品はない。そのため、鉢形土器といったほかの器種が存在する可能性もあるが、今回は確認することができなかった。また高环形土器についても、脚部のみが出土した場合は、判別が困難な器台形土器が存在したことでも想定しておかなければならない。出土位置としては、B～C～7～8およびD～E～2～3の遺構・包含層が中心である。時期については、高环形土器脚部の形態等から、古墳時代前期に比定することができよう。

第II期 須恵器および土師器が属する。全体の約1/4を占めるが、内訳としては須恵器の量が土師器を上回っていることから、古代前期の土器様相を呈していることを予想することができる。出土地点としては、B～C～3～8の遺構・包含層にて散見される。

第III期 中世土師器・珠洲焼・貿易陶磁器が属する。中世土師器・珠洲焼がそれぞれ土器・陶磁器類の約1/4の量にあたり、中世に属する土器・陶磁器類が約半数を占めている。また、出土地点は調査区のほぼ全体に及んでいるものの、特に遺構密集区域であるB～C～3～5グリッドの遺構・包含層から集中的に出土していることが指摘できるので、遺物からみた主体的な時期は第III期であったと考えられる。

第IV期 近世陶磁器が属する。全体の約1割ほどの量であるが、完形率の高い資料が多いといえる。またB～C～7～8グリッドの遺構・包含層からの出土が多く、第III期とは中心部を異にしていた可能性がある。

1) 須恵器・土師器（1～50）

本遺跡出土の古代土器は須恵器と土師器に限定されるので、この項に一括した。その内容は、完形率の非常に低いものであり、器形全体を把握できたものは須恵器無台杯3点、土師器無台碗1点のわずか4点のみである。数量的な制約が大きいが、須恵器杯類などではいくつかの分類が可能であったので、まずそれぞれの器種分類を試み、次に各説とする。

i) 須恵器（1～45）

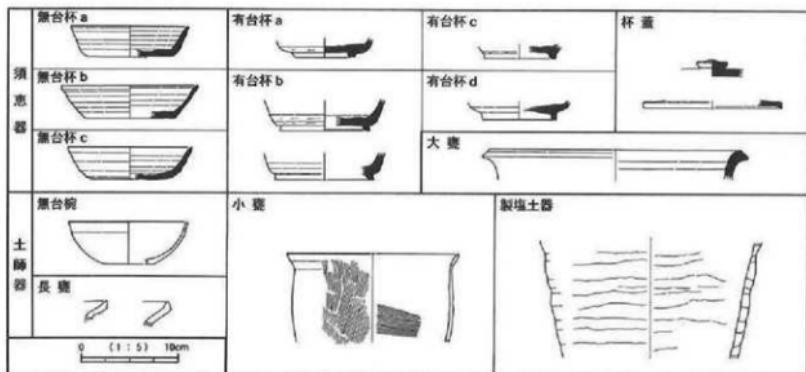
出土した須恵器は、食膳具を主体とし、これに貯蔵具が伴う。食膳具は無台杯13点、有台杯10点および杯蓋8点の計31点を図化することができた。なかには、底部が欠損しているために無台杯と有台杯との識別が困難なものもあったが、他の器形と比較することによって、判断したものもある。貯蔵具はすべて壺類としたが、体部片を中心とする破片資料のみであるため、横瓶等も含まれている可能性は否定できないが、今回は一括することとした。

無台杯（1～13） 無台杯は体部の形態等によってa～cの3類に分類することが可能である。無台杯aは、外傾して直線的に立ち上がるもので、ロクロナデの痕跡を残しながら、器厚はやや厚い。無台杯bは、体部がaよりも外傾して直線的に立ち上がる。器厚は概して薄い。無台杯cは、体部が内湾して立ち上がるものである。この3類の法量を比較すると、器高はいずれも大差がないものの、口径・底径には差異が認められる。すなわち、bは口径・底径ともに大きいが、aは口径が小さく、cは底径も小さいのである（第12図）。それぞれ1点ずつの比較であるため、分類基準としての不正確さは否めないが、わずかな器形の違いが口径と底径の値に表れているといえよう。また、胎土の識別によって産地を求めるならば、b・cは佐渡小泊窯産、aは小泊窯産のほかに在地窯産が混在すると考えられる。なお、底部切離し技法は、確認できるものはすべて回転ヘラ切りであった。

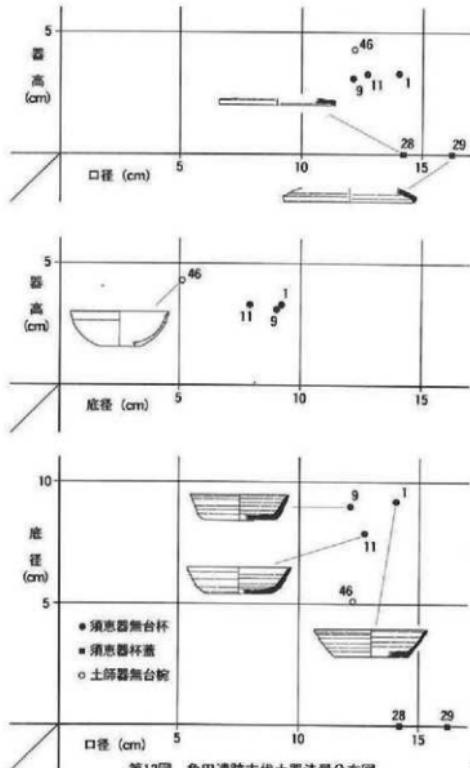
1～8は無台杯bである。このうち器形全体がわかるのは1のみであった。体部は薄手であるが、口縁部がやや膨らんでいる。口縁部には、重ね焼きによる幅約6mmの黒色帯がみられる。灰色を呈し、焼成は良好である。胎土には長石微粒を多く含んでいる。口径14.0cm、底径9.2cm、器高3.3cmと推測される。C-6グリッド包含層出土である。2は、口縁部～体部片である。1ほど外傾はせず、体部下半が若干内湾気味なのでcに属する可能性もある。口径11.8cmで、SE-682から出土した。3～5は、口縁部片である。各々の推定される口径は、3が12.6cm、4が11.5cm、5が13.2cmである。いずれも口縁部に重ね焼きの痕跡を残している。3・4はSD-1018aの1区、5はSD-1040の出土である。6～8は底部片である。体部への移行部分が残存しているので分類が可能となった。推定される底径は、6が8.9cm、7が9.6cm、8が7.4cmである。出土位置は、6がC-5グリッド包含層、7がSE-922、8がSD-1038の2区である。

9・10は無台杯aである。唯一器形の把握できる9は、胎土には長石や小さな黒斑がやや多い。口縁部には重ね焼きによる黒色帯があり、底部には3条1単位の棒状擦痕がみられる。口径12.1cm、底径9.0cm、器高3.1cmと推測される。SD-1018aの1区中層および2区上層の接合資料である。10は、底部片のみである。焼成が不良であったためか、色調は灰白色である。胎土には砂粒を多く含まれている。B-6グリッドから出土した。在地窯産と目される。

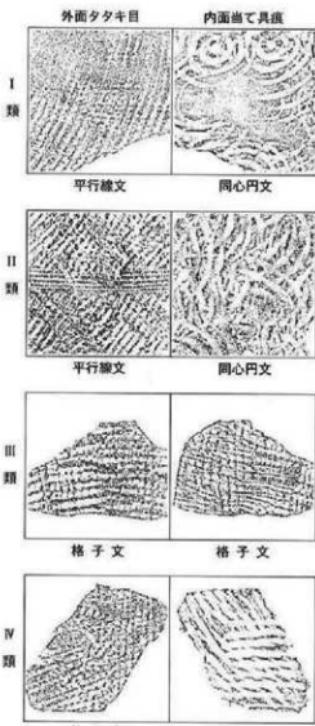
11～13は無台杯cである。11は、ロクロナデの痕跡が顕著で、口縁部に重ね焼きの痕跡が残る。口径12.7cm、底径7.9cm、器高3.3cmと推測される。SD-1050からの出土である。12は、底部から体部への移



第11図 角田遺跡古代土器器種分類図



第12図 角田遺跡古代土器法量分布図



第13図 角田遺跡タタキ目・當て具痕分類図 (1 : 2)

行部分にやや丸みがあったのでcとした。ロクロナデのほかヘラ削りがみられる。推定される底径は8.1cmである。SD-1050から出土した。13は、口径12.7cmと推測される。胎土には海綿骨針がやや混じる。C-7グリッド包含層からの出土である。

有台杯 (14~23) 出土した有台杯は、高台の形態に着目すれば多くの分類が可能である。しかし、資料数も少なく、全体の器形を把握できるものはないことから、a~dの4類に分類することとした。有台杯aは、底径に対して高台径が小さいものである。有台杯bは、aとは異なって、底部縁辺部に高台を付するものであるが、胎土から佐渡小泊窯産と思われるものをまとめた。有台杯cは、高台の位置がbと同じであるが、在地窯と思われるものである。a~cの底部切離し技法が回転ヘラ切りであるが、有台杯dは、回転糸切りによるものである。

有台杯aとできるのは14のみである。底径が8.4cmであるのに対し、高台径は6.1cmを計る。高台は内端接地し、底部から体部への移行部分ではヘラ削りが観察される。産地は在地窯と思われる。SKP-440から出土している。

15~19は、有台杯bである。高台の断面形により、外側が下方に張り出すもの(15・16)、方形で高さが高いもの(17)、低いもの(18)に細分される。また、15は2条、16・17は1条のヘラ削りが施されている。15は、底径9.8cm、高台径9.2cm、高台高0.5cm、16は、底径11.4cm、高台径10.5cm、高台高0.6cm、17は、底径9.8cm、高台径8.8cm、高台高0.5cm、18は、底径7.6cm、高台径6.7cm、高台高0.3cmと推定される。また、15はE-5⑧グリッド包含層、16はC-3⑨グリッド包含層、17はSD-1038の3区、18はSKP-441から出土している。19は、器高から推測して有台杯とした。口径は11.7cmと思われる。C-6グリッド包含層出土である。

有台杯dは、23のみである。分類基準とした底部切離し技法のほか、高台の外側が下方に伸びる形態は他の有台杯とは異質である。胎土には黒色微粒子が多く含まれている。底径10.0cm、高台形7.7cm、高台高0.8cmを計る。SD-1050南区上層の出土である。なお、底部内面には、非常に平滑な摩滅が観察される(第14図)。他の部分にはないこの摩滅は、使用形態もしくは硯などへの転用を示すものであろうか。今回は指摘にとどめる。

杯 蓋 (24~31) 圓化し得たのは8点であるが、器形全体を把握できるものはなかった。口径についても28が14.2cm、29が16.4mmと推測されるのみである。各々の出土地点は、24がA-2グリッド表採、25がC-3グリッド包含層、26がC-7グリッド包含層、27がSE-111、28がSD-1018aの3区上層、29がSE-571、30がB-6グリッド包含層、31がSK-460南区である。

大 瓢 (32~45) 圓化し得たのは14点のみで、いずれも小片にとどまる。

32~34は口縁部片、35~45は体部片である。

32は、口縁端部に近い部位で大きく外反し、端部が外側につまみ出される。口径は27.6cmと推測される。C-3グリッド包含層から出土した。33は、32と異なって口縁部が全体的に外反した形態であったと思われる。同様に端部が外側につまみ出されている。SD-1050出土である。34も、口縁部が全体的に外反していたと思われる。口縁端部は外側のほか、上方にもややつまみ出されている。C-4グリッド包含層出土である。

体部片は、少量はあるものの、外面のタタキ目、内面の当て具痕にはバラエティーに富んでおり、I~IVの4類に分類した(第13図)。I類は、外



第14図 角田遺跡出土須恵器の
摩滅状態

面が幅3mmの平行線文に長さ3mmごとの刻み目のあるタタキ目で、内面は同心円文の当て具痕の組み合わせである。II類は、幅3mm、長さ9~11mmの平行線文タタキ目と木目と思われる細かな刻みを持つ同心円文当て具痕の組み合わせである。III類は、約3mm四方の格子文のタタキ目とやや不規則な格子文の当て具痕の組み合わせである。IV類は、格子文のタタキ目と幅4mm前後の平行線文当て具痕の組み合わせである。I類は大半を占め、35(E-5グリッド南包含層)、36(SKp-390)、37(D-2⑦グリッド包含層)、39(SD-1018a)、40(SD-1050)、41(SK-736)、42(SE-682)が該当する。II類は、43(B-5グリッド包含層)、III類は44(C-4グリッド包含層)、IV類は、38(SD-1050)のみである。なお45(D-3⑦グリッド包含層)は、焼成もあまく、器面も摩滅しているので、タタキ目は観察できなかったが、おそらくI類と思われる。

ii) 土 師 器 (46~50)

出土した土師器は小片が多いため、古式土師器や中世土師器との識別の難しいものもあった。しかし、およその傾向では、古代土器に占める割合は、決して主体的なものとはいえない。また、器種ごとの点数としては、長甕や小甕の小破片が大多数を占めているが、個体数は把握できなかった。全体として國化できたものは以下の5点にすぎない。器種は、大きく食膳具と煮炊具があり、その内訳は食膳具が無台碗、煮炊具が長甕・小甕・製塩土器となる。

無 台 碗 (46) 國化し得たのは1点のみであった。46は、体部が大きく内弯して立ち上がり、口縁端部に至ってやや外反する器形である。内外面ともに摩滅が顕著であるために、調整や底部切離し技法を把握することはできなかった。しかし、器壁があまり厚くないことからも、ミガキ等の調整があったと考えられる。色調は浅黄橙色を呈し、焼成はやや不良である。胎土はおおむね精良であるが、微砂粒がやや混じる。口径12.2cm、器高4.3cm、底径5.1cmと推定される。SK-933a土坑から出土した。

長 甕 (47・48) 全体の器形を示す資料はなく、國化できたのも口縁部の2点のみである。いずれも小破片のため、口径も不明である。47は、体部から外側に屈曲して「く」の字を呈した後、やや内弯して口縁端部がわずかにつまみ上げられるものである。にぶい黄橙色を呈し、焼成はやや良好である。胎土には径0.5mm程度の砂粒が混じる。C-7グリッド包含層より出土した。48は、47と同じく頭部は「く」の字に屈曲するが、口縁部のやや器形が異なる。体部からの屈曲後はやや外反し、口縁端部がつまみ上げられ、受口状を呈する。色調はにぶい黄橙色で、焼成はやや不良である。胎土には径0.5mm程度の砂粒が混じる。SD-1018aの3区下層より出土した。

小 甕 (49) 口縁部~体部上半が出土した。体部は緩やかな球胴形が想定され、頭部でしまった後、口縁部は外傾して立ち上がる。器厚は全体的に薄く、体部で4mm程度、特に薄い頭部では2mmほどである。器面の調整は、内外面にハケ目が施されている。外面のハケ目は縱位であり、口縁部から約6mmを除いた部分に全体的にみられる。また内面は横位であるが、器面がやや荒れているために、体部下半におけるハケ目のみが観察されたが、上半にも施された可能性もある。口径17.6mm、胴部最大径16.5mmと推定される。にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。胎土には、径1mmほどの砂粒のはかに海綿骨針がやや混じる。SKp-1047より出土した。

製塩土器 (50) 体部片1点のみが出土している。器形は、外傾しながらほぼ直線的に立ち上がる所以、おそらくはバケツ形を呈すると思われる。製塩土器に特有の輪積痕が内外面ともに顕著に残っているが、調整については看取することができなかった。内面の大部分には比較的厚いススが付着している。淡橙色を呈し、焼成はやや良好である。胎土は0.5~5mmの砂粒を多く含む。SKp-598bの出土である。

2) 中世土師器

a 出土状況

角田遺跡における中世土師器は、グリッドで取り上げた包含層出土と、各遺構内から出土したものとに大別される。しかし、後者の場合、それぞれの遺構から數片程度が出土したものであり、土器溜まり的な一括廃棄という状況での出土例は皆無であった。また、破片の大半が小片で占められており、たとえ同じ遺構内出土であっても、ほとんどは混在の可能性を否定できず、意図的な一括廃棄あるいは同時性を積極的に読み取ることはできなかった。したがって、共伴関係が確実に把握できる事例は乏しいことになる。

また、包含層出土の場合も散発的な出土状態であり、これといった特徴は見出せなかった。ただし、中世土師器の出土位置は、井戸・柱穴が密集するB～C-3～5グリッドに集中する傾向が看取されることから、当該区域内における遺構群の時期をおおまか示すものと考えられ、区域外では他時期の遺構群が多い可能性を示唆することになる。

b 形態分類

分類の基準 中世土師器の器種は、皿類と小皿類の2器種だけである。図化資料では、皿類33点、小皿類17点を例示することができた。形態分類はそれぞれの器種で行うが、その視点の第一は製作技法であり、次いで調整手法とそれと連動する口縁部形態で見極めることとした。

製作技法は、非ロクロ成形とロクロ成形とに大きく二大別することができる。非ロクロ成形とは、京都系とされる手づくね技法であり、これをA類とする。この技法で製作された製品を観察すると、口縁部は内外面とも横ナデ調整、底部内面は縦のナデ調整であり、外面は手持ちによる整形の痕として、指痕がわずかな凹凸として残されている。特徴が最も強く看取られるのが口縁部の横ナデ調整であり、その強弱などによって形態差が見出せる。また、形態的には、口縁部の長短も目安となる。

ロクロ成形は、越後においても古代以来一般的な土器製作技術であった。しかし、12世紀後半に非ロクロ皮形の手づくねで製作された京都系土師器が席巻して以来、13世紀代になると在地では途絶えてしまう技術である。角田遺跡では、皿が唯一1点出土しているが、在地で製作されたというより、他所からの搬入品である可能性が高い。本遺跡の出土例は、回転糸切りにより底部が切り離されるロクロ成形土師器であり、これをB類とするが、北陸地方でロクロ成形の技法がすでに途絶えていたことは、関東あるいは東国などといった地域との関連を想定せざるを得ないことになる。調整は、内外面ともロクロナデ調整が施されるが、底部内面はA類と同じく縦のナデ調整であり、底部外面は糸切り痕がそのまま残され、未調整となっている。

皿類(1～33)

皿類の成形技法は、大きくA類とB類に区分できる。B類は1個体であり、それ以上の細分は留保せざるを得ない。

大多数を占めるA類については、口縁部の横ナデ調整を丁寧に強く施すことにより、結果的に底部との境界に稜線が生じる第 α 群と、この稜線を小さな有段状に強調する第 β 群、そしてこれらが形骸的となる第 γ 群に三別することができる。第 α 群は、さらに第I・II類に、第 β 群は第III類とすることが可能であり、そして第 γ 群は第IV・V類に区分して理解したい。第 α 群と第 γ 群の相違点は、前者が緩やかな段状もしくは強いナデを直上に施すことによって比較的明瞭となるが、第 γ 群では、第IVa類を除き浅くて

太い沈線状のナデで表現したり、緩やかな屈曲など形骸化の一端がうかがえるものである。

A 類（1～32） 手づくね成形の非クロ土師器皿類は、成形と調整及び器形によって I～V 類まで大きく 5 類に区分され、さらにそれぞれ 2～3 類に細分することによって、11 種と底部に分類できる。

第 I 類（1～4） 口縁部は、上下 2 段に横ナデ調整が施され、内面にも弱い稜線をとどめる。横ナデは、上段において膨らみを残すが、下段は強く湾曲しており、器形としては腰部分がくびれたようなプロポーションを呈する。a と b に 2 細分されるが、第 I a 類は口縁部がやや長くなる（1）。第 I b 類は、第 I a 類に比して口縁部の長さが相対的に短いものである。事例として 3 例（2～4）が提示されるが、2 は焼成や遺存状況が良く、3・4 とはやや趣が異なる。今回は、事例が 1 個体であるため、取り敢えずこれらを一括したが、別分類とすることは容易であり、類例等の増加を待ち再検討したい。

第 II 類（5～8） 底部と口縁部との境界は比較的明瞭ではあるが、特別強調されてはおらず、緩やかな屈曲状を呈する。口縁部の横ナデは、上下 2 段で施される。第 I 類との相違は、第 I 類が上段を弱くし下段を強く横ナデするというように上下に強弱があるが、第 II 類ではほぼ同じ力加減で、上下 2 段とも一定程度の強さで横ナデを施すものである。本類も a と b の 2 細分を行うが、それは上下 2 段に行う横ナデ調整の強弱である。第 II a 類（5・6）では、口縁部の横ナデがやや弱く、第 II b 類（7・8）では強いため、後者では口縁部の形状が、2 段の湾曲として看取ることができる。

第 III 類（9～24） 角田遺跡から出土した中世土師器の大半（土師器皿全体の 42%）を占める形態が、この第 III 類である。最大の形態的特徴は、口縁部と底部との境界が、強い横ナデなどにより段状を呈し、極めて明瞭に区分されていることである。第 III 類も、口縁部の横ナデ調整は上下 2 段で施されるが、それぞれに強弱があり、これを視点に a～c の 3 類に細分した。

第 III a 類は、上下 2 段の横ナデがともに強く、2 段の湾曲した形態を観察することができる（9～15）。第 III c 類では、下段のみ強く横ナデを施し、上段は弱く、形状に丸みを残すものである（19～22）。第 III b 類は、両者の中間的な形態で、下段はほかと同様であるが、上段の横ナデが c 類よりやや強く、若干の湾曲を看取ることができるものとした（16～18）。これら細別した 3 類の特徴を見ると、第 III a・b 類は第 II a・b 類に、また第 III c 類は第 I a・b 類とも共通した調整手法とみることができる。これらが時期差あるいは変遷を意味する可能性もあるが、対比できる良好な資料がないことから、これらの見極め等は今後の課題としたい。

なお、底部のみの破片である 23・24 については、口縁部による分類が不可能である。しかし、2 点とも内面に煤が付着していること、そして第 III 類とした土師器皿 14 点のうち、他類より格段に高い 71.4% の比率となる 10 個体から煤が観察されていることから、取り敢えず本類に含め第 III x 類とした。

第 IV 類（25～28） 口縁部に横ナデ調整が施されるが外面は比較的直線的で平板であり、丸みをもってすぼむ底部とは角度の変化による接線で区分される。2 類に細分したが、第 V a 類の稜線は概して明瞭であるが（25・26）、これに対し第 V b 類では弱くなるものとした（27・28）。両者の差異としては、a 類の横ナデ調整が概してシャープであり、下段部には細くて鋭い沈線状の線が施されることに対し、b 類ではそれがなく全体的に丸くだれたニュアンスを与えるものである。また、第 IV b 類とした 2 点は、口縁部の形態がやや相違することから、別分類とすることも可能である。しかし、個体数が少ないので実感もあり、今回は一括し、今後改めて検討することとしたい。

第 V 類（29～32） 器形的な特徴は、底部から口縁に至るまで丸く内湾した形態の一群を一括した。口縁部の横ナデ調整と、底部外面の手づくね調整に大きな変化はないが、口縁部の横ナデ調整が弱くなり、

形骸化の傾向が認められる。本類については、事例が少ないともあるが、取り敢えず2類に細別しておく。第V a類(29~31)は、上下2段の横ナデ調整のうち、下段部分がやや強く施され、この特徴そのものは第III類あるいは第I類に近似する。しかし、全体的に弱くなってしまい、下段の横ナデ調整痕も浅くて幅の広い痕跡状となって、形骸化の一端をうかがうことができる。第V b類については、上下2段の横ナデ調整が意外にシャープであり、細くてやや鋭い沈線状の線2条で表現されているものである(32)。この特徴は、稜線の在り方を別にすれば、第IV b類と共通するものである。

B類(33) 出土した個体は、唯一1点であり、ここではA類に引き続く分類呼称として第VI類としておきたい。

第VI類(33) 口縁部のナデ調整は、上下2段となり、この点だけを見ればA類の特徴と大きな隔たりはないことになる。しかし、1点のみの事例であり、詳細は各説において行うこととした。

小皿類(34~50)

A類(34~50) すべて手づくねによる非ロクロ成形の京都系となるA類だけであり、ロクロ成形のB類は検出されていない。形態的特徴から分類すると、底部と口縁部との境界が明瞭な一群と、全体に丸みを帯び不明瞭となった一群に大別できる。前者を小皿の第I類とし、後者を第II類と呼称する。

第I類(34~41) 口縁部と底部との境界が明瞭で、小さな有段状をなすものなどが含まれる。ここでは、調整や有段の表現などによって3類に細別したい。

第I a類(34~36)は、上下2段の横ナデ調整が比較的明瞭な一群とした。ただし、最も明瞭な事例は36であり、皿類に対比すれば第II群が近い。これに対する34・35は上段のナデが弱く、形態的には第III c類に近いながら、第I b類との関連性も考慮できる事例である。個体数が少ないとから、今回はこれを一括したものである。

第I b類(37~39)は、口縁部のナデ調整を1段のみとしたものであり、底部との境界付近に強い横ナデ調整を施し、結果的には有段状が強く意識される。このため、皿類の第III類、とりわけ第III c類との関連性が強いものである。

第I c類(40~41)は、底部との境界に小さな段を明瞭に残しつつも、口縁部の横ナデ調整がやや弱い一群である。このため、第I b類に近似することから、横ナデ調整の強弱のみとすれば第I b類との区分は必要ないかも知れない。今回は第I b類の形骸化の一端を示すものとして分類しておきたい。

第II類(42~50) 口縁部と底部との境界が不明瞭な一群を一括した。細分については、横ナデ調整の強弱による口縁部形態の差異と、口縁部の外反度で3類に区分した。

第II a類(42~45)は横ナデ調整が比較的強く施されたと見なされる一群であり、口縁部外側がやや湾曲することが特徴である。第II b類(46~50)は、口縁部の外側が丸みをもち、そのまま底部へと移行する。口縁部の外反度などにより2類に細分した。

c 胎土と分類

角田遺跡から出土した中世土師器の胎土は、國化資料を中心に分類すると大きく5類に大別できる。まず、A類は、微細で雑多な砂粒を主体としつつも、比較的大粒な赤褐色系の粒子($\phi 2 \sim 4$ mm)を多く含むものである。50点中に19個の事例があり、全体で38.0%を占めることから、在地で主体的に生産された可能性が高い。B類は、微細で雑多な砂粒が多く含まれ、 $\phi 1$ mm程度の黒色や黒褐色系の粒子が目立つ一群である。ただし、各個体の色調を見るとやや灰色系が強く、酸化が弱いものと思われる。このため、

酸化が強い場合には、黒褐色粒子が赤褐色系となることも予想され、基本的にはA類と同類となる可能性が高い。50個体中16個の事例があり、全体では32.0%を占めるが、A類とB類をあわせると70.0%に達する。C類は、黒褐色系の微細な砂粒を主体とし、 ϕ 3~4mm程の礫がやや多く含まれることを特徴とする。個体数は5個と少なく、全体の10.0%を占めるだけである。D類は、微細で雑多な砂粒が比較的多く含まれるものである。9個体が確認され、全体に占める割合は18.0%となる。E類は、概して大粒の焼土粒が含まれるが、雑多な砂粒等の混入が少ないことが特徴となる。事例としては、ロクロ成形で底部を回転糸切りとした33のみであり、唯一1個体の出土であることから、搬入の可能性を強くする結果となっている。

なお、個々の分類結果については、第⑩表にまとめたので参照していただきたい。

d 中世土師器各説

図版21~22には、50点の中世土師器を図示したが、完形品もしくはそれに近い個体が少なく、大半は小破片からの復元実測である。このため、各個体の法量については、正確さにかける部分がある。

以下、各個体について個別に説明を加えたいが、出土位置や法量など基本的な属性については第4表にまとめたので参照していただきたい。

なお、中世土師器の個別説明にあたっては、遺構内一括などがほとんど出土しなかったことから、形態分類を行った各類ごとに述べていくこととした。

Ⅲ 類（1~33）

Ⅲ A I類（1~4） 1は、他に比して口縁部がやや長く、本遺跡出土中世土師器の中では、最も古相を呈するものと判断され、かつ色調も橙色を呈し、最も赤みが強い個体である。遺存状況が悪く、軟質で摩滅が著しい。このため、調整等の見極めはできない。成形方法については、上下二枚の粘土板を合わせて底部ではさらに中央に1枚を挟んでおり、全体では薄い粘土板の三枚重ねで製作されている。2は、遺存状態が良好で、調整痕等が明瞭に残る個体である。口縁部は、内外面とも横ナデ調整が施され、底部内面には縦ナデ調整痕が観察できるが「×」状に2方向が認められる。底部外面は、手づくね成形後未調整で、異物が露出したままとなっている。胎土中には微細な砂粒とともに大粒な異物が目立つ。特に明るい褐色粒が多く含まれるが、これは1とも共通する。成形法については、底部を薄い粘土板二枚重ねで製作し、口縁部分を挟み込んで全体を形作っていることが、断面の観察で見ることができる。3は、遺存状態が悪く、摩耗が著しい。胎土中には概して大粒の小砂利（ ϕ 2~3mm）が目立つ。成形法は、1・2と同様に二枚重ね技法の可能性が高い。4は遺存状態が既に良好で、調整痕の観察は容易である。胎土中には微細な砂粒が含まれるが、量的にはそれほど多くない。褐色系の粒子は含まれない。二枚重ね技法で製作された可能性はあるが、その痕跡は顯著でない。

なお、3と4の横ナデ調整部位の下端には、それぞれに細い1条の沈線が入る。3はやや摩滅が著しいため鋭さは弱いが、4については沈線幅が0.2~0.3mmと細くて锐い。同様な事例は他類にも目立つが、本例は何らかの工具により意図的に施されたというより、横ナデ調整を施す際に爪の先端部分が触れて生じたようにも見受けられる。現段階では、これを明確に特定できないが、無意図的な当初段階ではこのような場合も想定できるのではないだろうか。

Ⅲ A II類（5~8） 5~7は、ともに白色系を呈しており、微細な砂粒を含む胎土もほぼ共通する。また、8は遺存状況が不良で軟質な個体である。胎土中には黒褐色の粒子が多く含まれ、その他の砂粒も多い。しかし、これら4点には褐色系の粒子はほとんど含まれていない。また、二枚重ね技法については、

痕跡がはっきりせず、可能性は否定できないが断定も難しい。横ナデ調整部下端の細い沈線は、8が顕著であるが、7には認められず、5・6では痕跡が観察できる。

皿A III類（9～24） 本類については、個体数が多いため細別分類で説明を分けたい。第III a類は、胎土の特徴を見ると大きく3分することができる。まず、11・12・15の3点は、遺存状況が比較的良好な一群で、横ナデ調整部は概して平滑で、色調等もほぼ同じ感触を与えるものである。微細な砂粒等を多く含むが、灰色を呈するやや大粒の小砂利（φ2～4mm）が目立っている。12・15は、底部外面を手づくね状態でそのまま未調整であるが、11については底部の稜線付近にヘラケズリ状の調整を施している。なお、これら3点の内面には、斑状ながら黒灰色の付着物が認められる。10は、微細な砂粒を多く含むが、その中でも褐色系の粒子が目立ち、やや大粒の小砂利が含まれるものである。9・13・14の3点は、遺存状況がやや不良であり、全体的にやや摩滅する。胎土の特徴は、微細な砂粒を主体としつつ、その中に黒褐色粒子が目立ち、やや大粒の小砂利が少量含まれている。本類の中で、二重粘土板作りの可能性が高い事例は、11と13であるが、特に11が顕著である。

第III b類は、遺存状況が良好な個体は16であり、17はやや不良である。また、16・17の内面は、全面黒色を呈し、器肉内の1/3まで浸透している。18は、斑状となる。また、18では、粘土板の重ね合わせ痕が確認できる。

第III c類については、4点ともほぼ同じ胎土であり、黒褐色系を主体とした砂粒を多く含み、そして赤褐色系の粒子が目立つ。ただし、19については、含まれる砂粒がかなり多く砂質感を与え、22は赤褐色粒が少ない。横ナデ調整部下端の沈線は、21の場合段部の角にそれが認められ、22には明瞭に施されるが、19・20はない。スス状の付着物等は19を除く3点に認められるが、20・22は内面の全面が黒褐色を呈し、器肉内まで浸透する。また、21は全面的ながら暗茶褐色とやや薄く観察できる。

第III x類とした底部破片は、2点とも胎土と形態が異なる。23は底部外面が緩やかな丸みを持って膨らむ器形である。遺存状態はやや良程度で、軟質的な感触を与える。胎土は、微細な砂粒を多く含むが、褐色系の粒子が目立つものである。24は、底部外面が平板的で、凹凸が著しい。遺存状態は良好である。胎土は、黒褐色系の微細な砂粒が含まれるが、褐色系の粒子は極めて少ない。内面は黒色を呈し、器肉内の一帯に浸透する。二重粘土板作りの可能性があるが、明確でない。なお、内面の調整痕は、2点とも底面中央が横ナデ調整後に、横ナデ調整が施されている。

皿A IV類（25～28） 25は、遺存状況が概して良好な破片で、全体的に滑らかな感触を与えるが、胎土中には微細な砂粒が多く含まれる。特に、赤褐色粒子が目立つ。横ナデ調整部下端には2条の鋭い沈線があり、その中間に細い沈線を観察できる。器肉を観察すると、内外面はやや明るい橙色を呈するが、その内部はやや白色を帯びてぼんやりとしている。サンドイッチ状を呈することから、二重粘土板作りの可能性が高い。26は、黒褐色系を主体とする微細な砂粒が多く含まれる。遺存状態は悪く、摩滅が著しい。口縁部下端には1条の沈線がある。内面は黒褐色を呈し、器肉内に浸透する。

27の胎土は25に近似する。内外面は橙色を呈し、器肉内が灰色となるが、粘土板の重ね合わせが顕著であり、二重粘土板作りで製作されたことが明らかである。外面はスス状の付着物により黒ずんでいる。28は、微細な砂粒を少量含むだけであり、比較的よく精選された胎土である。器肉内の色調は、やはりサンドイッチ状を呈している。

皿A V類（29～32） 29は、薄い作りの皿である。全体に摩滅が著しく調整痕等は残されていない。胎土中には微細な黒色粒子がやや含まれている。30も焼成が甘く、遺存状態は不良である。このため、調整

No.	器種・分類	出土位置・遺構	法面/口径:底径:器高(cm)	色調	スス	保存状態	現存部	胎土	重積	備考
1	皿A I a類	S Kp-182	(13.8 9.0 : 3.1)	褐色	-	×	1/5	A	○	
2	皿A I b類	S E-111	12.8 8.0 2.6	灰白色	-	◎	1/3	A	○	
3	皿A I b類	SD-460 東西パルト西	13.6 (8.0 2.4)	灰白色	-	△	1/5	C	△	
4	皿A I b類	S E-572	13.8 (10.0 3.3)	灰白色	-	○	1/5	D	△	
5	皿A II a類	C-4	(11.0 7.0 2.9)	灰白色	-	△	1/8	D	△	
6	皿A II a類	S E-701	(13.6) - -	にぶい黄橙色	-	△	1/6	D	△	
7	皿A II b類	S K-682	(11.0) - -	灰白色	-	○	1/8	D	△	
8	皿A II b類	C-5	(13.8 8.0 3.0)	明褐灰色	-	△	1/8	B	?	
9	皿A III a類	B-5	(12.6 8.0 3.3)	明褐灰色	-	×	1/5	B	△	
10	皿A III a類	C-5	(12.8 8.0 2.7)	浅黄褐色	-	○	1/8	A	△	
11	皿A III a類	—	(13.4 8.0 3.0)	灰白色	△	○	1/5	C	△	
12	皿A III a類	S Kp-716	(13.6 9.0 2.8)	灰白色	-	○	1/8	C	△	
13	皿A III a類	S Kp-607	(13.6 8.0 2.4)	明褐灰色	○	○	1/8	B	△	
14	皿A III a類	S Kp-530 + 534	(14.2 9.0 3.1)	灰白色	-	×	1/4	B	△	
15	皿A III a類	S Kp-781	(14.0 8.0 3.0)	灰白色	△	○	1/8	C	△	
16	皿A III b類	S E-739 (4区)	(10.8) - -	灰褐色	○	○	1/5	B	△	
17	皿A III b類	B-4	12.8 (7.0 2.9)	にぶい橙色	○	○	1/4	B	?	
18	皿A III b類	C-8	(13.0 9.0 3.2)	淡橙色	-	△	1/8	A	○	
19	皿A III c類	C-3	(10.0 6.0 2.7)	にぶい橙色	-	○	1/6	A	△	
20	皿A III c類	C-4	(12.8 8.0 2.6)	浅黄褐色	○	○	1/5	A	△	
21	皿A III c類	S K-456	(14.0 8.0 3.0)	にぶい橙色	○	○	1/4	A	△	
22	皿A III c類	S Kp-469	(13.6) - -	浅黄褐色	○	○	1/8	B	?	
23	皿A III x類	S Kp-699	(- - -)	にぶい橙色	○	△	底部完	B	?	
24	皿A III x類	S Kp-427?	(- - -)	にぶい黄橙色	○	○	底部1/2	C	?	
25	皿A IV a類	S Kp-644	(12.0 7.0 2.9)	橙色	-	◎	1/8	A	?	
26	皿A IV a類	S Kp-300	12.8 (8.0 2.7)	灰黄褐色	○	△	1/4	B	△	
27	皿A IV b類	S Kp-1081	(12.6 7.0 3.2)	浅黄褐色	-	△	1/6	A	○	
28	皿A IV b類	B-4	(13.6) - -	浅黄褐色	-	△	1/9	D	?	
29	皿A V a類	B-7	10.2 (6.0 2.3)	浅黄褐色	-	×	1/6	B	?	
30	皿A V a類	D-3@	12.4 (7.0 2.6)	淡赤橙色	-	△	1/6	A	?	
31	皿A V a類	S Kp-682	(13.6 9.0 3.0)	にぶい橙色	△	×	1/8	B	△	
32	皿A V b類	S Kp-388	(13.8 8.0 2.8)	明褐灰色	○	○	1/12	B	?	
33	皿B III類	S E-111	12.4 9.6 2.7	褐色	-	○	1/2	E	-	
34	小皿A I a類	S D-460 (南区)	(7.6) - -	黑色	?	△	1/8	B	?	
35	小皿A I a類	S K-682	7.4 6.4 1.4	明褐灰色	-	△	1/4	B	○	
36	小皿A I a類	B-4	8.6 6.0 1.6	にぶい橙色	-	△	1/5	A	?	
37	小皿A I b類	S E-739 (2区)	8.0 6.8 1.6	にぶい黄橙色	△	×	1/3	B	?	
38	小皿A I b類	S E-701	8.6 7.0 1.7	淡橙色	-	○	完形	A	?	
39	小皿A I b類	S E-739 (4区)	(9.0 7.0 1.7)	にぶい橙色	○	○	1/6	A	?	
40	小皿A I c類	S Kp-496	7.4 (5.0 1.5)	灰褐色	-	△	1/8	B	?	
41	小皿A I c類	S E-24	8.0 6.5 1.7	にぶい橙色	-	○	1/3	D	△	
42	小皿A II a類	C-3	6.6 5.0 1.5	浅黄褐色	-	△	1/4	D	△	
43	小皿A II a類	C-3	6.4 4.0 1.8	橙色	-	×	1/4	A	-	
44	小皿A II a類	C-3@	7.2 6.6 1.7	にぶい橙色	-	△	1/3	A	?	
45	小皿A II b類	S D-460 (南区)	7.8 5.8 1.7	灰白色	-	△	1/4	D△		
46	小皿A II b-1類	C-3@	(8.0 5.6) 1.5	浅黄褐色	-	×	1/8	A	-	
47	小皿A II b-1類	S Kp-159	7.6 6.0 1.5	橙色	-	△	1/4	A	△	
48	小皿A II b-1類	B-4@	7.8 6.4 1.3	橙色	-	△	1/2	A	?	
49	小皿A II b-2類	S D-653 (3区)	(7.8 5.0 1.7)	にぶい黄橙色	-	○	1/4	D	-	
50	小皿A II b-2類	C-3	(8.2 4.0 21.6)	にぶい橙色	-	△	1/8	A	△	

※スス: ○多い △少しなし 遺存状態: ◎良好 ○良好 △普通 ×不良
重積: 黏土板重ね合せの痕跡: ○あり △可能あり ?不明 一なし

第4表角田遺跡中世土器器観察表

痕等の観察は難しい。胎土中には、微細で複雑な砂粒が含まれ、褐色系粒子が多い。31の胎土中には、黒色粒子を主体とする砂粒が多く、若干の褐色粒子が含まれている。32は、比較的遺存状態が良好な資料である。胎土や色調等は、第III a類の15などに近似する。口縁部外面の横ナデ調整は上下2段に区分でき、2条の細い沈線がめぐる。上段部は、横ナデの痕跡としてカキ目状の条線が残っている。スヌ状の付着物は、31・32で観察される。

皿B VI類 (33) 唯一出土したロクロ成形による中世土器である。色調は、内外面とも橙色を呈するが、器肉内中央部は灰色である。底部の切り離しは、回転糸切りであるが、縦に板目状の圧痕もしくは縦ナデ調整と思われる条線が残されている。口縁部は、内外面とも横ナデ調整である。底部内面は、縦ナデ調整が強い力で施され、その凹凸が観察できる。底部外面の縦位条線と対をなす可能性があるが、にわかに判断できなかった。胎土中には砂粒がほとんど含まれず、A類の土器とは際立った差異がある。

形態としては、口縁部外面に2段のロクロナデ調整痕があり、底部はベタ高台状に近い形状となる。しかし、この形状は、糸切り部位の位置によるものであり、高台を意識してはいないものと判断される。

小皿類 (34~50)

小皿A I類 (34~41) 本類は3類に細分されているため、各類ごとに説明を若干加えたい。

第I a類 (34~36) の3点は、概して薄い作りである。34は、器肉内まで黒色を呈する。このため、スヌ等の付着物は確認できない。焼成・遺存状況は普通であるが、やや摩滅した小片であり、詳細な調整等は観察できない。35については、遺存状況は悪くないが、器面がやや摩滅しており、調整痕は強く横ナデされた部分だけが残されている。上下2枚を重ねたような成形痕が観察できる。35は、口縁部外面の内面に横ナデ調整が観察される。また、底部外面の指頭痕は明瞭に残る。器肉の色調は、内外面にぶい橙色であるが、その中間はやや白くなる。なお、35の器肉の観察では、張り合わせが不調となったような平板な空洞が認められることから、二枚重ねで製作された可能性が高い。

第I b類 (37~39) では、37の遺存状態が悪く調整痕等は口縁部の横ナデを除き観察できない。しかし、38・39の2点は内面の調整痕が残っている。両者とも、口縁部および屈曲部分まで横ナデ調整を施すが、内底面は縦ナデ調整である。スヌ等は、37・39に残されるが、38はない。なお、38の小皿は完形品である。外底面の作りは、実測図を見ると不安定であるが、実際は安定していてそれほどビブれない。なお、38の口縁部外面の横ナデ痕は、一周後に上方へナデ上げられた調整痕が明瞭に残されている。

第I c類 (40~41) は、2点がある。40は、焼成がやや甘く、遺存状態はそれほど良くない。このため調整痕等は不明である。41は遺存状態もよく、調整痕が明瞭に観察できる。内底面の調整は、前述した38・39とは異なり中央部分まで回転ナデ（横ナデ）が施されている。また、器肉の観察では、不明瞭ながら上下二枚の粘土板で製作されたような痕跡が観察される。

小皿A II類 (42~50) 本類は2類に細分されるため、細分類にそって説明を加えたい。

第II a類 (42~45) の4点は、すべて遺存状態が余り良くなく、調整痕等の残りは良くない。このため、調整についての詳細は不明である。なお、これら4点のうち、色調が白っぽい42・45の2点は、器肉が二枚で構成されているような痕跡を観察することができる。

第II b類は5点を一括して述べる。焼成は50を除けばやや不良といった程度で、大半を甘いものが占める。このため、口縁部の横ナデ調整痕をとどめるものがわずかに確認されるだけで、内底面の調整等は不明とせざるを得ない。これらの中で、粘土板の重ね合わせ痕と推定できる痕跡をとどめる事例は、47・50の2点だけである。

3) 貿易陶磁器 (51・52)

中世土師器や珠洲焼に比べると、貿易陶磁器の出土量はきわめて少ない。青磁は1点も確認されず、図化した白磁および青白磁が1点ずつ出土しているのみである。

青白磁 (51) 壺の蓋である。頂部には草花文が施されているが、文様を形作る線をみると、型づくりによると思われる。このような蓋は12世紀以降にみられるものであるが、具体的な生産時期は不明とせざるを得ない。

白磁 (52) 碗の口縁～体部片である。体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部はやや外側に反る。口径は11.7cmと推定される。釉薬は灰色を呈しているが、口縁端部には幅5mmほどの無釉部分がある。いわゆる口禿碗と呼ばれるものであり、IX類に分類されるから、13世紀後半～14世紀前半の所産と考えられる〔横田ほか1978〕。

4) 珠洲焼 (55～108)

出土した珠洲焼のうち、図化が可能であったのは54点であり、それには小片も含まれている。器種としては、壺類・甕類・鉢類に分類される。ただし、大半が体部片のみであるため、壺類と甕類の識別が困難なものも多数あった(66～105)。また年代的な点については、吉岡康暢氏の研究〔吉岡1994〕に依拠することとする。それぞれの出土位置等については、第5表を参照されたい。

壺類 (55～62) 甕類ではなく、壺類とすることができたのは55～62の8点である。

55は、ロクロ成形による壺R種の肩部の小片ではあるが、櫛目による波状文が描かれていることに注目される。波状文の櫛目は7条からなり、左上から右下という斜位、左から右という横位の方向に施されている。特に下の2帯は斜位の上から横位の波状文を交差させて独特の文様を描かせているような感がある。小片であることもある、製作年代を特定することはできない。しかし、横位・斜位に描かれる櫛目波文は吉岡編年によるII～IV期の壺R種に多く見受けられることから、13世紀～14世紀前半の所産と考えることができる。56も、壺R種の肩部で、櫛目による文様が描かれている。ただし、小片のため、詳細は不明とせざるを得ない。57・58は、タタキ成形による壺T種の肩部、59～61は体部下半である。いずれも小片であるために詳細な時期は特定できない。62は、体部下半～底部の破片である。底径10.2cm、底部は静止系切りによって切離されている。体部の器厚に対して底部の器厚が極端に薄くなっているが、ひとまず壺類に分類した。

甕類 (63～65) 今回の出土資料で、確実に甕類と判断できるのは、口縁部および底部である63～65の3点のみである。

63は、口縁部～体部片である。口径は推測できなかった。64は、口縁部片である。口径は54.6cmと目される。ともにIII期の所産と考えられる。65は体部下半～底部片である。底径22.6cmを計る。内面には、成形における輪積みの痕跡を残している。

鉢類 (106～108) 図化し得た3点のみである。106は、口縁部～体部片である。体部は直線的に外傾して立ち上がり、ロクロナデされている。口縁端部はおおむね方形に仕上げられる。体部内面には18mm幅に7条の卸し目が施されている。卸し目は2帯のみ確認できるが、その間隔は17mmである。また、口縁端部内面にはやや摩れた痕が観察できる。口径は33.4cmと推測される。時期は吉岡III期の所産と考えられる。107・108は、底部に近い体部片である。摩減も著しく、詳細な時期も不詳である。

番号	器種	部位	出土位置・遺構	色調	焼成	備考	番号	器種	部位	出土位置・遺構	色調	焼成	備考
55	壺R	肩部	SKp-411	灰 色	良好	波状文	81	壺・甕	体部	SKp-682	褐色	中中不良	
56	壺R	肩部	SKp-189	灰 色	良好	波状文	82	壺・甕	体部	SKp-739(4区)	灰 色	良好	
57	壺T	肩部	SD-1050(中区上部)	灰 色	良好		83	壺・甕	体部	SKp-739(1区)	灰 色	良好	
58	壺T	肩部	SKp-368	灰 色	良好		84	壺・甕	体部	SE-563	褐色	良好	
59	壺T	体部下半	C-3	灰 色	良好		85	壺・甕	体部	SD-1058(3区)	褐色	中中不良	
60	壺T	体部下半	B-7	褐灰色	中中不良		86	壺・甕	体部	SD-1050(新1区)	褐色	中中不良	
61	壺T	体部下半	SK-456	褐灰色	中中不良		87	壺・甕	体部	SKp-1072	灰 色	良好	
62	壺	体部下半	SD-1050(中区上部) ～底部	灰白色	良好	底部磨耗未切口 底径10.2cm	88	壺・甕	体部	B-3	灰 色	良好	
63	甕	口縁部～ 体部上半	SKp-524	灰 色	良好		89	壺・甕	体部	C-3	灰 色	良好	
64	甕	口縁部	SD-1050(中区上部) ～颈部	灰 色	良好		90	壺・甕	体部	C-3(2)	灰白色	良好	
65	甕	体部下半	SKp-368	灰 色	良好	底径22.6cm	91	壺・甕	体部	B-3	灰 色	良好	
66	壺・甕	体部	SKp-376?	灰 色	良好		92	壺・甕	体部	B-3	灰 色	良好	
67	壺・甕	体部	SKp-398	灰 色	良好		93	壺・甕	体部	C-3	褐色	良好	
68	壺・甕	体部	SKp-368	灰 色	良好	器面摩耗	94	壺・甕	体部	C-3	灰 色	良好	
69	壺・甕	体部	SKp-457	灰 色	良好		95	壺・甕	体部	C-3	灰 色	良好	
70	壺・甕	体部	SKp-427b	褐灰色	中中不良		96	壺・甕	体部	E-4東部	灰 色	良好	
71	壺・甕	体部	SKp-427a	灰 色	良好		97	壺・甕	体部	C-7	褐色	中中不良	
72	壺・甕	体部	SKp-398	灰 色	良好		98	壺・甕	体部	B-4	灰 色	良好	
73	壺・甕	体部	SKp-456	褐灰色	中中不良		99	壺・甕	体部	底土	グリーカー	良好	
74	壺・甕	体部	SKp-572	灰 色	良好		100	壺・甕	体部	E-4東部	灰 色	良好	
75	壺・甕	体部	SKp-460	褐灰色	中中不良		101	壺・甕	体部	B-4	灰 色	良好	
76	壺・甕	体部	SKp-460	灰 色	良好	器面摩耗	102	壺・甕	体部	底土	灰 色	良好	
77	壺・甕	体部	SKp-621	灰 色	良好		103	壺・甕	体部	C-8	グリーカー	良好	
78	壺・甕	体部	SKp-580	褐灰色	中中不良		104	壺・甕	体部	C-3	灰 色	良好	
79	壺・甕	体部	SKp-637b	灰 色	良好		105	壺・甕	体部	C-4	灰 色	良好	
80	壺・甕	体部	SKp-682	灰 色	良好		106	擂鉢	口縁部～ 体部上半	SKp-662	灰 色	良好	口径33.4cm カキ目7条
							107	擂鉢	体部下半	A-2表採	グリーカー	良好	
							108	擂鉢	体部下半	B-3	灰 色	良好	

第5表 角田遺跡株洲焼觀察表

5) 近世陶磁器 (109~121)

近世に属するのは陶磁器によって占められるが、今回は13点を図化することができた。器種は小皿・五寸皿・大皿・中鉢・擂鉢である。生産地は、初期伊万里焼や唐津焼を中心とする肥前系に求められる。なお、以下の記述にあたっては、先行研究「おもに大橋1993・新宿区内藤町遺跡調査会1992ほか」を参考としたほか、北陸近世遺跡研究会の諸氏に多くのご教示を得た。

小皿 (109~111・116~118) 口径13cm前後と推測できるものについては小皿とした。小皿の产地としては、初期伊万里焼 (109・110)・波佐見焼 (111)・唐津焼 (116) といったものがあげられる。

109は、口縁部が2カ所欠損するものの、ほぼ完形の状態で出土した。口径12.9cm、高台径6.8cm、器高2.7cmを計る。体部は丸味を帯びるが、高台がやや大きく、初期伊万里焼の標準的な法量を量している。内面には草花をモチーフとした花盆文が描かれ、見込みには一重の圓線が巡る。灰白色的透明釉が器面全体に施されている。また、底部外面と高台には砂が付着しており、砂床であったことがわかる。SE-909aからの出土である。生産時期は、初期伊万里焼の最終段階である1630~50年代を中心とした17世紀前葉～中葉と思われる。

110は、体部下半～底部片である。高台径は6.6cmと推測される。見込みには二重圓線が巡るが、内側の圓線の幅がやや細い。その内側になる底部内面にはおそらく松と思われる模様が描かれている。底部外面と高台には砂が付着しているので、砂床であることがわかる。また、全面に施されている灰白色的釉薬はやや厚めである。生産時期は17世紀前半と思われるが、109よりも先行する可能性がある。

111は、波佐見焼と思われる底部片である。高台径4.2cmを計る。見込みには二重圓線が施されているが、その上位である体部内面には何らかの模様が描かれている可能性がある。また、同種の小皿類は底部内面が蛇ノ目釉剥ぎになるが、111については重ね焼の際に最上位に置かれたものであろうか。生産時期は17世紀中葉と思われる。B-8グリッドから出土した。

116は、唐津焼の口縁部～体部片である。体部はやや内窵して屈曲する折縁形を呈する。胎土はにぶい橙色で、灰オーラー色の釉薬が施される。口径は13.6cmと推測される。C-8グリッド包含層からの出土である。

117は、底部片である。胎土は灰白色、釉薬は灰オーラー色を呈し、高台の接地面には釉薬がみられない。高台径は5.9cmである。産地は肥前系と推定される。C-4グリッド包含層の出土である。

118は、底部片である。オーラー色の釉薬が施され、貫入がみられるが、高台は無釉である。高台径4.6cmを計る。A地区（市道拡幅部分）から出土した。

五寸皿（115） 口縁部～体部片である。小片であるが、口径は16.4cmと推測されるため、五寸皿の可能性がある。体部は外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁部が外側に屈曲する折縁形を呈している。胎土はにぶい橙色で、薺灰釉がかかる。産地は肥前系と推定される。C-4グリッド包含層出土である。

大皿（112） 112は、鉄軸印花文皿である。ひとまず大皿類としたが、盤類にも含まれうる形態である。口径29.4cm、高台径10.4cm、器高7.1cmを計る。施釉前に沈線を施すと、その部分に塗られた釉薬は厚くなつて色調が濃色となるが、そのような沈線が口縁部に1条、体部中位に2条1筋、底部に2条2筋巡らされている。これによって底部内面のスタンプ文様は、内側・中位・外側と同心円状の3区画に分かれている。スタンプは、内側・中位が桜、外側が蝶であり、文様の和風化がうかがえる。底部が遺存するのは約1/2のみであるが、中位・外側の文様は幅に制約されて1列をなすものの、全体的にみれば、3区画ではいずれも配置がランダムである。鉄軸は全面に施釉されるが、重ね焼きにおける目には、白色の陶石を碎いたものが用いられている。唐津焼で、時期は1610～40年代である。SK-870からの出土であるが、SE-909a（接合）・SKP-910・SE-936より同一個体の破片が得られている。

中鉢（113・114） 2点得られたが、口径が16cm前後であるため、中鉢類とした。2点とも口縁端部は外側に折り返されて玉縁状を呈している。

113は、口縁部～体部片で、口径17.0cmと推測される。体部はやや内窵しているので、浅丸型を呈していると思われる。C-6グリッドから出土した。

114は、大きく内窵して立ち上がる浅丸型で、口径15.7cm、底径5.6cm、器高6.1cmを計る。胎土は灰色、釉薬は灰オーラー色であるが、底部内面は幅4.1cmの蛇ノ目釉剥ぎがなされている。SK-40の出土である。

播鉢（119～121） 播鉢類は、体部下半の3点のみを得た。いずれもロクロ成形である。

119は、体部の立ち上がりにやや丸味を帯びる形態である。シャープなカキ目がみられ、10条で1単位となる。にぶい赤褐色を呈し、焼成は良好である。口縁部は残存していないが、おそらく玉縁状の形態をなしていた可能性も想定される。17世紀中葉の所産と考えられる。B-8グリッド包含層出土である。

120は、小片であるが、おそらく119と同様の形態であったと思われる。にぶい橙色を呈し、焼成は良好である。C-5グリッド包含層より出土した。

121は、同様に体部下半の破片であるが、摺目の間隔は広く、胎土も異なるため、他の2点とは産地が異なる可能性がある。色調はにぶい橙色で、焼成はややあまい。B-5グリッド出土である。

3 木製品類

今回の調査では、比較的大量の木製品が出土した。種類・用途から大別すれば、漆器のほかに、日常生活用品・建築用部材・用途不明木製品がある。以下それぞれの概要を述べる。

1) 漆 器 (53)

漆器は、椀が1点出土しているのみであるが、ほぼ完形に近い状態で出土した。底部はベタ底の平高台で、体部は内窓して立ち上がるが、中位あたりから口縁部はやや外側に反っている。口径14.0cm、高台径7.0cm、器高5.1cmを計る。樹種は特定できないが、横木取りである。成形はロクロ挽きによるもので、高台裏に十字の刻みがあるが、ロクロ挽き時における固定の痕跡と思われる。内外面ともに黒色漆であるが、高台裏には漆がみられない。これは、渋下地であるために剥がれたものと思われる。S X-739の1区からの出土である。時期は、高台の形態より13世紀後半と目される〔品田1991a〕。

2) 日常生活用品 (129・131・140~193)

それぞれの用途については、推測の域を出ないものもあるが、ここでは鋤・板杓子・ハシ類・曲物について述べることとする。

鋤 (129) 129は鋤の一部と思われる。厚さ2.1cmの柾目板よりなり、一方を両面から法面をつけ、半円形に成形している。この部分に金属製の鋤先が取り付けられて使用された可能性もある。表面には径1~3mmの孔が穿たれ、それぞれ3~4方に向かう刻みがあることから、紐などを通して固定したと思われる。また、裏面には縦横の方向に走る刃物傷が多い。S E-682から出土した。

板杓子 (131・140) 131・140は、両側部を欠損した破片であるため、全体の形態は不明である。しかし、銀杏の葉状に幅の広がる形態から、板杓子と推定した。131は、厚さ約4mmで、横位の刃物傷がみられる。S E-33の出土である。140は、厚さ9mmの板材で、S E-778c出土である。

ハシ類 (141~189) 板材を縦割りにした細い角材を面取りして成形する。したがって、大半の断面が4~8角形となる。しかし、全体的には粗いものの、断面形に丸味を帯びているものもある。162・182・188・189は形態が異なるが、製作途中のものであろうか。ここではひとまずハシ類とした。出土点数としては、ハシ類が非常に多く、特にS E-778a井戸(141~173)からの出土量が目立っている。ほかにS E-33(174・175)・S E-571(176~182)・S E-778c(183~189)の各井戸からも出土している。

曲物 (190~193) 側板 (190・191) および底板あるいは容器の蓋 (192・193) が出土している。190は、幅48mm、厚さ3mmを計る。191は、側板綫じ部で、板が2枚重なっており、幅39mm、厚さ6mm(3mm×2枚)である。幅0.9mmの桜皮により、1カ所で縫じている。縫位の刃物傷がみられるが、板を曲げやすくしたものと思われる。190・191はいずれも柾目板が用いられている。ともにS E-739の3区出土であり、遺存状態はやや不良であるが、同一品と思われる。

192・193は、いずれも柾目板材が用いられ、円盤状を呈している。192は径9.8cm、厚さ0.9cm、193は径12.3cm、厚さ1.0cmを計る。193は約1/4を欠損する。192はS Kp-39、193はS E-456出土である。

番号	種別	出土遺構	備考	番号	種別	出土遺構	備考
194	井戸枠	S E -778a		204	礎板	S Kp-424	
195	井戸枠	S E -778a		205	礎板	S Kp-135a	S B -1201
196	井戸枠	S E -983		206	礎板	S Kp-351a	S B -1201
197	不明	S K -829	196との組合せか	207	礎板	S Kp-204	
198	不明	S K -829	197との組合せか	208	柱根	S Kp-546	A類
199	礎板	S K -342	S B -1202	209	柱根	S Kp-223a	B類 S B -1201
200	礎板	S K -829		210	柱根	S Kp-333	B類 S B -1201
201	礎板	S Kp-379	S B -1202	211	柱根	S Kp-241a	B類 S B -1201
202	礎板	S Kp-379	S B -1202	212	柱根	S Kp-257	B類 S B -1201
203	礎板	S Kp-146	S B -1205	213	柱根	S Kp-326	B類 S B -1201

第6表 角田遺跡出土建築用部材一覧表

3) 建築用部材 (194~213)

今回の出土品のうち、井戸枠・柱根・礎板などが建築用部材として該当するであろう。各々の出土位置等については第6表を参照されたい。

井戸枠 (194~196) それぞれ井戸から出土した板材であり、特に壁面に付着していた状況も考慮して井戸枠を構成する部材と推定した。195・196は、それぞれ厚さが7mm・12mmの柾目板材である。194は、補強として用いられたものであろうか。釘孔などは確認されなかった。

柱根 (208~213) 本遺跡からは多数の柱根が検出されたが、ここでは一部のみ掲載することとする。柱根は大きく2類に分類できる。A類 (208) は、いわゆる芯柱で、木の芯を用い、側面をおそらく手斧などで削るものである。B類 (209~213) は、木の芯を用いず、外側を木取りしたものである。面取りなどの加工痕は特にみられず、断面は台形を呈するものが多い。B類は、B-C-2~3グリッドのS B -1201(第III期)を構成する柱穴にみられる。

礎板 (199~207) 柱目状に木取りしているものが多い。柱根と接する部分に何らかの加工痕や凹みなどを想定していたが、商舗も著しいためか、確認することはできなかった。

その他 (197・198) 197・198は、ともにS Kp-829から出土した部材である。同じS Kp-829出土の200はこれらとやや離れて底面から出土したので礎板としたが、197・198は、斜位の状態で検出された。特に197は中央に約1.9cmの窪みが付されている。他の部材と組み合わせて使用されたと思われる。また、一部が欠損しているため断定はできないが、ホゾ孔であった可能性もある。

4) 用途不明木製品 (130・132~139)

用途不明の木製品を一括した。板状を呈するものが多い。

130 (S E -571) は、一端を半円形に窪ませている。また139 (S E -983) は、先端部付近に径4mmの穿孔がある。これらの特徴は機能・用途に関わるものと思われる。132・135~138 (S E -739) は、その形態から、木札といった可能性もあるが、墨痕等は確認されなかった。133・134 (S E -778a) も不明とせざるを得ない。

4 石製品類

出土した石製品は、整理箱1箱分にも満たない量で、遺存状態もあまり良好とはいえない。ただし、砥石などは定量見受けられるので、本節にて報告することとする。

1) 石臼類 (122)

石臼は1点出土したのみである。122は、粉挽臼の上臼である。臼面径28.1cm、上面径28.9cm、厚さは一定していないが、最大で11.6cmを計る。上面には1.5~1.8cmほどの窪みがある。臼面には同心円状に巡る使用痕が顕著である。そのために、目のパターンは判然としないが、おそらく6区画で、8~10条の副溝を刻んでいると思われる。臼面の中央には径2.2cm、深度2.1cmの軸孔があり、中ほどには穀物を投入する孔が上面から臼面を貫通している。また、側部には1辺3.7cmの略方形を呈した挽手用の孔が穿たれている。石材は在地の安山岩を使用していると思われる。SK-837の出土である。新潟県の場合、石臼が中世前期に出土した事例ではなく、中世後期の痕跡がない本遺跡においては、この石臼の時期は近世に求められよう。

2) 砥石類 (123~127)

図化し得たのは5点にとどまった。いずれも欠損部分があって、全体の形態は不明である。123は、上野産と思われる流紋岩製の中砥石である。側部が欠損しているが、遺存する3面のほか、小口も使用されている。中央に向かって細まる形態は、鎌研ぎ用に用いられたと思われる。厚さ2.3cmを計る。SE-682出土である。

124は、流紋岩製の中砥石で、123と同様に上野産の可能性がある。幅5.0cmを計る。欠損する面があるが、他の3面は使用されている。おそらく鎌研ぎ用と思われる。C-4グリッド出土である。

125は、在地産と思われる輝石安山岩製の中砥石である。幅4.8cm、厚さ4.5cmを計る。形態からはやはり鎌研ぎ用と考えられる。ただし、4面とも使用されているものの、一対は平滑であるものの、他の一対には刻線がみられるので、鎌以外の道具も想定される。SE-682出土である。

126は、安山岩製の中砥石と思われる。4面とも使用されている。幅6.9cm、厚さ2.4cmを計る。SE-778aから出土した。

127は、安山岩製の中砥石と思われる。幅2.7cm、厚さ1.1cmを計る。4面のほか、小口もやや使用されている。SKp-756から出土した。

3) その他の石製品類 (128)

128は、軽石である。一部欠損しており、長さ4.9cm、厚さ2.5cmを計る。摩耗した面を遺している。

5 金属製品類

金属製品は54のみである。緩やかに湾曲した鉄板片であるが、突起物が付き、その付近で傾斜が変わる。突起を支脚とする鉄鍋の底部と推測されるが、類例に乏しく、指摘にとどめたい。SKp-890出土である。

VI 総括

1 角田遺跡と開発

1) はじめに

角田遺跡は、古墳時代から近世まで断続的に営まれた集落跡である。わずか530m²ほどの調査区からは、1,200基以上の遺構が非常に高密度で検出された。これは古墳時代以来続いた当該地の開発において、角田遺跡が大きな役割を果たしていたことを物語っている。にもかかわらず、遺物の出土量は少なく、主体となる中世土器・陶磁器の場合でも、1m²あたりの出土量は0.3点ほどを数えるのみで、しかもほとんどが小片である。このような遺構数と遺物量の不均衡さは、一般集落とは異なる特異な内容に思えるが、実際には角田遺跡の性格そのものを表わしているものと考えることができる。

今回の調査を実施する以前には、本遺跡の存在は周知されていたものの、想定した内容をはるかに上回る規模の遺跡であった。また、特に有力者等を伝えるような伝承などではなく、乏しい文献史料からは、土地制度上の帰属も明らかではない（第2章第2節）。このような状況からは、当該地に集落を営んだ者を特定することも不可能であり、角田遺跡の理解が不十分となる。本節では、出土遺物の考察を含め、遺跡の性格を考察することを目的とした。

2) 西中通地区の地割と近世の開発

角田遺跡の現況は水田であった。近世前期まで断続的に集落が営まれた本遺跡を把握するために、当該地の水田形成について考察し、古代・中世の開発を理解することへの一助とした。

西中通地区的地割 角田遺跡は、西中通地区に所属する鶴地内に所在する。当該地は護岸工事による河川流路の固定化など、前近代の環境とは大きな変化がみられる。遺跡近辺の河川をめぐる古環境については前述したので（第2章第1節）、ここでは前近代の西中通地区を全体的な視野から若干触れることしたい。ただし、対象とする地区は、角田遺跡を囲む河川、鰐石川と別山川を挟む範囲、すなわち土合・上原・鶴北部とする。

第15図は、1890・91年に調査された当該地の旧土地更生図をもとに作成したものである。本遺跡は剣村大字角田に所在している。剣村は、村南部（第15図対象外）に集落を形成し、別山川に接する村北部である角田・土深ヶ・下境・中江尻は、いずれも水田により構成され、比較的大きな面積を有している。一方、別山川北部の土合村では、各々が小さな面積の大字によって構成され、南部に水田・畠地、北部に居住域が形成されている。しかも北部には、「殿屋敷」・「屋敷割」など、中世末期に館跡などが存在した可能性を示唆する地名がある。実際に当該地には土合殿屋敷遺跡が、その西側には岩野城跡や宮ノ浦遺跡が周知化されているが、実態解明の手掛かりとなろう。このような別山川の南北における地割の差異を積極的に評価すれば、中世末期における角田周辺の開発が途上であったことをうかがうことができる。

近世の開発 ところで、今回出土した近世陶磁器は、少量であるが、器形等を把握することができるものがあり、明確な時期を想定することができた。すなわち、砂床を用いた初期伊万里焼（109ほか）や唐津焼の鉄釉印花文大皿（112）により、17世紀前葉～中葉に時期を求めることができる。しかも112は一般



第15図 西中通地区の旧土地更正図（約1：8,000）

¹⁹⁾ 集落からの出土例があまりないとされている。

では近世の角田遺跡はどのような特殊性を帯びていたのであろうか。当該地の水田は用水を藤井堰東江の分流から得ていることが知られているが（『白川風土記』〔柏崎市立図書館1977〕）、中世末～近世の為政者にとって、藤井堰は大きな関心事であった（第II章第2節）。16世紀末に上杉氏によって開削されて以来、代々の領主もこれを引き継ぎ、分流を各地にめぐらして開発に力を注いだことは想像に難くない。途上であった角田周辺もこの開発の対象となり、水田が形成されたと推定されるが、角田遺跡はその際の拠点になったと考えられる。開発の拠点となるには、地理的な条件のほかに歴史的な背景が大きな要因としてあったと思われるが、次項以降にて、古代・中世の開発について検討したい。

3) 古代の土器と開発

角田遺跡では、古墳前期に比定できる古式土師器も出土しているので、当該地における開発は、遅くとも古墳時代前期には始まっていたといえる。別山川の対岸にある台地上には西岩野遺跡が弥生後期に展開するが、鯖石川の約4km上流の関野遺跡など、古墳時代前期になると河川の自然堤防を利用した集落が散見

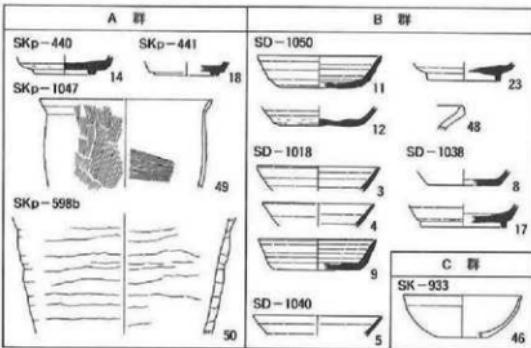
される。今回は時間的な制約から、第Ⅰ期とした古墳時代については詳述できなかったが、第Ⅱ期の古代についてまとめてみたい。

古代の土器相 出土した古代土器の特徴をあげると、食膳具はほぼ須恵器で占められ、無台杯の量が有台杯をやや上回ること、在地産と佐渡小泊産とともに定量みられること、などが指摘できる。このような点から、この土器群の時期を推定すれば、8世紀後半～9世紀前半と考えられる。ただし、土器1点1点に着目すれば、形態の差異からは、若干の時期差をうかがうことができる。

古代土器が出土した遺構としては、7～8グリッドに一部重複して横たわる溝群が大半であり、それに柱穴・ビット出土が伴っている。柱穴出土土器は、構成する建物などの時期を示すに有効であるが、溝群はいずれも中世以降に機能していたと想定され、覆土に含まれた古代土器は流動的であったと思われる。そこで、柱穴等出土土器（A群）と溝群出土土器（B群）を比較することとした（第16図）。ただし、対象とした土器は、時期差による形態の変化が明瞭な食膳具および煮炊具に限ることとした。また、土師器無台碗46は古代後期の形態を呈しており、摩滅が顕著であることからも、偶発的に紛れ込んだものとみなしこととした。

A・B群を比較すると、A群では無台杯が確認されないが、B群では無台杯が有台杯を凌駕し、佐渡小泊産（無台杯b・c、有台杯b）が大半を占める。また、形態的な点では、A群には底径に比して高台径が小さい古相を呈するものがある（有台杯a：14）。これに対し、B群では口径に比して底径が小さい「輪」を志向した形態を持つものがある（無台杯c：11・12）。以上、少量ながら、観察できた事項からA・B群に年代を与えるならば、A群は8世紀後半、B群は9世紀前半にひとまず位置付けられよう。

古代の開発 古代の建物としては、SB-1211・1212・1213が想定される。土器群の出土状況から考えれば、溝群出土に限定されるB群よりもA群土器の年代を当てはめることが妥当と思われる。したがって、古墳前期以来の開発がなされ、今回の調査区における古代の居住域が営まれたのは8世紀後半と考えられる。ただし、続く9世紀前半のB群土器は溝群に存在しているので、9世紀前半の居住域も調査区近辺にある可能性を指摘しておきたい。古代においても、集落として安定した微高地を求めながら開発を進め、居住域を変遷させていったと思われる。9世紀半ば以降については、資料がわずかなC群土器のみであるため、不明とせざるを得ない。



第16図 角田遺跡古代土器遺構分類図

4) 中世の遺物と開発

遺物の出土量からみた角田遺跡の主体時期は第III期とした中世前期である。発掘調査以前の本遺跡は、わずかな土器片が採集できることが知られているのみであったが、圧倒的な遺構数および高密度な遺構分布が確認されたのである。ここでは、本節冒頭で触れた特異な内容を持つ角田遺跡の中世の状況を少しでも把握することを目的としたい。

中世の食膳具組成 まず、中世の遺物について考察する。今回出土した遺物群は、土器・陶磁器のほかに、木製品や石製品など、バラエティーに富んだ内容であり、漆器・椀や曲物といった木製品が器（容器）として使用されていたことがわかる。土器・陶磁器から考えれば、中世の本遺跡は13世紀後半を中心とした短期間に営まれたことが想定されるが、木製品・石製品・金属製品としたものの中には、時期的な属性が判然としないものもある。そこで、ここでは時期をある程度明確にできる土器・陶磁器・漆器を対象とすることとした。また、時期幅が限定された場合、土器様相を把握する手段として、種別や用途別による組成の分析が有効であるため、若干の考察を試みることとしたい¹⁷⁾。

第6表は、今回出土した中世土器・陶磁器・漆器の出土量を破片数をもとにして表わしたものである。もとより、この数値は調査面積が小さく、遺跡の一部分に過ぎないことが前提であるが、調査区が線的に拡張した形をとり、遺構分布密度の高い部分と低い部分とを貫いているものであることを積極的に評価すれば、この数値も本遺跡における平均的なものであるとも考えられる。大まかな組成として用途別に土器・陶磁器の種類をあげると、食膳具（碗・皿）は中世土器・白磁・漆器、貯蔵具（壺・甕）は珠洲焼・青白磁、調理具（擂鉢）は珠洲焼となる。この中で貯蔵具とした青白磁は壺に伴う蓋1点である（51）。青白磁の壺の場合、調度品的な用途も加味されていたと思われるから、珠洲焼とは別に扱うことが妥当と思われる。とすれば、貯蔵具・調理具は珠洲焼によって占められていたとすることができる。中世前期の場合、越後北部のように北沢窯や赤坂窯といった他の製品が搬入されない当方では、貯蔵具や調理具に分類される壺・甕・擂鉢の主要3器種は広域に流通する珠洲窯の製品によって独占されているのが一般的である。ただし、ここに51のような青白磁が存在することの意義は大きく、本遺跡の格付けには欠かせない資料といえる。

種類	器種	破片数	計	用途	種類	破片数	計
中世土器	皿	96(100.0%)	96[55.8%]	食膳具	中世土器	96(98.0%)	98[57.0%]
	壺・甕	69(94.5%)			白磁	1(1.0%)	
珠洲焼	擂鉢	4(5.5%)	73[42.4%]	貯蔵具	漆器	1(1.0%)	70[40.7%]
	壺	1(100.0%)	1[0.6%]		珠洲焼	69(98.6%)	
白磁	碗	1(100.0%)	1[0.6%]	調理具	青白磁	1(1.4%)	4[2.3%]
	蓋	1(100.0%)	1[0.6%]		珠洲焼	4(100.0%)	
漆器	碗	1(100.0%)	1[0.6%]				
合計		172		合計			172

第7表 角田遺跡における中世土器・陶磁器・漆器の破片数集計表

次に、残る食膳具について検討したい。第7表は破片数であるが、接合や胎土の比較後に行ったので、食膳具の場合はおむね個体識別法〔宇野1992〕に基づいていると思われる。その結果、中世土師器は96点で、それぞれ1点ずつ出土している白磁碗と漆器碗以外はすべて中世土師器となり、食膳具の約98%を占めることになる。全国の中世遺跡を対象に出土した土器・陶磁器の計量分析を行った宇野隆夫氏によれば、「食膳具において同一の地域・時期であれば、格上の遺跡あるいは地区の方が、土器食膳具の比率が高い。すなわち格下であるほど、中世前期では中国製陶磁器（中略）の比率が高い」という傾向が指摘されている〔宇野1997〕。宇野氏の研究成果に基づけば、角田遺跡の評価は「格上の遺跡」とすることができよう²⁾。青白磁壺（蓋）や櫛目波状文の珠洲焼壺の存在は、このことを裏付けていると思われる。さらに、中世土師器を含めた中世遺物の出土状況は、土器溜まりのような一括出土ではなく、遺構あるいは遺物包含層に少量ずつ、しかも小片で分布するといったものである。このことは、これまで述べた組成が日常的な土器等の使用を反映していることを示しているのではないだろうか。

中世の開発 少量かつ小片の中世土器群ではあるが、「格上の遺跡」という様相を想定することができた。ここに至って、遺構の高密度な分布との相関関係がある程度明らかになったようである。特に遺構が集中しているのは、S B-1201大型建物などが位置するB～C-3～4グリッドであるが、確認調査における別地点のトレンチをみても、集中区域の広がりはB～C-3～4グリッドに限られるようである〔柏崎市教委1998〕。今回の調査区は、推定される遺跡範囲の中心部ではなく、むしろ縁辺部に近い。おそらくは鰐石川に何らかの関係が想定されるのであり、密集した遺構群は河川交通に携わる何らかの機能が備わっていたことを指摘できるであろう。

これらのことから、角田遺跡は古代集落が廃絶した後、13世紀後半頃に再々開発がなされ、鰐石川の河川交通などに関わったと思われる。13世紀後半は、一般に気候が穏やかで、経済活動が盛んになった時期とされている。このような状況の中で角田遺跡は営まれていたのではないかだろうか。ただし、開発の主体者については、「格上の遺跡」に関わるような有力者であったことを念頭に置く必要がある。

5) おわりに

本節では、まず旧土地更生団などを用いながら近世の開発について述べ、最後に中世の様相について考察した。中世末期から重要視されてきた藤井堰あるいはその末流の開削に際しては、拠点となる地点が複数あったと思われる。当該地の場合は角田遺跡が拠点となったと思われるが、それには中世角田遺跡が存在したことと同じ理由があったと思われる。すなわち、当該地は、鰐石川がほぼ直角に流れの向きを変える位置にあり、逆にいえば常に微高地として集落を保つことの可能な地点であったという地形的な要因も大きかったと考えられる。中世角田遺跡に携わった人々の特定や、14世紀における廃絶などは今後の課題である。

- 註 1) 組成を検討する際には、出土遺構・地点別に統計化するとそれぞれの性格が反映されることがある〔小野1991〕。しかし、今回の場合は、遺構毎の遺物出土量はごくわずかであるため、数量化するには逆に不適切になると思われる。ここで算出した組成は、本遺跡の平均的な状況とみなすこととするが、今回の調査区は、遺構分布の複雑な部分を横切っているため、実態との誤差は少ないと考えられる。
- 2) 周辺の中世集落遺跡で、比較的遺物出土量が多かったものとしては、鶴巣田遺跡〔新潟県教委1988〕がある。鶴巣田遺跡では戸内・美濃焼や染付など、中世後期の遺物も出土しているため、正確な比較はできないが、報告書に掲載されたものに限れば、中世前期に属す食膳具における青磁。白磁と中世土師器の割合は約1：5～6である。したがって、角田遺跡より中世土師器の占める割合は小さいといえる。

2 角田遺跡における集落構成と遺構群

角田遺跡は、古墳時代前期（第Ⅰ期）、奈良時代後期から平安時代前期（第Ⅱ期）、鎌倉時代中期（第Ⅲ期）、江戸時代前期（第Ⅳ期）の大きく4時代にわたりて断続的に営まれていた遺跡である。しかし、発見された遺構の所属時期を見ると、古墳時代前期の遺物が伴う例が希に存在するが、確実にその時代に特定できる遺構は明かでない。特に、S E -936の壁面内において、確認面下-70cmで出土した甕口縁破片の存在が示すように、当該期の生活面は還元化したままの色調をとどめる第Ⅳ層の青灰色粘土層の中にあったと考えざるを得ない。したがって、古墳時代前期の遺物とは、古代・中世以降において井戸や柱穴を掘削する際に掘り出された可能性が高く、遺構からの出土事例も混入と見なすことができる。このため本遺跡の遺構とは、第Ⅱ期～第Ⅳ期の古代から近世の各時代に所属するものとして取り扱いたい。

以上のことから、本節では、古代から近世までの第Ⅱ期・第Ⅲ期・第Ⅳ期を対象にし、まず第1項ではそれぞれの遺構の種別毎に概観し、次く第2項では各時代の集落構成と遺構群について、調査の成果等をまとめてみたい。

1) 遺構群の検討

a 建物跡・柵跡

1,100個を超える柱穴群から復元された建物跡はようやく13棟、柵跡も2列に過ぎず、膨大な数の柱穴が活用されないまま残される結果となった。しかし、わずか530m²という今回の調査区と関わりを持つ建物跡は、その総数を想定すれば100棟を超える棟数に達するのであり、ここに本遺跡の重要な意味がある。

取りえず把握できた建物跡等の分布は、B・C-3グリッドを中心とする建物跡A群と、B・C-5・6グリッド一帯に所在するB群といった大きく2群の建物跡群である。両者の差違は、位置だけではなく、重複度やそれぞれの建物の規模、そして指向する方向性でも相違が認められる。これらの諸点については、以下で検討したい。

ところで、本文でも述べたように、柱穴の分布や密集状況を観察すると、それらの位置には一つの指向性とも言うべき流れが認められる。最も特徴的であるのは、B・C-3グリッドで看取される帯状に分布する柱穴群であるが、この指向性とはそのまま復元された建物跡A群の指向する方位となっている。この傾向は、密集度が最も高いB・C-4グリッドでも連続的に認められる。ただし、B・C-4グリッドについては、確かに乱雑となって乱れがあり、それほど単純に帯状の分布は観察しにくい。その事由としては、真北を指向する建物跡B群の指向性と一致する帯状分布が認められることである。つまり、B・C-4グリッドにおける最大の密集度と乱雑な柱穴検出状況の要因とは、建物跡A・B両群がそれぞれに指向する柱穴配列の重複した結果と判断できるのであり、本来ならば多數の建物跡が密集して存在しており、A・B両群は連続していたことになる。

方向性 まず、それぞれの建物跡の指向する方向性を、それぞれの長短の主軸ではなく、北を中心にして測定すると、大きく3つにまとめることができる。その第一は、真北から西に向かって0°～5°までの5度間に集中して指向する一群がある。これを便宜的にa群とすると、建物跡の事例はSB-1211・1212・1213・1214・1215の5棟が挙げられるが、これらはすべて建物跡B群に属するものである。第二のグループとしては、14.5°～18°までのおよそ4度間に集中する一群である。これらをb群と称することと

するが、事例としては S B-1201・1202・1203・1204・1205・1206 の 6 棟であり、建物跡 A 群の全てと B 群の一部が該当することになる。最後は真北から西へ 27°5' を指向する S B-1217 であるが (c 群)、事例としてはこの 1 棟だけであった。

規 模 建物跡 A 群におけるそれぞれの建物跡は、ほとんど全てが調査区外へはみだすため、正確な規模が不明なものが多い。しかし、S B-1201 は廂を含めると確認されている部分だけで 4 間 × 4 間以上であり、S B-1204 も廂を含め 3 間 × 4 間となる。このほかの建物跡を見ても、柱間の数は少なくとも、それぞれの間隔が大きく、相対的に規模の大きなもので占められていることがうかがわれる

のである。

これに対して、B 群の場合は、正確な規模の算定まではできていないが、把握されている範囲内（調査区内）では、最大でも 3 間 × 2 間であり、柱間の間隔も A 群より狭くなっている。また、2 間 × 1 間あるいは 3 間 × 1 間など小規模なものが多いことも本群の特徴である。

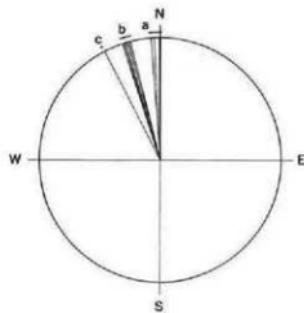
重複関係 建物跡 B 群における重複を見ると、同一方位を指向する建物跡の重複例は S B-1212 と S B-1213 の 1 件だけである。この事実は、同時併存した建物が多く、面的な広がりをもって建物が配置されていたことを示唆する。これに対し A 群ではそのほとんどが重複関係にあり、同時併存の可能性が示せるのは、S B-1201 と S B-1202 および、S B-1201 と S B-1203 の 2 事例だけで、おおよそ正反対の傾向がある。A 群の場合は、方位などもおむね同じであること、そして概して規模が大きく、廂を備えた事例が複数含まれることなどから、主屋もしくは中枢的な施設として代々継続的に建て替えられた結果を示していると判断できよう。

時 期 上、建物跡 A 群と B 群の差違をまとめたが、これらの差違とは時期差によって生じた可能性が高い。柱穴内から得られた出土遺物は少なく、各建物跡の所属時期を正確に特定することは難しいが、わずかな出土例や方向性等から大まかな見解を提示したい。

まず、各建物跡の所属時期としては、第 II 期から第 IV 期までの範囲内にあることはほぼ間違いがない。そこで方向性から見た場合、a 群とした真北を指向する一群は、古代の土器が柱穴から出土しているとおり、第 II 期に比定したい。ただし、その場合、真北を意識している点を重視し、律令体制が堅持されていた時期、おおむね奈良時代後期（8世紀後半）頃の可能性が高いものと思われる。次に b 群については、本群が主体となる建物跡 A 群の各柱穴から出土した遺物とともに、それら A 群の周囲に分布する井戸のはほとんどが第 III 期の所産とされていることから、本建物群も第 III 期の所産と考えたい。残る c 群とした S B-1217 については、時期を特定する根拠がなく難しい。第 II 期後半（平安時代）から第 III 期、あるいは第 IV 期の可能性も比定できない。

b 井戸・土坑類

井戸・土坑類は、合計 38 基を抽出した。分類の視点としては、客觀性を重視し、平面規模となる直径と深度による法量で行った。その結果、A～E までの 5 類と X 類に大別したものである。これらのうち、A・



第17図 角田遺跡建物跡主軸方位図

B類とした8基を土坑とし、C～E類の28基を井戸とし、溝状土坑をX類とした。しかし、B類とC類は、規模の大小は歴然としているが、直径と深度の比率はともに1:1であり、形態は相似関係にある。このため、両者を土坑と井戸に分けてしまうことの可否には、明確な根拠がなく問題を残している。しかし、井戸とすれば一定程度の深度が必要であるが、B類はC類よりすべて浅く設定されていることから、井戸と近似した機能の想定は可能としても、井戸そのものとして利用されていなかったものと判断した。

土坑A・B類 土坑A類は、深度が10～20cmとほぼ同じレベルで共通するが、平均直径では大小2類に細別が可能である。ただし、所属時期は第II期（古代）・第III期（中世）・第IV期（近世）の3期にわたることから、規模による細分では特別な意味を見出せそうもない。平面形態では、古代に属する2基（SK-933a・986）がともに円形と判断できることに対し、中・近世の2基（SK-49・255a）が梢円形となることから、古代と中近世の両者それぞれの機能などはある程度共通はしても、時期差で異なっている可能性は高い。しかし、現状ではそれぞれの意図や目的を明らかにできない。また、墓坑等については、中近世とした2基にその可能性がある。しかし、墓を示す遺物の出土ではなく、また調査した感触からすれば、墓という積極的なニュアンスはほとんど感じられなかった。

土坑B類とした3基の時期は、中世2基に近世が1基であるが、それぞれの時期によって形態がやや異なる。中世とした2基（SK-70・129）は、壁の立ち上がりが垂直に近くやや寸胴の形態を呈していた。これに対し、近世としたSK-40は、底面の直径は上端に比して小さくなることから、両者の性格は自ずと異なっていた可能性が高い。特に、SK-40では、図版48-b・c・g・hのように数多くの板材などが斜めに陥没して落ち込むようにして検出されている。しかし、中世とした2基の土坑から、板材はほとんど出土していないことから、両者の性格は相違するものと考えられる。しかし、これら土坑の性格等は、特定するに至っていない。

井戸C・D・E類 井戸C類は、井戸類の総数28基に対し19基を数え、その割合は67.9%に達することから、本遺跡では標準的な形態と規模であったとすることができる。ただし、基數が多いことから、それぞれの規模にかなり幅を持ち、平面規模である直径は65cm～115cm、深度も70cm前後から120cm程に達するものまでが含まれることになる。これらC類の井戸のうち、中世とした事例は推定を含め13基、近世の所産としたものは同じく6基である。時期別にみた法量分布では、中世と近世それぞれの井戸が混在していることが明らかである。このような実態からすれば、中世前期から近世初期までの長期間にわたって維持された平面規模と深度であったとすると、それだけ形態の変化などはなかったことになる。

井戸D・E類については、規模による差違が歴然としていても、覆土の堆積状況などは類似しており、極めて近い類とすることができます。深度は90cm前後から120cmを超え、井戸類の中では相対的に深くなるが、C類の中で深いものと対比すれば大きな差違はない。しかし、大きく異なる点は平面規模であり、D類は150cm～200cm、E類は250cm以上で340cmの最大径を計る事例までがある。このように平面規模、特に直径が大きくなった事由としては、覆土として堆積した土砂の多くが壁の崩落土と見られるものであることから、一定程度の規模を超えると壁の崩落が始まった可能性が高い。この点は、本遺跡が立地する軟弱な地盤と大きな関わりがありそうである。井戸D・E類に属する井戸の時期は、すべて第III期とした中世前期であり、近世の事例が全てC類であることを考え合わせると、壁の崩落に至らない程度の規模に集約されていった可能性が指摘できるのではないだろうか。今回は具体的な事例から確認するには至らないが、中世前期のある時期において、規模の大きな井戸1基を、改修を加えつつ集約的・長期的に利用する段階から、小さな井戸複数で一定水量をまかないつつ、半ば使い捨てのように新たな井戸を掘削してい

くような段階への変遷が指摘できそうである。

ところで、井戸内からの出土遺物としては、土器・陶磁器・漆器や木製品のほかに、木炭粉などススが多く付着した大きな礫などが数例確認された（図版71）。これらは、数多く出土しているハシ類などとともに、井戸の施業にあたってなんらかの祭祀が執り行われた可能性が指摘できそうである。なお、井戸とした遺構28基のうち、井戸枠が出土した事例は1基もなく、すべて素掘りの井戸であった。

X 類 今回、溝状土坑とした土坑X類は、西側へ延びる延長が2基とも調査区外となるため確定することはできない。しかし、確認調査の状況と対比すれば長大となる可能性がないことから、溝状土坑とすることが取り敢えず妥当と判断し、本類に含めたものである。性格等については、方形土坑等との関わりなどといった問題もあるが、現段階では一切不明であり、今後の課題としておきたい。

c 溝 群

角田遺跡の溝類は、大きく2類に分類することができるが、本項ではそのうち、居住空間域の内外を区切るものと考えられるA類についてまとめたい。

大溝A類 調査区の東端でまとまって検出された大溝群がA類である。柱穴などの遺構群は、これら溝群に接する西側まで分布し、それ以東ではほとんどなくなる。また、遺構確認面の標高も、大溝群の位置から東側への傾斜が確認されている。これらのことから、集落の居住空間は、これらの溝群を境界としていたことはほぼ間違いないようである。ただし、遺物は、溝群以東からも出土しており、遺跡範囲としては、若干東側へ延びていることになる。

大溝は、合計4条が検出されている。所属する時期については、最新のSD-1040溝が近世の可能性を持っている。しかし、出土遺物に近世のものはないことから、4条全てが第III期の中世前期の所産である可能性は高い。時期が大きく隔たらない事由の一つには、それぞれの溝が指向する方向性が共通することでもうかがわれる。各溝が指向する方位は、SD-1018aとSD-1038溝が指向するN-9°-Wと、SD-1050溝が指向するN-52°-Wに大きく2つに分けられる。残るもう一つの大溝であるSD-1040溝は調査区内で屈曲するが、前者から後者への方向転換でまとめられるのである。

ところで、SD-1018a・SD-1038溝と、SD-1050溝は、それぞれ直線で検出された溝である。しかし、今回の調査区の幅は6mに過ぎず、これら3溝がそのまま直線であるとするこの確認は取れていない。そこで参考となるのが、SD-1040溝である。A類に属する溝が一定の方向性を保っている事実は、互いに時期差はあっても、密接な関係を認めざるを得ない。また、水路とすれば、地形的な高低差などから自由な方向を指向することは難しい。したがって、SD-1018aとSD-1038溝は調査区の南側で、またSD-1050溝は調査区の北側で屈曲している可能性が高いと判断したい。

さて、以上のように、ほかの3条の溝もSD-1040溝とほぼ類似した状況で屈曲すると仮定した場合、南側の延長は自然堤防の高まり区域を横断して鯖石川の河道と接続することになる。また、北側で方位を北西に転じれば、鯖石川右岸に形成された自然堤防の高まり区域を囲むようにして、別山川方面へ流れ下る可能性を示すことになる。この場合、これら溝の目的や機能は、鯖石川右岸の高まりである自然堤防を囲むことから、集落居住空間の排水を意図した水路である可能性が高いことになる。ただし、遺跡西部においてそれぞれの溝が南へ向きを変え、集落を取り囲むとすれば、館などの可能性が生じる。しかし、13世紀後半という時期でもあり、今回はこの可能性については除外するとともに、今回の想定については、今後さらに検討を加えていくこととしたい。

2) 集落構成

すでに述べたとおり、本遺跡で把握された遺構は、古墳時代前期を除く古代から中世・近世まで3時期にわたるものである。最も大きく展開した時期は、遺構数及び遺物の出土量からしても第Ⅲ期の中世前期であるが、第Ⅱ期とした古代の遺構も少なくはなかった。しかし、第Ⅳ期とした近世初期については、井戸や柱穴などの遺構、そして陶磁器を中心とした遺物が一定量確認されているが、建物跡の特定までは至っていない。このため、近世初期については今後の課題として留保し、本項では第Ⅱ期と第Ⅲ期の集落について若干のまとめを行うこととした。

古代角田集落 集落を構成する遺構は、建物跡だけである。井戸は特定されていないが、当該調査区周辺に存在していたとしても、基數そのものはかなり限定された少数と考えられる。当該期の遺構分布域は、B・C-4~7グリッドまでおよぶが、柱穴が最も密集していたB・C-4グリッドでは、建物跡の復元は成功していない。

古代の所産として復元された建物跡は合計5棟である。しかし、柱穴に遺物が伴っていた事例は、SB-1211建物跡とSB-1213建物跡の2棟だけであり、他の3棟の柱穴からは遺物が出土しておらず、主軸の方向等から類推したものである。建物跡の主軸は、それぞれ真北を強く指向しており、計画的な配置がうかがわれる。しかし、建物の規模は、3間×2間が3棟(a類)、3間×1間が2棟(b類)であり、これらの規模は、柱間の間隔も狭く、柱穴の規模もそれほど大きなものではない。また、建物プランが調査区外までおよぶものが大半を占めるため、廻の有無等を確認できないが、存在する可能性は少ない。出土遺物をみると、土師器や須恵器などで占められ、それらに施釉陶器等は確認されていないことから、集落の性格としては官衙などではなく、一般的な集落として捉えることとした。

建物跡の機能や性格については、a類が居住機能を備えた住居であり、b類は倉庫や納屋といった小屋などと考えられる〔鬼頭1985〕。したがって、住居とすることが可能な建物跡は、SB-1211・1212・1213の3棟となる。しかし、SB-1212とSB-1213の2棟は互いに重複しており、建替えがなされたものと判断できる。また、住居に付随する小屋などの建物は、SB-1211建物跡では把握されていないが、SB-1212・1213建物跡にはSB-1214建物跡が伴った可能性が高い。なお、SB-1215建物跡については、SB-1212・1213両建物跡の柱穴が互いに接することから同時併存の可能性は少なく、別の建替住居に付随していた可能性を考慮したい。

以上の結果からすれば、今回の調査区内で把握された古代の集落とは、2棟以上の住居とそれらに付随した小屋等の施設で構成されていたとすることができる。これら建物跡の時期的な問題については、遺構に伴った遺物が少ないと特定することは難しい。しかし、これら5棟のほとんどが真北を指向し、一定程度の計画性が認められる点を重視し、第Ⅱ期の前半、つまり律令体制がなお健在な8世紀後半代を想定したい。この点は、8世紀前半代の須恵器・土師器の出土位置が、B・C-3~5グリッドの柱穴などから出土することに対し、9世紀代に入る遺物のほとんどがB・C-7・8グリッドの溝内などからの出土であることが示唆的である。

中世角田集落 本遺跡で最も主体的な時代が第Ⅲ期とした中世前期である。遺構の種別も豊富で、建物跡、柵跡、井戸・土坑、溝類や溝状土坑がある。遺構群の広がりはおおむね調査区全域にわたるが、最も密集していたのはB・C-3・4グリッド周辺であった。

建物群の配置は、C-3グリッドを中心にA群とした大型の建物跡が重複して存在し、復元には至らな



第18図 角田遺跡の遺構群と周辺の地形

かったがB・C-4グリッドでも相当数の建物が想定できる。主屋の存在が想定される範囲は、平成9年度に実施した確認調査結果を勘案すれば、南北20m×東西15mであることが確認されるが〔柏崎市教委1998〕、これほどの密集度は今回調査対象とした3,600m²の調査区内では最高である。角田遺跡の範囲は確定されてはいないが、当該屋敷跡が集落の中核を占めていた可能性は高い。また、A群とはやや離れるが、東側のB群でも溝に近いC-6グリッドから、中世の可能性が高い小さな建物跡1棟が検出されている。井戸は、大きく3カ所に群としてのまとまりが認められる。D・E類とした大型の井戸は、C-3グリッドの大型建物跡群の東側と南側に接する位置に配置されているが、調査区東端付近にはない。これに対しC類とした井戸は、調査区域全体に広がりをもって分布するという傾向が認められる。土坑A・B類は、B-E-3グリッドなど調査区の西側に配置され、性格が判然としない溝状土坑（溝B群）は、遺構密集区域かその隣接地点に所在することになる。そして、これら中世前期の遺構群を区切る境界として溝群（A類）が存在するのであるが、これらの性格は舗をめぐる壙的な溝ではなく、居住空間の除湿など排水を意図して上流の東側や湿地に接する北側に設定された排水路と考えたい。

中世における角田集落の最大の特色は、B・C-3・4グリッドにおける非常に密度が高い柱穴群の存在であろう。復元された建物跡6棟の内、主屋的な性格をもつと見なすことができる建物は4棟となるが、これらはすべて若干の位置を変えつつも大半が重複するものである。そして、活用されなかった柱穴は相当数残されていることは、少なくとも5・6回以上の建替えを想定せざるを得ない。しかも、方位がおおむね統一されている事実は、継続的かつ連続的な建替えを強く示唆する。井戸群の分布とは、遺構密集区域を取り巻くように分布しており、建物跡A群が実生活に密接な施設であったことがわかる。

今回の調査結果では、把握できた建物跡が1割に満たないこと、柱穴内からの遺物が少なく、それぞれの時期判定は難しい。しかし、わずかではあるが柱穴の重複が確認されており、それによれば、①SB-1206建物跡→SB-1204建物跡と、②SB-1205建物跡→SB-1201建物跡の2例が確認できる。ただし、SB-1204建物跡とSB-1201建物跡の関係は、新旧が逆転した事例があるため不明確となっている。しかし、両者は、廂を伴う大型の建物であり、特にSB-1201建物跡の場合四面廂の可能性を持っていること、前述した二つの事例は、新しい建物跡のほうが大型化する傾向を看取ることができる。このため、少し大胆に変遷をまとめれば、SB-1206建物跡→SB-1205建物跡→SB-1204建物跡→SB-1201建物跡という建て替えが想定できる。ただし、建物跡はこれら4棟だけではないことから、それぞれの前後に幾つかの建物跡が組み込まれることになる。どちらにしても、全てを見極めることは困難とせざるを得ない。

さて、最後に中世における角田集落の景観について少しだけ触れておきたい。柱根が残り、柱穴の配置が正確に捉えられた建物とは、SB-1201建物跡である。そして、方向性と柱穴の位置をある程度一致させている建物としてSB-1202建物跡がある。また、SB-1202建物跡の柱穴を避けて建てられたと考えられるSB-1203建物跡は、ともにSB-1201建物跡とそれと同時併存していたものとみられる。主屋の景観とは、B・C-4グリッド柱穴密集区に1棟を加えることも予想されるが、基本的にこれら2棟の組み合わせが主屋の景観となる可能性が高い。柵跡はSB-1201建物跡南側に接して設定され、主屋の東側に井戸、その東の湿地との境界に排水路が巡らされていることになる。そして柵跡の南側を鰐石川が西へ流れていることになる。主屋の東側と北側には、おそらく一族や部党等の住居あるいは倉庫や納屋などの小屋が建っていたのかも知れない。調査面積はわずかであり、遺跡の全体像は描けないが、13世紀後半の鎌倉時代中期には、このような屋敷が鰐石川の辺で営まれていたのである。

3 角田遺跡出土中世土師器の時期と変遷

角田遺跡における中世土師器の出土は、小片などが多かった事情はあるが、それでも図化に至った資料が合計すると50点という結果になった。これは、数量的な面において、既報告事例中最多となるものであり、出土した中世土師器の主体型式である刈羽三島型を検討する上で良好な資料が得られたことになる。しかし、完形品は1点のみ、完存率が $1/2$ 程度以上となる個体数も限定されており、大半は実測に際し復元したものである。このため、器高や口径等の法量に推定値が多いことは否めない。このことは、以下において形態や法量等の検討を行うに際して、少なからず課題を残すことになる。今回は、刈羽三島型中世土師器について、総体的な様相を把握するための前段的な作業とし、詳細な検討等は良好な資料が得られた段階で再検討することが必要であることをお断りしておきたい。

なお、時間的あるいは報告書の紙幅の関係などの制約があり、全てを検討の対象とすることはできなかつた。このため、本節では主に中世土師器の編年的な課題の一環として、相対的な変遷観を中心にして概略を述べるにとどめ、その他については、別に機会をうかがいつつ、その責を果たしていきたいと思う。

1) 中世土師器概観

中世土師器とは、中世に生産され使用された土師器であり、皿と小皿に器種が限定されている。しかし、古代の土師器との間に断絶があるのではなく、伝統的な土器生産の系譜下にある一連の土製食器として理解することができる。しかし、古代以来伝統的な土師器製作技法には、北陸や関東・東国など全国的に一般的であったクロ成形底部糸切り成形技法（製作技法B）と、もう一つ京都周辺で行われていた非クロ成形手づくね技法（製作技法A）という大きく二つの技法があった。しかし、中世になると京都周辺のみで伝統的に行われていた製作技法Aの土師器生産が、北陸や東国など全国に伝わり、在地技法の衰退あるいは消滅に至らせつつ、京都産土師器の模倣が急速に広がったのである。これが所謂京都系土師器であるが、その在り方は地方や地域によって少しづつ様相が異なっている。

越後における中世の土師器は、上述した二つの技法で製作されていた。しかし、それぞれの技法が併存するのではなく、時期によって主体となる技法が交替するなどといった大きな流れのあることが、これまでの研究で明らかにされている。ただ、二つの技法が時期や時代によって交替するという事象については、歴史的な背景を充分に説明できていない。しかし、製作技法の転換は社会的な変化の反映であり、これを大きな画期と見ることは妥当である。その場合、越後の中世土師器は、第Ⅰ期から第Ⅴ期までの5期に大きく区分することができる。

第Ⅰ期とは、古代以来伝統的な在地技法であるクロ成形で底部を糸切りで切り離す製作技法Bの時期であり、平安時代からの系譜をたどることができる。第Ⅱ期と第Ⅲ期は、京都での伝統的な技法である非クロ成形による手づくね技法を主体とする製作技法Aの時期となる。第Ⅱ期の土師器とは、京都産を模倣した京都系土師器であるが、第Ⅲ期とは第Ⅱ期の京都系土師器がそれぞれの小地域で独自に変貌を遂げ、在地化した土師器が主体を占める。このため、頑城型や阿賀南型、そして刈羽三島型など幾つかの地域型が形成されるが、これも第Ⅲ期の大きな特徴となる。第Ⅳ期は製作技法Bが復活した時期である。ただし、北陸では第Ⅱ期以来すでに途絶えてしまった技法であり、関東など東国から改めて導入された可能性が高い。しかし、製作技法Bが復活した時代も長くは続かず、再び京都系土師器によって席巻されてしまうこ

ととなるが、この段階が第Ⅶ期となる。

ところで、角田遺跡の中世土師器は、製作技法Aが大半を占め、製作技法Bはわずか1点の出土であった。主体となる製作技法Aの土師器は、口縁部を強く横ナデするなど第Ⅲ期の刈羽三島型土師器の特徴が顕著である。刈羽三島型は、資料化された数量が未だ少なく、変遷観や年代観でも不分明なところが多い。また、この時期は頬城郡や信濃川下流域などで地域色豊かな土師器が生産・使用されているが、他地域との交わりが少ないため、年代観や互いの併行関係を見極めることが困難であるなど、多くの課題があった。しかし、角田遺跡の刈羽三島型中世土師器は図化できた資料だけでも49点であり、小片が多いなど少なからず問題を抱えているとはいえ、既報告事例では最多となった意味は大きい。そこで本節では、角田遺跡で得られた中世土師器の変遷と、これらの年代観を中心について検討を試みたいと思う。

2) 形態分類

角田遺跡から出土した中世土師器の器種は、皿と小皿である。形態分類についてはすでに本文で述べたおりである。概略を述べれば製作技法はAとBが認められるが、Bについては皿1点だけである。大半を占める非クロロ成形手づくね技法のAは、刈羽三島型中世土師器となる。製作技法Aの皿類は、5分類11細別とした。また小皿類は製作技法Aのみであり、2分類5細別したものであり、分類試案をまとめたものが第19図である。

ここで抽出される刈羽三島型の特徴としては、口縁部のナデ調整が上下2段で施される場合が一般的であり、口縁部の形態は上下それぞれ強弱をもつナデ調整によってバラエティーが生じている。最も特徴的な調整とは、下段部のナデ調整を強く施すものであり、その形態は体部との境界が有段状を呈する。角田分類では第III類としたものが典型的な事例であり、本遺跡出土中世土師器の代表とすることができる。

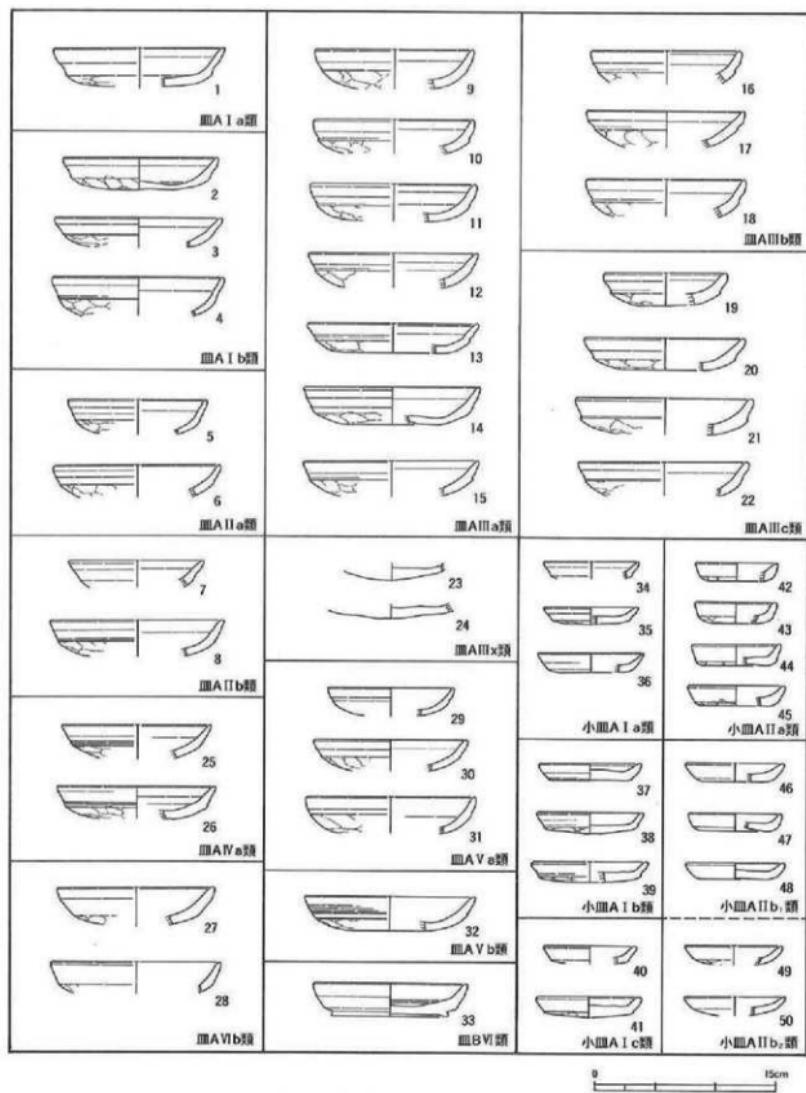
3) 変遷試案

角田遺跡における中世土師器の出土状況をみると、一括廃棄等で時期をある程度限定できるような事例は皆無であった。また、遺構内において共伴関係で出土したとされる事例でも、出土量が少なかったり、あるいは小片のため混入の疑いを否定できないなど、同時性等を限定的に認め得る事例が少なかったのは事実である。このため、遺構別資料によって変遷を追える積極的な事例は何もないことになる。

そこで、当該資料の変遷を見極める視点として、形態分類を行った類別によって、新旧など相対的な前後関係の流れを捉えることとしたい。この場合、幾つかの形態が時間的に長期にわたって系譜がたどれる形態があったとしても、一つの段階に集約されてしまうという課題を内包することになる。しかし、組成の変遷といった課題を解消できるのは、一括廃棄遺物などが得られた段階であり、今回はその前段作業として検討を試みることとしたい。

まず、角田遺跡第Ⅲ期（中世前期）において主体となる土師器は、皿類では第III類とした下段の強いナデ調整により体部との境界が有段状を呈するものである。第III類より後出的となる形態は、体部との境界を幅広な沈線状のナデを施す第IV類や、有段が不明瞭となり緩やかな稜線で体部との境界を区切る第V類であり、ともに形状や調整等が形骸化あるいは簡略化されたと判断されたものである。

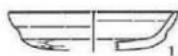
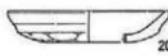
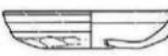
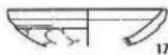
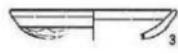
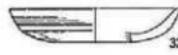
小皿類の場合も、有段が明瞭な第I類が古相、不明瞭となり丸みを強くする第II類は新しくなるものと判断し、原則的に皿類の二大別にそれぞれ対応させたい。皿類の第I類と第II類については、口縁部と体部との境界が有段状というより、強いナデ調整によって窪み状を呈しており、皿A・皿類の祖型と見ること



第19図 角田遺跡中世土器器形分類図

皿類

A

III a
期III b
期III c
期

第20図 角田遺跡中世土師器変遷試案

小皿類

B

A



33



34



37



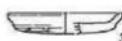
35



38



36



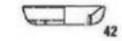
39



40



41



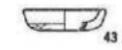
42



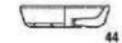
25



26



43



44



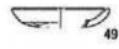
45



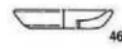
27



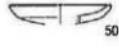
28



49



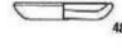
46



50



47



48



が可能である。したがって、相対的には皿A III類よりも古相とみたいが、皿A II a類（6）と小皿A III b類（38）がS E -701井戸で共伴し、また皿A I b類（16）と小皿A I b類（37・39）がやはりS E -739井戸において共伴していることから、取り敢えず同じ段階としておきたい。

ところで、皿A I類をみると、a類はb類より口縁部がやや長く、土師器の中で最も赤味が強いなど相違点があり、b類より古相となる可能性が高い。また、皿A V類の形態は、体部との境界をなす稜線が明瞭なa類と丸みを強めるb類では形態差が大きく、b類がa類の系譜を引くことは理解できても、皿A I～III類から直接的にはつながり難いものと見られる。したがって、皿A V類も新古に大別し、a類を古相に、b類は新相に組み入れておきたい。また、唯一のロクロ成形品であるさら皿B VI類（33）については、皿A I b類（2）とS E -111井戸において共伴関係にある。

小皿類については、皿類に比して法量が小さく、表現される形態差もそれだけ少なくなる。このため、底部との境界が丸みを帯びる第II b類は新しいとすることは出来ても、小皿A II a類については稜線が見極められることから相対的に新古の関係があるものと考え、小皿A I類と時期的に近いものと判断したい。この点は、小皿A II a類（45）の一部が、S D -460溝状土坑において、小皿A I a類（34）と皿A I b類（3）が小片ながら共伴していることも参考となる。

以上のこと整理すれば、中世土師器からみた角田遺跡第III期（中世前期）は、大きく3期に区分できることになる（第20図）。まず、皿A I b類・II類・III類・V a類、皿B VI類、小皿A I類・II a類を一つの段階とし、本遺跡の主体的な時期として中心的な段階に設定したい（角田第III b期）。第III b期では、皿A I b類と皿A II類が、皿A III類より相対的に古相くなる可能性を持っているが、皿A I a類はそれよりも古相を呈すると判断されることから、これを古段階に設定したい（角田第III a期）。そして、第III b期の一群より新しいとして区分した皿A IV類・V b類、小皿A II b類については、新段階としておきたい（角田第III c期）。

4) 年代観の検討

中世土師器の年代観を検討するにおいて、これらを直接的に見極める遺物は皆無であり、一括りが乏しいという出土状況では、どれがいつ頃の年代と特定することも不可能である。そこで、中世土師器とともに遺構内から出土した遺物を中心に、角田第III期に属する中世土師器以外の出土遺物から、当該期の大まかな年代観を推定することとしたい。対象とすることができるものは、珠洲・貿易陶磁器・漆器となるが、ある程度時期や年代観が見極められる事例は、角田遺跡からはそれほど多く出土していない。以下、種別毎に若干触れることとしたい。

珠洲 ある程度器形等が把握でき、時期の推定が可能な資料は、壺・甕類（55・63・64）と鉢類（106）の4点ほどである。これらを吉岡編年〔吉岡1994〕に対比しつつ検討を加えてみたい。55の壺は、壺R種の肩部分に3単位ほどの櫛目波状文が施されている。小片のため、これのみで年代を特定することはできないが、55のような横位・斜位の文様が壺R種に多く描かれるようになるのは、おおむね吉岡編年第二II期以降とされていることを重視したい。そして、櫛目波状文は吉岡IV期前半を境にして壺類から消失している。甕類とした63・64の口縁部については、厚手ながらくの字状を呈し、口縁が丸みを持って外反しており、吉岡編年第三期の所産としてよい資料である。鉢類とした106についても、口唇部が平坦であり、外側への引き出しがほとんどないことなどから、やはり第三期の所産と考えることができる。以上概観した点をまとめると、ある程度限定できる資料は、吉岡編年第三期に集約されることがわかる。したがって

て、珠洲編年からみた角田第III期の年代観は、13世紀前半代の含みを持つつも、おおむね13世紀後半と考えることができそうである。

貿易陶磁器 白磁（52）と青白磁（51）各1点が出土している。白磁碗については、皿類に分類される口禿げ碗であり、13世紀後半から14世紀前半の所産と考えられる資料である。青白磁については、12世紀以降に見られ、それ以上時期を特定できない。貿易陶磁器による時期の比定は難しいが、両者が重複するのは13世紀後半から14世紀前半代ということになる。ただし、白磁碗が共伴した珠洲の年代観を合わせれば、13世紀後半代の可能性が幾分強いかも知れない。

漆 器 わずか1点の出土であり、総体的な様相が不明となるため、編年が確立しているとは言えない状況では、年代観の特定は難しい。これまでの編年観に合わせると、底部からの立ち上がりがやや丸みを帯び始めていること、底部はベタ高台ながら僅かに足の形成が認められることなどから、木製食器（椀皿盤類）編年の第VI期【品田1997】に比定できる。特に、石川県三木だいもん遺跡の事例に近似していることから、越後における第VI期資料である鶴巻田遺跡出土資料より相対的に古く位置付けられそうである。この漆器第VI期の年代観は、13世紀中頃から後半頃と予想されていることから、当該資料については13世紀末まで下げなくても良いかも知れない。

年代観の想定 以上の検討結果から、角田第VI期の年代観は13世紀前半から14世紀前半代の幅の中にあり、総合的には13世紀中葉という含みを持つとも13世紀後半代に集約できそうである。特に、13世紀前半あるいは14世紀前半に時期を特定できる資料がないという事実は、本遺跡第III期の資料が13世紀後半代の様相を示す遺物群と認識して大過なさそうである。

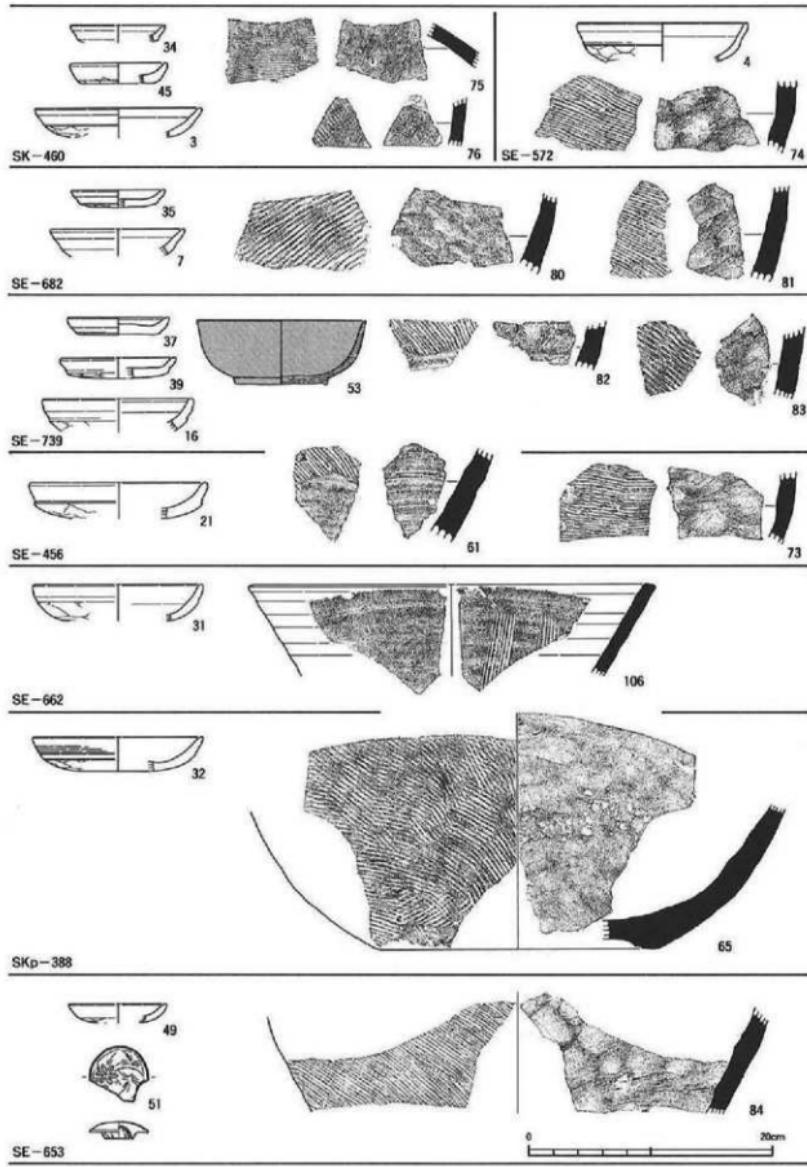
ところで、角田遺跡出土中世土師器については、古・中・新の3段階の変遷試案を示した。この試案は、各段階を限定的見ることはできず、総体的な流れを示したものに過ぎないのだが、大まかな年代観を与えておきたい。まず第IIIa期については、13世紀中葉を含みつつも後半代へ至り、第IIIb期はおおむね13世紀後半代を想定しておきたい。また新段階とした第IIIc期については、13世紀後半から末頃としつつ、14世紀にかけての年代も今後の検討課題として考慮しておきたい。

5) 法量の分布と分化

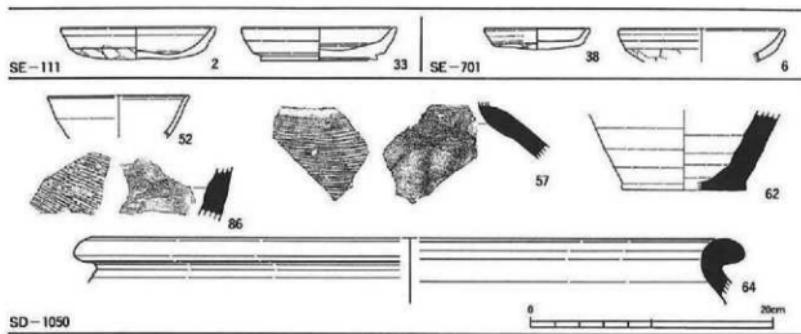
第23図には、中世土師器の器高と口径の相関図と、形態分類別の口径分布図を提示した。前述したことなく、図上復元が多いため、あくまでも現状の参考図とせざるを得ないものであるが、一つの叩き台として、若干の状況をまとめておきたい。

まず、至極当然ではあるが、皿類と小皿類の分布エリアは器高および口径とも明瞭に区分されている。皿類の口径は直径10.0cm～14.2cm、器高は2.3cm～3.65cm、平均ではおおむね2.5cm～3.0cmに集中する。法量的には、大きく大小2種（I・II）があるが、大は2種（IIa・IIb）に分化していることがうかがわれる。なお、前述の法量分化は中段階の状況に一致するが、新段階では大の器種だけである。この点は、点数が少ないと起因とも考えられるため、参考にとどめる。小皿類の口径は直径が6.4cm～9.0cm、器高は1.3cm～1.8cmであり、おおむね1.5cmに集中している。法量的には、大中小のクラスがある。ただし、この状況は中段階での分化となるが、新段階では中クラス（II）に集約されていく傾向が認められる。

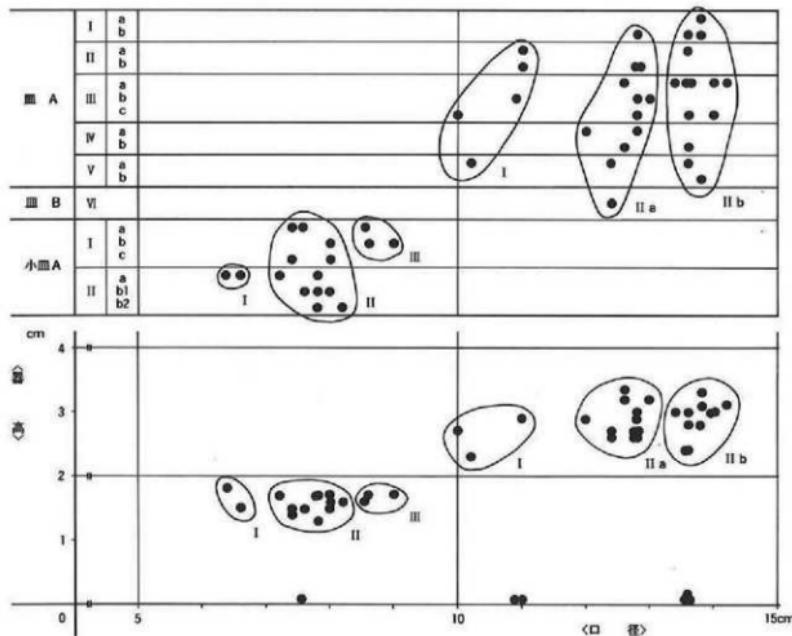
このように、中段階と新段階では大中小の器種で差異があり、新段階で淘汰されて行くように見受けられる。ただし、新段階の個体数が少ないと、推定値が多いことなど多くの課題があるため、今後良好な資料が得られた段階で改めて検討することとしたい。



第21図 角田遺跡遺構出土土器・陶磁器集成（1）



第22図 角田遺跡遺構出土土器・陶磁器集成（2）



第23図 角田遺跡中世土師器法量分布図

6) おわりに－まとめと今後の課題－

さて、以上において角田遺跡の中世土師器について、形態的な変遷を主題として述べてきた。内容的には、形態分類を行い、類別に相対的な新旧の前後関係を示したものであるが、まず皿類を3段階に分け、小皿類は皿類との共伴事例などを参考にして対比させた。相対的な前後関係の中心に据えたのは、出土量が最も多かった皿A III類であり、これを中段階（角田第III b期）とした。第I・II類については、第III類より相対的に古くなる可能性を含み、系統的に連なる可能性を持っている。しかし、共伴事例では明確に分離できないことから大半を中段階に位置付け、最も古い要素を持つ第I a期）を設定し、角田第III期の出発点としたものである。新段階（角田第III c期）は、中段階における土師器の調整や形態の簡略化・形骸化の流れがあるものとして皿A IV類と皿A V b類で構成した。そして小皿類は、中段階に小皿A I類とII a類、新段階に小皿A II b類を対比させたが、これらの検証は今後の課題とせざるを得ない。

なお、今回、充分に触れられなかった課題として、在地生産との関わりから胎土の特性などの見極めや、あるいは本文でも少し言及したが、刈羽三島型土師器の成形技法の検討などが挙げられる。別の機会をうかがうこととしたい。

最後となったが、以下に若干の課題等について述べまとめて代えたい。刈羽三島型中世土師器の編年的な検討は、これまで柏崎市田塚山遺跡群の報告に際し行われたことがある〔品田1996〕。その内容は、田塚山遺跡群出土の中世土師器を中心に、柏崎市閑野遺跡〔柏崎市史編さん委1987 a〕・同小見石遺跡〔柏崎市教委1991〕および三島郡出雲崎町番場遺跡〔新潟県教委1987〕といった4遺跡の資料を集成し、大きく3期に区分したものであった。時期的には、12世紀末頃から14世紀にかかる頃までを対象としたことになり、今回の角田遺跡資料は田塚山第II期から第III期にかけての段階におおむね該当する。しかし、使われた資料数は37点、遺構一括土器群もないなど、資料的なまとまりに欠ける中での検討であった。このため、形態分類なども充分ではなく、個体によっては位置付けに問題を残すなど課題が多いものとなつてゐる。

今回、角田遺跡出土資料を用いて変遷まで言及したが、実際のところ遺構一括資料は得られてはおらず、前回の検討と大きく環境が改善されたわけではない。また、年代観もほぼ13世紀後半に収まることから、当該期の土器様相を把握する上では良好な資料と言えるのだが、前後の時期との関連や変遷を見極めるには、資料が不足した結果となっている。現在、刈羽三島型中世土師器が比較的まとまって報告された事例としては、柏崎市鶴巻田遺跡〔新潟県教委1988〕のほか、最近では刈羽村の払川遺跡や山ノ脇遺跡〔刈羽村教委1998〕の事例が知られるようになり、ようやく土器様相を比較できるような条件が、不充分ながら揃いつつあるというのが現状である。まずは、一括遺物の収集といった作業が必要であり、それらの相対的な編年をどの程度組むことができるのかが今後の課題と言えるだろう。

中世土師器からみた角田遺跡は、13世紀の後半に至って突如的に集落あるいは屋敷の形成に至ったことが、中段階に区分した土器群の量比が示唆するところである。そして、新段階で数量が激減していることから衰退の兆しが顕在化し、その後14世紀が始まる頃には無住の地と化したことがうかがわれる。これらの盛衰については、角田が河川の合流点という極めて興味深い立地が示すとおり、当時の政治史的な情勢や地域史的な展開などと深い変わりを持つものである。これらの解明や研究は以後に託され、発掘調査成果の本当の吟味はこれから始まることになる。今後に期待することとしたい。

VII 調査のまとめ

調査の要約 角田遺跡は、新潟県柏崎市大字韃字角田地内に所在する。発掘調査は、宅地開発と市道拡幅工事に伴う事前調査である。調査地点は韃字角田165—5番地、開発区域の総面積およそ3,700m²のうち、道路敷となるおよそ620m²を調査対象にし、安全確保のための用地を除いた約530m²を本発掘調査したものである。調査期間は、平成10年6月9日から同年8月12日までである。

発掘された遺構総数は延べ約1,200基、そのうちの大半を占める約1,100基が柱穴であった。その他の遺構としては、井戸28基、土坑8基、溝状土坑2基、大溝4条と細く浅い溝群などがある。復元された建物跡は13棟、棚跡2列であるが、活用された柱穴は延べ116個に過ぎず、当該調査区内に関わる建物跡の棟数はおよそ100棟は下らない計算となる。

遺跡が営まれた時代は、古墳時代前期（角田第Ⅰ期）、奈良時代後期から平安時代前期（角田第Ⅱ期）、鎌倉時代中期（角田第Ⅲ期）、江戸時代前期（角田第Ⅳ期）であった。第Ⅰ期の遺構は明確ではなく、遺跡が立地する鰐石川右岸の自然堤防形成期と重なるものと考えられる。第Ⅱ期の遺構は、建物跡5棟が想定されているが、井戸等はない。第Ⅲ期は、本遺跡が最も栄えた時代となる。復元された建物跡は7棟となるが、柱穴の密集度が高く、大半は把握できなかったものである。第Ⅳ期は、柱穴や井戸・土坑などが確認されている。しかし、建物跡の復元には至らなかった。

出土遺物として各期の主なものを挙げると、古式土師器（第Ⅰ期）、土師器・須恵器（第Ⅱ期）、中世土師器・珠洲・白磁・青白磁・漆器、ハシや鉤などの木製品、砥石などの石製品（第Ⅲ期）、伊万里・石臼・木製品（第Ⅳ期）がある。

遺跡の性格としては、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ期は農村的な集落の可能性が高い。しかし、第Ⅰ期は自然堤防形成期と見られることから集落形成の程度は分からず、現鰐石川の河道などにより浸食されてしまった範囲に集落本体が想定できるのかも知れない。また、第Ⅱ期前半の奈良時代後期は、建物跡の指向する方位が真北であること、河川の合流点という立地などから、律令体制の中で計画的に造られた集落である可能性を考慮しておきたい。第Ⅱ期後半の平安時代前期については、遺構が特定されていないため、評価は難しいが、集落の拡散期でもあり、前半とは性格の異なる集落形成がなされた可能性が高い。このため、第Ⅱ期は、前半期と後半期では集落の基本的な性格が異なっていた可能性は高い。第Ⅲ期は、河川の合流点という立地からみても、交通の要衝を意識して形成された在地小領主の屋敷などが想定できる。今回の成果では、その証拠が希薄であるため、今後の調査研究に託したい。第Ⅳ期は、近世初期の農村と考えられる。集落（家屋敷）形成の端緒は、藤井堰東江の竣工と通水による田地の開発であったと考えられる。ただし、この想定はあくまで類推であり、検証等は今後の課題である。

遺跡の盛衰と消長 最後に、今回の調査成果からみた角田遺跡の歴史的な展開を概観しておきたい。当地に最初に人跡を残した時代は、古墳時代前期と言うことになる。しかし、現位置を保っていたと見られる遺物は、遺構確認面下70cmの青灰色粘土層中から出土しており、自然堤防形成期の一時的な營みであった可能性が高い。この後角田は無住の地となり、粘土層等の堆積が著しかったと見られる。そして、8世紀の後半に至って、荒れた土地であったと考えられる角田の地に、再び集落が営まれるようになる。しかし、遺構の重複が少ないと見られ、短期間で廃絶したものとみられる。そして三度集落形成がなされたの

は9世紀に入った平安時代である。しかし、建物跡の特定には至っておらず、集落そのものは概して小規模であったか、あるいは本体が調査区の南側などに移っていたことも予想される。しかし、この時期の集落は、第II期前半に開発された土地の再開発が意図されていたことは充分理解できることである。しかし、遺物の出土量や遺構数の貧弱さからすれば、集落形成も短期間であった可能性が強いであろう。

角田遺跡が最も栄えた時期が中世前期とした鎌倉時代中期である。交通の要衝を押さえる目的で在地小領主が家屋敷を営んだものと見られるが、およそ半世紀足らずで廃絶する。その後はしばらく無住の地と化すが、17世紀にはいって四度目の集落形成がなされることになる。その契機は、藤井堰東江であり、用水が確保されたことによる水田開発にあったものとみられる。しかし、出土遺物の時期幅はやはり限定されており、現剣集落に移動したものの短期間で廃絶し、水田化されたものと見られる。

以上のように、角田では短期間で廃絶する集落形成が4度に渡って繰り返されていたことになる。今、角田の地は5度目の集落でござわっている。

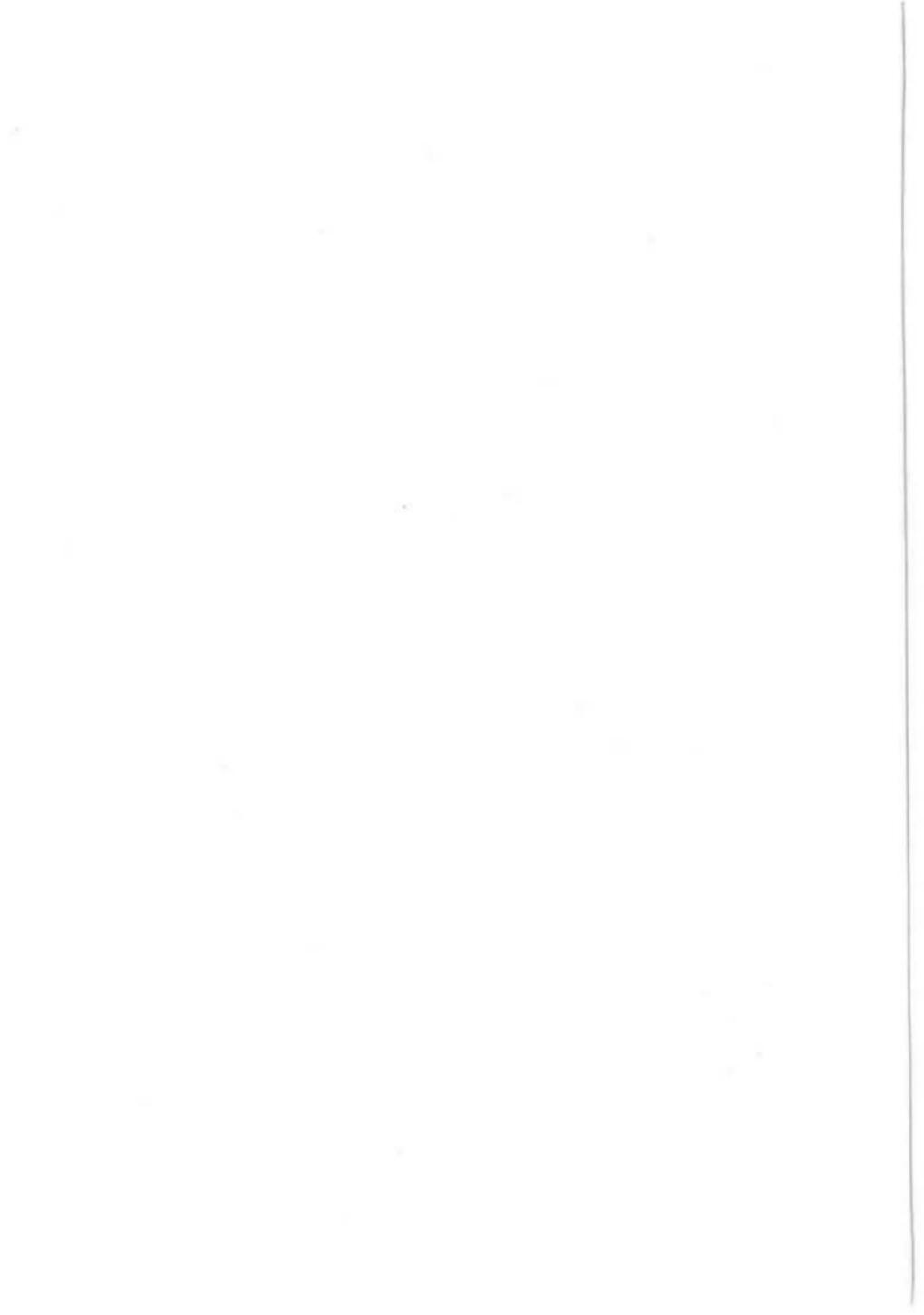
《引用・参考文献》

- 宇野隆夫 1982「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集 国立歴史民俗博物館
宇野隆夫 1997「中世食器様式の意味するもの—計量分析による使用法の復元ー」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 国立歴史民俗博物館
大橋康二 1993『肥前陶磁』(考古学ライブラリー-55) ニュー・サイエンス社
岡本部郎 1979「新潟県荒浜砂丘に分布する人類遺跡その1-荒浜小学校裏遺跡・荒浜甲中塚遺跡ー」『柏崎・刈羽』第7号 柏崎・刈羽郷土研究会
萩野正博 1986「莊園と国衙衛」『新潟県史』通史編1原始・古代 新潟県
小野正敏 1991「城館出土の陶器が表現するもの」『中世の城と考古学』 新人類往来社
柏崎市教育委員会 1980『岩野遺跡』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第2集)
柏崎市教育委員会 1985『吉井遺跡群』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第4集)
柏崎市教育委員会 1987『西岩野』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第7集)
柏崎市教育委員会 1990『吉井遺跡群II』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第13集)
柏崎市教育委員会 1991『小鬼石』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第15集)
柏崎市教育委員会 1996『田坂山遺跡群』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第21集)
柏崎市教育委員会 1996b『尼坂坂』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第23集)
柏崎市教育委員会 1997『角田遺跡—確認調査概要報告書—』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第24集)
柏崎市教育委員会 1998『柏崎市の道路Ⅰ-柏崎市内道路第Ⅲ期発掘調査報告書ー』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第29集)
柏崎市史編さん委員会編 1984『柏崎の近世史料』(柏崎市史料集近世篇Ⅰ上) 柏崎市史編さん室
柏崎市史編さん委員会編 1987a『柏崎市史料集考古篇1-考古資料(図・拓本・説明)ー』 柏崎市史編さん室
柏崎市史編さん委員会編 1987b『柏崎市史料集考古篇2-古墳・墓地』 柏崎市史編さん室
柏崎市立図書館編 1977 広瀬・典原著『古川風土記 越後國刈羽郡之部』 柏崎市郷土資料刊行会
刈羽村教育委員会 1998『弘川・山ノ脇遺跡』(刈羽村埋蔵文化財調査報告書第3集)
鬼頭清明 1985『古代の村』(古代日本を発掘する6) 岩波書店
品田高志 1991a「越後における古代・中世の漆器・漆器食器を中心にしてー」『新潟考古学談話会報』第7号 新潟考古学談話会
品田高志 1991b「越後の中世土師器」『新潟考古学談話会報』第8号 新潟考古学談話会
品田高志 1996「田坂山の中世仏堂と埴輪」『田坂山遺跡群』(柏崎市埋蔵文化財調査報告書第21集) 柏崎市教育委員会
品田高志 1997「越後国における土師器の変遷と諸相」『中・近世の北陸-考古学が語る社会史-』 北陸中世土器研究会 桂書房
品田高志 1997「北陸における古代と中世の木製食器」『北陸古代土器研究』第7号 北陸古代土器研究会
新沢佳大 1990「幕藩体制社会の支配」『柏崎市史』中巻 柏崎市史編さん室
新宿区内藤町遺跡調査会 1993「東京都新宿区 内藤町遺跡」第1分冊<遺物編>
新潟県教育委員会 1987『国道116号線埋蔵文化財調査報告書 三島郡出雲崎町番場道路』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第48集)
新潟県教育委員会 1988『北陸自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 西田・鶴巻田遺跡群』(新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第27集)
新潟県教育委員会 1990『関越自動車道関係発掘調査報告書 岩原1遺跡・上林塚遺跡』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第56集)
新潟県教育委員会 1992『関越自動車道関係発掘調査報告書 五丁歩遺跡・十二木遺跡』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第57集)
西中通のあゆみ編さん委員会編 1995「西中通のあゆみ」増補改訂版 柏崎市西中通公民館
村山教二 1960「中世における柏崎市町」『柏崎市史』上巻 柏崎市史編さん室
横田賢次郎・森田 勉 1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について一型式分類と編年を中心としてー」『九州歴史資料館研究論集』
4 九州歴史資料館
吉岡康鶴 1984『中世須恵器の研究』 吉川弘文館
米沢 康 1980「大宝二年の越中国四部分割をめぐって」『信濃』第32巻第6号 信濃史学会

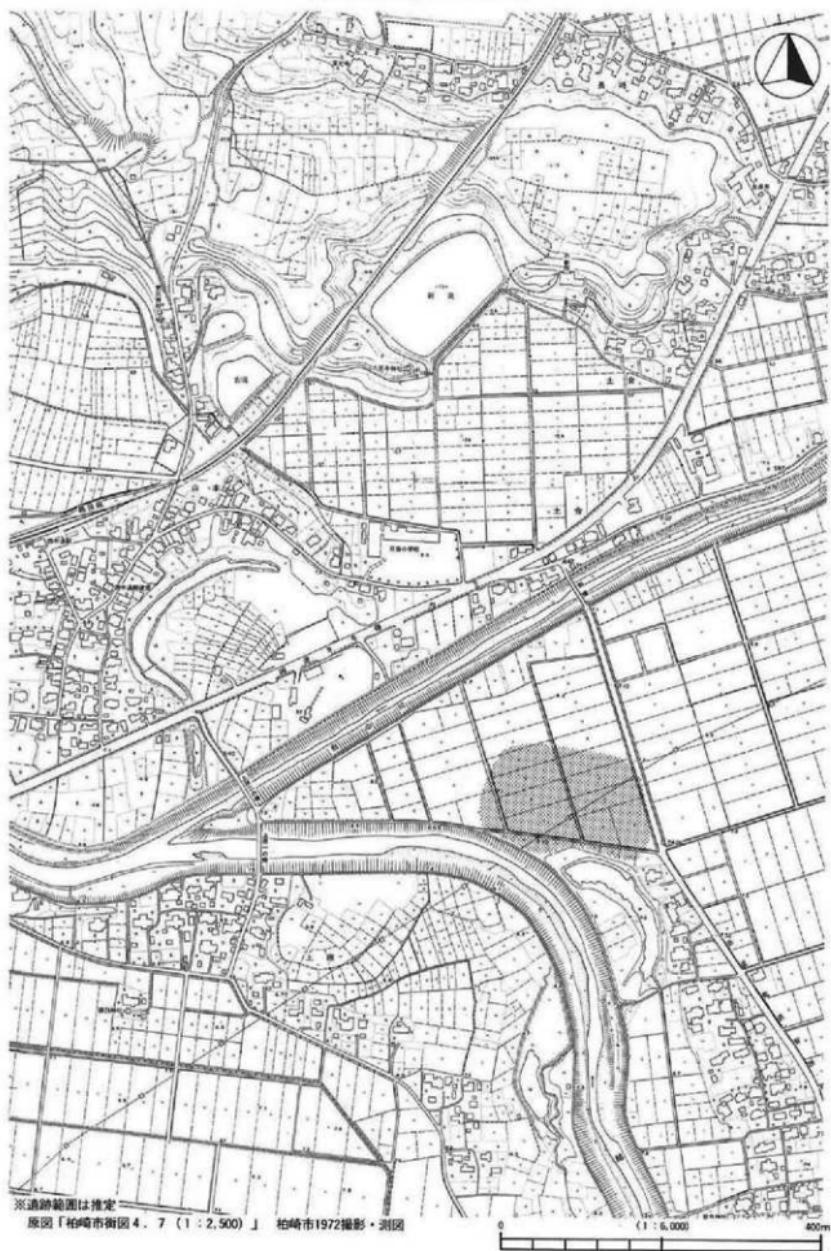
図 版

凡 例

1. ここには遺跡全体及び遺構に關わる実測図と写真をおさめ、図面図版と写真図版に区分されるが、図版番号は通し番号となっている。
2. 図面図版には、方位と縮尺を付した。方位はすべて真北である。
3. 出土遺物実測図の縮尺は、1：3を原則とし、柱根など大形品については1：6とした。
4. 写真図版のうち、出土遺物の縮尺は概ね1：2、1：3、1：6である。

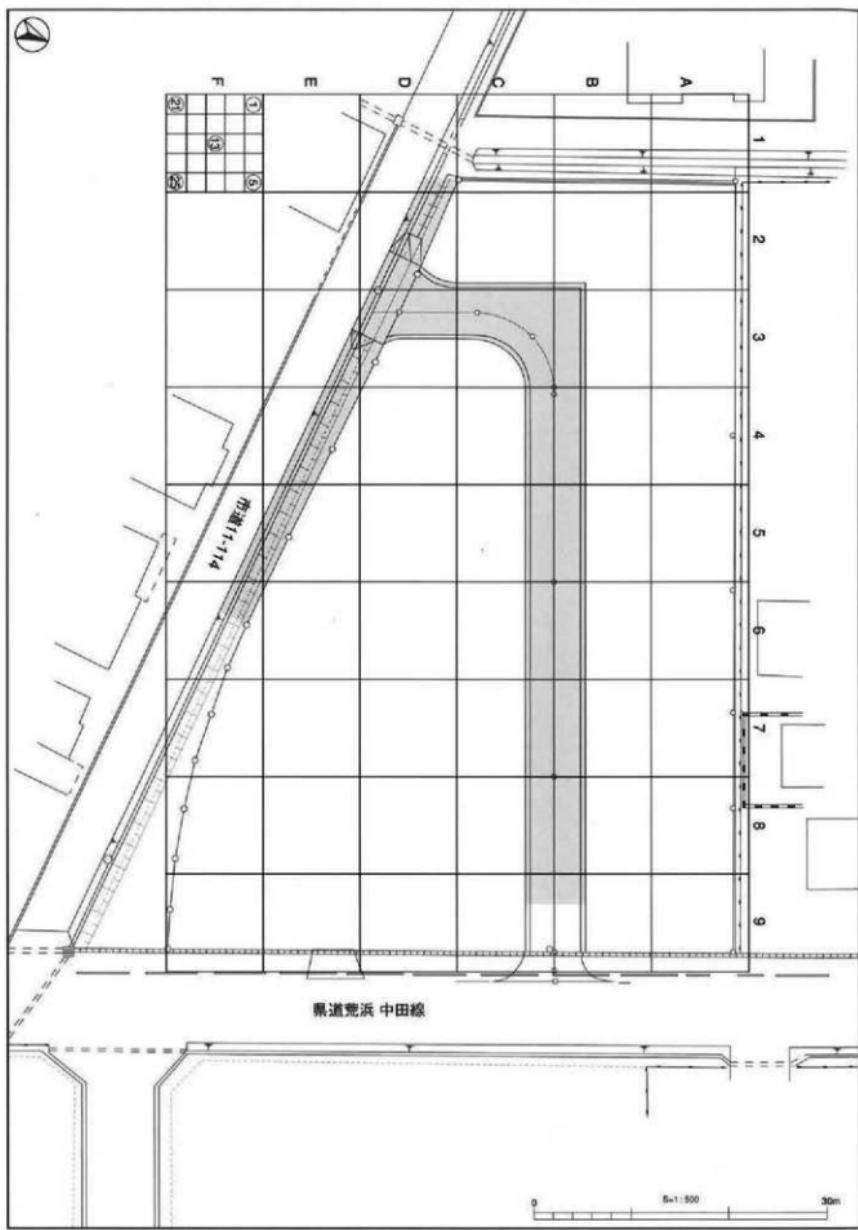


角田遺跡の位置と周辺の地形

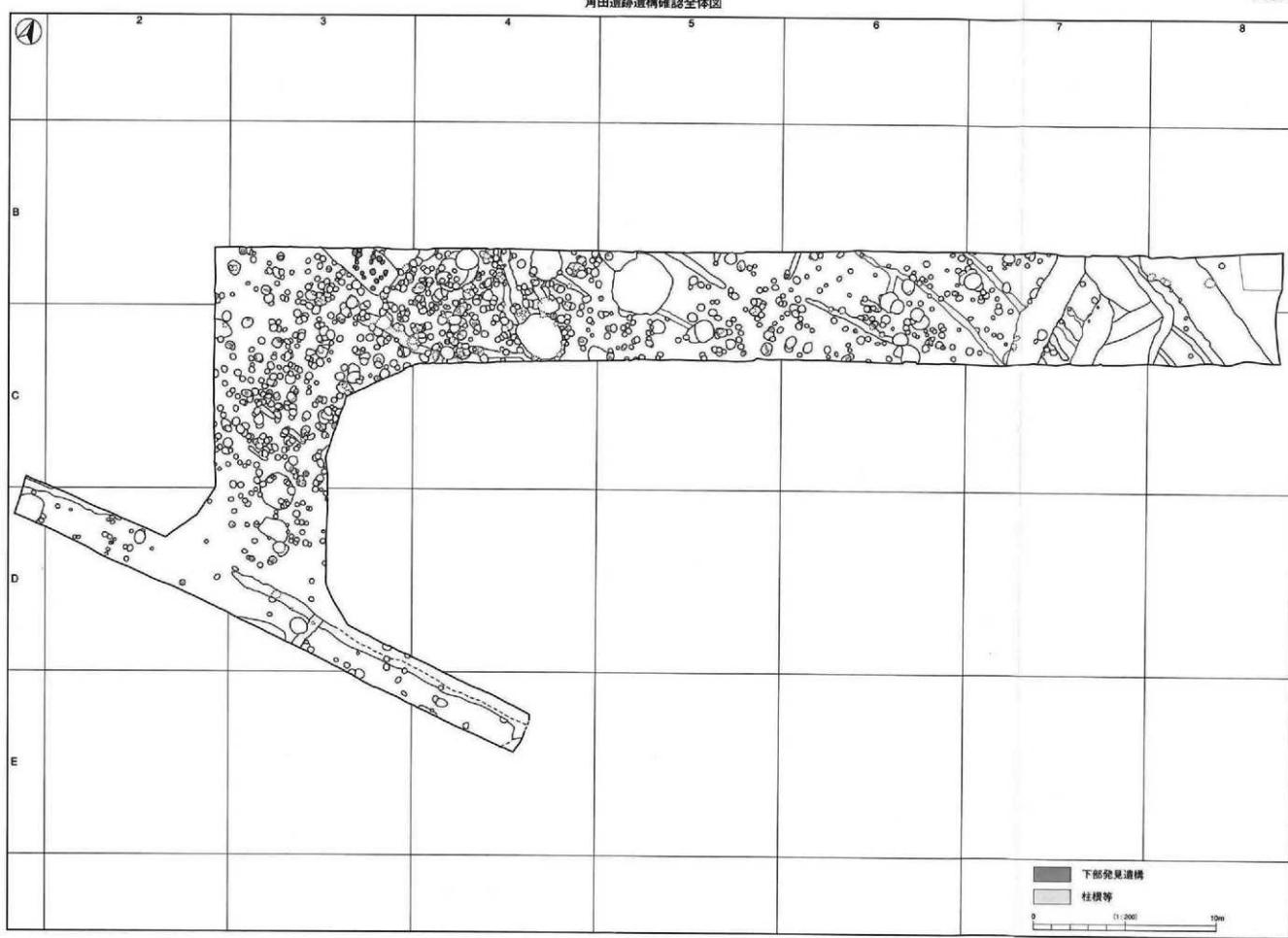


図版2

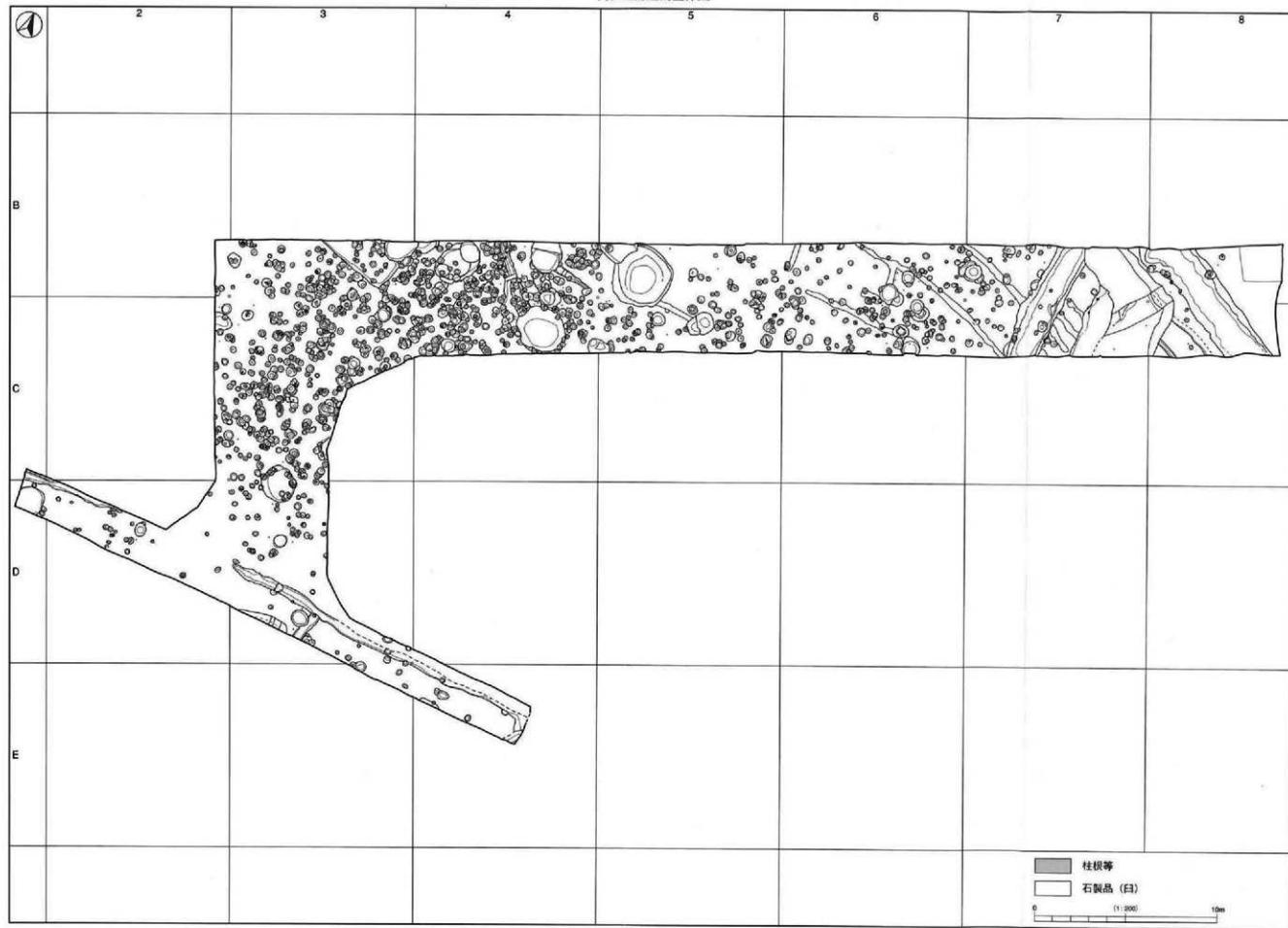
角田遺跡の調査区とグリッドの配置図



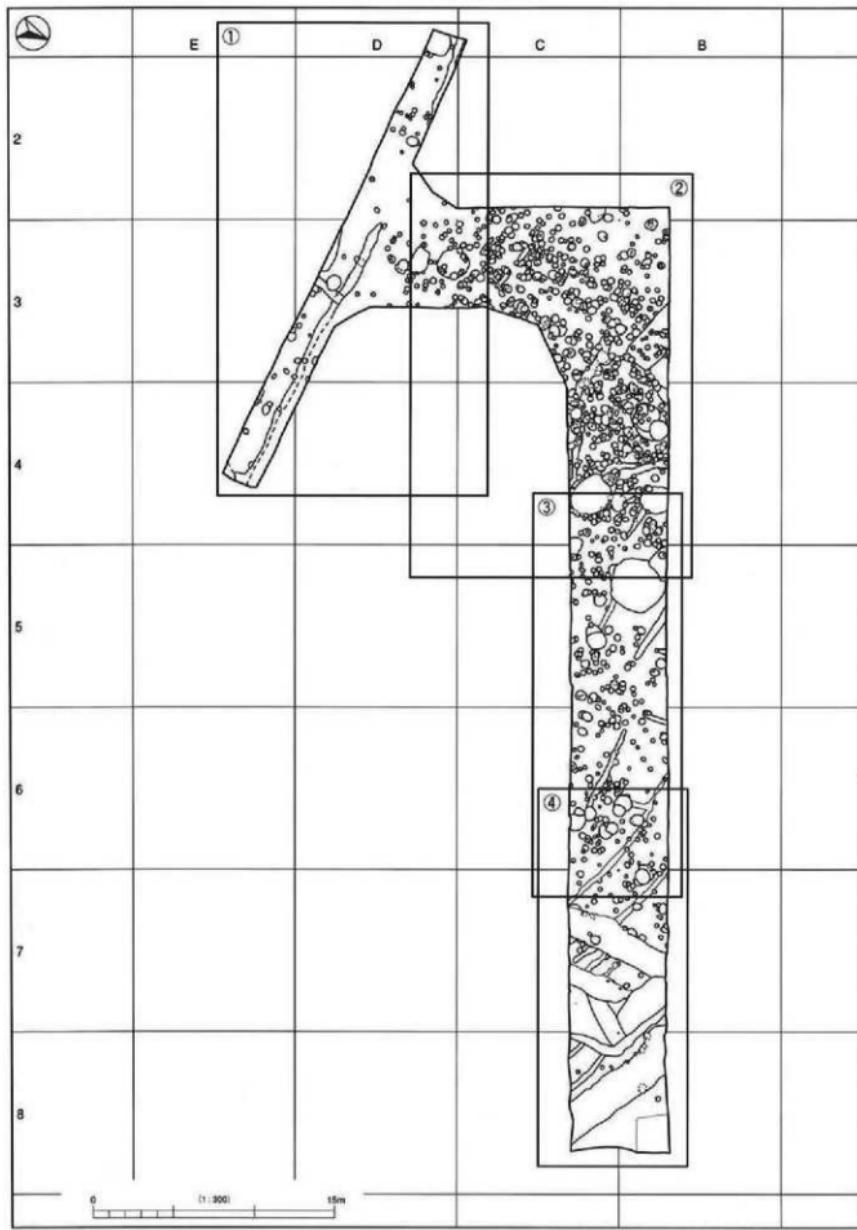
図版 3



角田遺跡遺構全体図

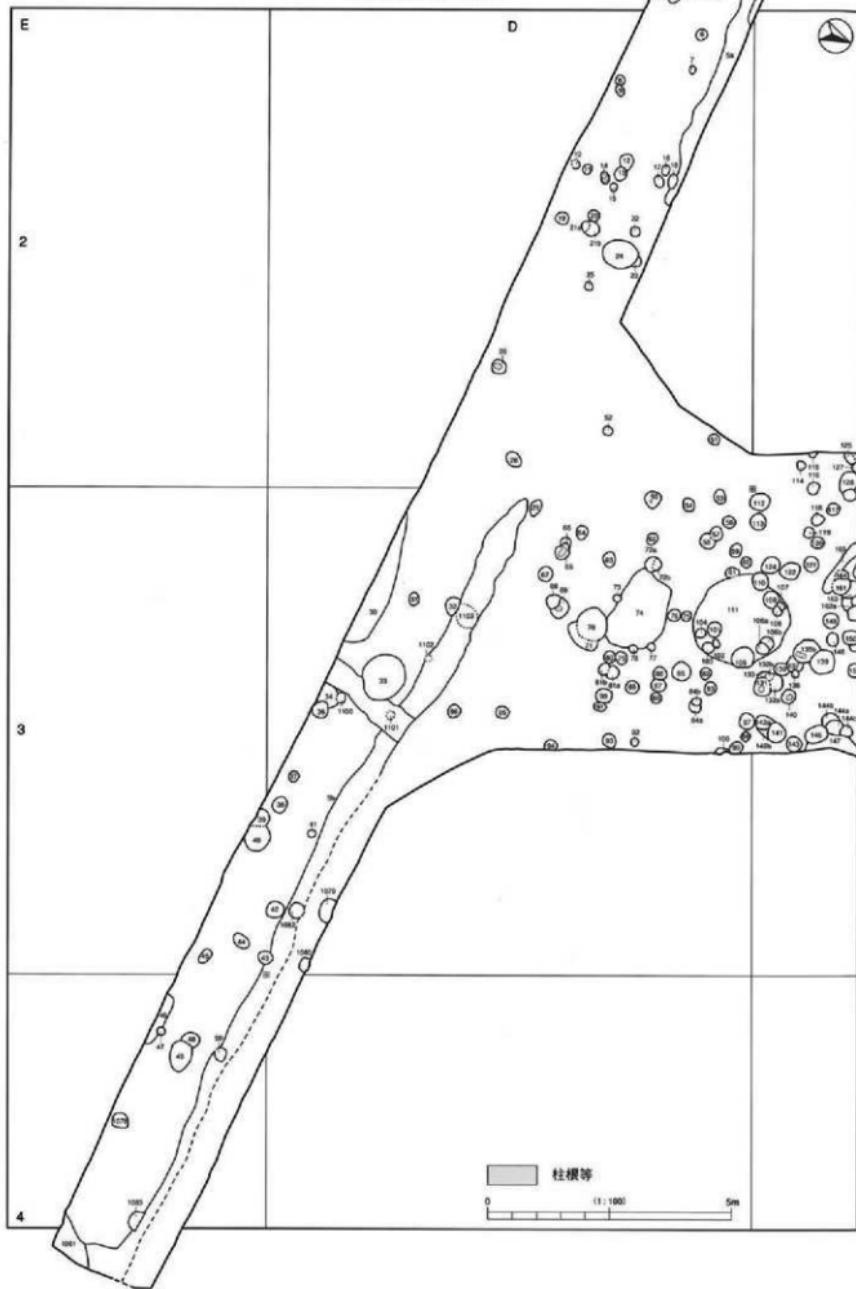


角田遺跡遺構図割付図

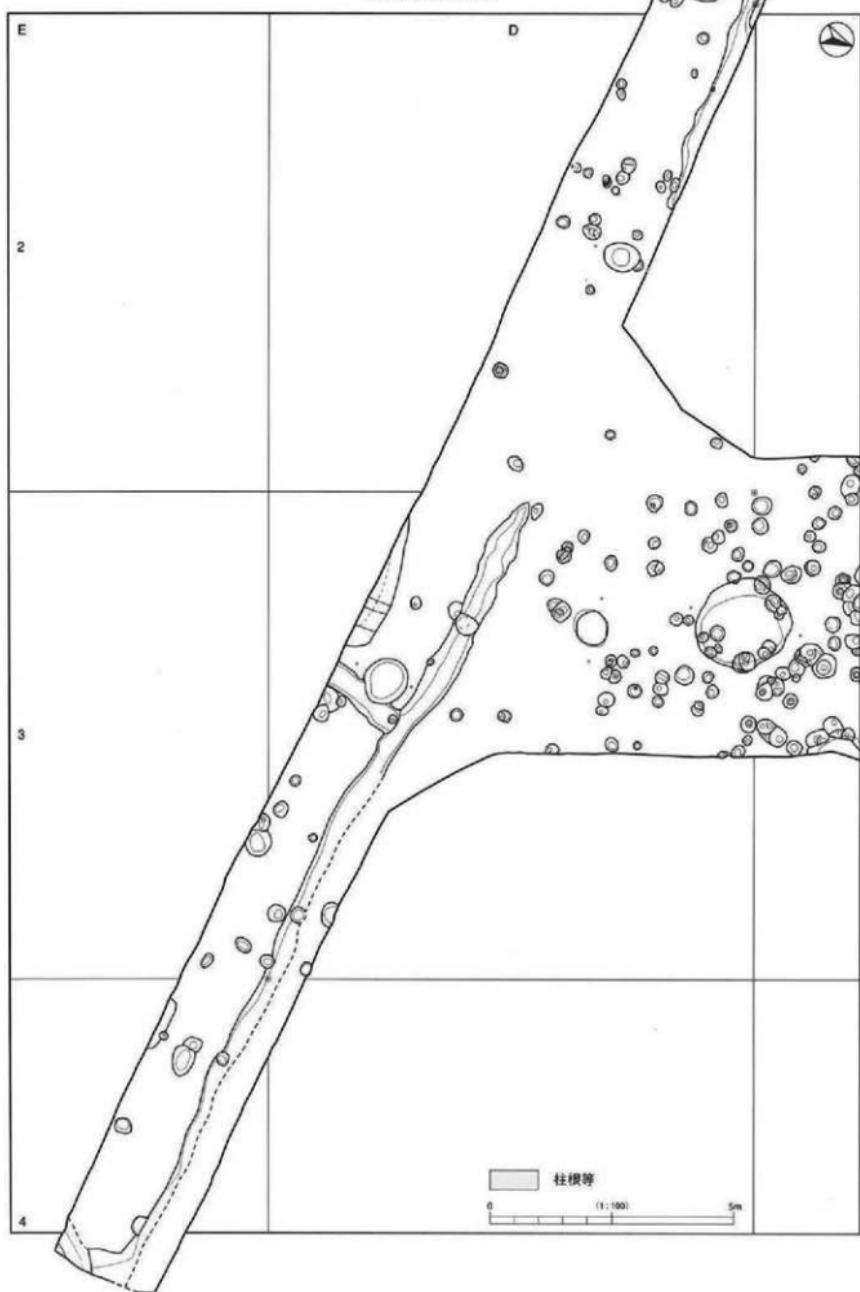


図版 6

角田遺跡遺構見取図 1

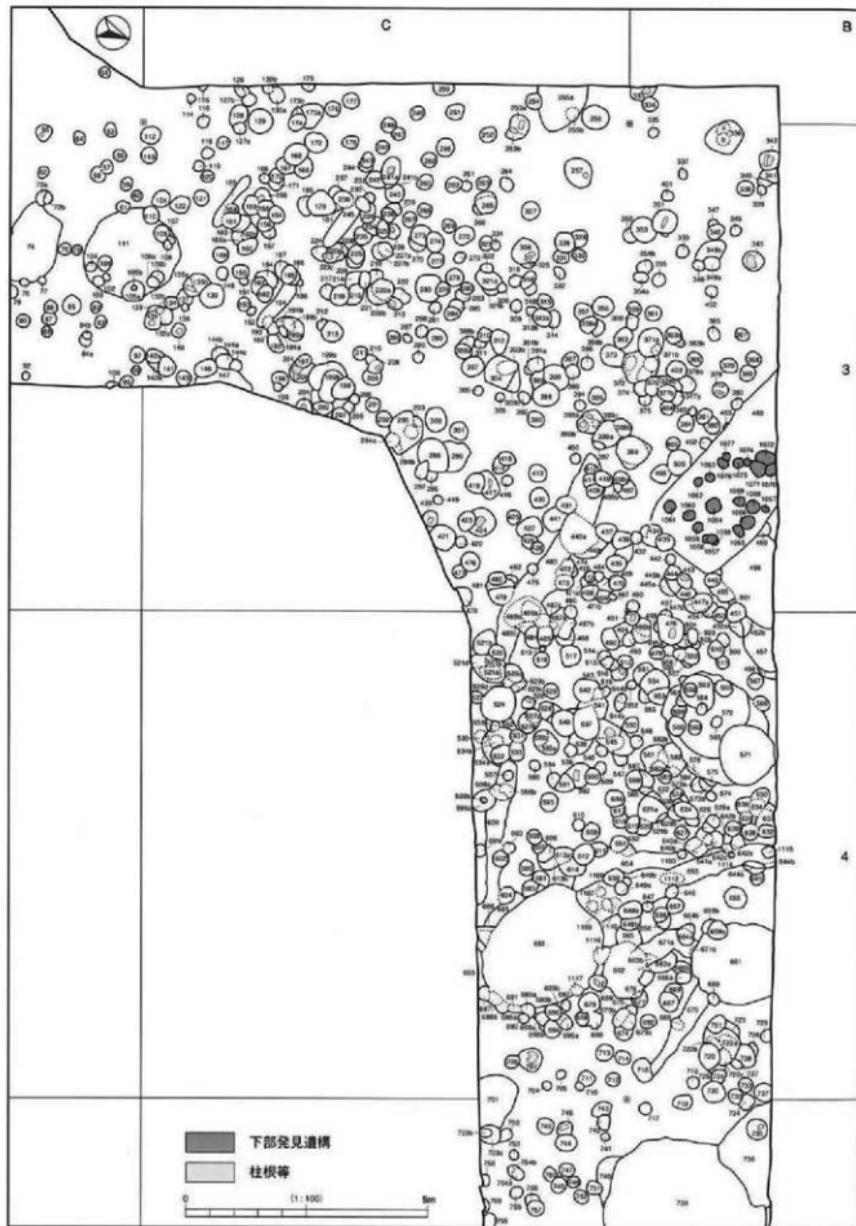


角田遺跡遺構図 I

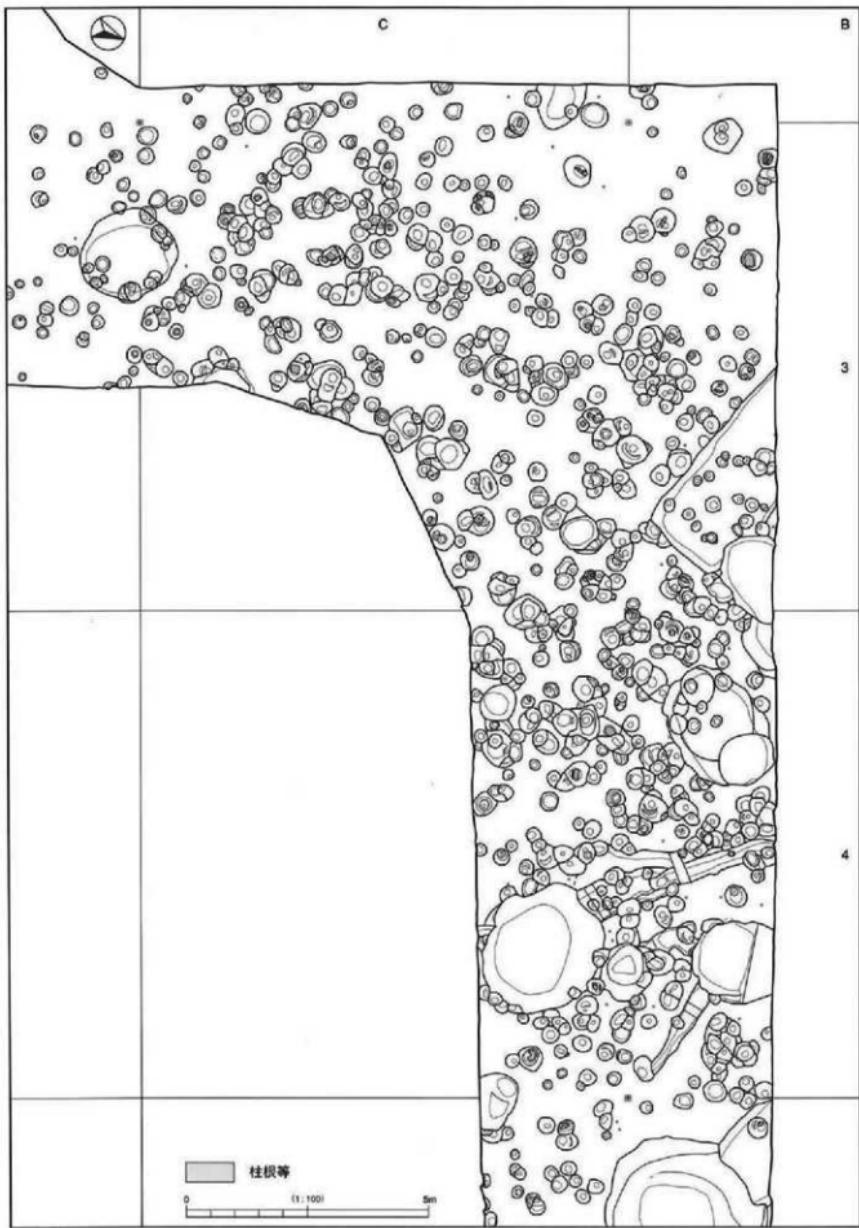


圖版 8

角田遺跡遺構見取図 2

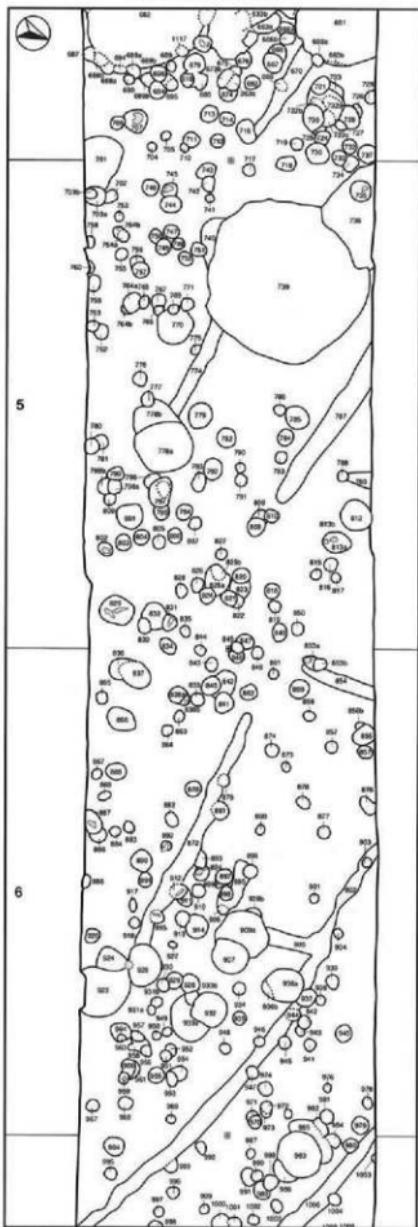


角田遺跡遺構図 2

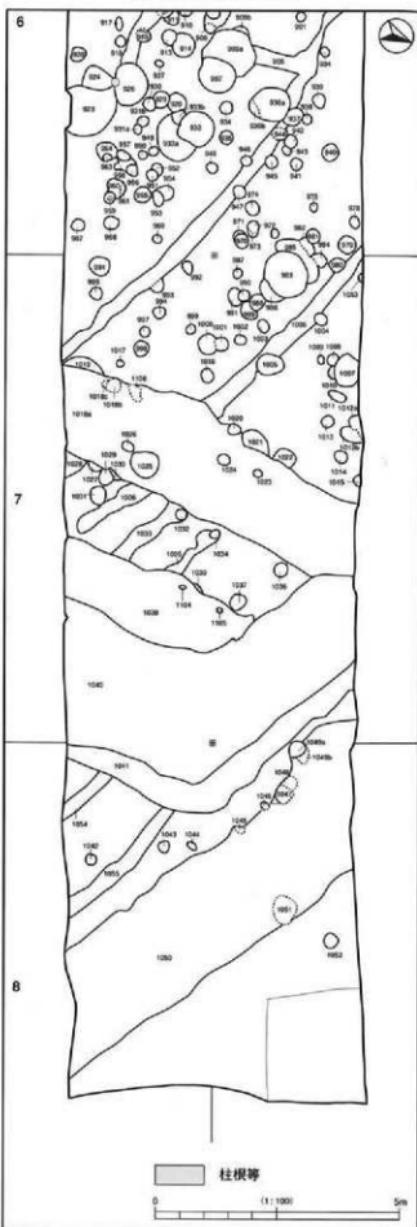


図版10

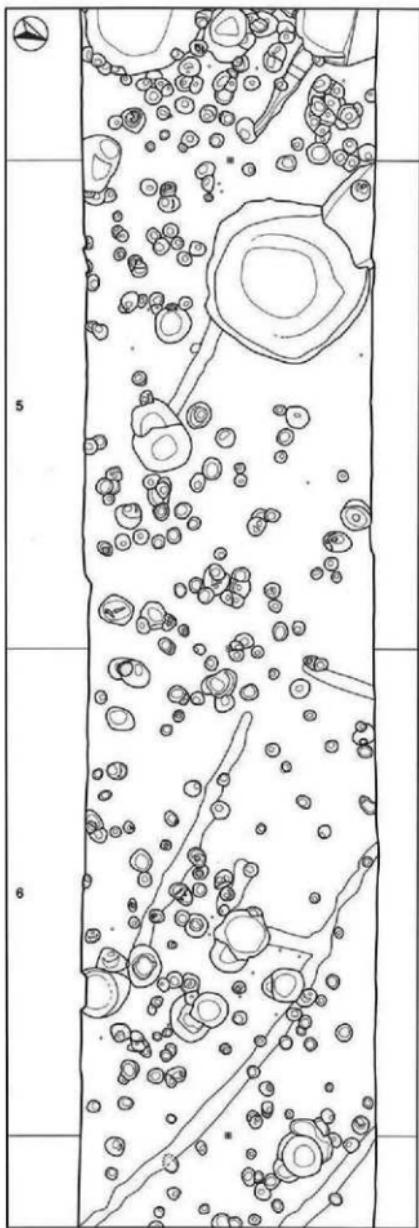
角田遺跡遺構見取図3



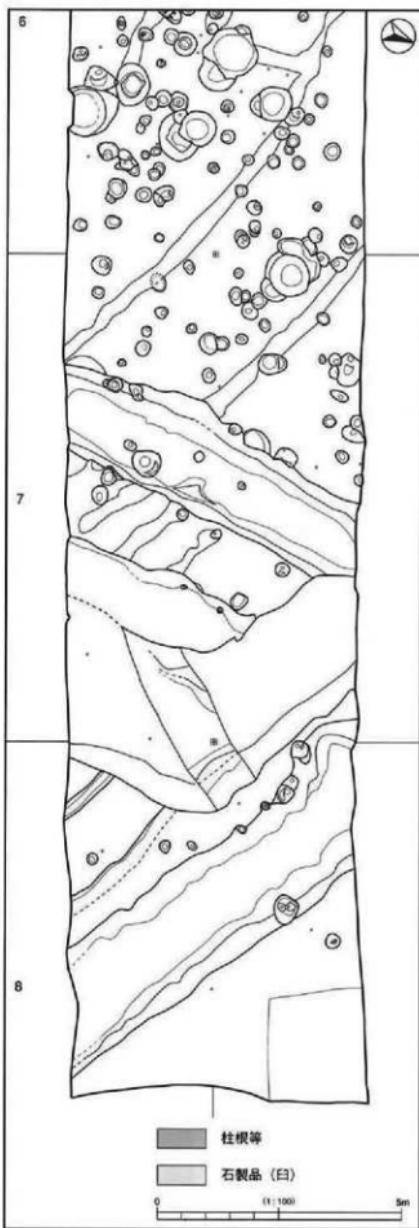
角田遺跡遺構見取図4



角田遺跡遺構図3



角田遺跡遺構図4

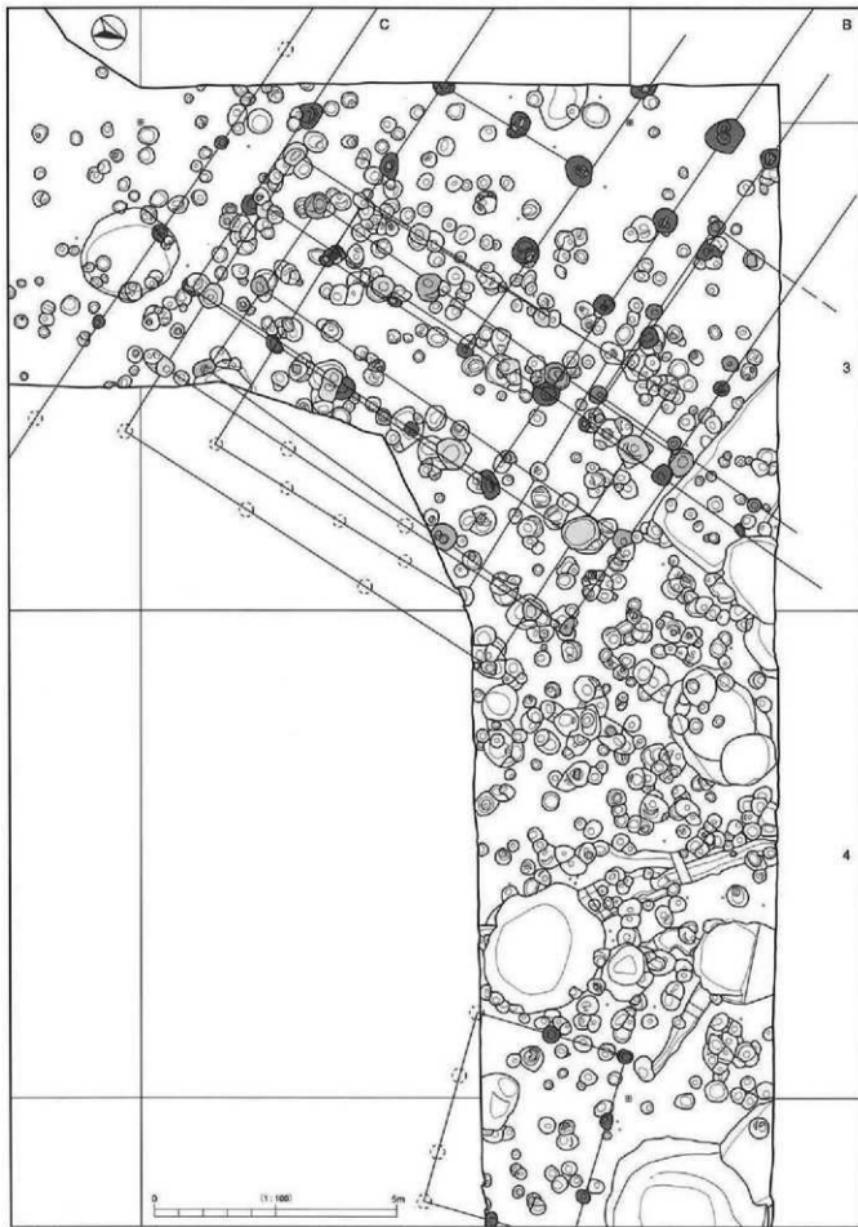


図版12

角田遺跡遺構配置図

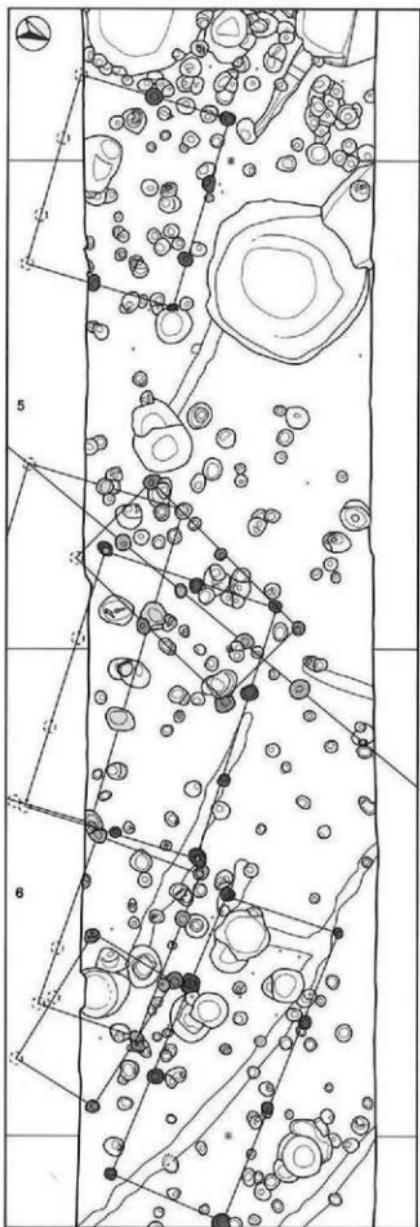


角田遺跡建物跡配置図1

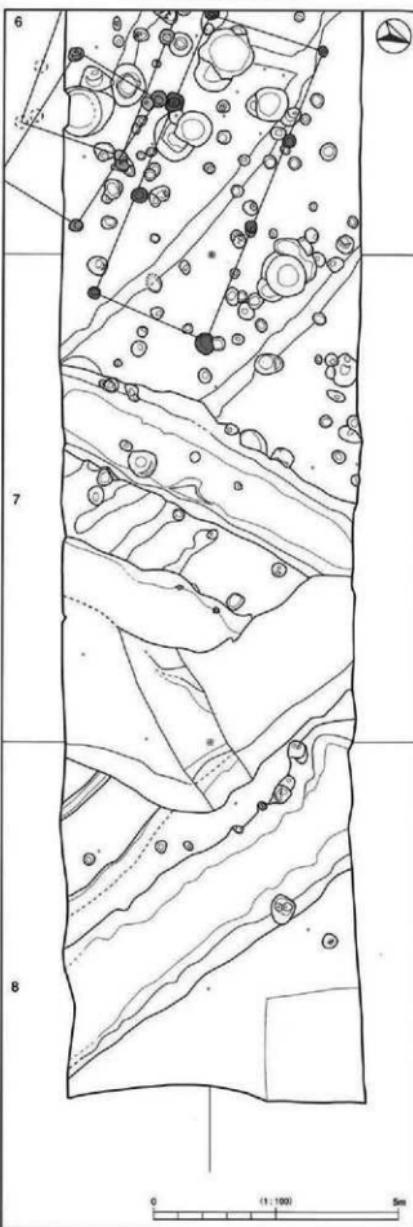


図版14

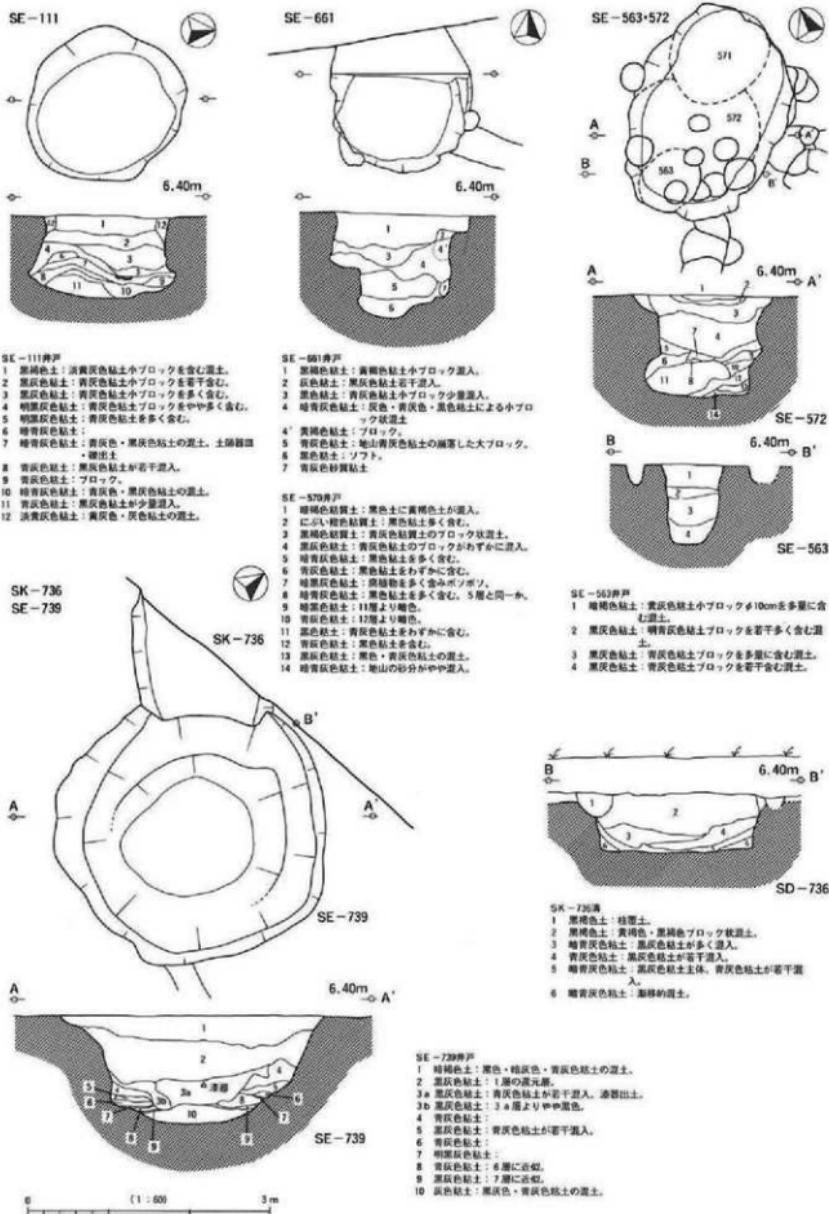
角田遺跡建物跡配置図 2



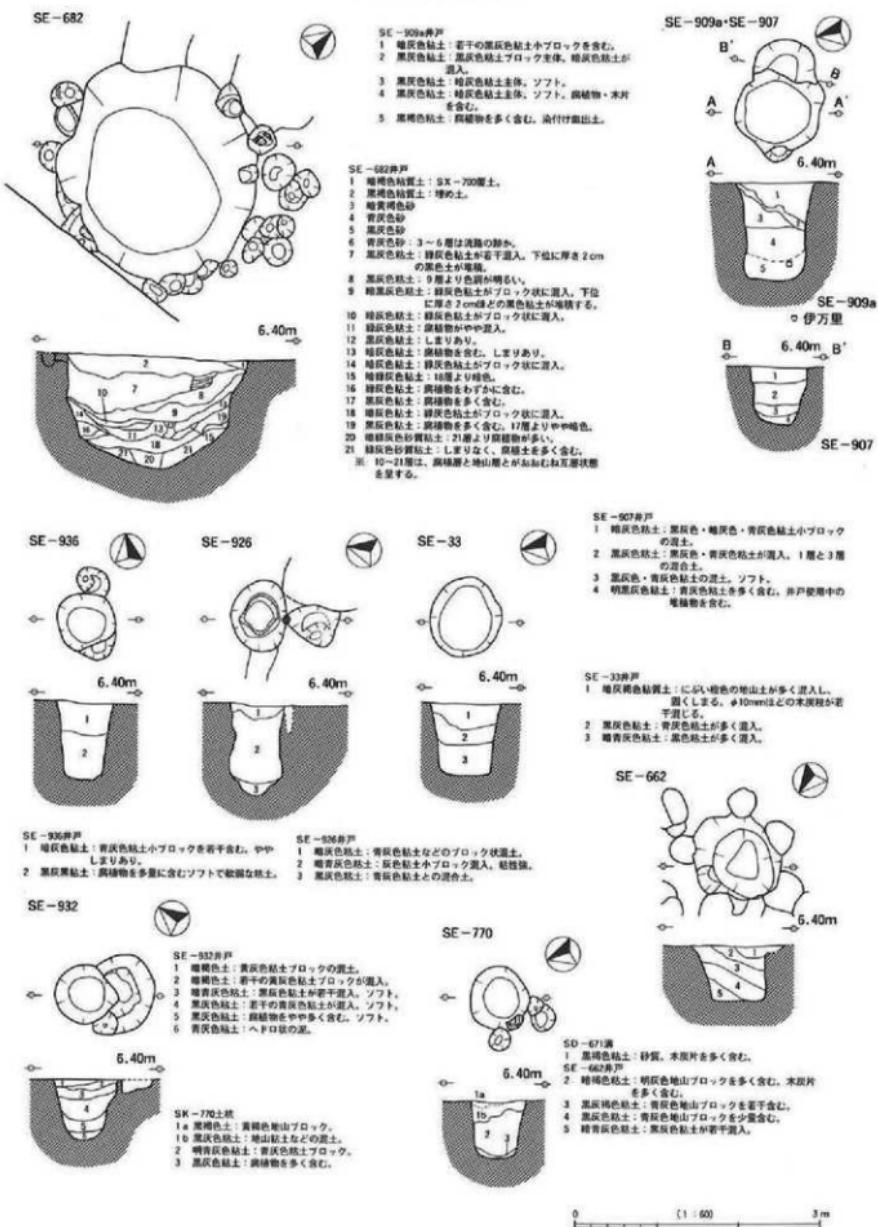
角田遺跡建物跡配置図 3



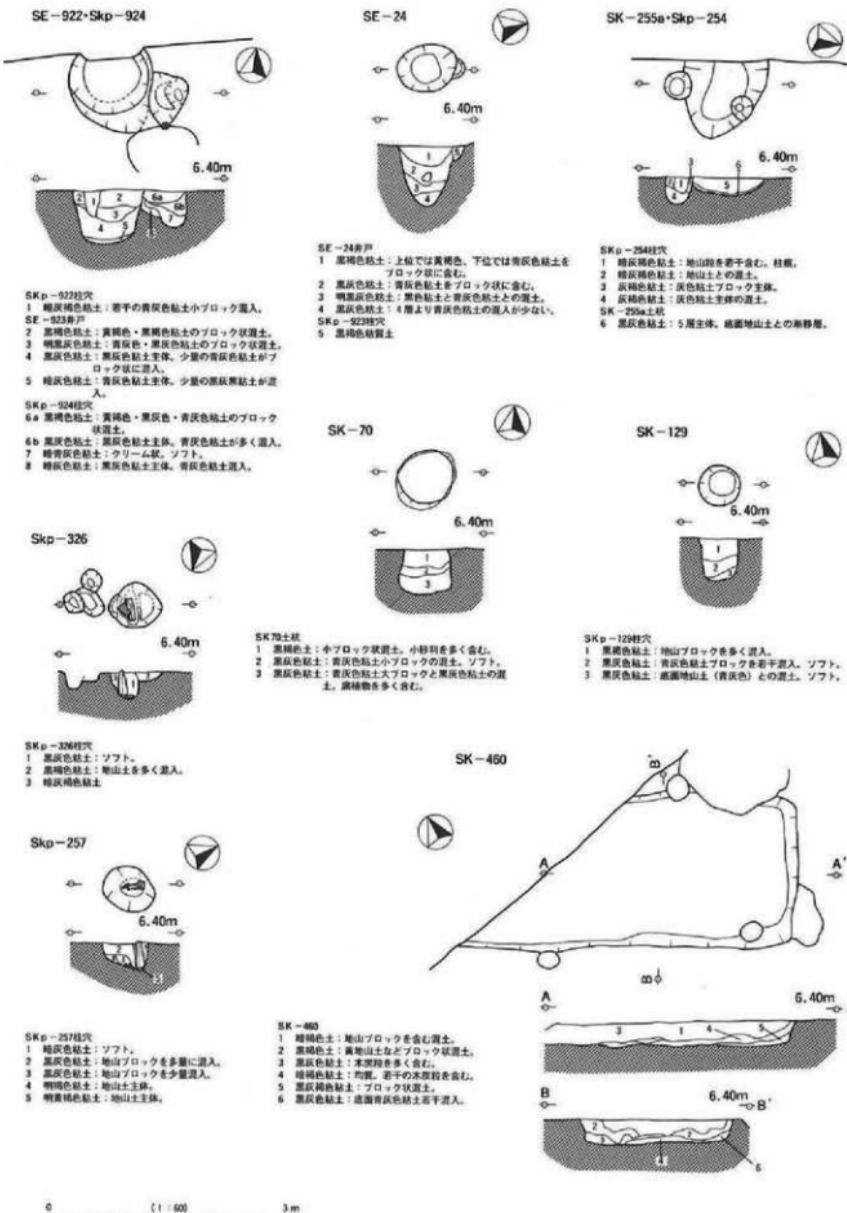
角田遺跡遺構個別図



角田遺跡遺構個別図2



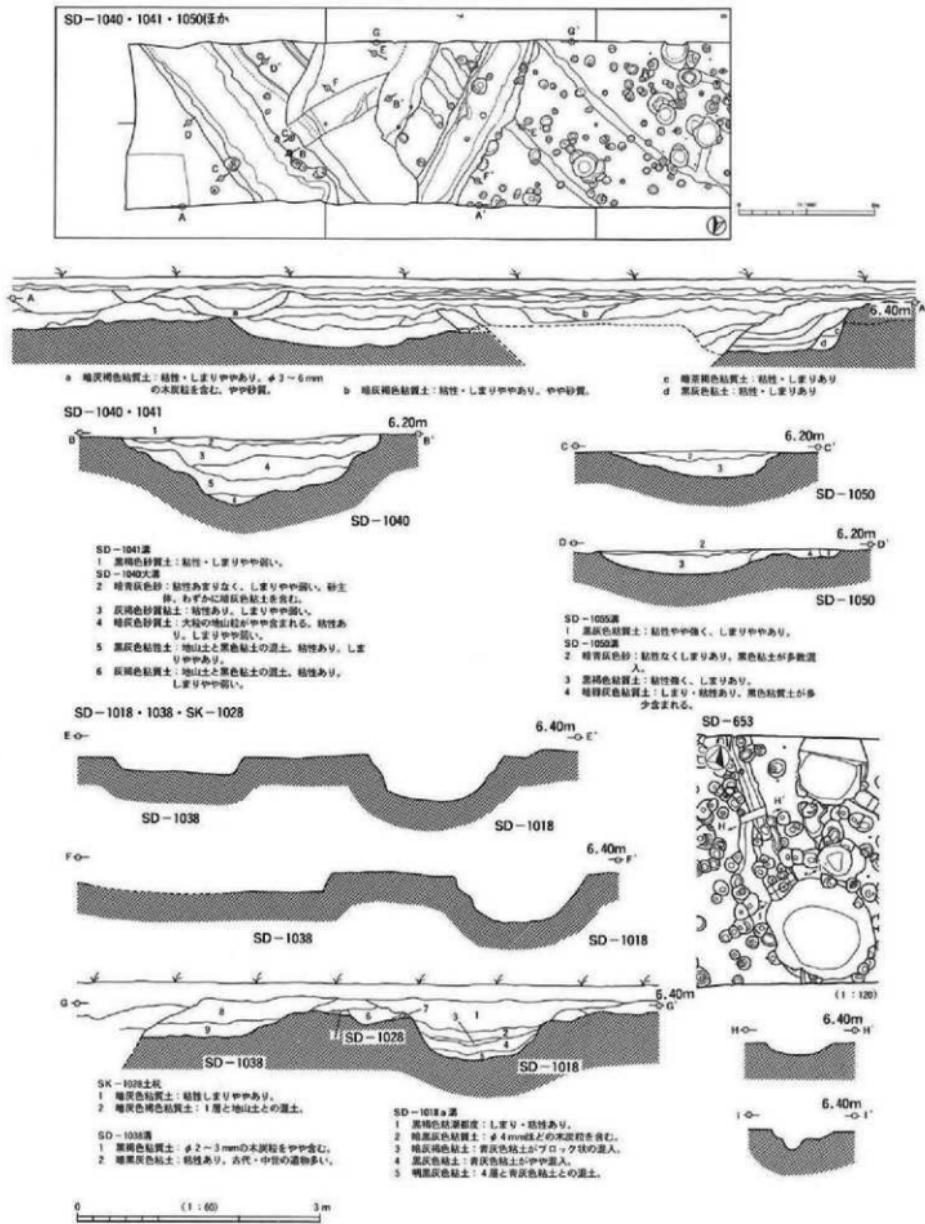
角田遺跡遺構個別図3



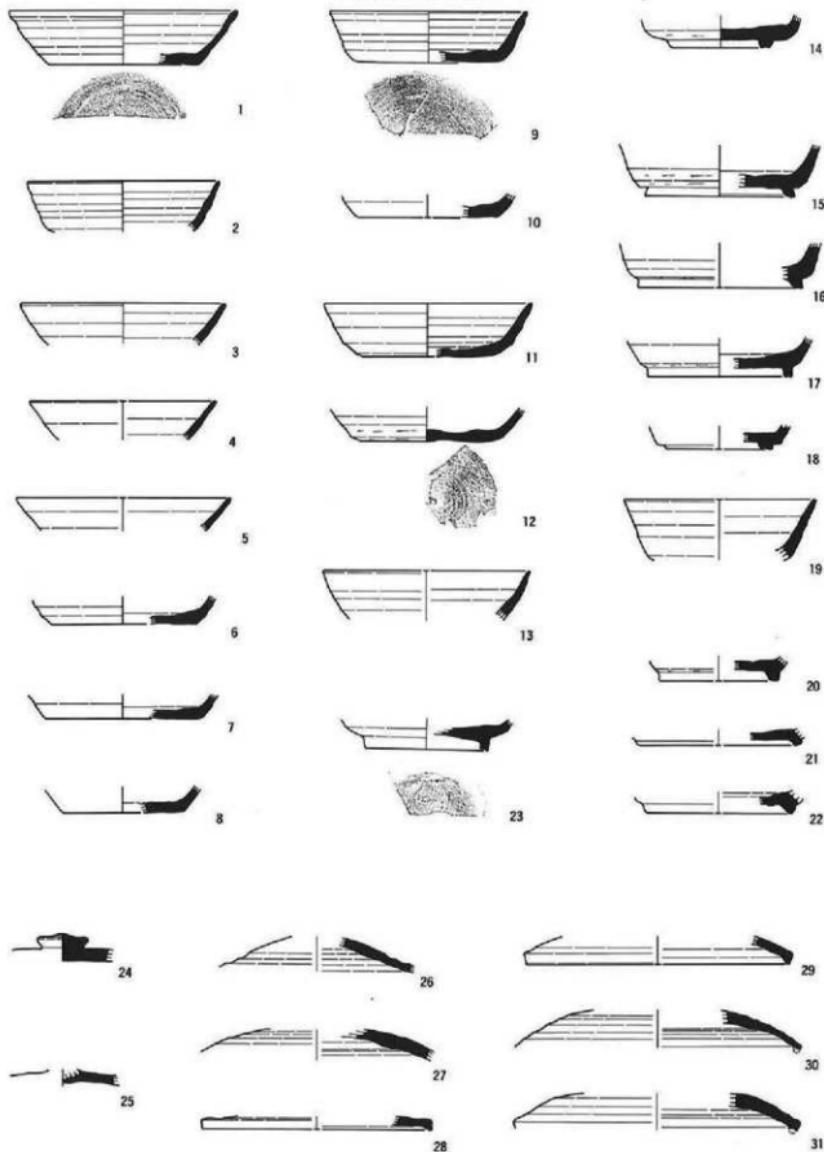
0 1 : 50 3 m

図版18

角田遺跡遺構個別図4

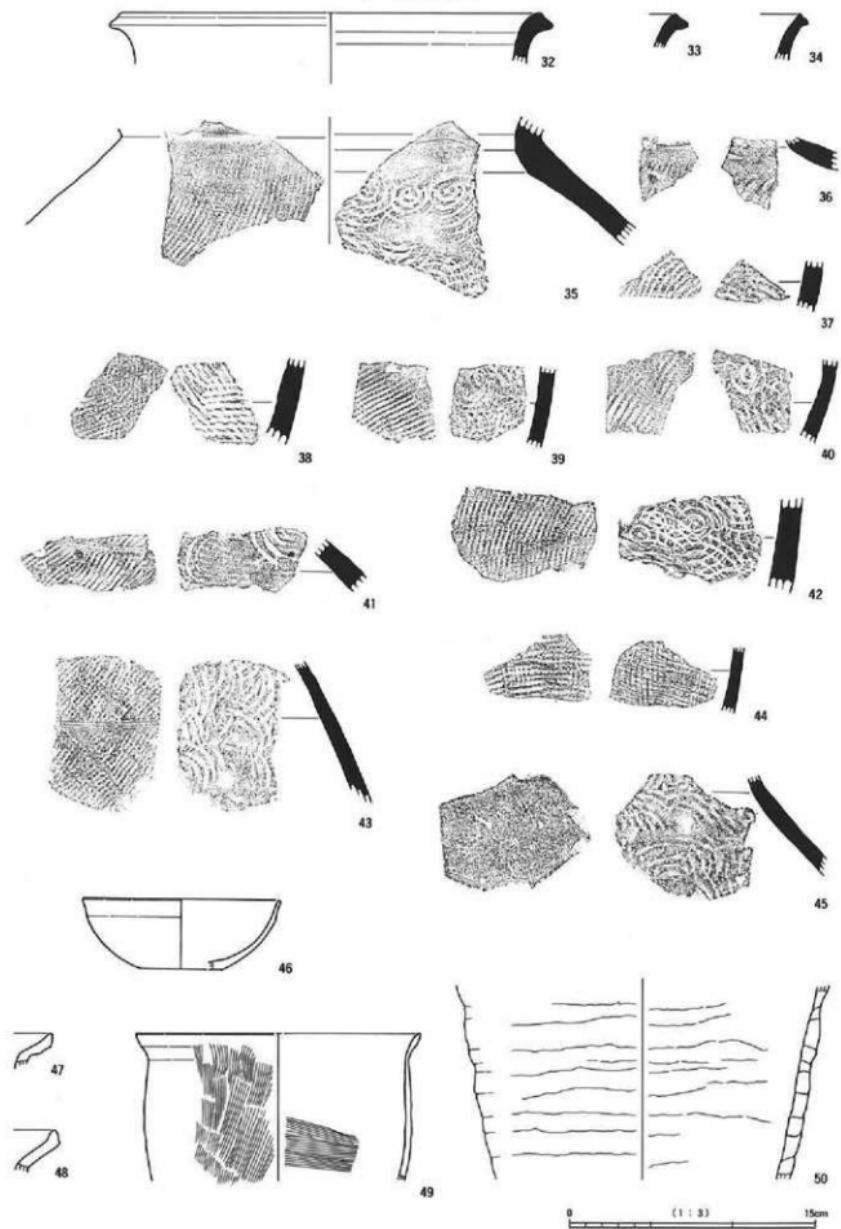


角田遺跡出土遺物1

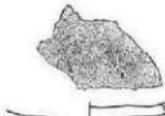
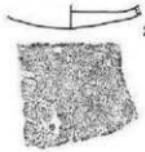
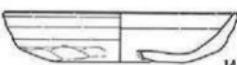
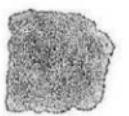
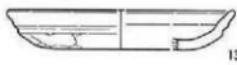
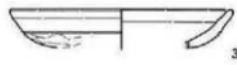
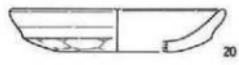
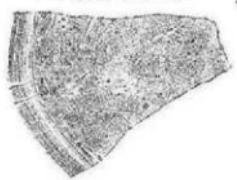
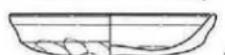


0 (1 : 2) 15cm

角田遺跡出土遺物2



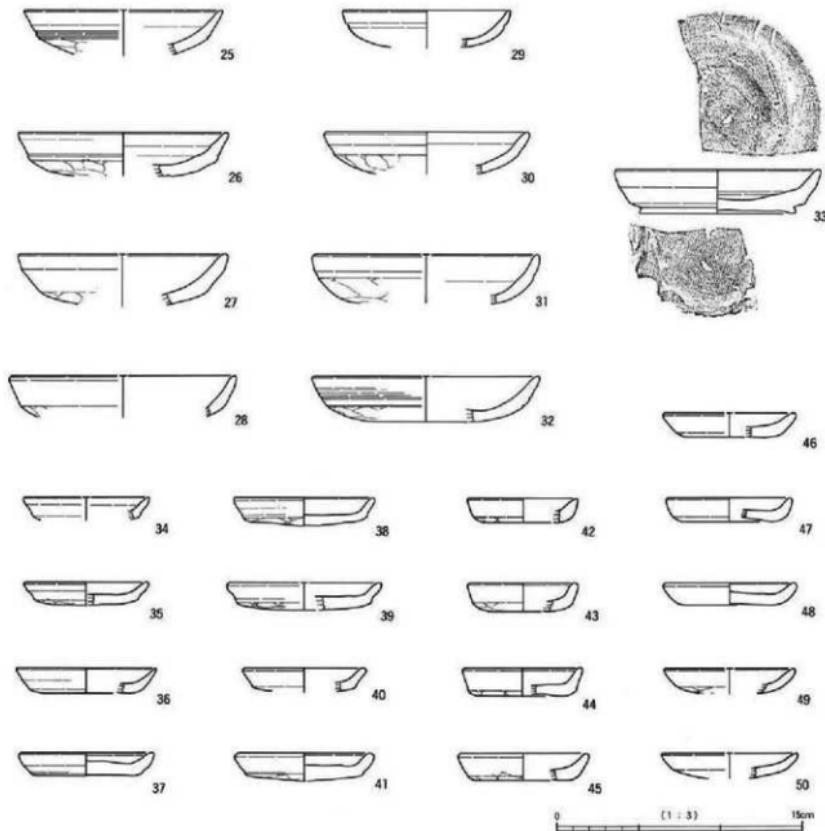
角田遺跡出土遺物 3



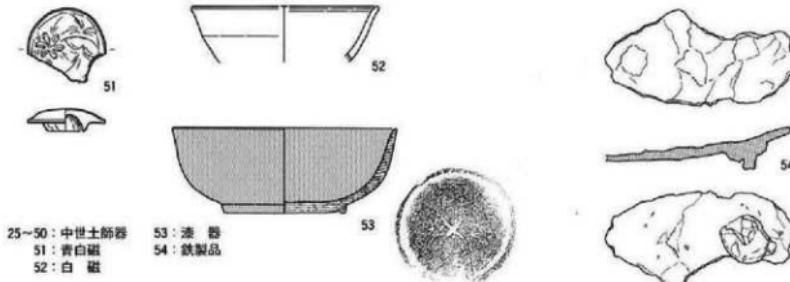
1~24: 中世土師器

0 (1 : 3) 15cm

角田遺跡出土遺物4



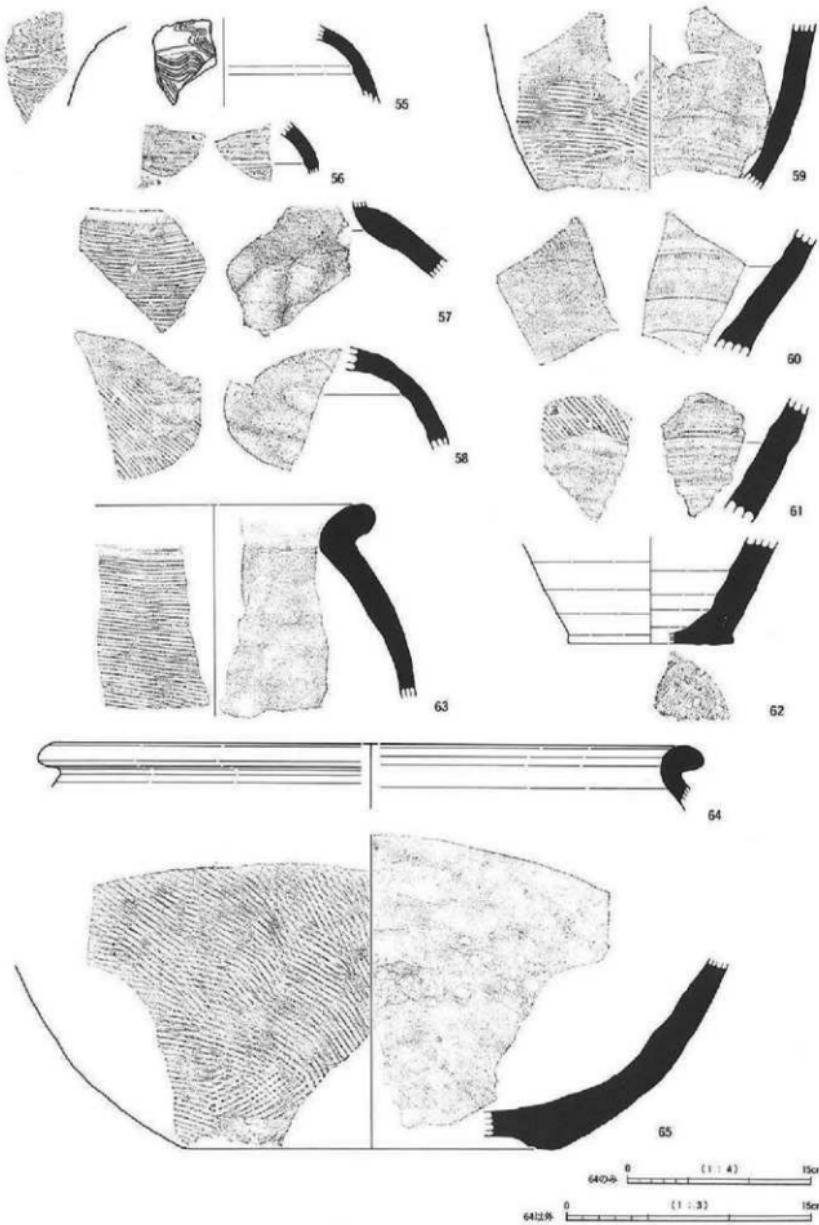
0 (1 : 3) 15cm



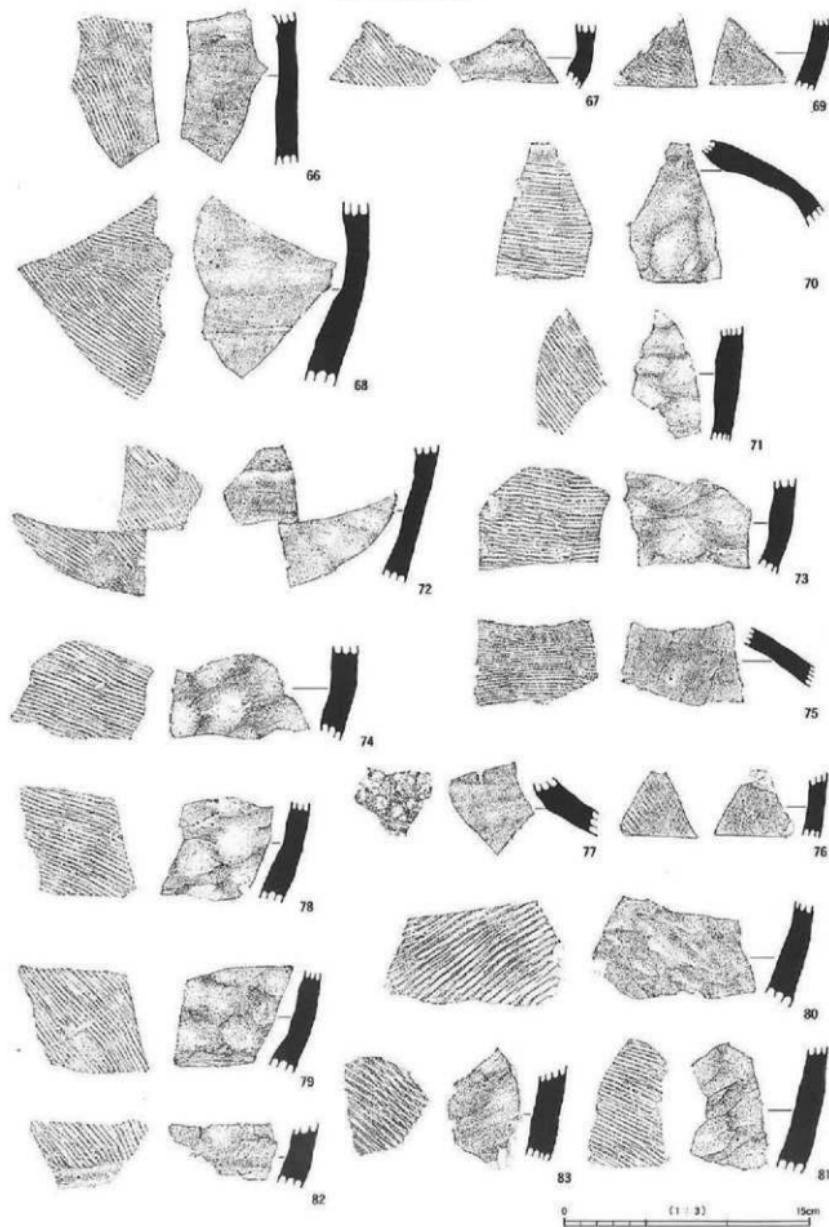
25~50: 中世土器
51: 青白磁
52: 白磁
53: 漆器
54: 鉄製品

0 (1 : 3) 15cm

角田遺跡出土遺物 5

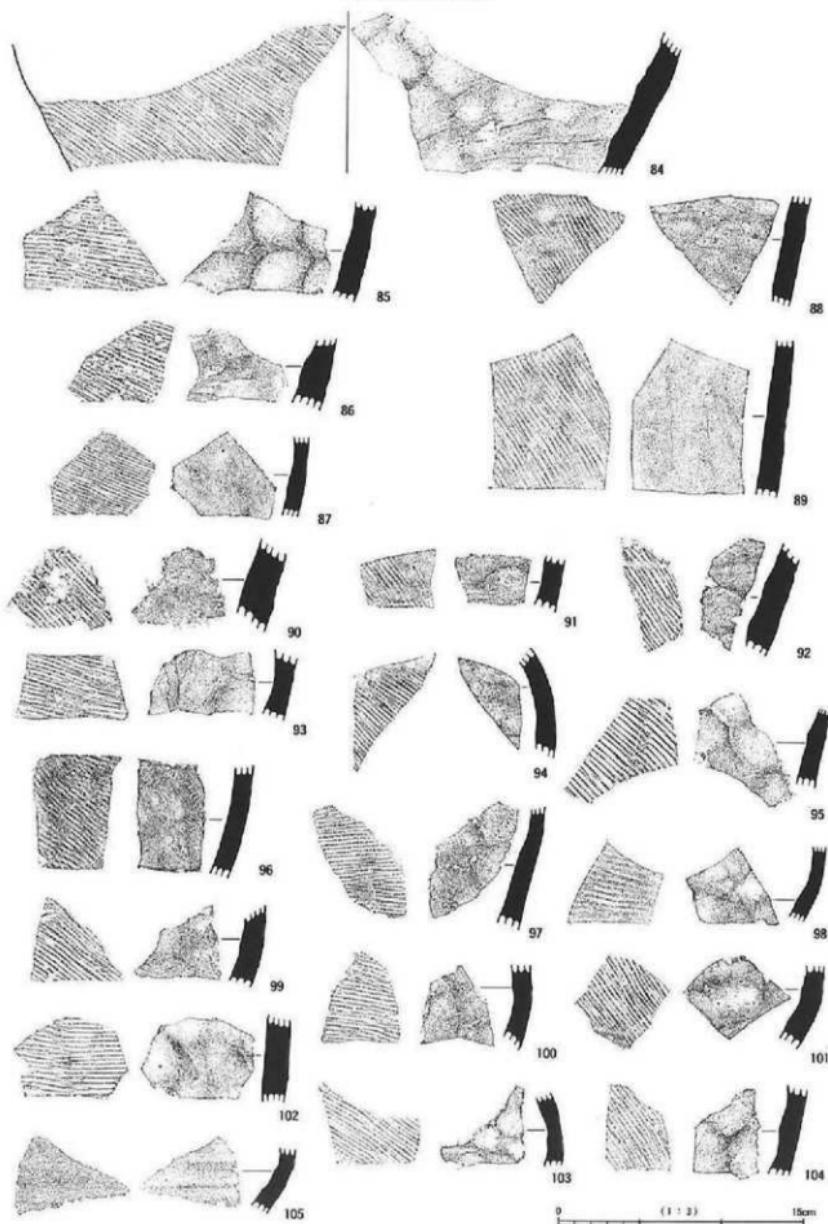


角田遺跡出土遺物 6



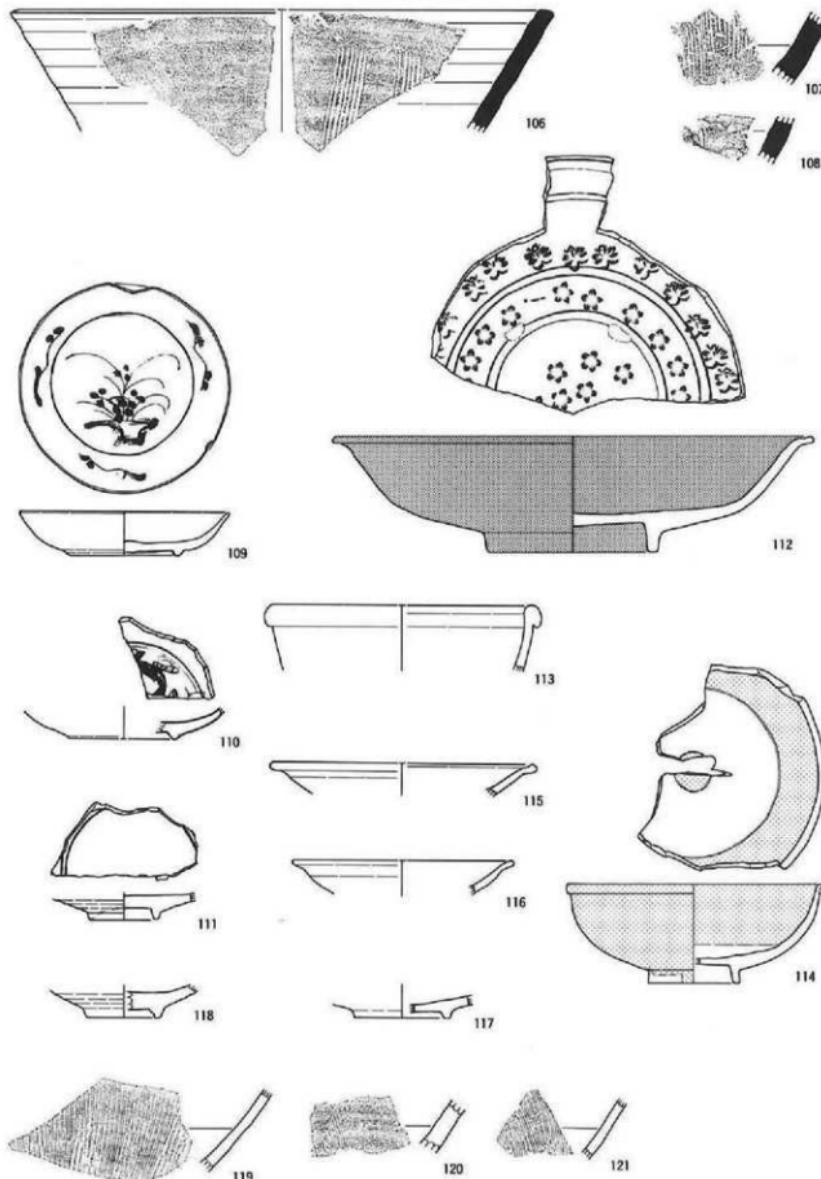
0 (1 : 3) 15cm

角田遺跡出土遺物 7



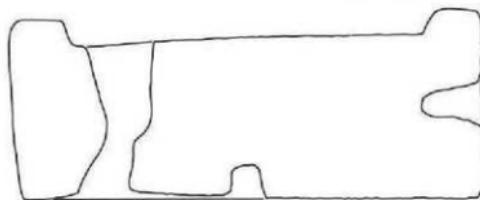
0 (1 : 2) 15cm

角田遺跡出土遺物 8

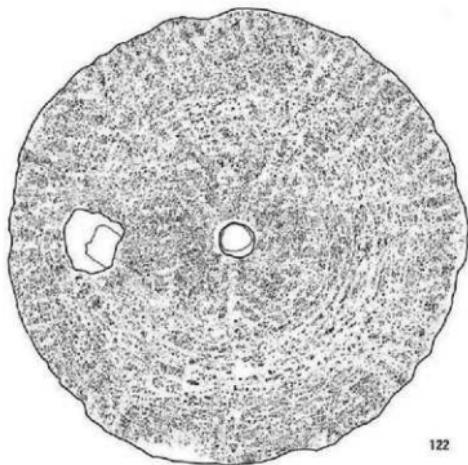


0 (1 : 5) 15cm

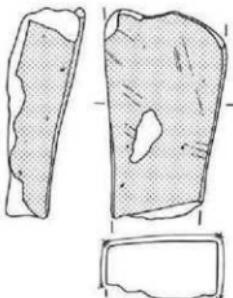
角田遺跡出土遺物 9



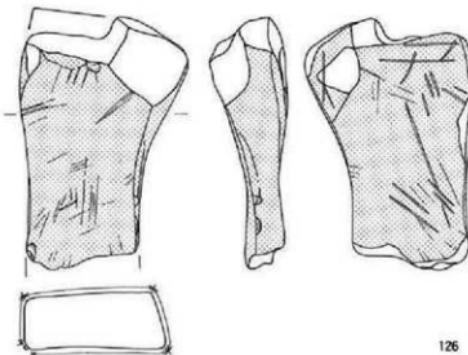
123



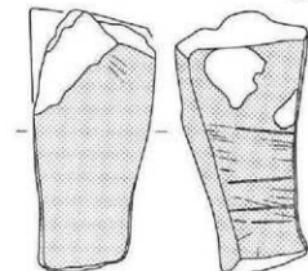
122



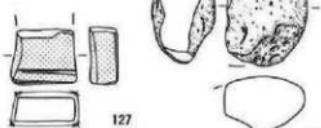
124



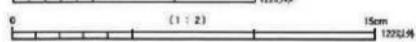
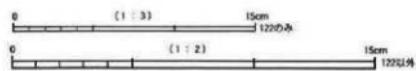
126



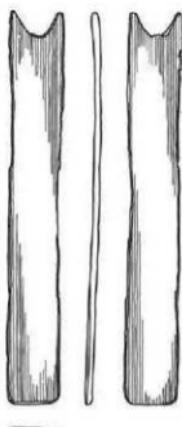
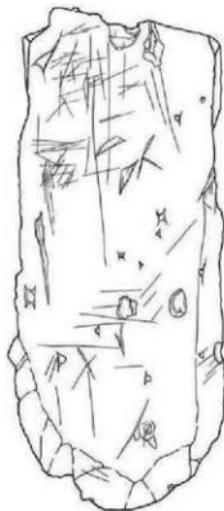
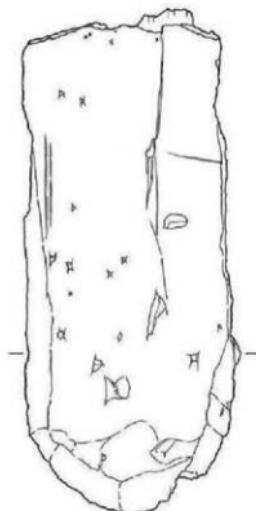
125



127



角田遺跡出土遺物10



129

130



132



133



134



135



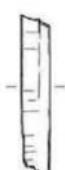
140



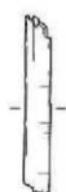
135



136



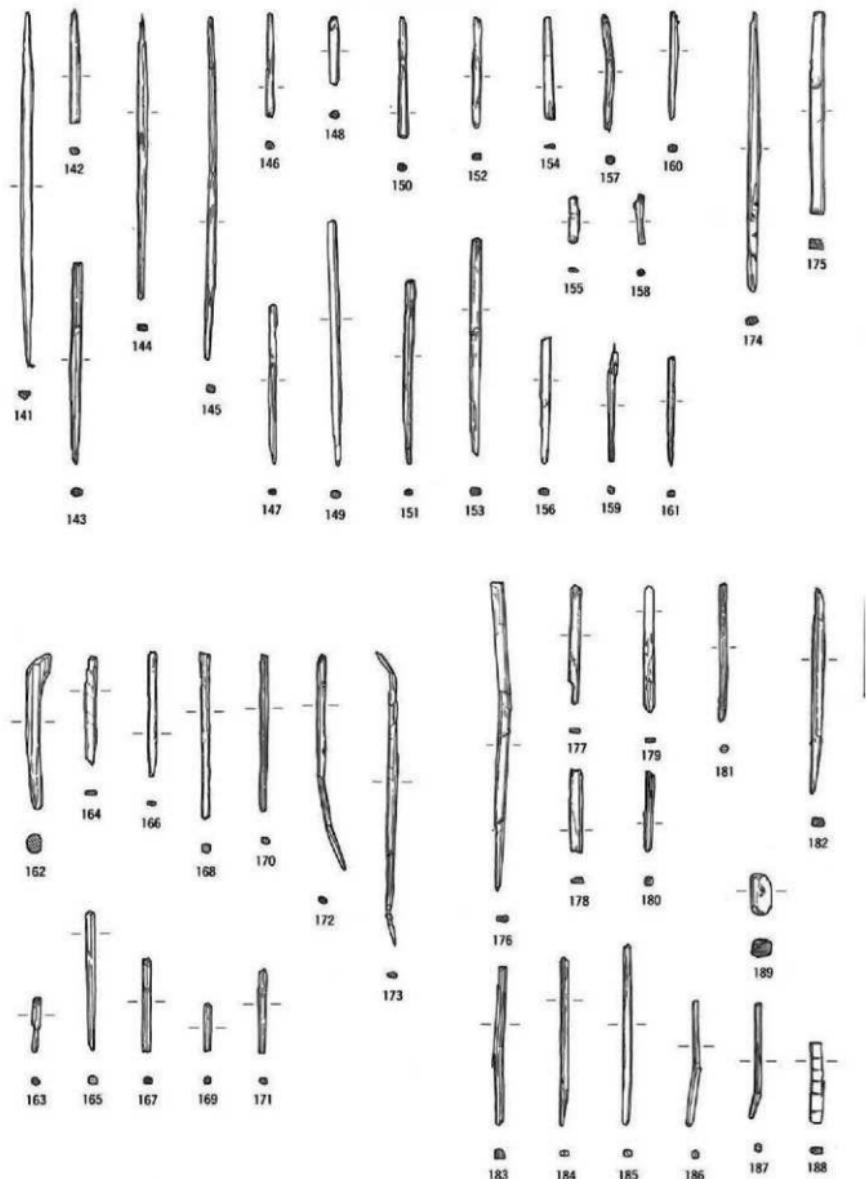
137

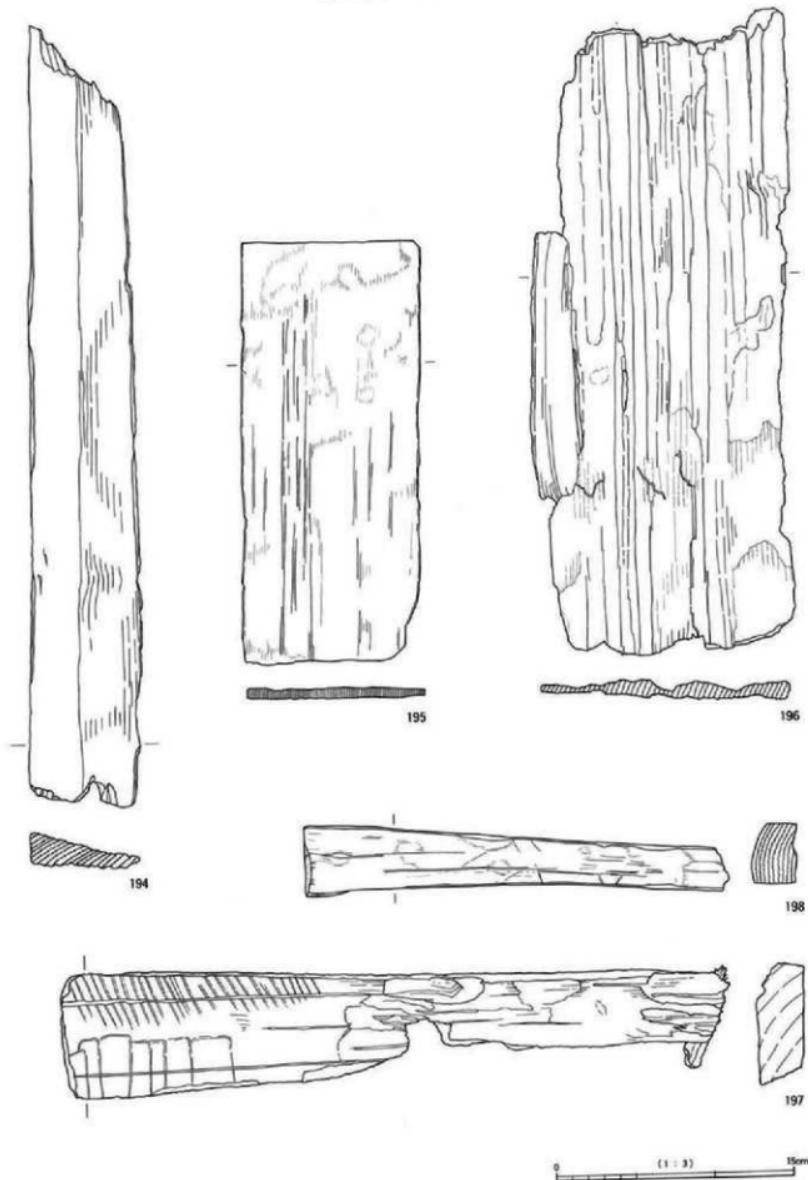


138

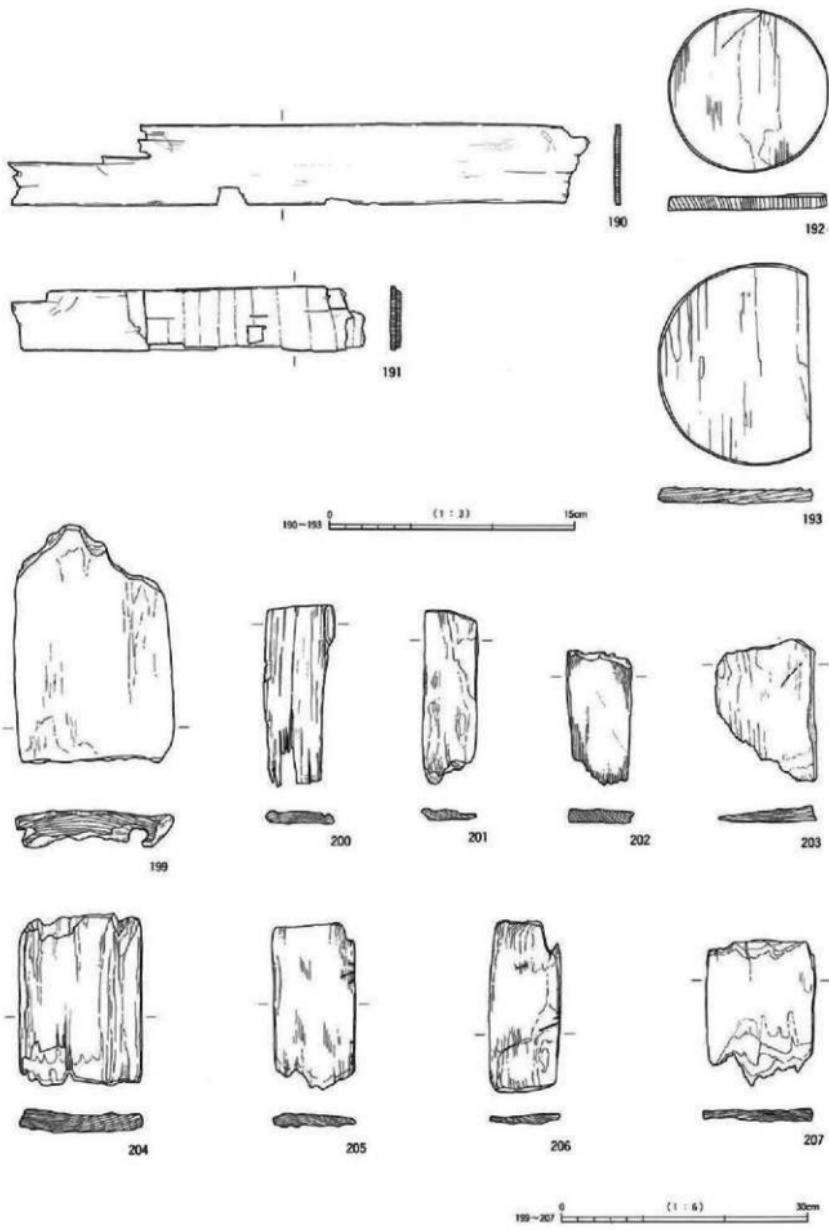
0 (1 : 3) 10cm

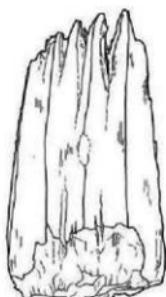
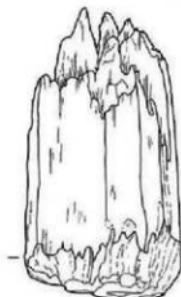
角田遺跡出土遺物11





角田遺跡出土遺物13





208



209



210



211



212



213



0 (1 : 6) 30cm

角田遺跡 1



a. 調査区全景

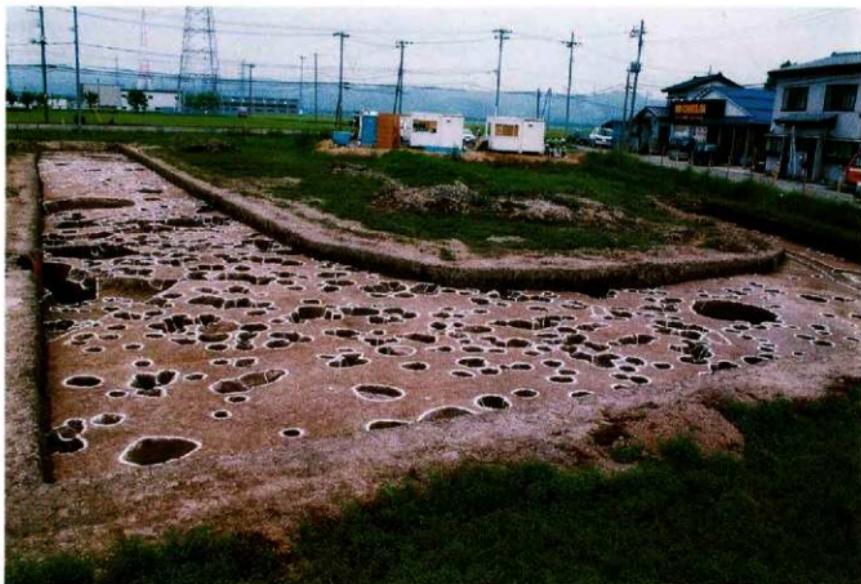
(南から)



b. 調査区全景

(北から)

角田遺跡 2



a. 調査区近景

(西から)



b. 調査区(B)近景

(北西から)

発掘調査 1



発掘調査 2



a. 遺構発掘風景

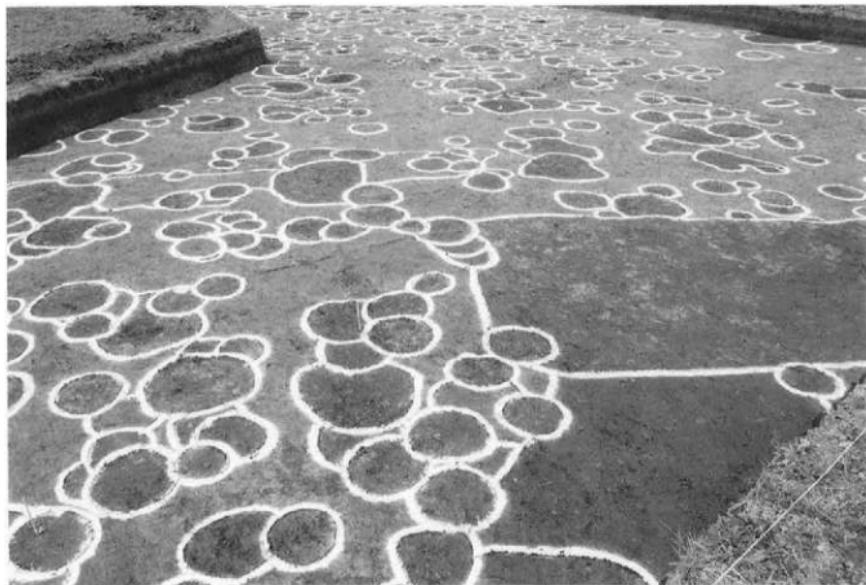
(西から)



b. 発掘調査スタッフ

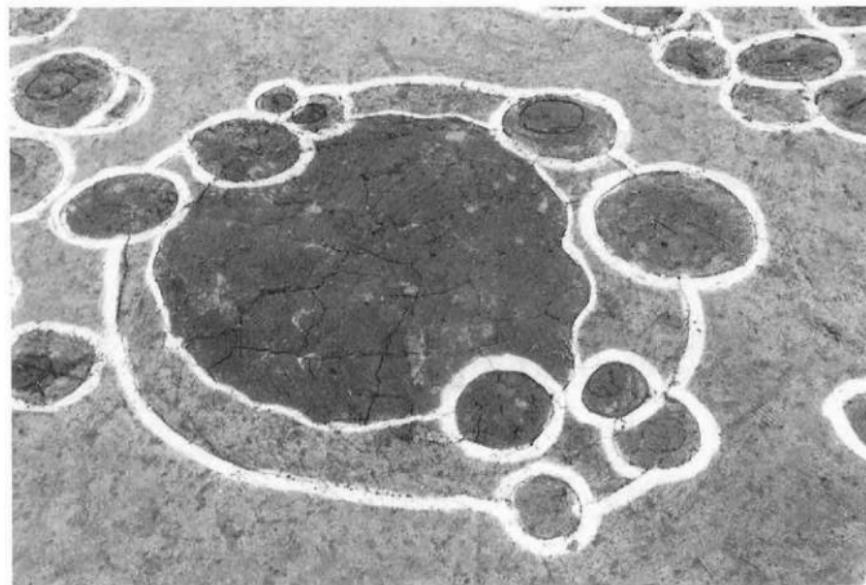
(南西から)

発掘調査 3



a. 遺構検出状況 (B・C-3 グリッド)

(北東から)



b. S E - 111井戸周辺遺構確認状況

(南から)

層序



a. B - 7 ~ 8 グリッド北壁土層断面

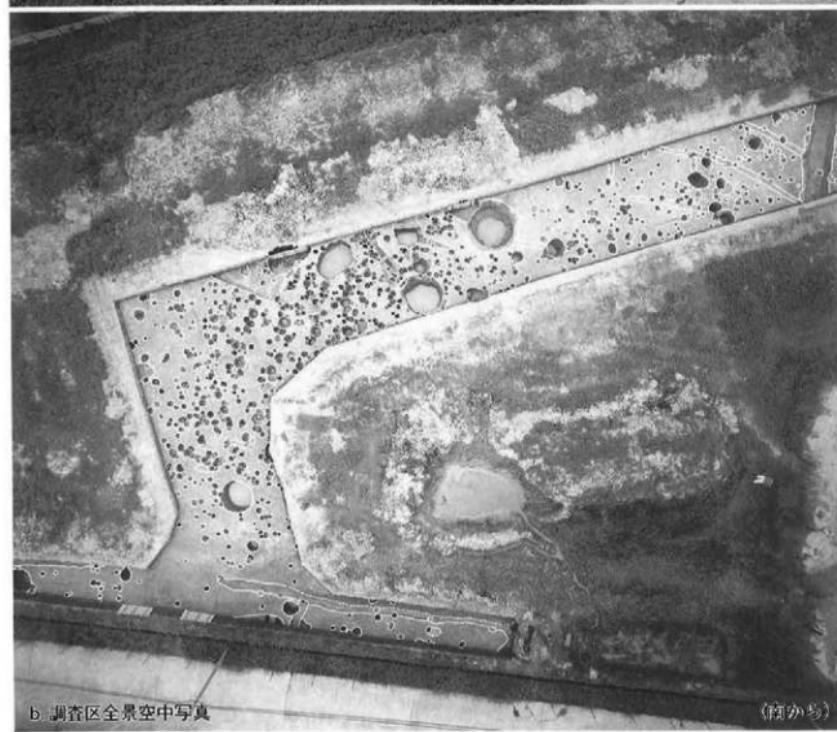
(南東から)



b. B - 7 ~ 8 グリッド北壁土層断面

(南東から)

遺構 1



遺構 2



a. 調査区全景

(西から)



b. A区全景 (D・E-2~4 グリッド)

(東から)

遺構3



a. B ~ D - 2 ~ 4 グリッド遺構群

(南東から)



b. B ~ D - 2 + 3 グリッド遺構群

(北西から)



a. S B - 1201 建物跡

(北から)



b. B + C - 2 ~ 4 グリッド遺構群

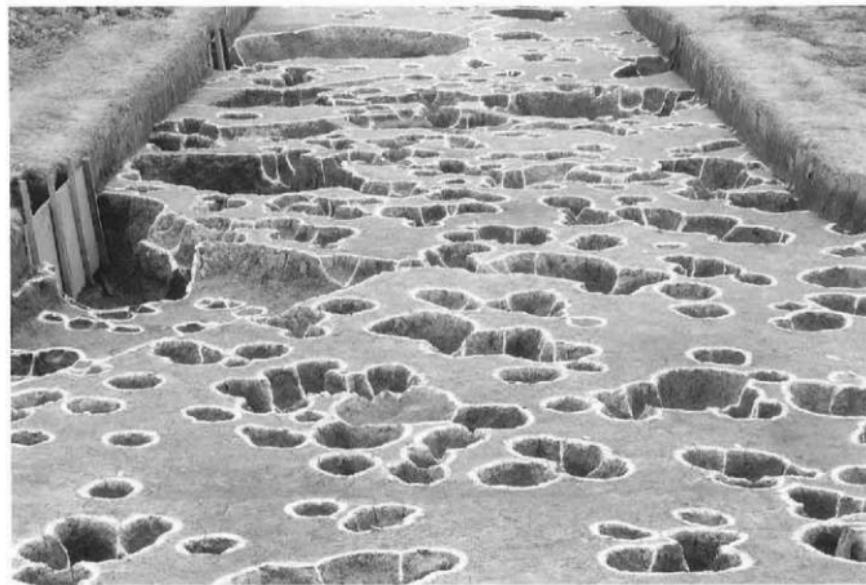
(西から)

遺構 5



a. B・C-2~8 グリッド遺構群

(南西から)



b. B・C-3・4 グリッド遺構群

(南西から)

遺構 6



a. B + C - 2 ~ 8 グリッド全景

(北東から)



b. B + C - 7 + 8 グリッド大溝群

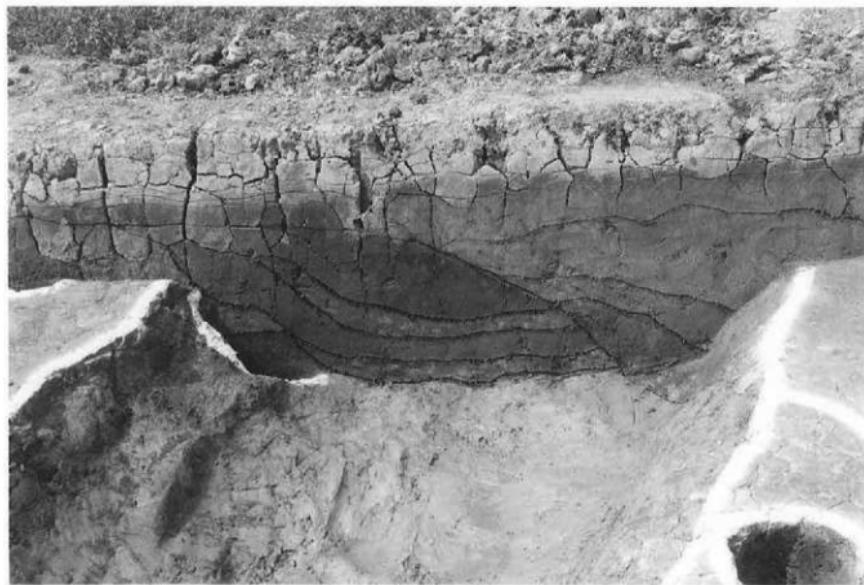
(北東から)

遺構 7



a. S D - 1018 a + 1038 大溝

(北から)



b. S D - 1018 a 大溝北壁土層断面

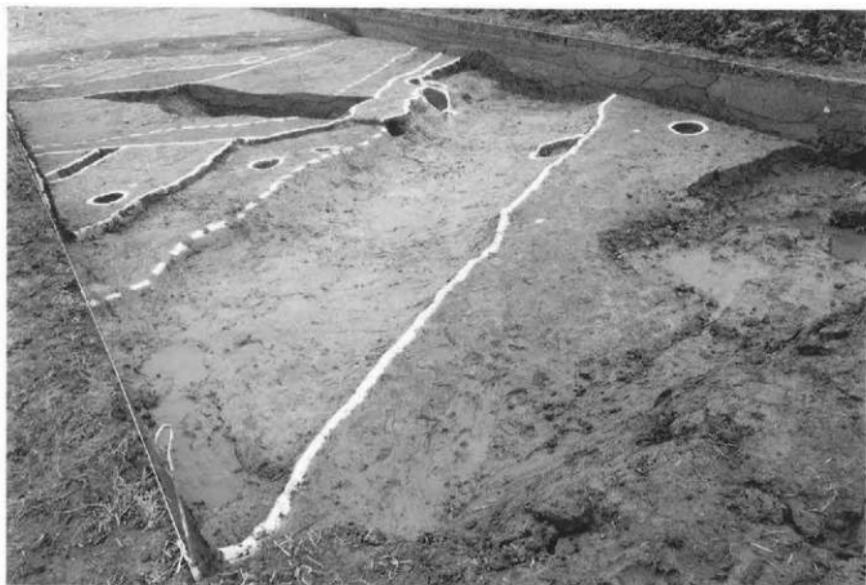
(南から)

遺構 8



a. S D - 1040・1050 大溝全景

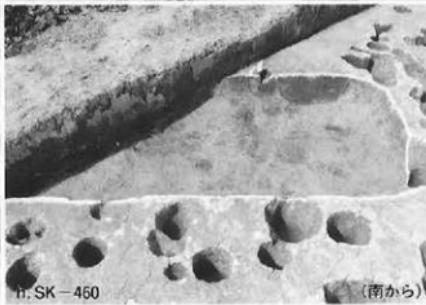
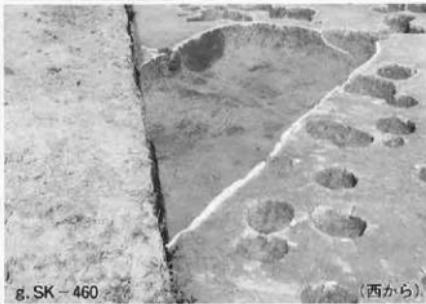
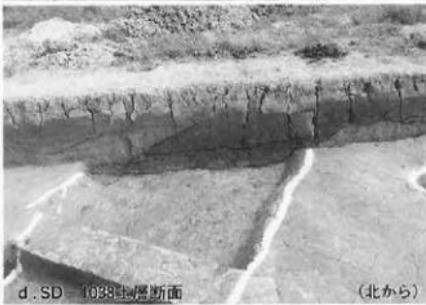
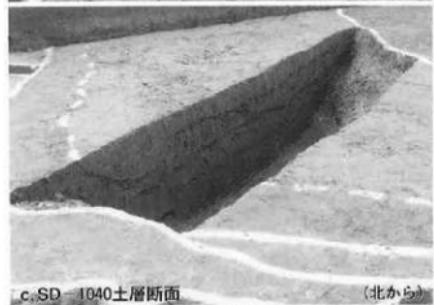
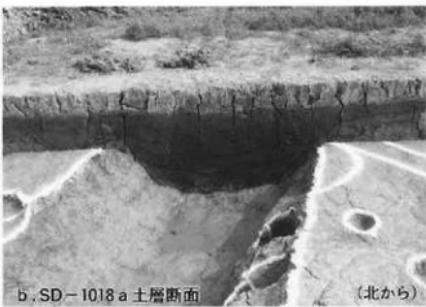
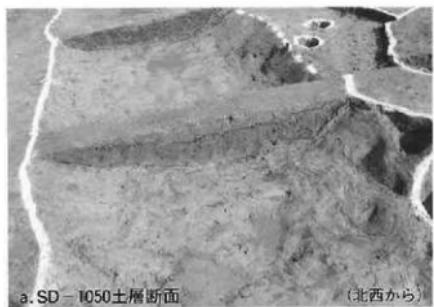
(西から)



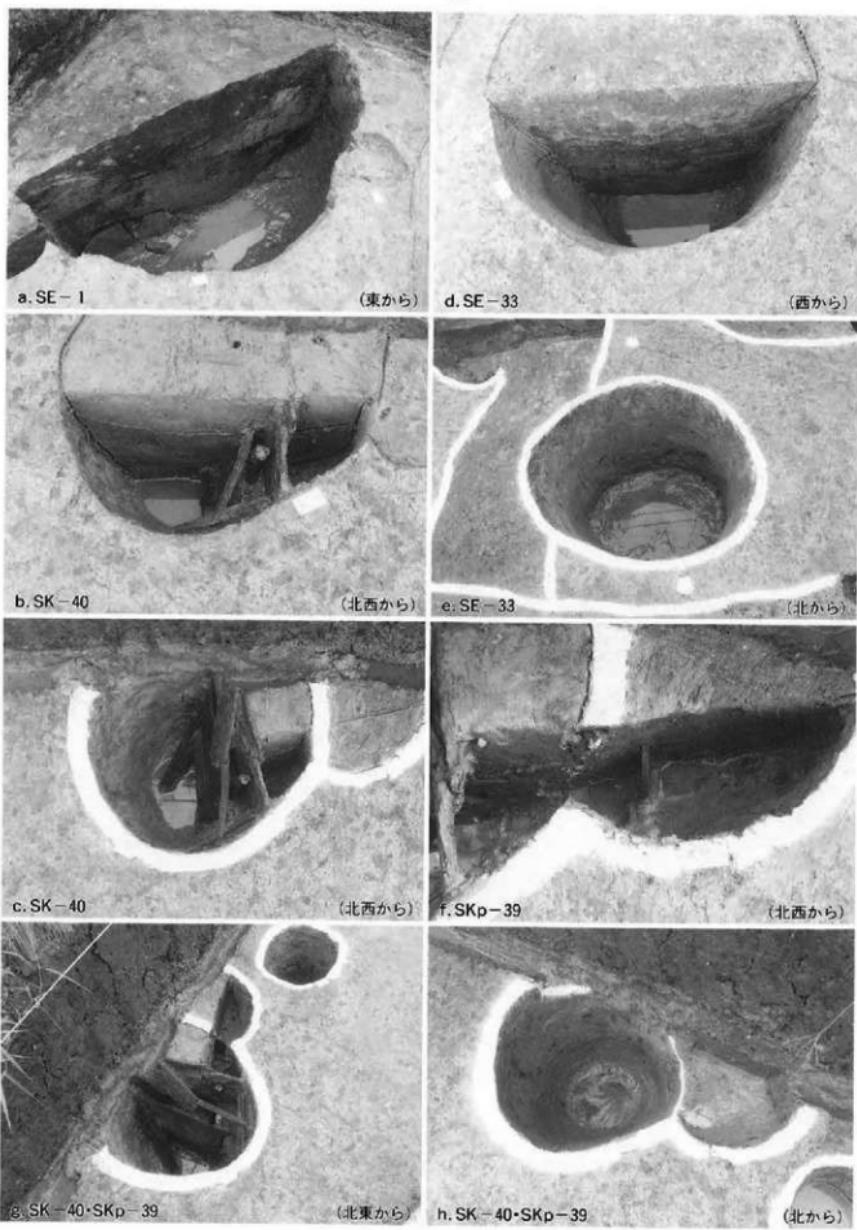
b. S D - 1050 大溝

(東から)

遺構 9



遺構 10



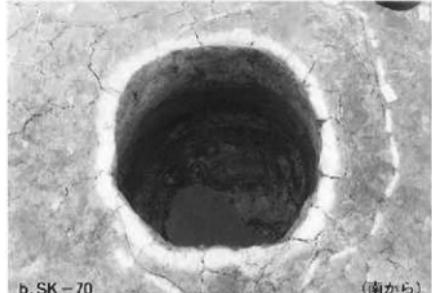
遺構 11



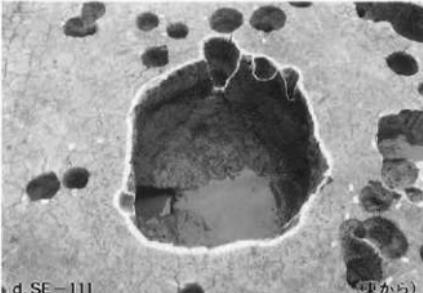
a. SK-70



c. SE-111



b. SK-70



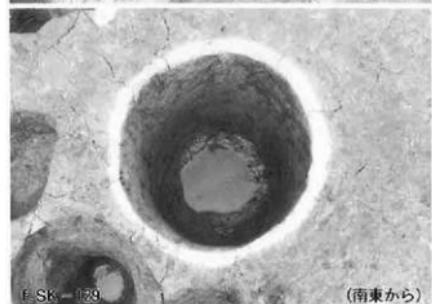
d. SE-111



e. SK-129



g. SK-255a



f. SK-129

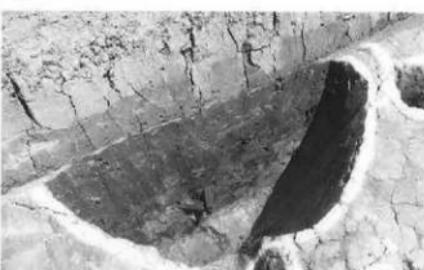


h. SK-255a



a. SE-24

(東から)



c. SE-457

(南から)



b. SE-456

(南西から)



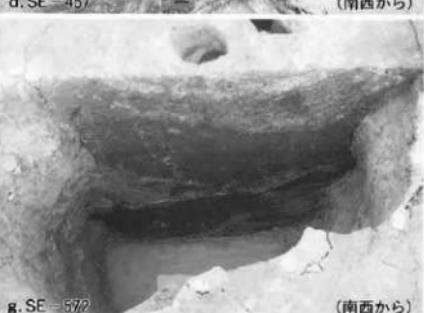
d. SE-457

(南西から)



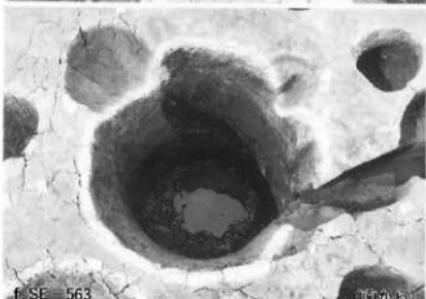
e. SE-563

(南から)



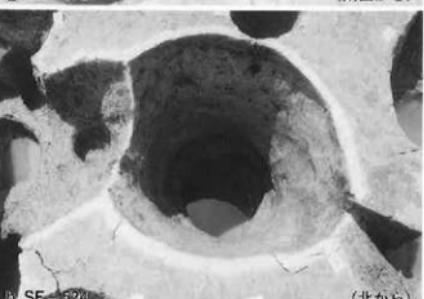
g. SE-572

(南西から)



f. SE-563

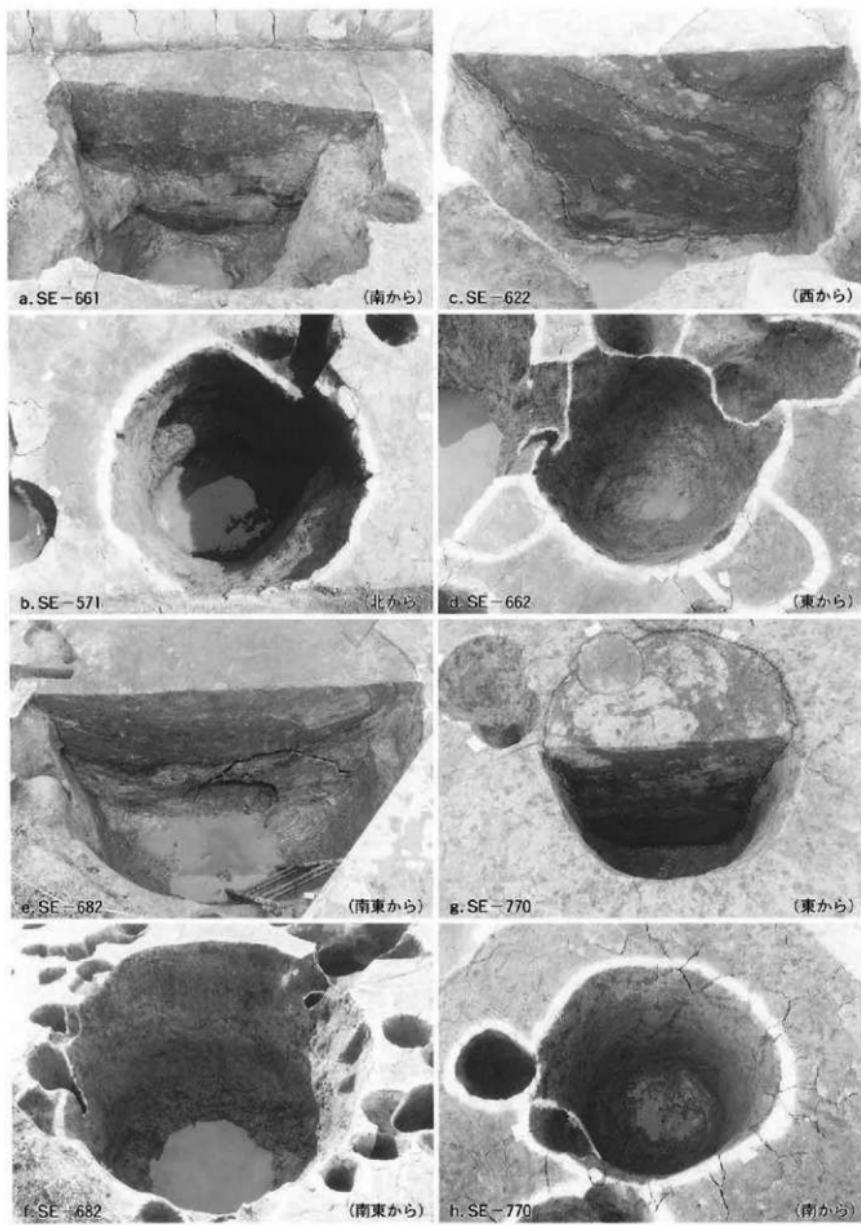
(南西から)



h. SE-524

(北から)

遺構 13



遺構 14



a. SE-739

(南東から)



c. SE-739半截

(北東から)



b. SE-739

(東から)



d. SE-739(漆器)

(南東から)



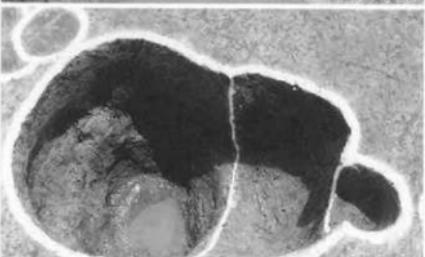
e. SK-736

(南東から)



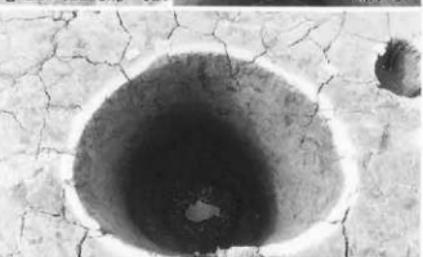
g. SE-922・Skp-924

(北から)



f. SE-778 a - 778 b

(北西から)



h. SE-926

(南から)

遺構 15



a. SE-932

(西から)



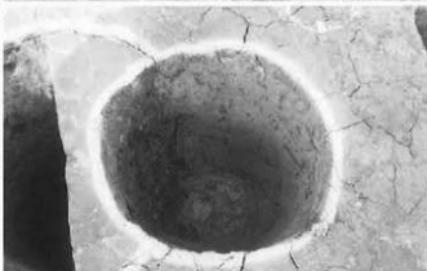
c. SE-907

(南東から)



b. SE-909 a

(西から)



d. SE-907

(南西から)



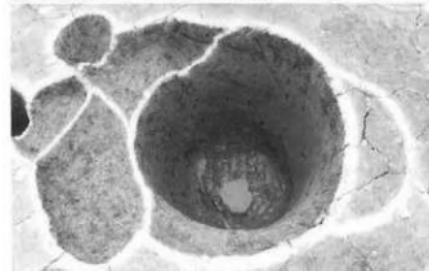
e. SE-907 + 909 a

(南から)



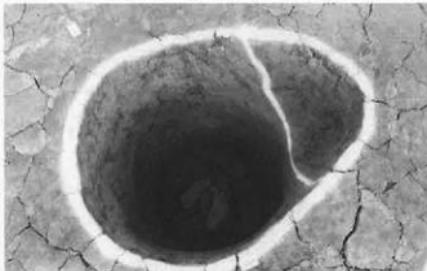
g. SE-936 a

(南から)



f. SE-983

(南から)



h. SE-936 a

(西から)



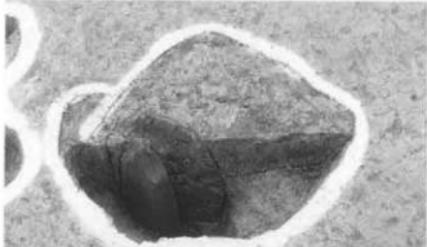
a. SKp-257

(南東から)



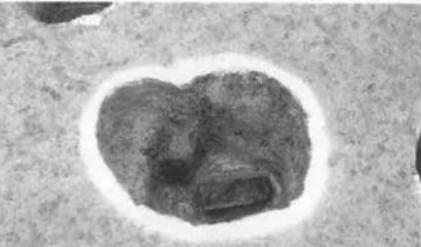
c. SKp-241

(西から)



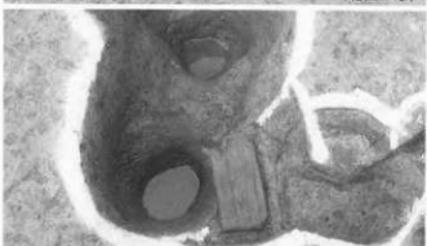
b. SKp-326

(北西から)



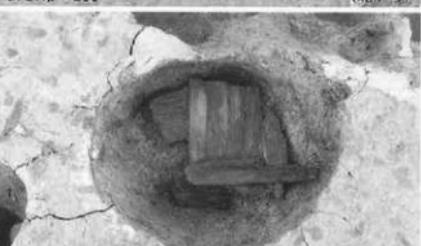
d. SKp-253

(北から)



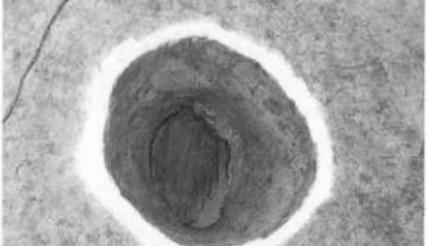
e. SKp-135 a

(南から)



g. SKp-403

(西から)



f. SKp-343

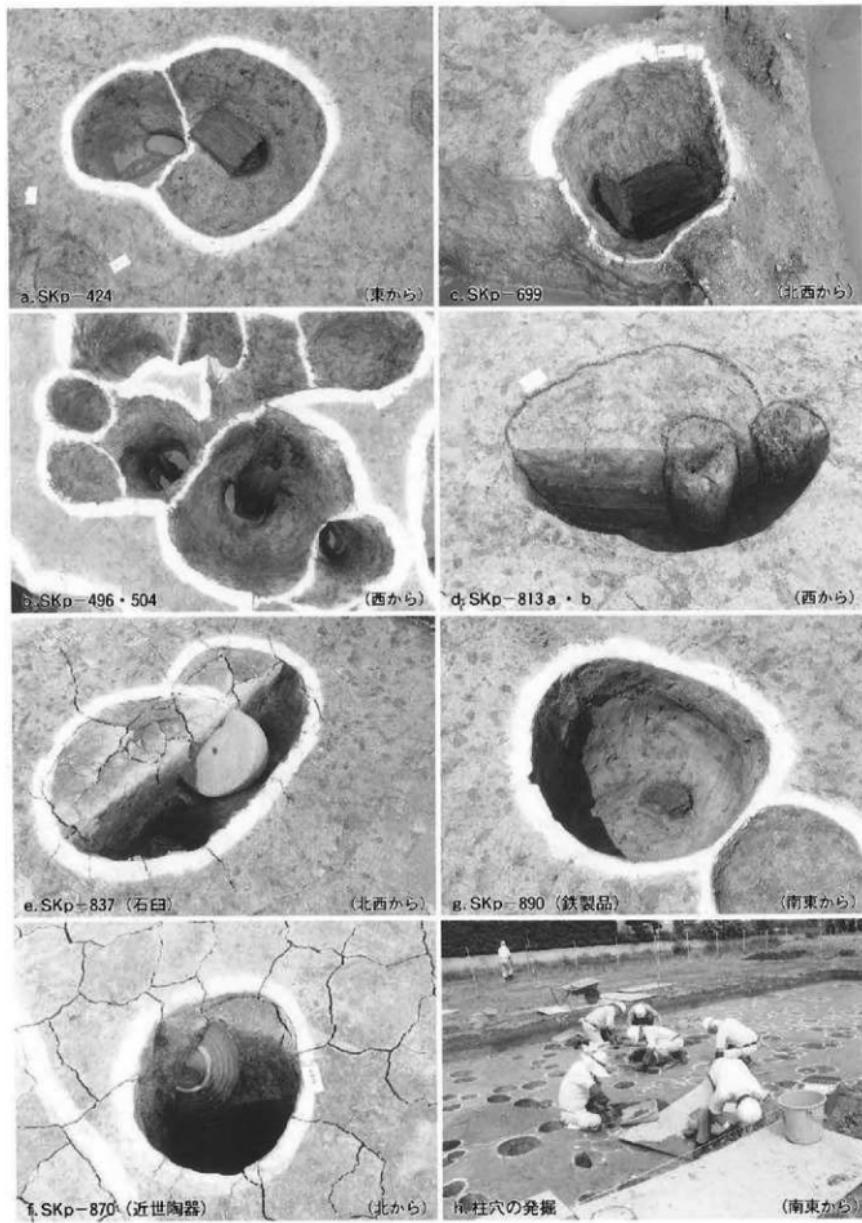
(東から)



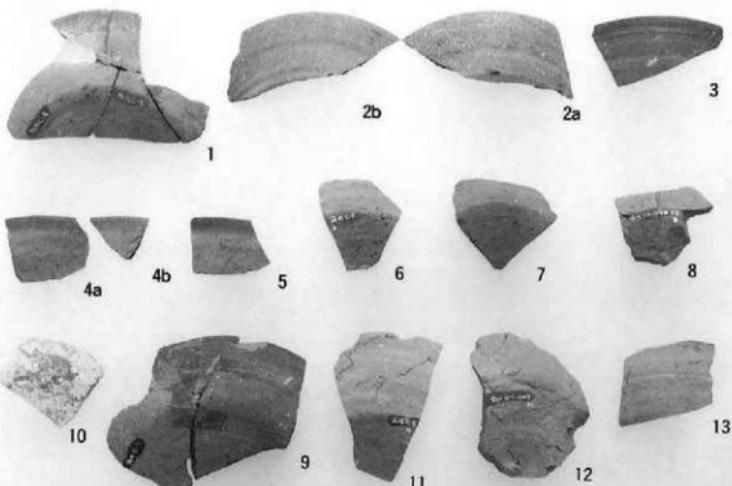
h. SKp-403

(北から)

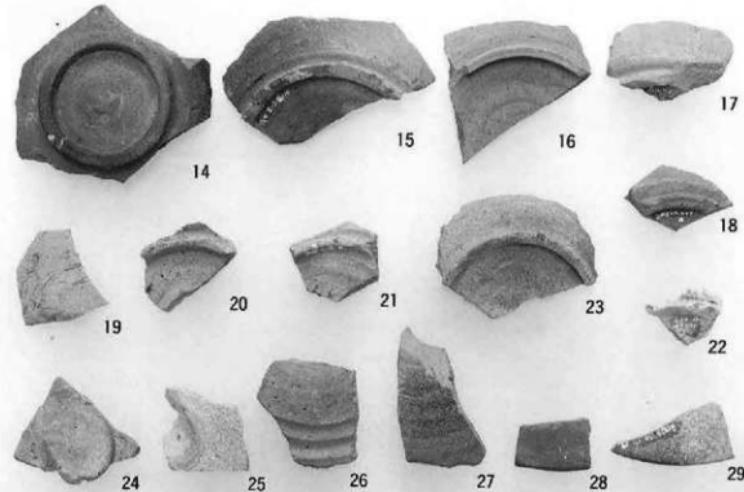
遺構 17



遺物 1

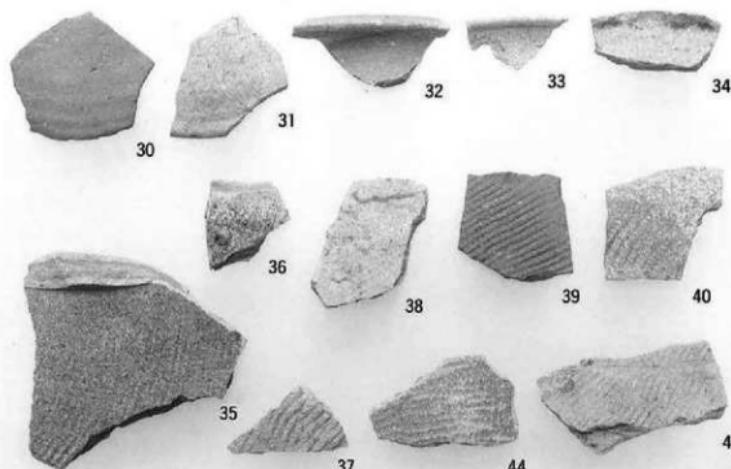


a. 須恵器 I (無台杯)



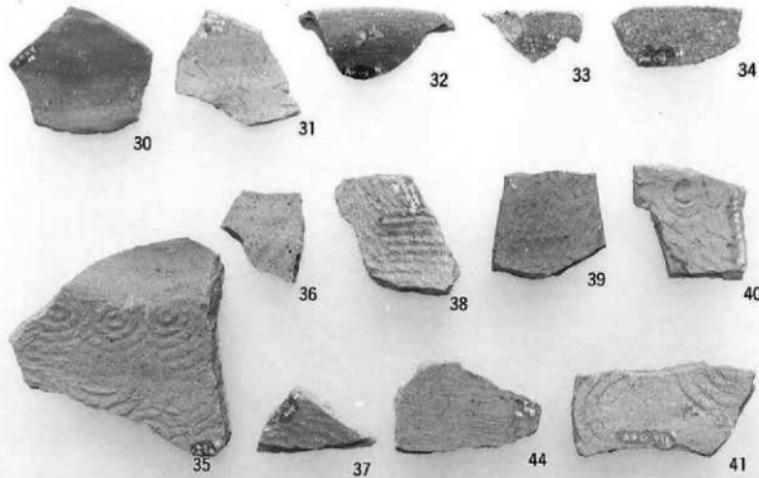
b. 須恵器 2 (有台杯・杯蓋)

遺物 2



a. 須恵器 3 (杯蓋・甌類)

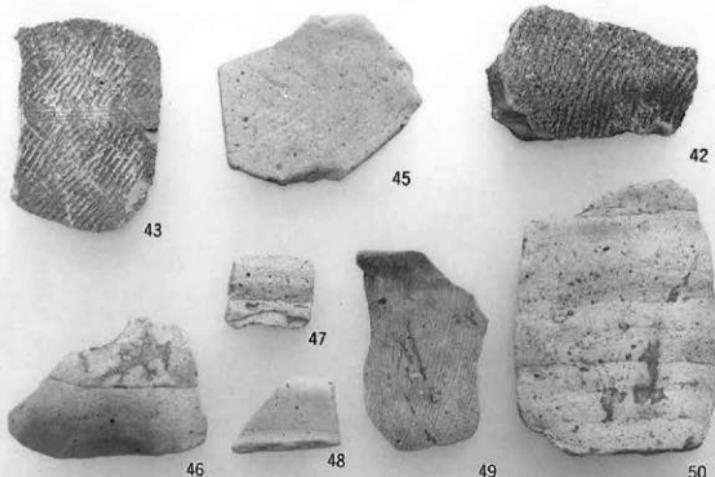
〔表〕



b. 須恵器 3 (杯蓋・甌類)

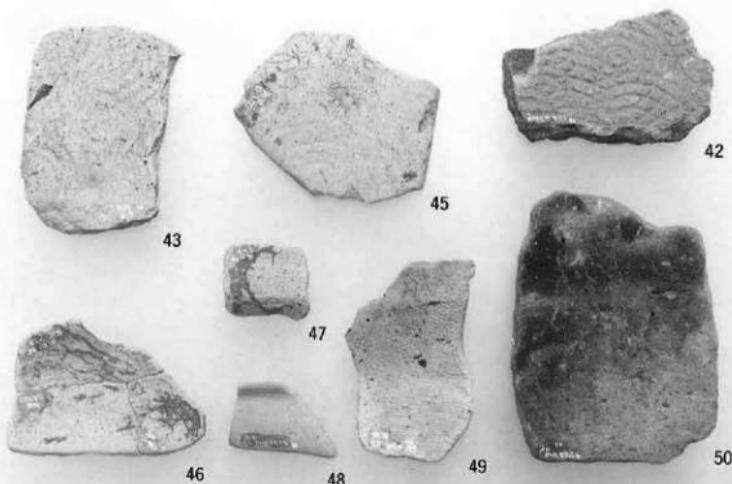
〔裏〕

遺物 3



a. 須恵器 4 (壺類) · 土師器 (杯・壺類) · 製塙土器

〔表〕

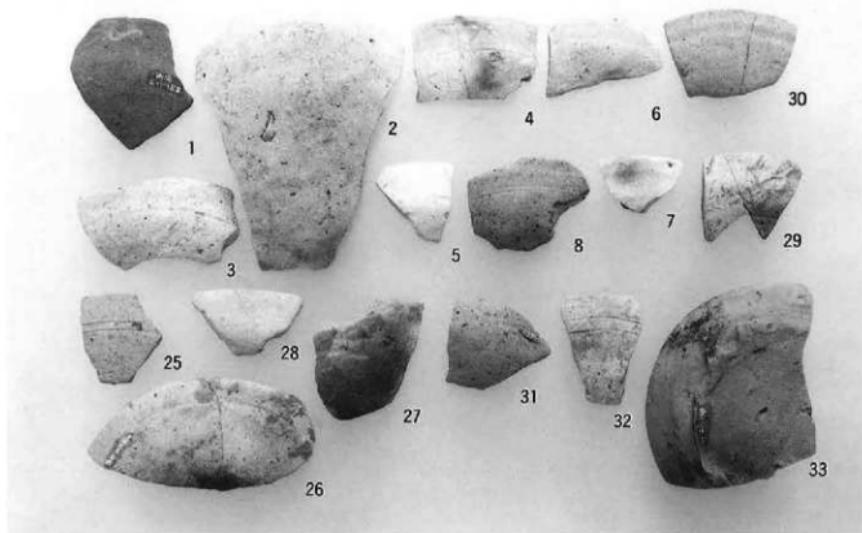


b. 須恵器 4 (壺類) · 土師器 (杯・壺類) · 製塙土器

〔裏〕

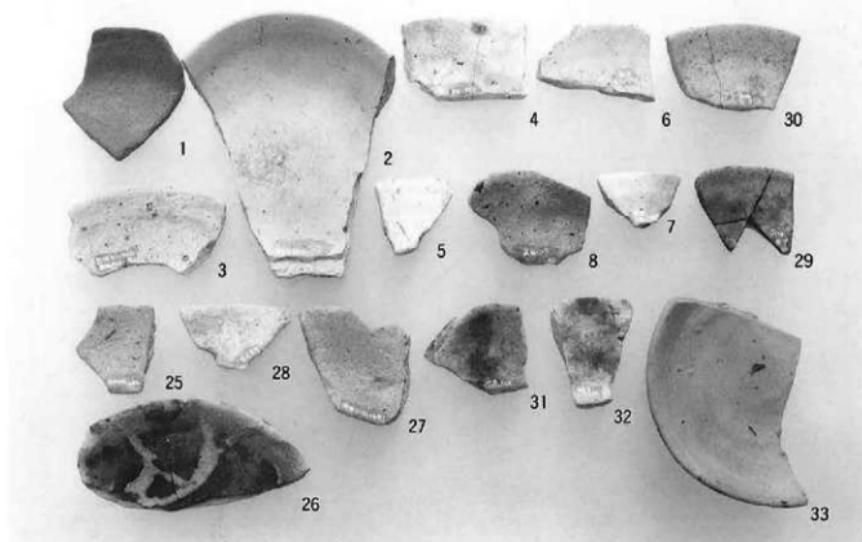
遺物 4

図版59



a. 中世土師器 1 (皿類)

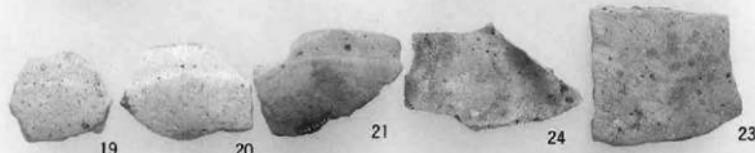
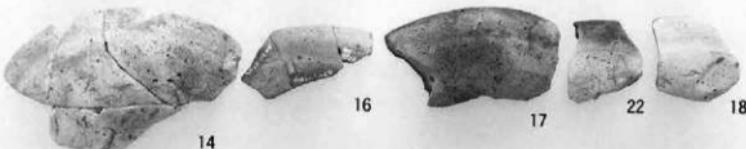
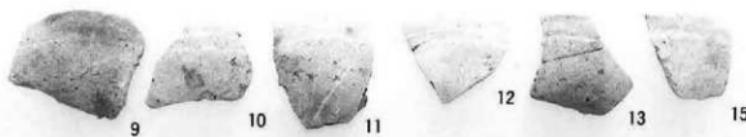
〔表〕



b. 中世土師器 1 (皿類)

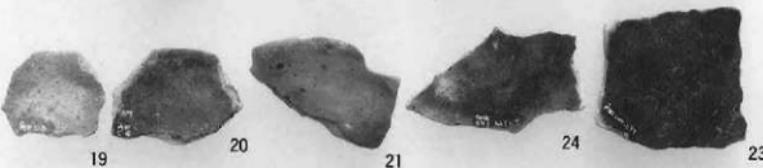
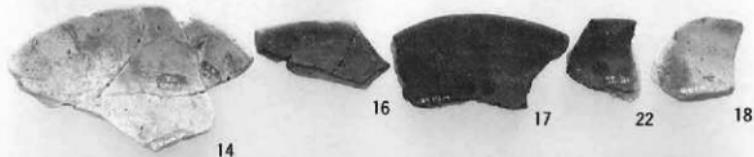
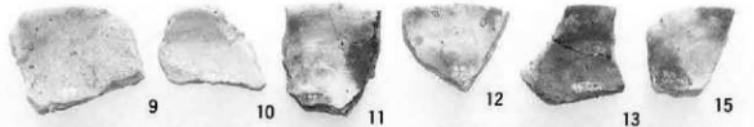
〔裏〕

遺 物 5



a. 中世土師器 2 (皿類)

〔表〕

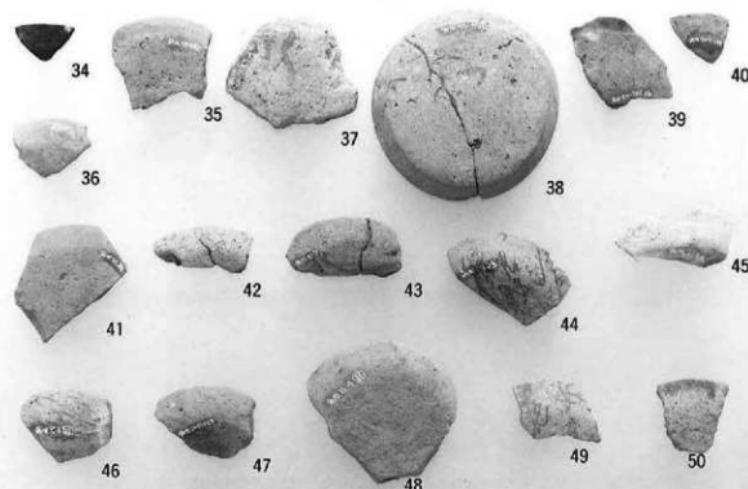


b. 中世土師器 2 (皿類)

〔裏〕

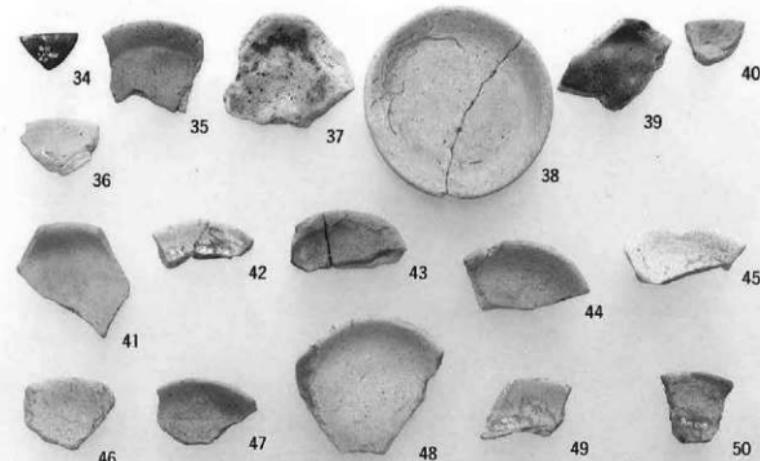
遺 物 6

図版61



a. 中世土師器 3 (小皿類)

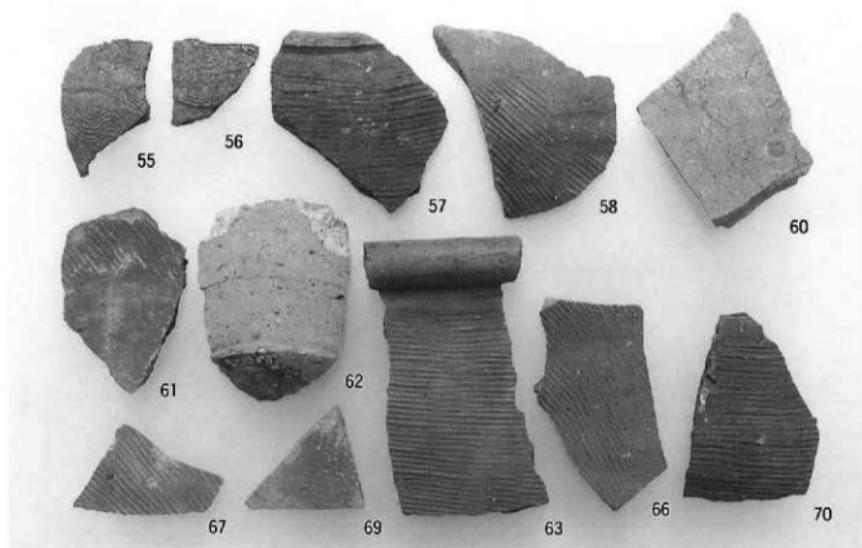
〔表〕



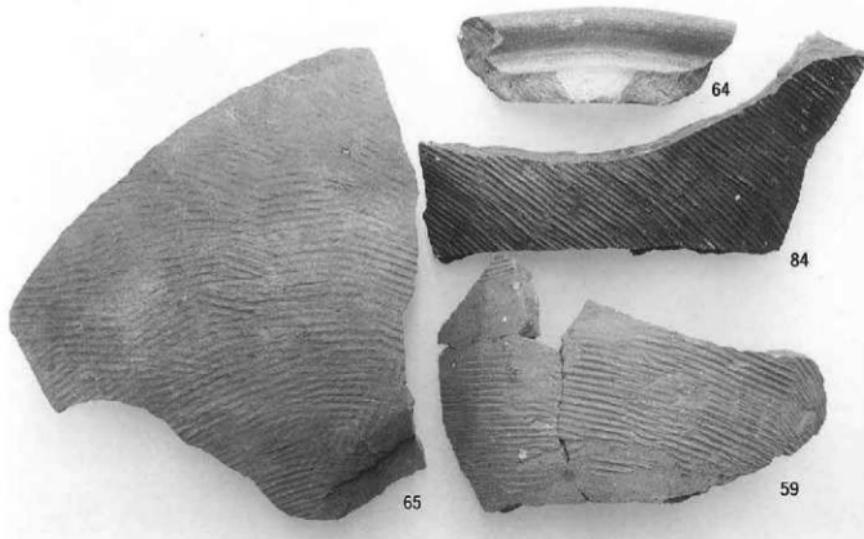
b. 中世土師器 3 (小皿類)

〔裏〕

遺 物 7

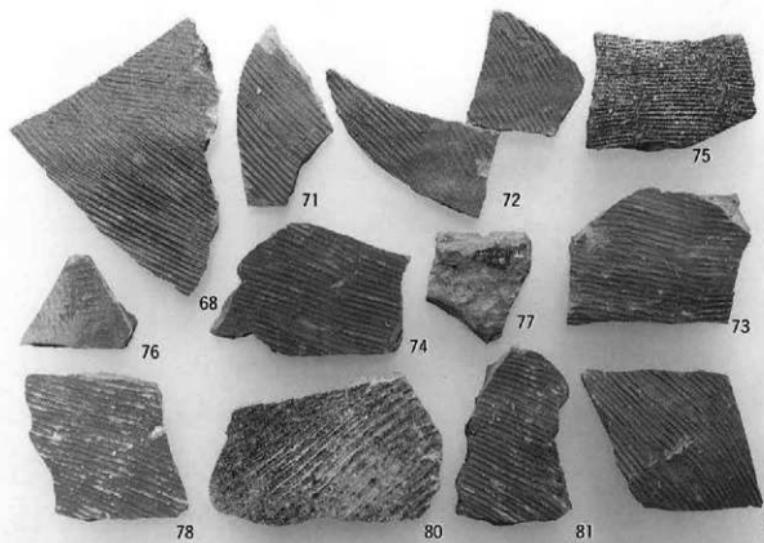


a. 珠洲 1 (壺・甕類)

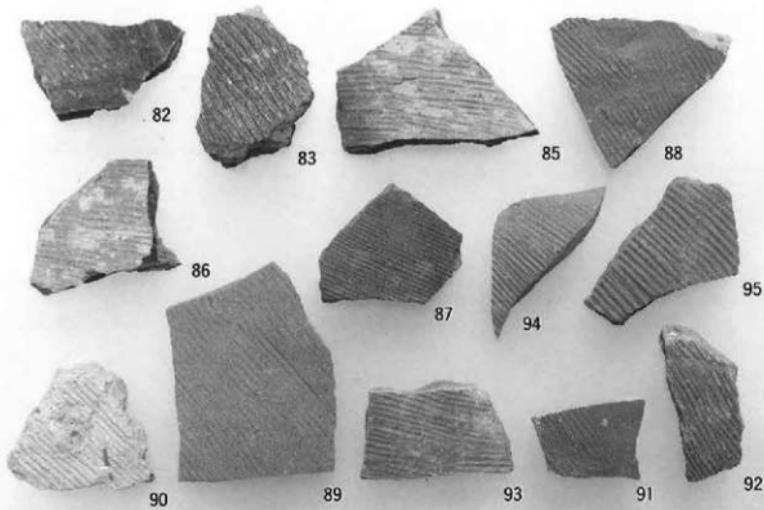


b. 珠洲 2 (壺・甕類)

遺 物 8

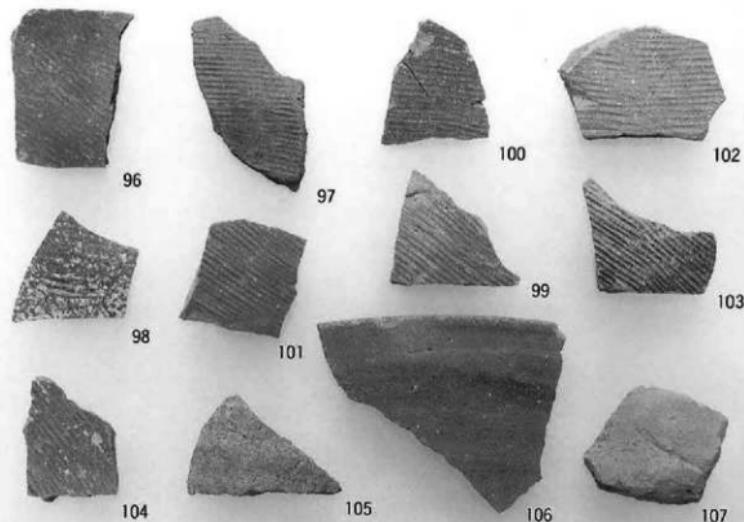


a. 珠洲 3 (壺・甕類)



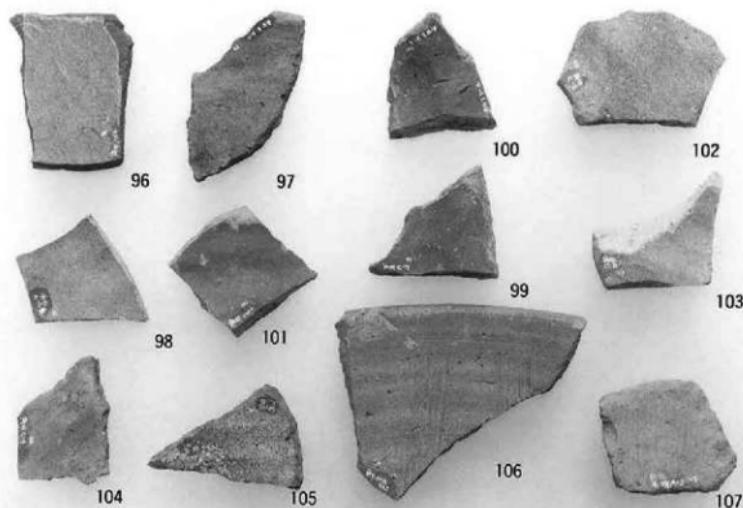
b. 珠洲 4 (壺・甕類)

遺 物 9



a. 珠洲 5 (壺・甕類・鉢類)

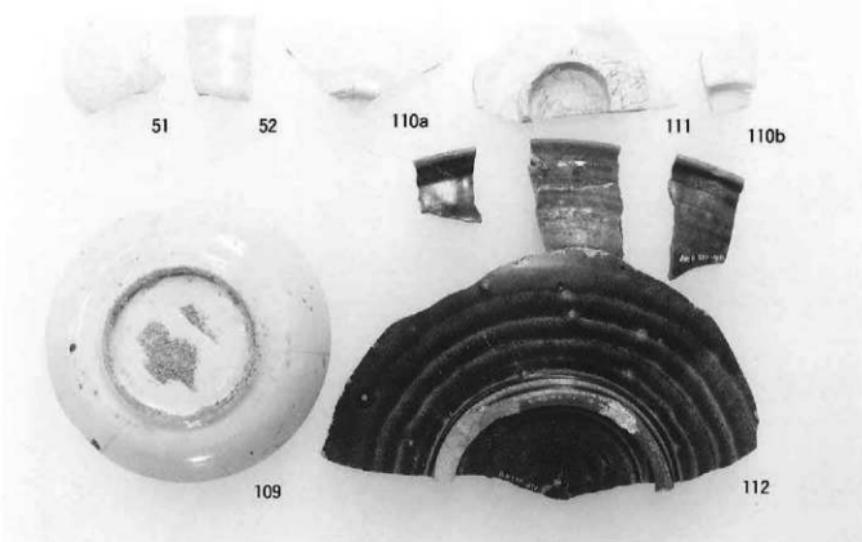
〔表〕



b. 珠洲 5 (壺・甕類・鉢類)

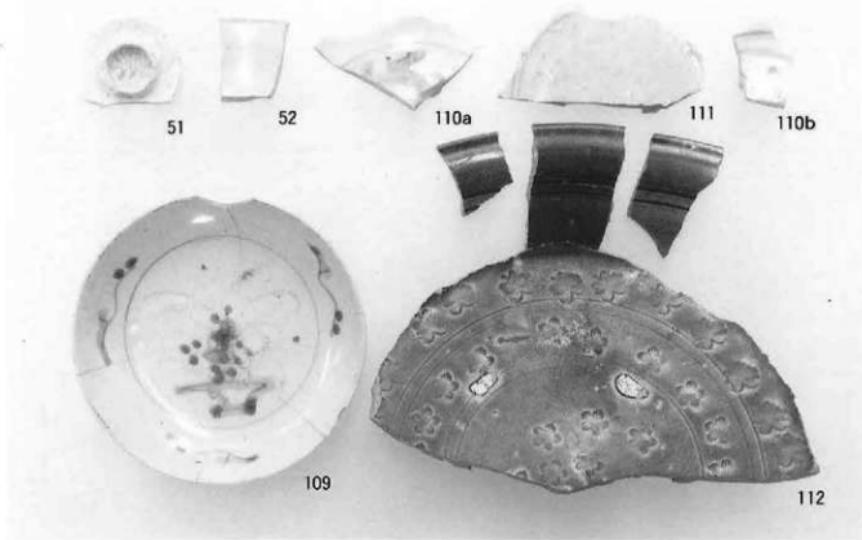
〔表〕

遺物 10



a. 貿易陶磁器・近代陶磁器 1

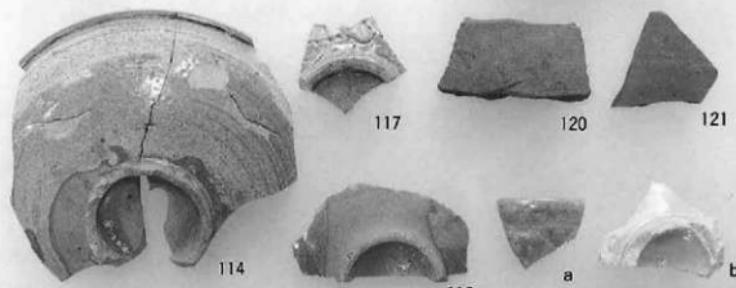
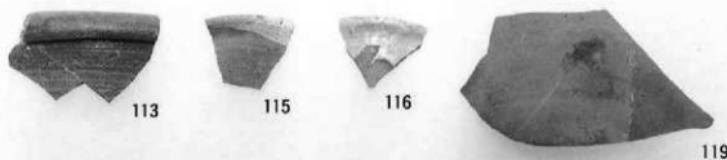
〔表〕



b. 貿易陶磁器・近代陶磁器 1

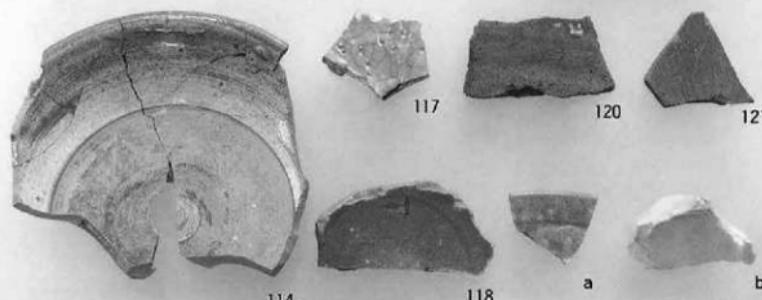
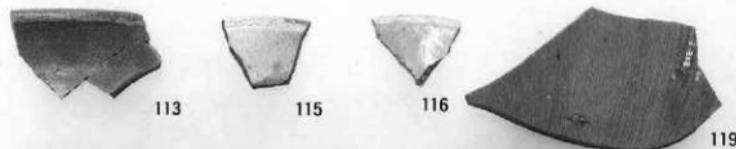
〔表〕

遺物 11



a. 近世陶磁器 2

〔表〕



b. 近世陶磁器 2

〔表〕

遺 物 12

図版67



a. 石製品 I (砥石)・漆器・鉄製品

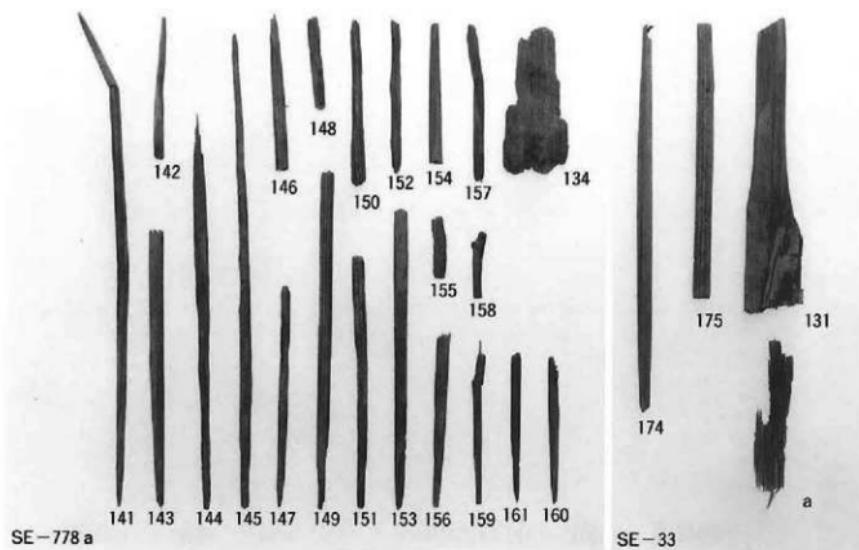
〔表〕



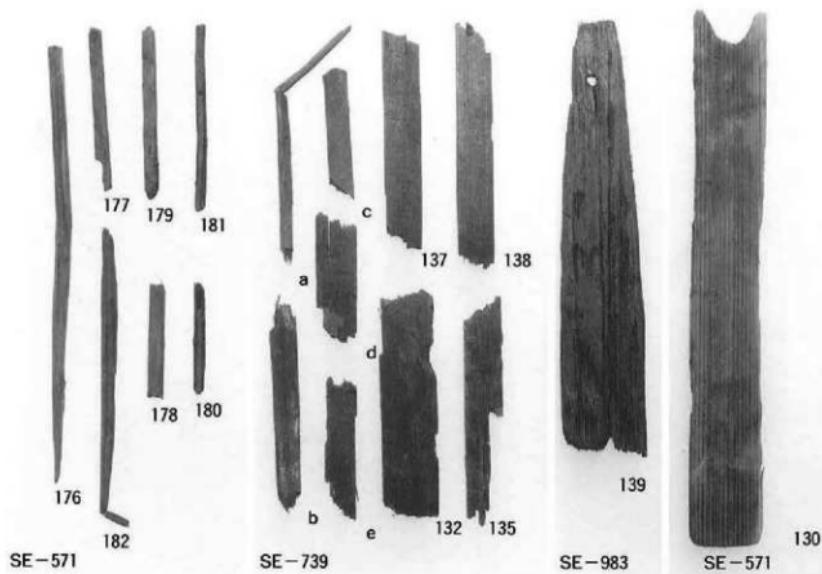
b. 石製品 I (砥石)・漆器・鉄製品

〔裏〕

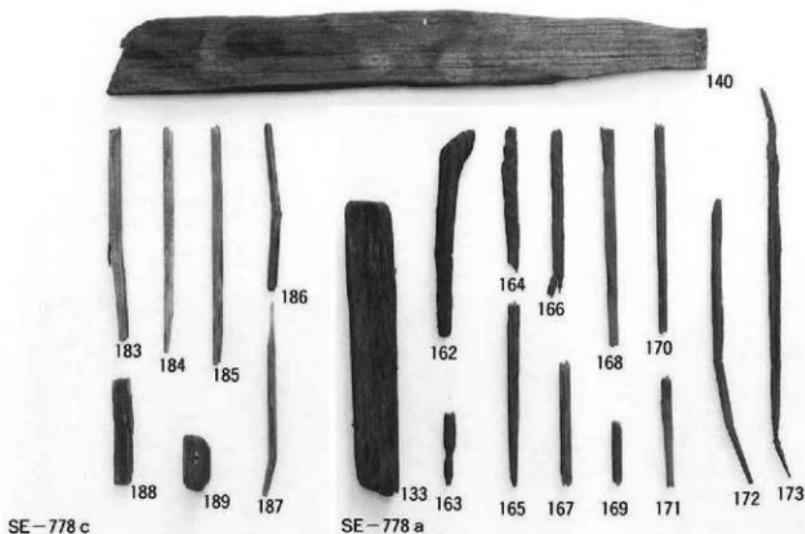
遺 物 13



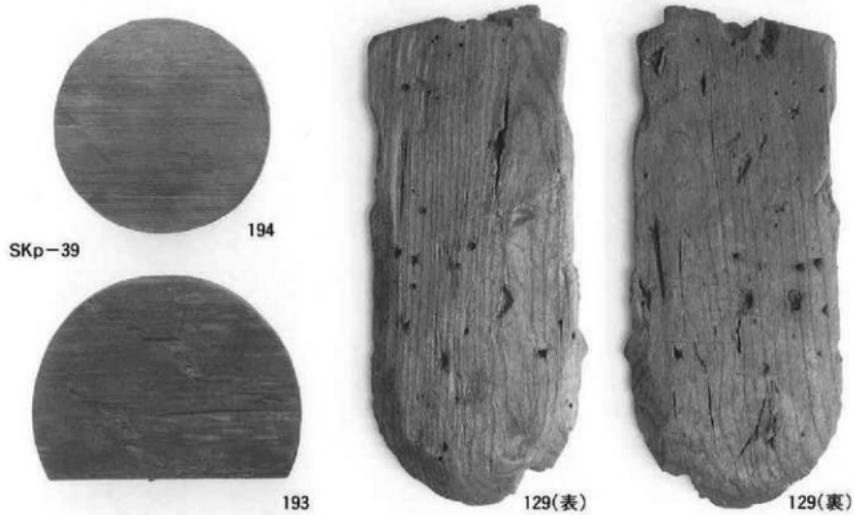
a. 木製品 1 (ハシ類ほか)



b. 木製品 2 (ハシ類ほか)



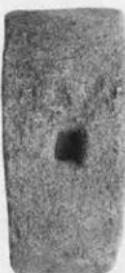
a. 木製品 3 (ハシ類ほか)



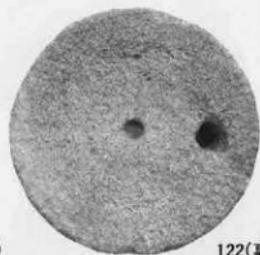
b. 木製品 4 (曲物度板・鋤)



SKp-837



122(表)



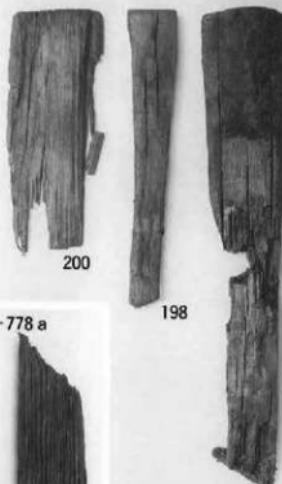
122(裏)



SE-983 196(表)



196(裏)



SE-778 a

SKp-829 197



191(表)

SE-739



190(裏)

191(裏)



194



195

遺 物 16

図版71



204(表)



204(裏)

SKp-424



a



a'

SKp-342



SKp-342

199(表)



199(裏)



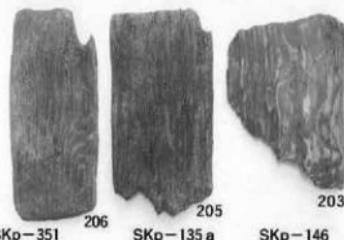
SE-1

SE-24

SE-571

SK-336

SE-778

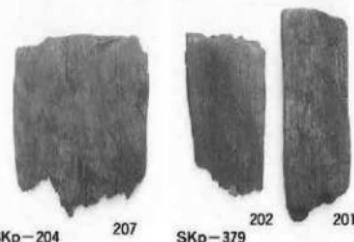


SKp-351

206 205

SKp-135 a

SKp-146



SKp-204

207

SKp-379

202

201



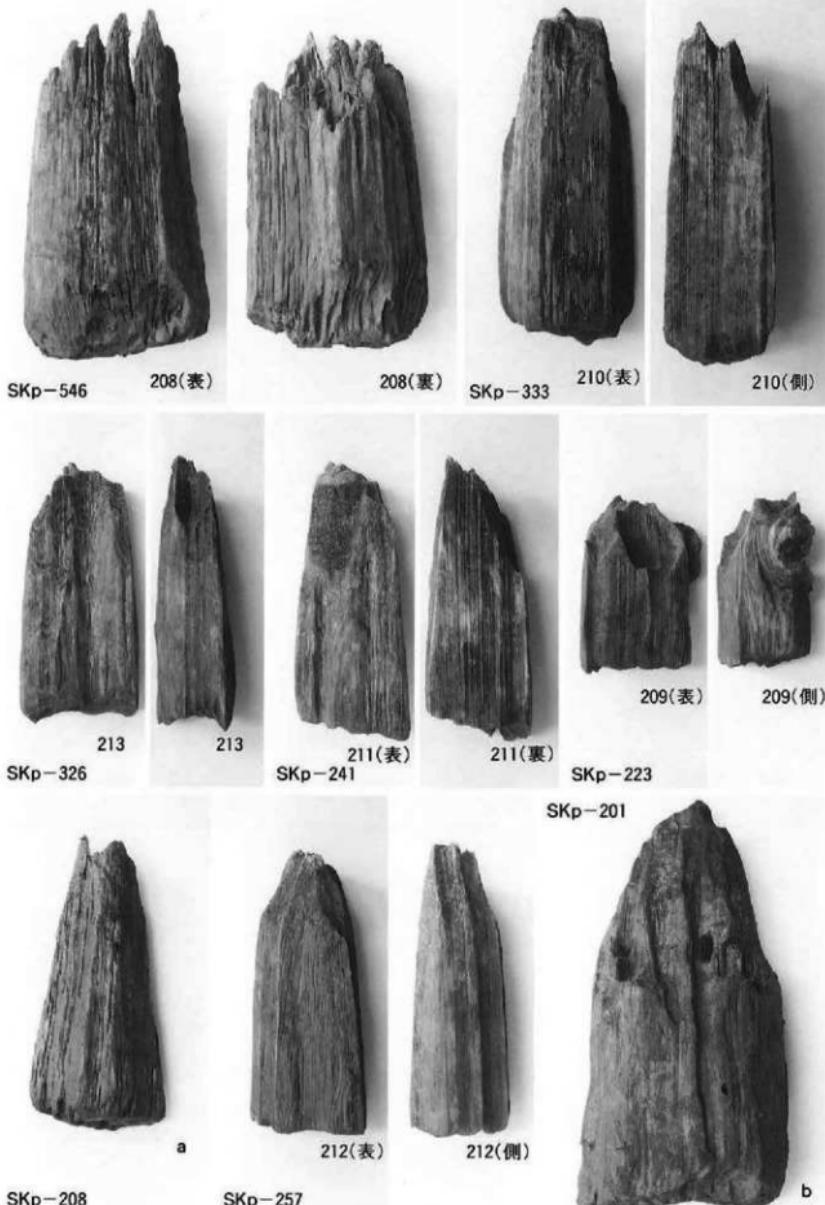
b

SE-739

199(裏)

木製品 6 (礎板) · 磚

遺物 17



木製品7（柱根）

報告書抄録

ふりがな	かどた							
書名	角田							
調査名	新潟県柏崎市・角田遺跡発掘調査報告書							
シリーズ名	柏崎市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第32集							
編著者名	品田高志・伊藤啓雄							
編集機関	柏崎市教育委員会 文化振興課 遺跡調査室							
発行者	柏崎市教育委員会							
所在地	墨 945-8511 新潟県柏崎市中央町5-50 T E L. 0257-23-5111 内線365							
発行年月日	西暦 1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ...	東經 ...	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
市町村	遺跡番号	15205	371	37度 23分 11秒	138度 36分 14秒	19980609～ 19980812	530	宅地造成工事に 伴う発掘調査
角田遺跡 新潟県柏崎市 町								
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
角田遺跡	館跡 集落跡	古墳・古代 中世・近世	掘立柱建物・柱穴 井戸・溝・土坑	青白磁・珠淵焼 中世土師器	1,000基もの柱穴を検出			

柏崎市埋蔵文化財調査報告書第32集

角田

——新潟県柏崎市・角田遺跡発掘調査報告書——

平成11年3月31日 印刷

平成11年3月31日 発行

発行 柏崎市教育委員会

〒945-8511 新潟県柏崎市中央町5-50

印刷 株式会社 柏崎インサツ